

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書第106集

# 西山城跡

— 四国横断自動車道(須崎市～四万十市間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2008.3

高知県教育委員会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター





# 西山城跡

－四国横断自動車道(須崎市～四万十市間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

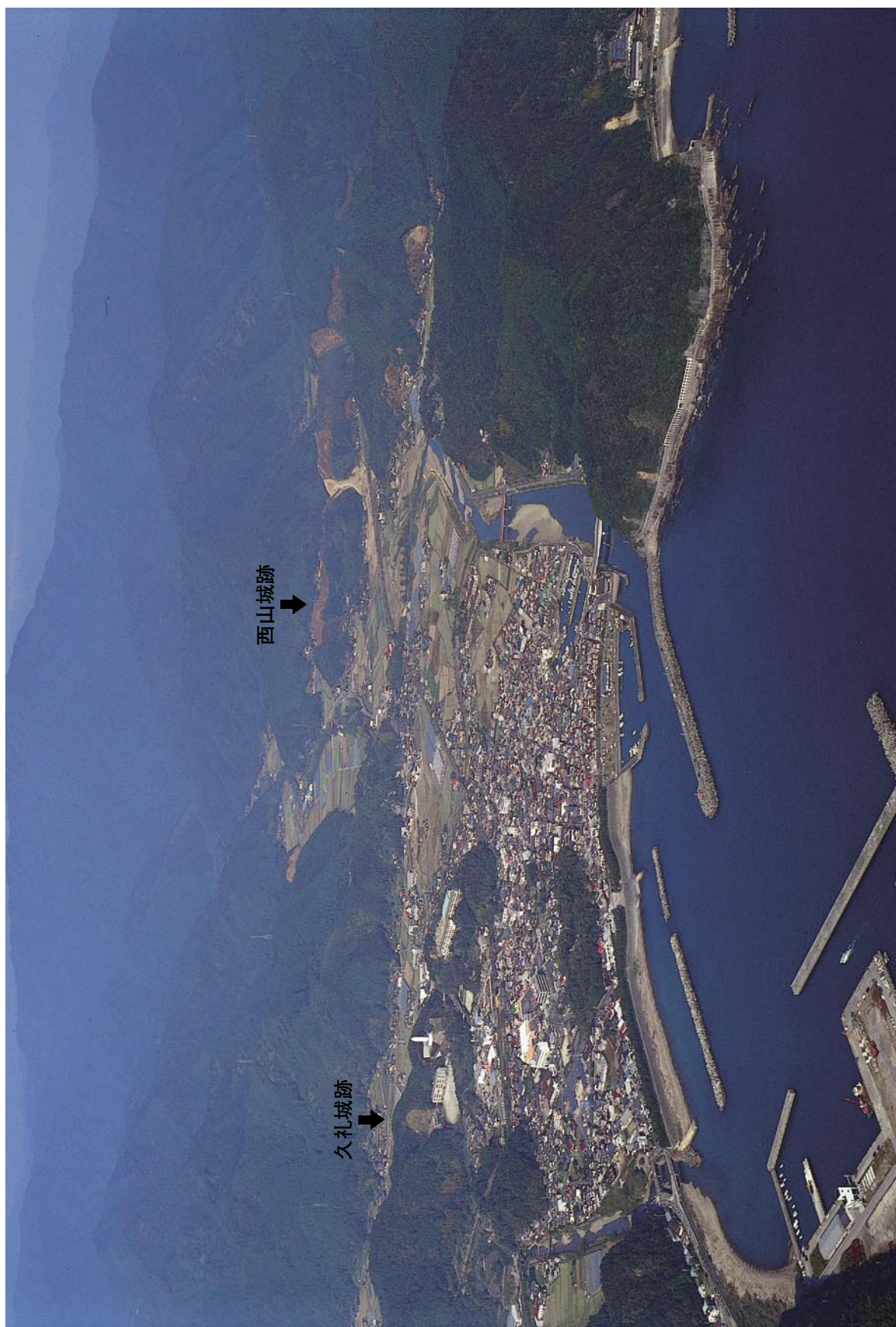


2008.3

高知県教育委員会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター







久礼湾と西山城跡





西山城跡航空写真（真上より）



西山城跡航空写真（東上空より）





西山城跡遠景（東より）



西山城跡遠景（西より）





B区土塁2とC区竪堀1（A区より）



C区堀切6（西より）



## 序

「青い空と広い海、澄みきった空気、自然環境に恵まれた」と紹介する中土佐町は、林業と漁業の町として知られていますが、高知県の三大祭りのひとつに挙げられる久礼八幡宮大祭や、中世の五輪塔群など数多くの有形・無形文化財に見られるように地域色豊かな歴史と文化の町であります。

この度、四国横断自動車道建設に伴い、西山城跡の調査が行われ報告書が刊行されることとなりました。南北朝期から戦国時代にかけて中土佐町久礼の中心的役割を果たした西山城跡は当時の山城の姿をそのまま残しており、久礼の果たしてきた物資交流の要衝としての歴史的役割を象徴する数多くの遺構、遺物が出土しました。この調査成果は県内の歴史を解明する上で重要な位置を占め、分けても全国的な城郭研究の中で高岡郡の城郭の施設・性格などを知る上で貴重な資料となりました。

高速道路建設に伴い、中土佐町の更なる発展が期待されている今、先人によって刻まれた歴史の一部が明らかとなったことは大変意義深いものがあると思います。この成果が豊かな地域史の復元に寄与し、地域の再発見に繋がるとともに一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に従事してくださった現場作業員の皆様、また、調査にあたって絶大な協力を頂いた中土佐町に対しまして厚くお礼申し上げます。

2008年3月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター  
所 長 汲 田 幸 一

## 例言

1. 本書は、四国横断自動車道(須崎市～四万十町)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託による西山城跡の発掘調査報告書である。
2. 西山城跡は、高知県高岡郡中土佐町久礼字城山・下越に所在する。
3. 発掘調査は高知県教育委員会から委託を受けて(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 調査期間は、平成16年8月2日～平成18年3月31日まで行われ、整理作業は平成18年4月1日から平成19年3月31日にかけて実施した。
5. 調査面積は、12,854 m<sup>2</sup>(延べ面積)である。
6. 発掘調査は吉成承三(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第二班長)・前田憲志(同 主任調査員)・矢野雅子(同 技術補助員)が行った。また、西山城跡の概要図(縄張り図)については宮地啓介(同 技術補助員)が作成した。
7. 発掘調査にあたっては、事前の樹木の伐採、移動等須崎市森林組合に委託した。また、現地形測量、及び航空写真測量ならびにレーザー測量については(株)四航コンサルタントに委託した。出土遺物の金属器保存処理については(財)大阪市文化財協会に委託した。
8. 本書の執筆は吉成・前田(第二章)が行い、編集は筒井三菜(同 主任調査員)の援助を得て吉成が行った。また、銅銭については矢野がまとめた。
9. 現場指導ならびに出土遺物についての助言、御教示を下記の方々から頂いた。  
前田和男(高知県文化財保護審議会会長)、北垣聡一郎(金沢城調査研究所所長)、萩原三雄(帝京大学山梨文化財研究所所長)、千田嘉博(奈良大学文学部文化財学科助教授)、小野正敏(国立歴史民俗博物館)、市村高男(高知大学教育学部教授)、八巻孝夫(中世城郭研究会)、大久保健司(中世城郭研究会)、高山剛(松野町教育委員会)、広瀬岳志(宇和島市教育委員会)
10. 現場作業ならびに整理作業は下記の方々に従事して頂いた。  
発掘調査作業員：浜田康男・浜田文子・浜田勝猪・奥田義教・池田征郎・岡村和男・前田健一・池田秋弘・久川光子・前田なるみ・松本隆徳・山下堯彦・田中光善・池田英雄・五ノ井君代・浜田敏雄・宗崎重孝  
測量補助員：野町和人・松村省三・高橋友子  
整理作業員：松木富子・浜田雅代・竹村延子・浜田千恵子・岩崎佐枝・高橋由香・西尾亜矢子
11. 調査の実施については、中土佐町の林勇作氏、山口正人氏、地元の田中寿雄氏をはじめ久礼大柵地区の方々の絶大な協力と援助を得た。記して感謝の意を表したい。
12. 出土遺物の注記は出土略号04-7NN・05-7NNとし、図面、写真等資料とともに高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。



## 本文目次

第I章 調査に至る契機と経過	1
第1節 調査の契機	1
第2節 調査組織・調査経過	2
第3節 調査日誌抄	3
第II章 地理的・歴史的環境	11
第1節 地理的環境	11
第2節 歴史的環境	11
第3節 西山城跡の概要	15
第III章 調査の概要	17
第1節 調査の方法	17
第2節 調査の概要	18
第IV章 調査の成果	25
第1節 検出遺構	25
(1) A区(曲輪1)	25
(2) B区(曲輪2)	31
(3) C区(南尾根部)	51
(4) D区(北尾根部)	61
(5) E区(東斜面部)	67
(6) F区(西斜面部)	74
第2節 出土遺物	78
(1) 土師質土器	78
(2) 瓦質土器	79
(3) 備前焼	80
(4) 貿易陶磁器	81
(5) 国内産陶磁器	84
(6) 瀬戸・産地不明	84
(7) 土製品	85
(8) 石製品	85
(9) 鉄製品	85
(10) 銅製品	85
(11) 銅銭	86
第V章 考察(まとめ)	
第1節 遺構からみた西山城跡	145
第2節 出土遺物からみた西山城跡	147
第3節 縄張りからみた西山城跡	149
第4節 まとめ～西山城跡から久礼城跡へ～	152

## 挿図目次

Fig.1	中土佐町位置図
Fig.2	西山城跡と周辺の遺跡地図
Fig.3	西山城跡と周辺の遺跡航空写真
Fig.4	西山城跡概要図
Fig.5	西山城跡周辺概要図
Fig.6	調査グリッド設定図
Fig.7	西山城跡遺構全体図
Fig.8	東西横断エレベーション
Fig.9	西山城跡発掘調査区位置図
Fig.10	A区(曲輪1)遺構配置図
Fig.11	A区SB1平面・エレベーション図及び計測表
Fig.12	A区東西バンクセクション図
Fig.13	A区SA1・2・3・4平面・エレベーション図
Fig.14	A区SK1平面・エレベーション図
Fig.15	A区通路状遺構配置図
Fig.16	B区(曲輪2)遺構配置図
Fig.17	B区TRセクション図1
Fig.18	B区SB1平面・エレベーション図及び計測表
Fig.19	B区SB2平面・エレベーション図及び計測表
Fig.20	B区SB3平面・エレベーション図及び計測表
Fig.21	B区SB3Pitセクション図
Fig.22	B区SB4平面・エレベーション図及び計測表
Fig.23	B区SB5平面・エレベーション図及び計測表
Fig.24	B区SB6平面・エレベーション図及び計測表
Fig.25	B区SK2平面・セクション図
Fig.26	B区SX1・2平面・エレベーション図
Fig.27	B区虎口平面・セクション図
Fig.28	B区土塁1平面・断面・セクション・立面図
Fig.29	B区土塁2平面・立面図
Fig.30	B区南土塁断面図
Fig.31	C区遺構配置・南北縦断エレベーション図
Fig.32	C区堀切6平面図
Fig.33	C区堀切6・7セクション図
Fig.34	C区堀切8セクション図
Fig.35	C区堀切9セクション図
Fig.36	C区横堀1・堅堀1平面・セクション図
Fig.37	C区堅堀4TRセクション図
Fig.38	D区遺構配置・堀切3～5エレベーション図
Fig.39	D区堀切1セクション図
Fig.40	D区堀切3～5セクション図
Fig.41	D区堅堀11TR2～4セクション図

- Fig.42 D区豎堀11縦断セクション図  
Fig.43 D区豎堀20バンクセクション図  
Fig.44 E区遺構配置図  
Fig.45 E区TR1縦断セクション図  
Fig.46 E区TR3セクション図  
Fig.47 E区豎堀12・13セクション図  
Fig.48 E区南端平面図  
Fig.49 E区バンクセクション図  
Fig.50 F区遺構配置図  
Fig.51 F区豎堀セクション図  
Fig.52 出土遺物実測図1  
Fig.53 出土遺物実測図2  
Fig.54 出土遺物実測図3  
Fig.55 出土遺物実測図4  
Fig.56 出土遺物実測図5  
Fig.57 出土遺物実測図6  
Fig.58 出土遺物実測図7  
Fig.59 出土遺物実測図8  
Fig.60 出土遺物実測図9  
Fig.61 出土遺物実測図10  
Fig.62 出土遺物実測図11  
Fig.63 出土遺物実測図12  
Fig.64 出土遺物実測図13  
Fig.65 出土遺物実測図14  
Fig.66 出土遺物実測図15  
Fig.67 出土遺物実測図16  
Fig.68 出土遺物実測図17  
Fig.69 出土遺物実測図18  
Fig.70 出土遺物実測図19  
Fig.71 出土遺物実測図20  
Fig.72 出土遺物実測図21  
Fig.73 出土遺物実測図22  
Fig.74 出土遺物実測図23  
Fig.75 出土遺物実測図24  
Fig.76 出土遺物実測図25  
Fig.77 出土遺物実測図26  
Fig.78 出土遺物実測図27  
Fig.79 出土遺物実測図28  
Fig.80 出土遺物実測図29  
Fig.81 出土遺物実測図30  
Fig.82 出土遺物実測図31  
Fig.83 出土遺物実測図32  
Fig.84 出土遺物実測図33  
Fig.85 出土遺物実測図34  
Fig.86 出土遺物実測図35  
Fig.87 出土遺物実測図36  
Fig.88 出土遺物実測図37  
Fig.89 出土遺物実測図38  
Fig.90 出土遺物実測図39  
Fig.91 西山城跡遺構全体及び遺物出土状況図  
Fig.92 鉄滓出土位置図  
Fig.93 西山城跡遺物出土組成グラフ  
Fig.94 西山城跡と岡の谷城跡縄張図

## 表 目 次

表1	古銭計測表
表2	出土遺物観察表1
表3	出土遺物観察表2
表4	出土遺物観察表3
表5	出土遺物観察表4
表6	出土遺物観察表5
表7	出土遺物観察表6
表8	出土遺物観察表7
表9	出土遺物観察表8
表10	出土遺物観察表9

表11	出土遺物観察表10
表12	出土遺物観察表11
表13	出土遺物観察表12
表14	出土遺物観察表13
表15	出土遺物観察表14
表16	出土遺物観察表15
表17	出土遺物観察表16
表18	出土遺物観察表17
表19	出土遺物観察表18
表20	出土遺物観察表19
表21	西山城跡出土鉄滓

## 写 真 目 次

巻頭 1	久礼湾と西山城跡
巻頭 2	西山城跡航空写真(真上より) 西山城跡航空写真(東上空より)
巻頭 3	西山城跡遠景(東より) 西山城跡遠景(西より)
巻頭 4	B区土塁2とC区堅堀1(A区より) C区堀切6(西より)
写真 1	西山城跡遠景(東より、久礼川から望む) 西山城跡近景(東より、曾我神社から望む) 西山城跡近景(西より、松の川から望む) 西山城跡近景(北より) C区堀切6より久礼を望む
写真 2	A区(曲輪1)から久礼城跡を望む A区(曲輪1)調査前全景(北より) A区(曲輪1)調査前全景(南より)
写真 3	A区(曲輪1)発掘調査風景(南より) A区(曲輪1)西斜面発掘調査風景(北より) A区(曲輪1)西斜面、盛土及び集石検出状況(北より)
写真 4	A区(曲輪1)検出状況(南より) A区(曲輪1)北端部遺物出土状況(備前焼 甕片集中) A区(曲輪1)南部遺物出土状況(銅製品と 土師質土器皿)
写真 5	A区(曲輪1)遺物出土状況(白磁皿) A区(曲輪1)遺物出土状況(銅製品) A区(曲輪1)遺物出土状況(瓦質土器火鉢)
写真 6	A区(曲輪1)南東斜面部検出作業風景(通 路状遺構)(北東より)

	A区(曲輪1)通路状遺構及びB区(曲輪2) 土塁2検出作業風景(北東より)
	A区(曲輪1)通路状遺構検出状態(東より)
写真 7	A区(曲輪1)通路状遺構とB区(曲輪2)土 塁2検出状況(北西上より) A区(曲輪1)完掘状態(北より) A区(曲輪1)南端部SB1完掘状態
写真 8	B区(曲輪2)調査前全景(南より) B区(曲輪2)北端部検出作業風景(東より) B区(曲輪2)北端部集石検出状況(東より)
写真 9	B区(曲輪2)SB1・SB3掘立柱復元状況(南 東より) B区(曲輪2)堆積状況(A区東西バンク南 壁セクション) B区(曲輪2)SB1掘立柱復元状況(A区曲 輪1より)
写真10	B区(曲輪2)SB1完掘状況(A区曲輪1より) B区(曲輪2)土塁1・SB1完掘状況(東より) B区(曲輪2)SB6完掘状況(A区曲輪1よ り)
写真11	B区(曲輪2)SK2上部集石・半截状況(東 より) B区(曲輪2)SK2半截状況(東より) B区(曲輪2)SK2完掘状況(東より)
写真12	B区(曲輪2)土塁2検出状況1(A区曲輪1 より) B区(曲輪2)土塁2検出状況2(北より) B区(曲輪2)土塁2検出状況3(A区通路 状遺構部分より)
写真13	B区(曲輪2)土塁2断割状況(北東より) B区(曲輪2)土塁2内部集石検出状況(北

- 東より)
- B区(曲輪2)土塁2セクション(西壁)
- 写真14 B区(曲輪2)遺物出土状況(青磁碗)  
B区(曲輪2)遺物出土状況(土師質土器)  
B区(曲輪2)遺物出土状況(筭)
- 写真15 C区完掘状態遠景(東より)  
C区堀切6バンクセクション(東より)  
C区堀切6完掘状況(西より)  
C区堀切7バンクセクション(東より)  
C区堀切8完掘状況(東より)
- 写真16 C区調査前全景(南より)  
C区堀切9(東より)  
C区横堀1・集石検出状況
- 写真17 C区竪堀4・5完掘状態(A区曲輪1より)  
C区堀切6完掘状態(東より)  
C区完掘状態(A区曲輪1より)
- 写真18 D区調査風景(B区曲輪2より)  
D区堀切5完掘状態(東より)  
D区堀切4完掘状態(東より)
- 写真19 D区竪堀11バンクセクション(東より)  
D区竪堀11バンクセクション(竪堀11・堀切6接合部)  
D区竪堀11バンクセクション(竪堀11・堀切6接合部)  
D区竪堀11作業風景  
D区竪堀11完掘状態
- 写真20 D区堀切3・4・5完掘状態(南東より)  
D区堀切1完掘状態(東より)  
D区東斜面作業風景(南より)
- 写真21 E区作業風景(北より)  
スカイキャリアーによる土砂の運搬作業  
E区発掘調査風景
- 写真22 E区TR1～3設定状況(南より)  
E区TR調査風景(北より)  
竪堀12遺物出土状況(備前焼甕)  
竪堀12遺物出土状況(上層)  
竪堀12遺物出土状況(備前焼他)  
竪堀12遺物出土状況(青花皿)  
竪堀12遺物出土状況(青花皿)  
竪堀12遺物出土状況(土師質土器羽釜)
- 写真23 竪堀13遺物出土状況(青磁皿)  
竪堀13遺物出土状況(備前焼甕)(東より)  
竪堀12セクション(西より)
- 写真24 F区西斜面検出作業風景(北より)  
F区竪堀8～10完掘状況(北より)  
F区竪堀6・7完掘状況
- 写真25 F区西斜面遺物出土状況(備前焼甕)
- F区西斜面遺物出土状況(青磁碗)  
F区西斜面遺物出土状況(瀬戸梅瓶)
- 写真26 F区西斜面遺物出土状況(青磁花瓶)  
F区竪堀6・7遺物出土状況(青磁花瓶)  
F区出土青磁花瓶
- 写真27 久礼子供会見学 2005.5.21  
久礼子供会見学 2005.5.21  
高岡地区文化財保護連絡協議会  
2005.10.4  
高岡地区文化財保護連絡協議会  
2005.10.4  
久礼小学校現場見学(正昭会主催)  
2005.10.12  
久礼小学校現場見学(正昭会主催)  
2005.10.12  
西山城跡シンポジウム現場見学会  
2005.10.23  
西山城跡シンポジウム(中土佐町主催)  
2005.10.23
- 写真28 西山城跡シンポジウム 2005.10.23  
久礼中学校見学 2005.11.17  
笹場小学校現場体験学習 2005.11.28  
平成17年度記者発表 2006.1.20  
北垣聡一朗氏、萩原三雄氏 視察  
ラジコンヘリによる航空写真測量  
2005.3.8  
ヘリコプターによる航空写真測量  
2006.1.27  
雪の西山城跡 2005.2.1
- 写真29 出土遺物1  
写真30 出土遺物2  
写真31 出土遺物3  
写真32 出土遺物4  
写真33 出土遺物5  
写真34 出土遺物6  
写真35 出土遺物7  
写真36 出土遺物8  
写真37 出土遺物9  
写真38 出土遺物10  
写真39 出土遺物11  
写真40 出土遺物12  
写真41 出土遺物13  
写真42 出土遺物14  
写真43 出土遺物15  
写真44 出土遺物16  
写真45 出土遺物17  
写真46 出土遺物18



# 第 I 章 調査に至る契機と経過

## 第 1 節 調査の契機

西山城跡が所在する中土佐町は、県の中央部やや西よりに位置し、北は須崎市、西は大野見村、西から南にかけては窪川町に接する。東側は太平洋が広がる土佐湾に面し、山が海岸に迫る土佐湾西岸の漁業の町である。昭和 32 年(1957)に久礼町と上ノ加江町が合併して「中土佐町」として成立し、久礼湾と加江湾の恵まれた良港で鰹、ブリなどの釣(久礼)・定置網漁業(上ノ加江)で栄えた代表的な漁港である。かつては大敷網の先進地として栄えていたが、今では「土佐の一本釣り」で知られるように鰹などの沖合い釣漁業、延縄漁業が中心である。また、農業では葉タバコ栽培と、野菜などの施設園芸が盛んである。「平成の大合併」と呼ばれる中、平成 18 年(2006) 1 月に隣接する大野見村と合併し、新しく「中土佐町」となった。久礼は四万十町(旧窪川町)方面に向かう街道筋にあたり、現在の鉄道が開通するまでは交通の要地であった。また、高幡地域(高岡郡、幡多郡)の山村からの林産物の積出港でもあった。しかしながら、現在の交通輸送の中心である道路の本格的基盤整備については昭和 30 年代後半からであり、それ以前は上ノ加江から須崎間は巡航船が運航していた。県道高知・中村線については昭和 38 年に一般国道 56 号に昇格し、安和・久礼間については海岸線に道路が設けられていたが、落石が多いため昭和 45 年に焼坂トンネルを開通させ現在のルートとなった。全国的に道路が整備され陸上輸送が中心になった現在、隣接する須崎市、四万十町(旧窪川町)の間に位置する中土佐町ではさらなるルートの確保が必要に迫られていた。

四国横断自動車道路は平成 14 年に須崎市まで完成し、西進する須崎市から窪川町までの路線計画が挙げられた。今回この計画ルートに西山城跡の立地する丘陵部が工事範囲にあたることから高知県教育委員会は日本道路公団四国支社高知工事事務所と協議を行い、工事対象地について記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施することとなった。四国横断自動車道路(須崎市～四万十町)区間は、国土交通省の新直轄事業として実施されることとなり、国交省からの委託により日本道路公団(現西日本高速道路株式会社)と高知県教育委員会が契約し、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが再委託を受け発掘調査を実施することになった。平成 16 年 6 月 1 日付けで高知県教育委員会と業務委託契約を締結し、事前の現況確認調査、写真撮影、測量を行い、同年 11 月 5 日から発掘調査を実施した。現地発掘調査は平成 17 年度も継続して行われ、平成 18 年 2 月 28 日まで実施した。

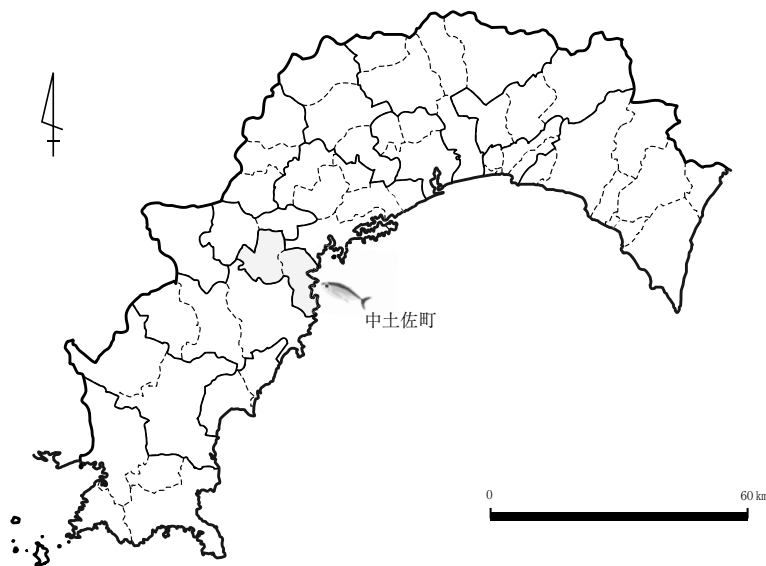


Fig.1 中土佐町位置図

## 第2節 調査組織・調査経過

### 1. 調査組織

発掘調査は平成16年度から17年度にかけて行われ、調査期間は平成16年11月5日から平成18年2月28日まで実施した。引き続き、平成18年度から平成19年度3月にかけて整理作業及び報告書刊行の工程で開始された。発掘調査及び整理業務は、高知県教育委員会から委託を受け(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。各年度の調査体制は以下のとおりである。

#### 調査組織

##### 平成16年度

総括：(財)埋蔵文化財センター所長 川村寿雄

調査事務統括：同次長兼総務課長 久川清利 調査統括：同調査課長横山耿一

調査担当：同調査第三班主任調査員 吉成承三 同 前田憲志

事務担当：同主任 池野かおり 同主幹 長谷川明

##### 平成17年度

統括：同所長 川村寿雄

調査事務統括：同次長兼総務課長 湯浅文彦 調査統括：同調査課長 森田尚宏

調査担当：同調査第二班長 吉成承三 同主任調査員 前田憲志

事務担当：同主任 池野かおり 同主幹 長谷川明

##### 平成18年度

統括：同所長 川島博海

調査事務統括：総務課長 戸梶友昭 調査統括：調査課長 廣田佳久

調査担当：調査第二班長 吉成承三 事務担当：同主任 池野かおり

##### 平成19年度

統括：同所長 汲田幸一

調査事務統括：総務課長 戸梶友昭 調査統括：調査課長 廣田佳久

調査担当：調査第二班長 吉成承三 事務担当：同主任 谷 真理子

発掘調査ならびに整理作業については以下の方々の協力を得た。

発掘調査作業員：浜田康男・浜田文子・浜田勝猪・奥田義教・池田征郎・岡村和男・前田健一・池田秋弘・久川光子・前田なるみ・松本隆徳・山下堯彦・田中光善・池田英雄・五ノ井君代・浜田敏雄・宗崎重孝  
技術補助員：矢野雅子

測量補助員：野町和人・松村省三・高橋友子

整理作業員：松木富子・浜田雅代・竹村延子・浜田千恵子・岩崎佐枝・高橋由香・西尾亜矢子

### 2. 調査経過

当初、西山城跡が立地する丘陵には伐採した樹木が現地に置かれた状態であり、城跡の範囲確認のため森林組合に委託し樹木を撤去及び斜面に移動させた。その後、高速道路建設計画範囲内において城跡遺構の拡がり把握する現地踏査を実施した。その結果、計画範囲のほぼ全域にわたり西

山城跡の遺構の拡がりが見らかとなり、斜面部を含めた 13,000 m<sup>2</sup>を発掘調査の対象とした。調査対象地が広範囲に及ぶため、丘陵の各尾根部、斜面部ごとに調査区を設定し、平成 16 年度は西山城跡の主郭にあたる部分の調査を行い、続く 17 年度は主郭から南北に延びる尾根筋および斜面部の調査を実施した。発掘作業にあたっては、重機等の使用が困難であるため、雑木、雑草の除去を含め全て人力で行った。斜面部の発掘にあたっては、掘削による土で土嚢を作り、斜面に杭を打ち伐採された雑木を杭間に並べその上に土嚢を敷き並べ足場として使用した。また、発掘による排土について調査対象内に仮置きするスペースがとれないことから、東面斜面についてはスカイキャリアー（伐木等を運搬する機械）を森林組合委託して、排土を移動させた。平成 17 年度調査の西斜面については地形が急峻であることから、斜面に作道を設置し、キャリアー・小型ダンプにより排土を移動した。現地測量については、発掘調査前と調査後の 2 回に分けて(株)四航コンサルタントに委託し、西山城跡全体の航空写真測量及びレーザー測量を実施した。また、個別遺構図等の作成については(株)アイシン精機の測量システム「遺構くん」を使用した。

### 第 3 節 調査日誌抄

#### 平成 16 年度

8.26(木) 日本道路公団と現地立会。調査範囲を確認する。



9.6(月) 西山城跡南麓に現場事務所を設置。

9.8(水) 調査区境に防護ネットを設置し、伐採樹木の撤去を始める(須崎地区森林組合へ委託)。



9.17(金) 南斜面部の樹木処理がほぼ終わる。調査区外で畝状空堀群を確認する。

9.29(水) 台風 21 号の影響で、現場周辺で水害が起こる。



10.15(金) 調査前全景写真撮影。

10.18(月) 測量用基準杭設置(四航コンサルタント)。調査前遠景写真撮影。

10.27(水) 調査前地形測量。

11.5(金) 現場作業が始まる。調査区全景写真撮影のため、A(詰)・B(腰曲輪)区の清掃を行う。A区北縁辺で備前甕片、播磨型鍋など表採する。東斜面の排水について、地元、中土佐町建設課、日本道路公団、県教委で協議。





11.12(金) A区にT字形にバンクを設定し、遺構調査を開始する。伐根作業に時間がかかる。青磁碗、備前甕片などの出土遺物は光波で測量する。

11.15(月) A区北で礎石を検出する。



11.17(水) A区バンク西側の掘削を行う。南部は、極めて遺物が少ない。

11.22(月) A区北の礎石周辺で備前焼片が集中する。B区で地形測量を行う。



11.24(水) A区北部で下層岩盤面を確認。工事用道路が使用可能となる。スカイキャリーの設置作業が始まる(森林組合委託)。中土佐町文化財保護審議会委

員林氏、中土佐町教委山口氏視察。

11.25(木) A区1面目の検出作業ほぼ終わる。北部でさらに遺物集中が見られる。県文化財課森田班長の視察。

11.26(金) A区北の検出状態を撮影し、東斜面部の掘削にかかる。スカイキャリー設置完了する。

11.29(月) A区で公共座標グリッドを設定し、遺物出土状態の実測図を作成する。

11.30(火) A区東斜面中段から下の排土は土嚢袋に入れB区縁辺に並べる。日本道路公団視察、葉山村文化財保護審議会委員の方の視察。

12.1(水) 現場の工事用平場にユニットハウス、トイレなど設置する。

12.3(金) 調査前のレーザー測量を始める(7日まで)。B区に土嚢1200袋を土留めなどとして並べる。B区南土塁で集石確認。作業用通路の設置完了(森林組合)。

12.6(月) B区にバンクを設定しI層表土の掘削にかかる。スカイキャリーによる樹木などの搬出が始まる。



12.7(火) B区表土15cm下で岩盤面を確認する。北部で遺物集中が見られる。

12.8(水) B区南土塁でA区へ延びる集石を確認する。またB区南でA区に延びるL字に削った通路状遺構を確認する。

12.10(金) B区の土嚢をA区西斜面へ運び通路をつける。





12.13(月) コンクリートシューターを設置し、B区北からD(北斜面)西側へ排土搬出を始める。



12.15(水) A区の精査を行う。土の堆積があるところはⅡ層とする。排土搬出用作業道の設置にかかる(鍋島建設)。県文化財保護審議会前田和男氏、地教委山口氏の見学。

12.16(木) A区の斜面部の掘削を始める。B区Ⅰ層目の掘削を終了する。B区からA区へ延びる通路状遺構を検出する。

12.17(金) B区南端の土塁状遺構の検出状態を撮影する。

12.22(水) 道具の手入れを行い、本年の作業を終了し撤収する。

12.27(月) 「遺構くん」トレーニング(アイシン精機)を行いながら測量データの整理を行う。

1.5(水) 作業再開する。北東斜面に土嚢を積み上げる。

1.11(火) A区西斜面の精査を行う。CV-5グリッドⅡ層より遺物集中。青磁花瓶片が出土する。日本道路公団視察。



1.13(木) 完掘遺構のレーザー測量、土塁集石などの測量を順次行う。作業道の土取り調整が行われる。

1.17(月) B区縁辺部の掘削を行う。フェンス柵の設置工事に入る(鍋島建設)。地教委山口氏の取材(広報なかとさ用)。



1.20(木) C区堀切1へ溜まった排土をフェンス柵までおろす。





1.21(金) B区、C区堀切7の精査を行う。

1.24(月) A区南から精査をかける。岩盤彫り込みの柱穴を検出する。兜の前立と考えられる銅製品と土師器皿4枚がまとめて出土する。

1.25(火) スカイキャリアーを設置し直す。

2.1(火) 大雪で現場作業中止。



2.2(水) 雪の残る中、国立歴史民俗博物館の千田嘉博氏の現場指導を頂く。



2.7(月) B区北部の土塁へ向けて掘削に入る。

2.9(水) B区からの排土、雑木をキャリアーで搬出する。B区のレーザー測量を行う。



2.10(木) C区堀切7の精査、清掃を行い、レーザー測量を行う。



2.14(月) 竪堀1と堀切7の間で横堀状遺構を検出する。

2.17(木) B区北土塁の内側で石積みを検出する。

2.21(月) C区、竪堀1～3の掘削を行う。現地説明会用通路を設置する。

2.22(火) 中土佐町の文化財保護審議会委員7名の現場視察がある。

2.25(金) B区北土塁周辺、IV層から鉄釘、土師質土器などが集中して出土する。

3.2(水) A区の柱穴の掘削を行う。北部の土坑(SK1)で備前甕片が多量に出土する。

3.4(金) 平成16年度の調査成果について記者発表を行う。



3.6(日) 現地説明会を行う。200名ほどの参加がある。

3.7(月) B区中央部の焼成土坑の実測を行う。

3.8(火) ラジコンヘリによる航空写真撮影、及び測量を行う。

3.10(木) レーザー測量、森林組合による排土搬出を並行して行う。





- 3.14(月) レーザー測量が終了する。
- 3.16(水) A・B区の養生のためブルーシートで覆い、現場作業を終了する。

**平成17年度**

- 4.22(金) 本年度の現場作業を始める。
- 4.27(水) A区北斜面、B区の精査を行う。
- 5.9(月) A区北斜面、IV層から瓦質土器風炉、青磁盤などが出土する。地教委山口氏と打合せ。
- 5.10(火) B区のバンクの掘削が終了する。瓦質土器火鉢片が出土する。



- 5.11(水) B区で遺構検出作業を行い、柱穴を3個検

出する。A区北西斜面で、白磁皿、白磁八角皿が出土する。

- 5.17(火) C区の調査を再開する。竖堀4・5、堀切8・9などにバンクを設定し掘削を行う。
- 5.21(土) 地元久礼の子ども会と保護者約20名の現場見学会を行う。
- 5.26(木) B区の精査がほぼ終了する。
- 5.30(月) C区の排土をスカイキャリアで搬出し始める(森林組合作業再開)。



- 6.1(水) C区堀切9西斜面を中心に掘削を進める。
- 6.7(火) C区堀切7の集石をはずし、東側は完掘する。土師質土器片、瓦質土器片が出土する。
- 6.9(木) C区の竖堀1～5、堀切8の掘削を行う。キャリアのワイヤーの修理を行う。
- 6.13(月) C区竖堀1・4・5の掘削を進める。
- 6.17(金) C区西斜面の精査、東斜面の排土処理を行う。



- 6.21(火) C区竖堀4・5間の斜面精査及び作業通路撤去を行う。
- 6.27(月) A区西斜面のバンクの掘削を行う。

- 6.28(火) C区の調査終了する。
- 7.1(金) A区西斜面バンクより外底部に墨書が認められる白磁皿が出土する。
- 7.5(火) 愛媛県宇和島市教育委員会の視察がある。
- 7.13(水) E区(B区東下斜面)に入る。B区精査中に筭が出土する。
- 7.15(金) E区堅堀13にバンク設定。青磁の碗や盤が出土する。
- 7.19(火) 東斜面側の土嚢通路の付け替えを行う。
- 7.22(金) A・B区の完掘状態を撮影する。
- 7.27(水) E区南のトレンチ調査で連続堅堀の可能性が出てくる。
- 8.1(月) E区堅堀13・15の掘削。
- 8.5(金) E区堅堀群の掘削を行う。
- 8.9(火) B区虎口の下斜面の掘削を行う。
- 8.11(木) E区斜面部から鞘に入った銅製品が出土する。
- 8.12(金) E区南の連続堅堀で、青花稜花皿、備前甕底部、瓦質土器など多くの遺物が出土する。
- 8.19(金) E区E VI-6グリッドから、備前、瓦質などが次々と出土する。F区排土搬出用に作道付けを開始する(鍋島建設)。



- 8.26(金) E区北東斜面の掘削も進む。
- 9.1(木) E区E VI-7グリッドから、備前甕片などが下から次々と出土する。
- 9.2(金) E区溝状遺構4の掘削で、備前甕片、瓦質火鉢片、青磁碗が数多出土する。
- 9.6(火) 台風14号接近。

- 9.8(木) 現場に向かう工事用道路の分岐点に崩落の危険性が出る。
- 9.9(金) E区SD-4で、断面に焼土層を確認する。
- 9.12(月) F区(西斜面)の調査に入る。仮設道工事、ほぼ完了する。
- 9.14(水) F区、備前甕破片の出土点数が50点ほどになる。A区西斜面に安全対策用のロックネットを設置する。



- 9.15(木) F区堅堀6から青磁花瓶片が出土する。
- 9.17(土) 久礼八幡宮の秋の大祭があり、大松明が街をねる。
- 9.28(水) F区で堅堀3条を検出する。
- 9.30(金) 見学用土嚢通路をつける。
- 10.4(火) 高岡地区文化財保護連絡協議会で西山城跡について講演を行う。
- 10.12(水) 久礼小学校5年生の現場見学がある(正昭会主催)。





10.13(木) F区仮設道から重機による掘削を行う。備前焼片など多数出土する。

10.17(月) F区で土師質土器、備前焼、鉄釘、貿易陶磁器など多くの遺物が出土する。D区(北尾根)の調査に入る。

10.18(火) ラジコンヘリによる航空写真を撮影する。



10.19(水) F区西斜面作道のところで、さらに土器集中が認められる。瀬戸瓶子片が出土する。

10.23(日) 西山城跡シンポジウムが中土佐町主催で開催される。午前は、現地見学。午後は、歴博の千田嘉博氏、高知大の市村高男氏、県文化財保護審議会の前田和男氏、石材研究から林勇作氏、県文化財課から松田直則氏、埋蔵文化財センターから吉成承三が参加し、シンポジウムが行われ、現場見学会もあわせて行う。



10.25(火) F区堀切の掘削に入る。堀切6西側の堀底から川原石、土錘、備前甕片が出土する。

10.31(月) F区堀切3・6と西斜面の掘削を行う。

11.8(火) D区竪堀11でトレンチ調査を開始する。

11.11(金) 見学用土嚢通路をつける。

11.17(木) 久礼中学校2年生46名の見学がある。



11.21(月) 排土搬出先の工事用道路の仮置場が飽和状態になる。

11.24(木) D区西斜面、竪堀11の調査を進める。文化財課戸梶課長、松田班長の視察。

11.28(月) 笹場小学校5・6年生の見学と発掘体験を行う。



12.2(金) 堀切1の掘削を行う。

12.8(木) 竪堀11のトレンチ調査を続ける。

12.15(木) 竪堀11の調査を続ける。

12.20(火) 堀切1以北の清掃を終える。

12.22(木) 降雪。

12.27(火) 機材撤収し本年の作業を終了する。

1.1(日) 平成18年1月1日、中土佐町と大野見村が中土佐町として合併する。

1.5(木) B区清掃、E・F区バンク掘削、竪堀11の掘削など作業再開。

1.6(金) 作業・見学用通路をつける。

1.9(木) 歴博の小野正敏氏、高知大の市村高男氏の



助言、御教示を受ける。

- 1.12(木) 佐賀県文化財課の田中氏の視察がある。
- 1.17(火) A区西斜面設置のロックネットの撤去を行う。
- 1.19(木) 現地説明会にむけての通路付けや清掃を行う。
- 1.20(金) 本年度の調査成果について記者発表を行う。
- 1.21(土) 誤記事により急遽現地説明会を行う。見学者26名。
- 1.22(日) 予定の現地説明会を行う。
- 1.23(月) 見学用通路や山上の現場事務所、機材庫などを撤去する。
- 1.24(火) スカイキャリーを撤去する(森林組合)。
- 1.25(水) 航空測量にむけて清掃を行う。レーザー測量を行う。



- 1.27(金) ヘリコプターによる航空写真撮影、及び航空測量を行う。
- 2.2(木) 縦堀11の掘削を続ける。
- 2.3(金) B区南土塁の補足調査を始める。
- 2.8(水) レーザー測量を続ける。B区北土塁の補足調査を始める。
- 2.10(金) 堀切10のトレンチ調査を行う。
- 2.14(火) B区北土塁Ⅲ層から青磁雷文帯碗が出土する。南土塁は、石積みを土塁中より検出する。
- 2.17(金) 午前で発掘調査を終了する。
- 2.21(火) 現場事務所撤去。
- 2.28(火) B区補足調査遺構の測量を行い、全調査を

終了する。



## 第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

「中土佐町史」が「青い空と広い海、澄みきった空気、自然環境に恵まれた」と紹介する中土佐町は、高知市より西へ47km、高知県中西部に位置し、東西20km、南北20.7km、面積194.43km<sup>2</sup>、農業と漁業を基幹とする総人口8722人の町である。平成18年1月1日に海岸部の旧中土佐町と海拔300mを越える山々に囲まれた台地部の旧大野見村が合併して新しい「中土佐町」が誕生した。

北東には須崎市があり、標高842.40mの檮山から青木崎まで延びる山々が境となり焼坂峠越えの国道56号線が東方と結ぶ基幹路になる。北には、不入山山系の山々が連なり津野町(平成17年2月1日、旧東津野村、旧葉山村が合併)と接している。西は、標高1053.90mの鈴ヶ森などがそびえる山岳地帯と、標高590.30mの火打ヶ森山系が四万十町(平成18年3月20日に旧窪川町、旧大正町、旧十和村が合併)との分水嶺となる。東は、土佐湾に面した典型的なりアス式海岸で久礼、上ノ加江、矢井賀などの良港を抱える。旧中土佐町内の山々を水源とする久礼川、大坂川、上ノ加江川などの各河川が、扇状地と複合平野を形成し土佐湾に注いでいる。西山城跡は、久礼湾口から1.5km付近にあり、久礼川とその支流の松の川、道の川が形成した平野部に、北東より延びてきた標高70.00mあまりの丘陵上に位置している。

旧中土佐町内は、晴天の日が多く、年間平均気温は17℃、年間降水量は約2600mmと極めて高温多湿で作物の栽培に適した環境にある。ハウス園芸が盛んで苺、小ナス、ミョウガ、ニラづくりが行われている。2000年の作付面積は、547haで8割が水田となっている。林野面積は、17348haで2割を国有林が占めている。青柳祐介の「土佐の一本釣り」の舞台でもあるように漁業の街でもある。最近では、久礼漁港の市場が新港に、上ノ加江には漁業体験のできる交流施設がそれぞれ完成し新たな取り組みが始まった。毎年5月に開催される「鱈まつり」や秋の「久礼八幡宮大祭」は多くの人々で賑わいをみせる。

旧大野見村内は、高南台地北部の四万十川(渡川)上流に開けたところにあり、蛇行する四万十川が地区を二分し、両岸に耕地が帯状に点在している。清らかな空気や水、水田と森林が広がり夏にはゲンジボタルが舞う閑静な里である。日較差が大きく美味な大野見米や良質の檜の産地としても知られている。

### 第2節 歴史的環境

旧中土佐町内での先史時代については、多くは明らかになっていないが、土佐湾へ流れ込む汐入川の上流にある押岡遺跡から縄文時代晩期とされる磨製石斧(全長7.7cm)が1点出土しており、町指定文化財として中土佐町教育委員会に保管されている。また、出土地点、年代は不明であるが、全長22cm、最大幅4.5cm、最大厚1.8cmを測る断面蒲鉾型の弥生時代の石剣が高知県立歴史民俗資料館に保管されている。久礼八幡宮には神宝として中広形銅戈(全長32.4cm、身の最大幅4.6cm、胡長10.6cm、内の長さ2.2cm、幅2.2cm)が1口所蔵されており県指定文化財になっている。旧大野見村に目を向けると、弥生時代の遺跡として宮野々遺跡が挙げられる。平成5年に発掘調査が行われ、弥生時代中

期の竪穴住居跡が検出された。旧大野見村も発掘調査事例は少なく、多くは明らかとなっていない地域である。中土佐町における考古学的な知見は少ないが、四国横断自動車道路建設に伴う発掘調査により、少しずつ歴史的知見がみえつつある。坪ノ内遺跡は、西山城跡東麓、道の川地区にあり、2004年の発掘調査において鎌倉時代から南北朝期にかけての集落や倉庫跡を確認した。調査区の中央部で梁間3間、桁行5間、面積75㎡を測る大型の総柱建物跡を検出している。時期は14世紀代と考えられている。また、2005年の調査においては、柱穴、土坑、井戸跡、溝跡、水路跡などを検出しており、2間×3間の総柱建物跡や2間×5間の建物跡なども確認されている。出土遺物は、中世前期のもので西山城跡出土の遺物より若干古くなると考えられる。その他、弥生時代の遺物も僅少なが出土している。

西山城跡周辺の遺跡に目を向けると、現国道56号線(道の川)を挟み東方約500mの地点に宗善寺跡がある。地元伝承で西山城主と伝わる北村氏の菩提寺跡とされ、南北朝から室町時代にかけての五輪塔群がある。西山城跡と宗善寺跡のほぼ中間の現在の国道56号線下には大門遺跡がある。戦国時代の合戦場とされ、近年まで多くの石積墓があったところである。中世城郭としては、久礼川を挟んだ南西側に岡の谷城跡がある。平場と土塁だけで作られた山城であり、岡の谷城跡からは、久礼湾を一望できることから、西山城跡の見張台的な役割を担っていた可能性が考えられる。

西山城跡の南1.3kmには、佐竹氏の居城である久礼城跡がある。山頂の詰と東方下の二段、西方下の三段を中心に、北方下長沢川に向かってのびる尾根の先端部の郭、詰西南部下の尾根から三段にかけての堀切、竪堀群、詰東南下の土塁群、二段東下の尾根の土塁群とこの尾根から詰北方下の郭にかけての竪堀群からなり、南北山麓近くに湧水をたたえる池が一カ所ずつある。昭和58年(1983)に主郭部を中心に発掘調査が実施されており、山頂部の詰の一段高くなっている西端部で、直径30～40cm大の楕円形の礎石を検出し、桁行6間、梁間2間の多間にあたると思われる建物跡を検出している。東端部では、桁行8間(7.70m)、梁間4間(4.00m)の望楼的建物の可能性のある礎石を検出している。この建物の北西に桁行、梁間とも2間と考えられる建物跡、中央東よりで井戸と思われる土坑状の遺構を確認している。出土遺物から久礼城跡の機能年代の判定は困難であるが、15世紀後半から16世紀後半のものと思われる青花碗片が出土している。久礼城跡が立地する丘陵の南部には青木城跡があり、さらに青木城跡の南1km強には尼ヶ森城跡がある。久礼城跡を中心に半径2km以内に5つの中世城郭が集中している地域である。

承和8年(841)、吾川郡内の4群を割いて高岡郡が設置されるが、現在の中土佐町地域が何郡に属したかは文献史料がなく明確でない。中土佐町内の地名が文献に現れるのは、13世紀半ばのことで「九条道家初度惣処分状」に加納久礼別府と見える。建長2年(1250)、九条道家が一条家を創設した四男実経に譲った家領のなかに幡多庄が含まれており、久礼は、その一部として付加されたというものである。ただ、加納久礼別府の成立時期や事情は、史料不足のため明らかにできない。「南路志」にみられる佐竹氏以前の久礼の領主と記す池田信濃守を祀っていると伝えられる五輪塔群が大坂谷の元川左岸にある。「堂社御改指し牒」に「池田何某と申人古寺山城跡ニ有此方之菩提寺」とあるのは東林寺のことで、この古寺の北上の山は青木城跡と言われている。池田氏に関する史料は少ないが、有力者の存在が認められる。中土佐町史によると佐竹氏は、新羅三郎源義光の子孫といわれ、「堂社御



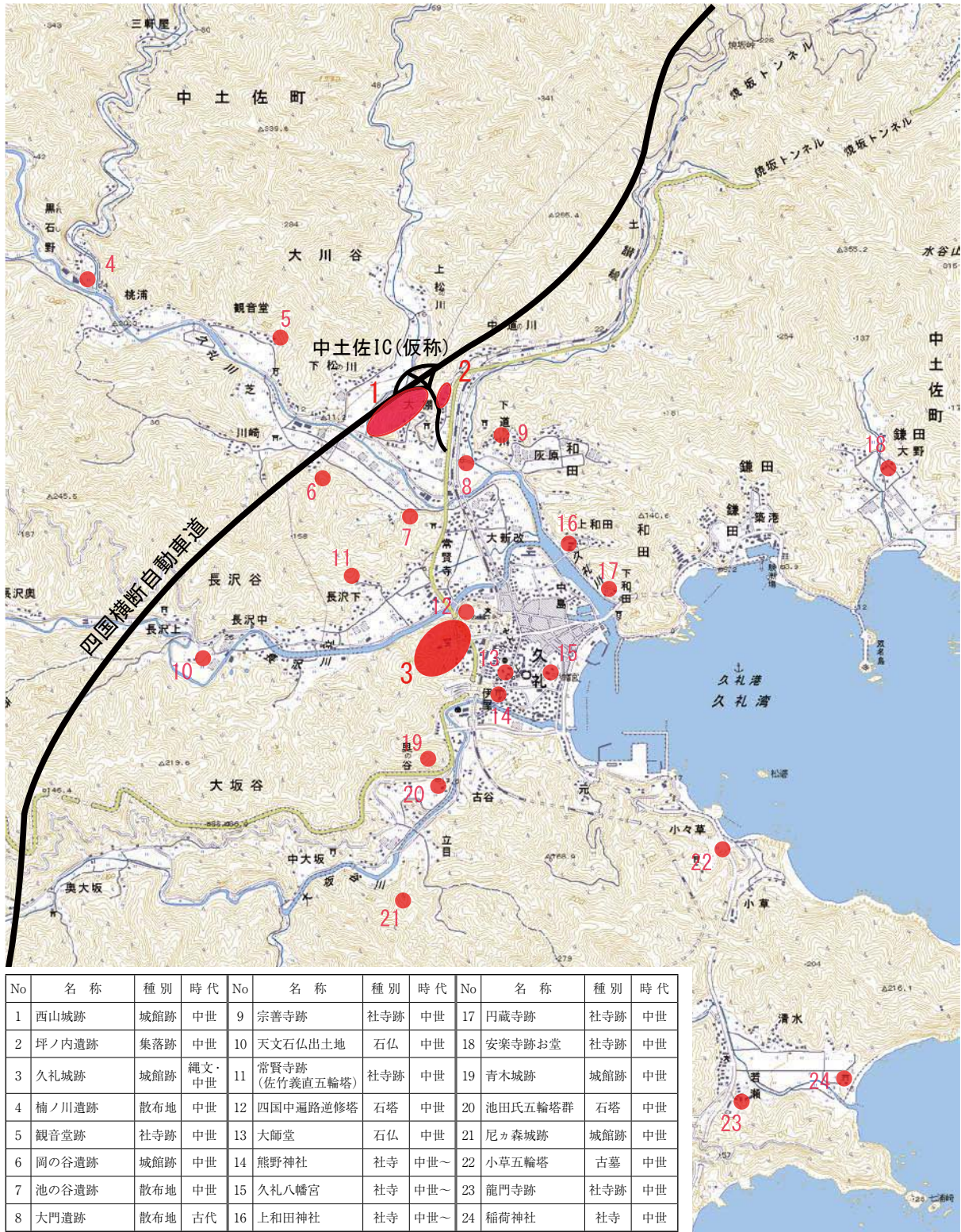


Fig.2 西山城跡と周辺の遺跡地図





Fig.3 西山城跡と周辺の遺跡航空写真

改指出牒」や「土佐州郡志」では、常陸国から土佐久礼に来て本拠を構えたとされる。「土佐国蠹簡集」では、大永年間(1521～27)に久礼へ来住したとしている。

「佐伯文書」によれば、暦応2年(1339)の土佐における南北朝の争いを記したなかに、北朝方武将として佐竹、佐竹一族彦三郎殿などに見える。佐伯文書は、南北朝期に津野新庄岡本城の北朝方武将であった佐伯(堅田)小三郎経貞の軍忠状を中心とする文書である。延徳3年(1491)、笹場の稲荷大明神、曾我大明神が佐竹氏により造立されており、その勢力が笹場までのびていたことがわかる。この後、戦国時代までの佐竹氏関連の史料は少なく、「船戸村金光寺般若経奥書」に年代は定かではないが、上ノ加江まで勢力が及んでいたことが考えられる記述がある。永正4年(1507)、細川政元が殺害され、守護代細川氏が上洛したのをきっかけに土佐は戦国時代に突入する。「土佐軍記」巻1の「土佐国守護之事」に佐竹氏は、国侍として位置付けられている。他にも北村、賀江など関連する人名も記述される。「上ノ加江町史」によると、土佐の平田氏には、幡多郡平田郷の平氏と高岡郡賀江岬に流れついた伊賀平氏に系統が分かるとある。後者を賀江平田、略して賀江と呼んだとしている。「土佐州郡志」と「南路志」は、平田氏の居城を上ノ加江の雲井城とし、一条氏の家臣として仕えるが後に謀殺されたと伝えられている。

### 第3節 西山城跡の概要

標高70.32mを測る山頂部に「詰」と考えられる曲輪があり、規模は長さ約40.00m、幅8.00～10.00m、面積約360㎡を測る弧状を呈した平場である。詰の斜面は50°以上の傾斜を測る「切岸」に成形している。東側下には比高差6.00m前後、標高64.10～64.19mに詰に沿って「く」の字型を呈した「腰曲輪」があり、規模は長さ45.00m、幅5.00～8.00m、面積約315㎡を測る平場である。この腰曲輪の両端部には「土塁」が見られ、北側はL字状を呈し、南側は一部、石詰みが見られる。南端の土塁下には規模の大きい「堅堀」が認められる。腰曲輪東下斜面には、堅堀を連続させた「畝状堅堀群」があり、さらにその下、標高45.00m付近の調査区外まで続く。詰の北端から北東方向に続く尾根には、合計5本の「堀切」を連続させており、一部が堅堀と連結する。また、詰の南東端比高差5.00m下には横堀と見られる遺構があり、腰曲輪の南土塁下の堅堀と連結する。また、詰から南に延びる尾根には、詰南端直下に堀切があり、北、西、南東の3方向に堅堀が連結する。ここから尾根は南東に向けて地形が下がり、標高54mにかけて3本の堀切が見られる。城の西斜面(松の川側)は、急峻であり、自然の地形を利用し、堅堀として使われたと考えられる遺構が一部に見られる。

このように、現況でも城の遺構を明確に確認する事が可能であり、良好に残っている。城の縄張りから見て堀切や堅堀といった遮断施設を多用しており極めて防御性の高い城造りといえる。特に、主郭を丘陵の標高の一番高いところに配置し、南北の尾根筋の起伏を利用し、主郭側を切岸状に成形し堀切を構築している点、また、主郭から派生する小尾根基端部にU字形の堅堀をそれぞれの尾根に構築している点が西山城跡の縄張りの特徴の一つといえる。このように中心である主郭の周りを堀切・堅堀といった遺構で完全に遮断しており、縄張りからみて軍事的緊張の中で構築された「砦」的な性格の城であると思われる。





Fig.4 西山城跡概要図

### 第三章 調査の概要

#### 第1節 調査の方法

調査にあたっては、調査対象地内の雑木の撤去後に城跡全体の縄張り図を作成した。東斜面で連続した豎堀を検出し、調査対象地区外まで続いていることが明らかとなった。その後、現況図を作成するにあたり、城跡遺構が調査対象地全域に拡がり広範囲に及ぶため、基準点設置、航空写真測量及び詳細な微地形データを取得するためレーザー測量を(株)四航コンサルタントに委託し実施した。基準点設置にあたっては、調査対象にあたる山上にNo.1～No.4の三級基準点をGPS測量により設置を行った。公共座標は世界測地系を使用した。航空写真測量にあたってはヘリコプターにより西山城跡が立地する丘陵及び周辺部を取り込んだスケール1/500の地形図を作成した。また、レーザー測量により、航空写真では詳細なデータが得られない西山城跡の遺構の部分について補足測量を実施した。これにより、発掘調査前の詳細な3次元データを得ることができた。

発掘調査は調査対象地をアルファベットA～F区の6区画とし、調査を実施した。山頂部にある詰に相当する平坦面及び斜面部をA区、腰曲輪をB区、南尾根部をC区、北尾根部をD区、東斜面をE区、西斜面をF区と調査区を呼称し、公共座標グリッドを設定した。X軸(南北)は北から順にローマ数字のI～VII、Y軸(東西)は西から順にアルファベットのA～Gを付し、20×20mの中グリッドを設定する。さらに中グリッドを4×4mの小グリッドに割り振り、1～25までの番号を使用する。

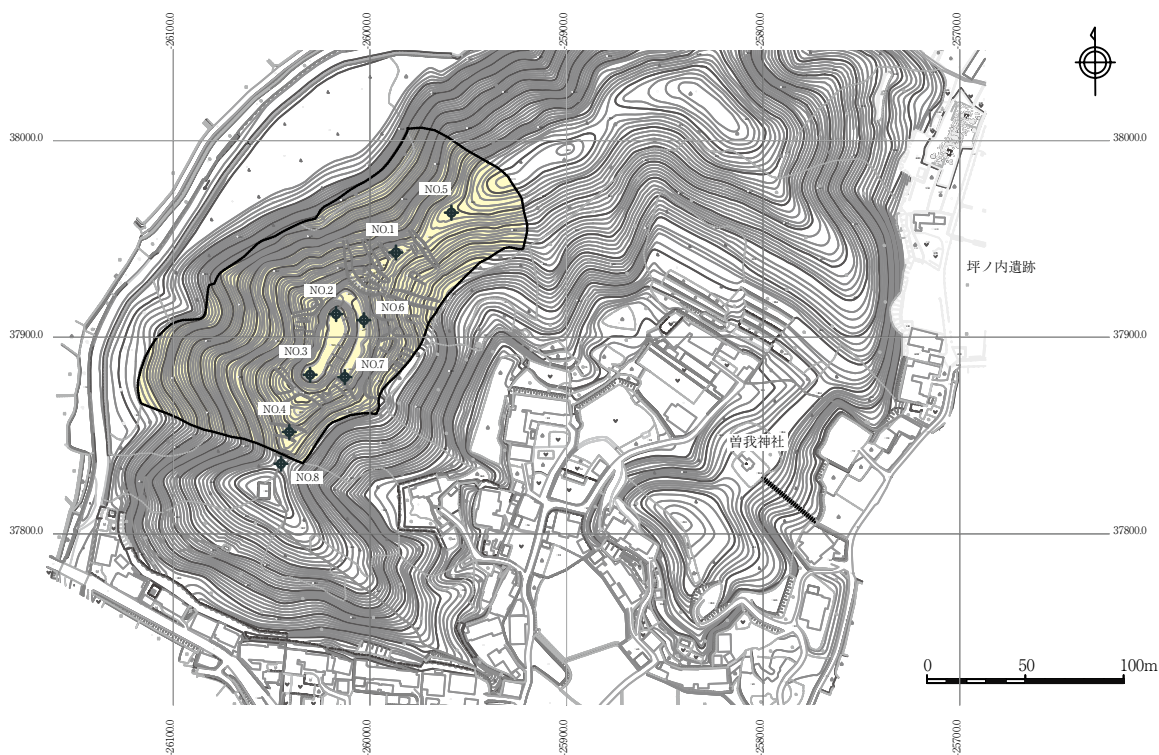


Fig.5 西山城跡周辺概要図



遺物等の取り上げについては、グリッドの左上の番号を基準に取り上げを行った。

発掘調査は平成16年度に主郭部分のA・B区、17年度にC～F区の調査を行った。各調査区の基本的な堆積を把握するために任意にトレンチを設定し、断面図1/20を作成した。また、検出遺構については遺構測量システム「遺構くん」(アイシン精機)を使用し平面図1/20を作成し、出土状況図1/10、セクション図1/20については実測を行った。

## 第2節 調査の概要

西山城跡は高岡郡中土佐町久礼字城山・下越に所在し、標高70.00～40.00m前後の北東から南にのびる尾根上に立地している。丘陵の西側は松の川、南側は久礼川、東側は道の川の三つの河川の合流地点に位置する。発掘調査は、高速道路(中土佐～窪川間)工事計画が城跡の立地する丘陵上を通るため、西山城跡のほぼ全域にわたって実施された。調査期間は平成16年度から平成17年度の二カ年にわたり実施され、最終調査面積は12,854㎡(延べ面積)であった。

平成16年度調査は標高70.20mにある平坦面A区と付属する腰曲輪、及びC区の堀切6と竪堀1の発掘を行った。発掘調査では、A区「詰」と考えられる平坦面で掘立柱建物、柵列、ピット、礎石等を検出し、B区の腰曲輪では土塁の石積み、掘立柱建物跡、虎口等を検出した。また、腰曲輪から詰に上る通路状の遺構も検出されているが、当該期の山城の調査では発見例は少なく貴重である。さらにこの通路が検出された腰曲輪には入り口にあたる「虎口」状の遺構も見つかっている。出土遺物は詰の北部及び北西斜面、及び腰曲輪北部に集中して出土が見られた。出土遺物の帰属時期は15世紀前半代と15世紀後半から16世紀初頭にかけての大きく二時期に分かれる。注目すべきは、青磁では水差しなどの奢侈品を含め貿易陶磁器の割合が多い。出土状況では、A区詰の南部で、地鎮、もしくは城の廃城の際に行った儀礼、祭祀行為の跡と考えられる銅製品と土師質土器の皿が共伴して出土した。このように、出土状況及び遺物の内容から城の主郭部分の空間の使われ方や機能時期を知る上で貴重な成果を得ている。

平成17年度調査は主郭(A・B区)の補足調査と、南尾根C区、北尾根D区の堀切と斜面部の調査、及び主郭の東斜面部E区、西斜面部F区の竪堀、斜面の調査を行った。C・D区の尾根部に構築されている堀切は連続しており、特に主郭直下に認められる堀切5・6は主郭側を切岸にし、さらに竪堀2・5・11に連結さすことで尾根筋・斜面からのアプローチを完全に遮断している特徴がある。主郭の東斜面は連続竪堀が確認されている箇所であるが、竪堀4・5間に小規模な平坦面が確認され、鉄釘、鉄滓が比較的まとまって出土した。E区東斜面の竪堀の特徴は基部をU字形に連結させており、竪堀17はB区で確認された虎口状遺構へのアプローチとしての機能も果たしているものと考えられる。西斜面のF区では主郭A区から比高差7.00～8.00mで竪堀を3条(竪堀8～10)確認した。それぞれの竪堀の基部は小規模な平坦面が付属している。これらの竪堀は、城跡の西側を構成する小規模な尾根の間に形成される谷部に構築されており、竪堀5～7を含めて西斜面の防御施設と考えられる。

出土遺物は特にE・F区の斜面部で主郭からの流れ込みと考えられる遺物が数多く出土した。



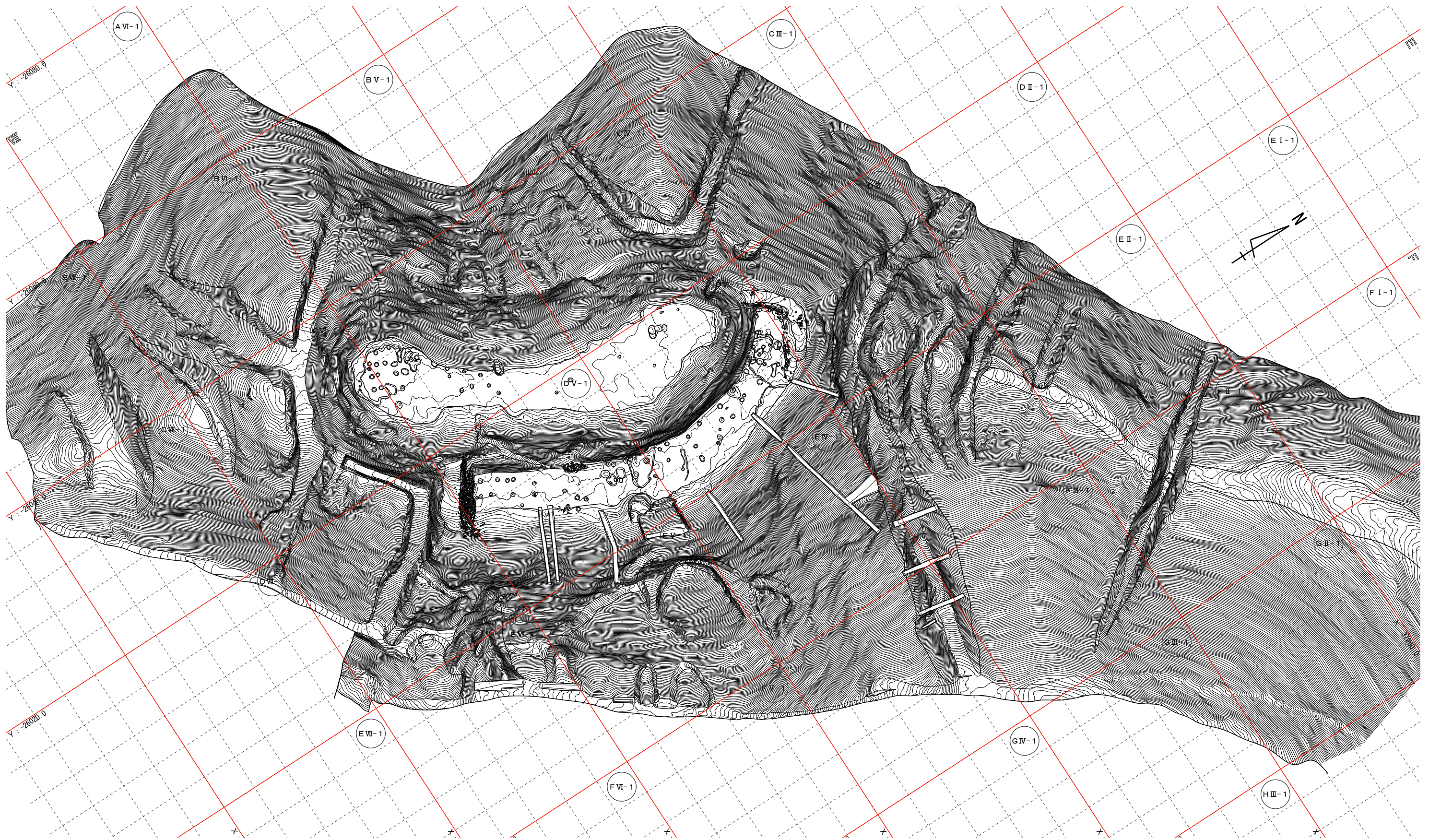
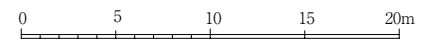


Fig.6 調査グリッド設定図





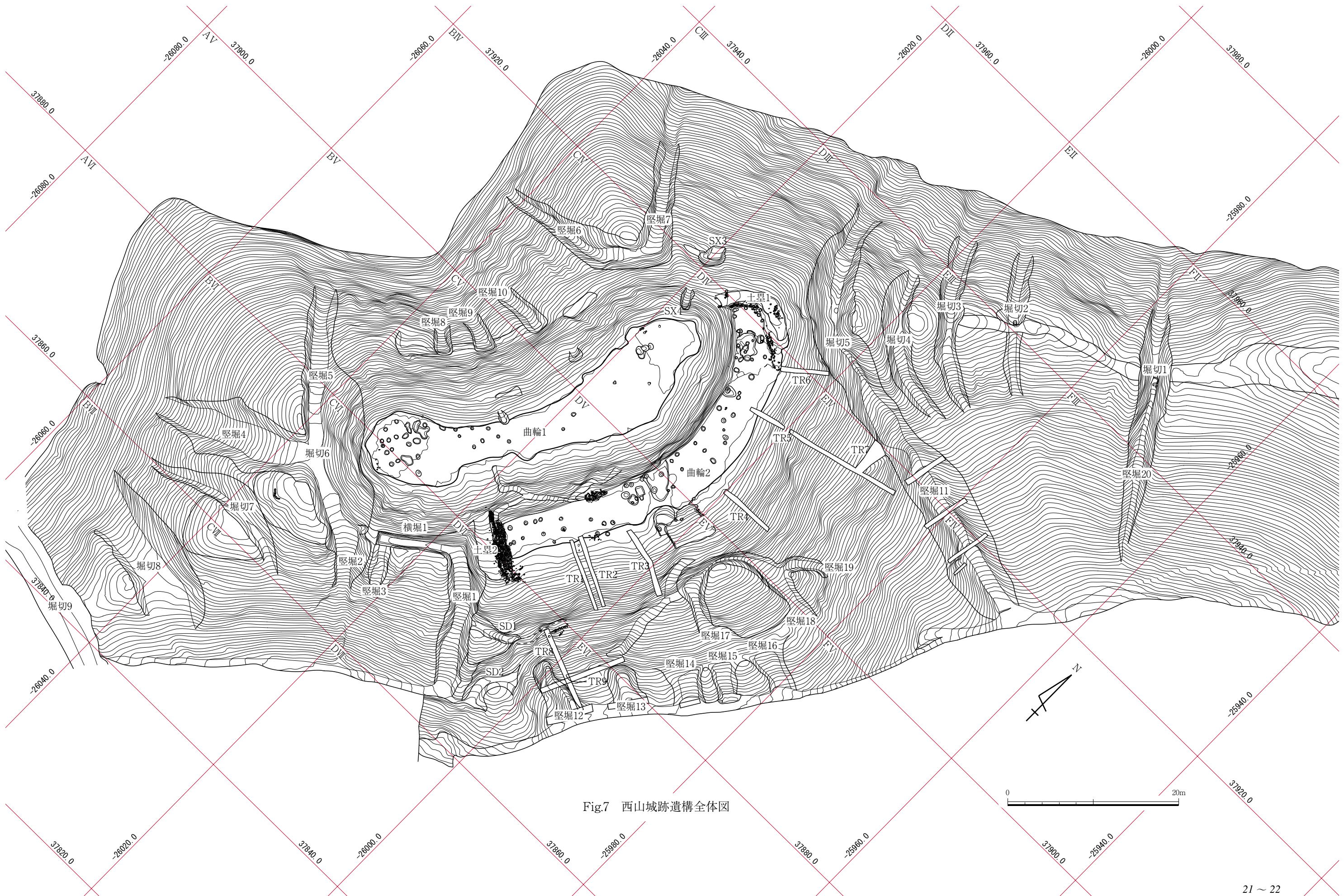


Fig.7 西山城跡遺構全体図

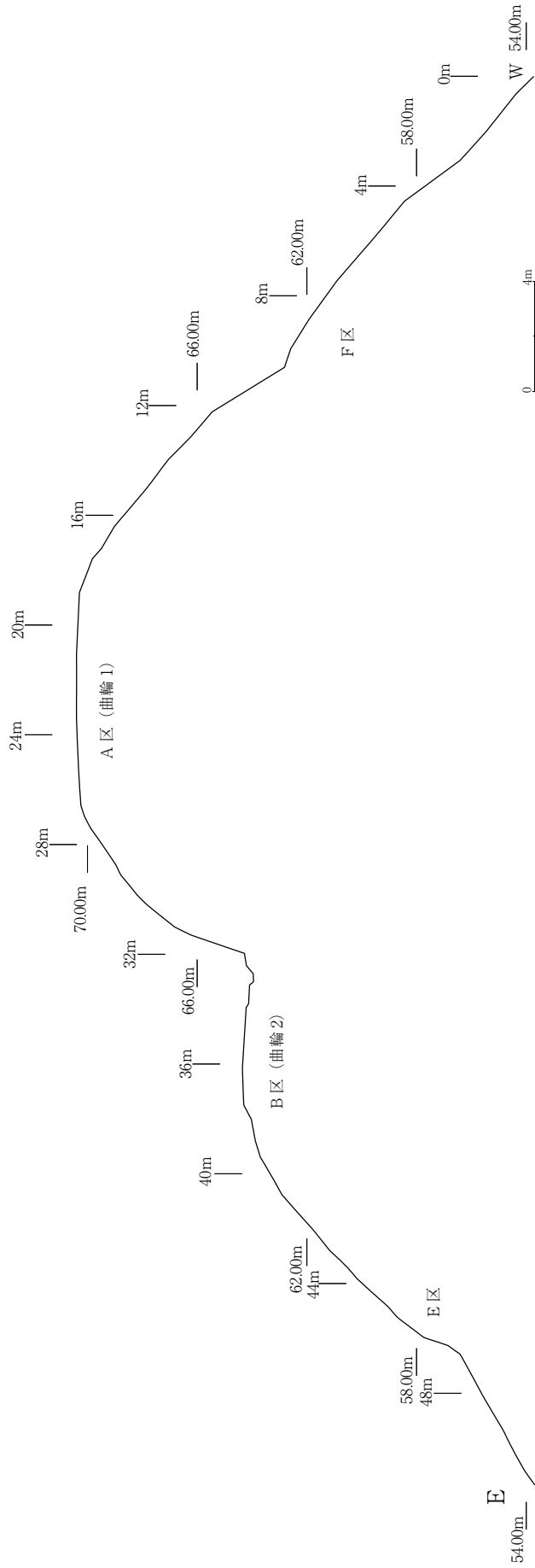


Fig.8 東西横断エレベーション



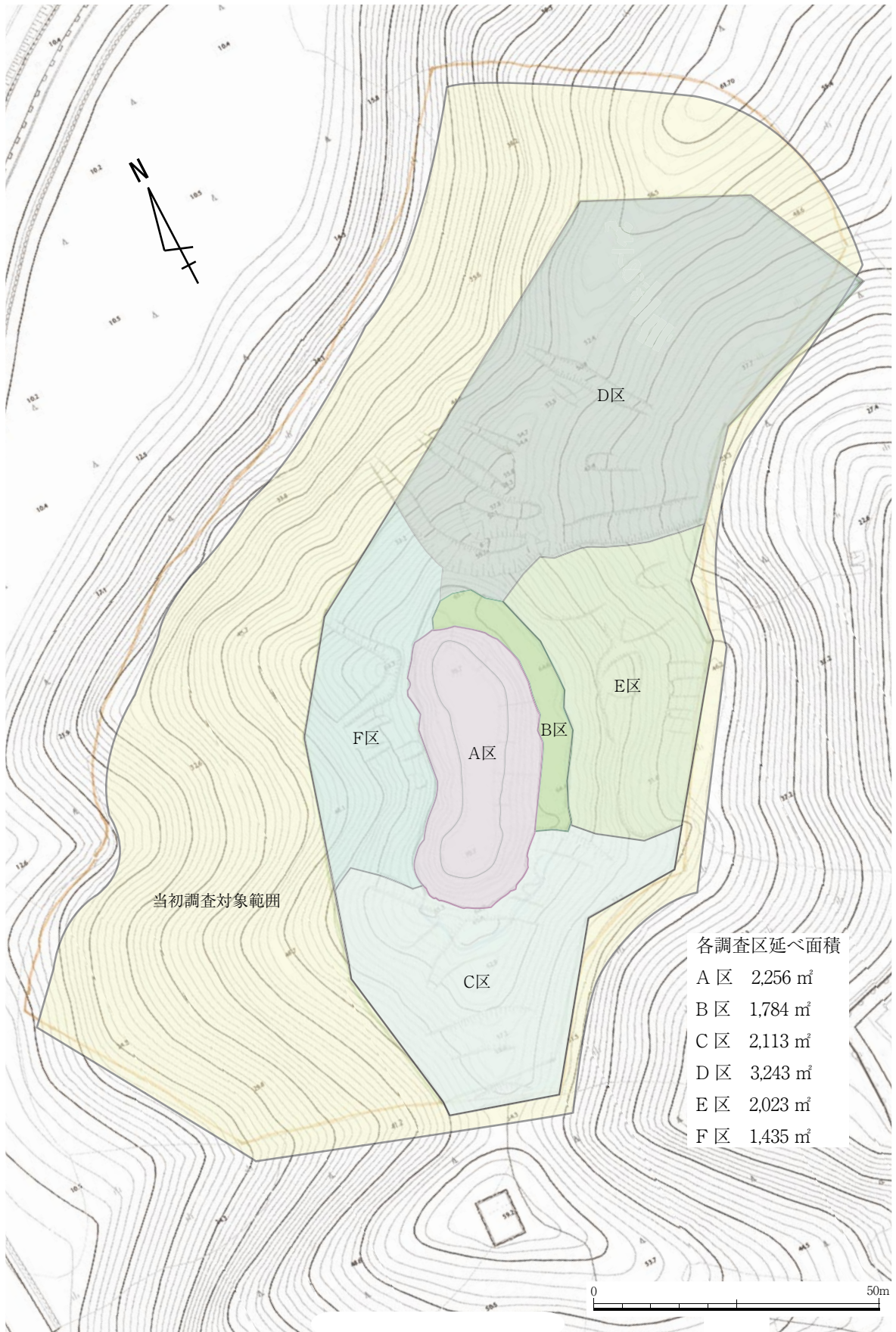


Fig.9 西山城跡発掘調査区位置図

## 第IV章 調査の成果

### 第1節 検出遺構

#### (1) A区(曲輪1)

調査対象地のほぼ中心にあたる山頂部に設定した調査区である。西山城跡の「詰」に相当する曲輪であり、南北41.20m、幅4.50～8.50m、面積420㎡を測る平地である。標高は70.50m前後を測り、平面形は弧状を呈する。斜面は傾斜50～55°の切岸に成形する。曲輪1の東側下には比高差5.50～6.00m、標高64.1～64.19mに詰に沿って腰曲輪(曲輪2)がある。曲輪1の西側の地形は急峻な谷地形を呈しており、比高差7.00～8.00m下に竖堀が検出されている。曲輪1の検出遺構は掘立柱建物跡1棟(SB1)、柵列4列(SA)、土坑1基(SK)、ピットである。また、曲輪2からのアプローチである通路状遺構を東斜面で検出した。

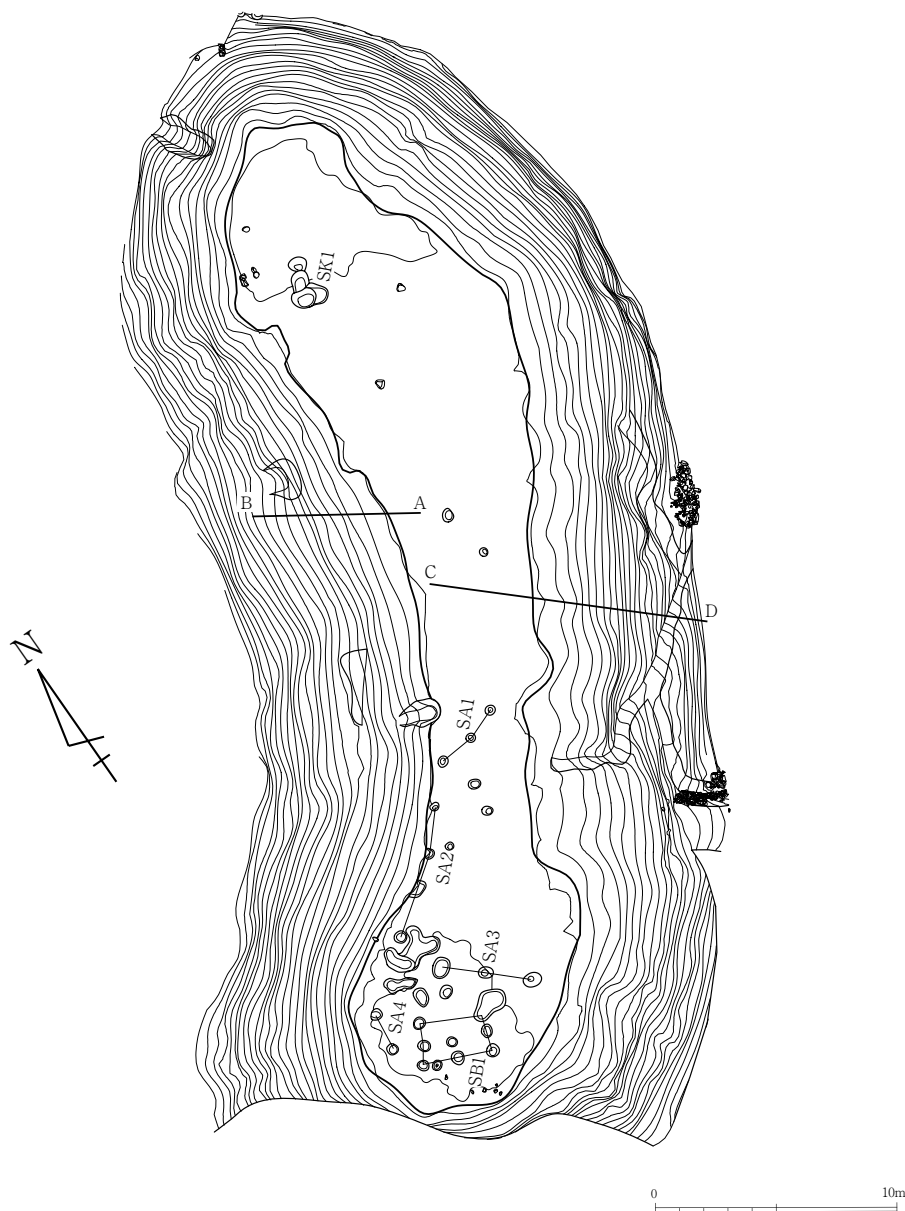


Fig.10 A区(曲輪1)遺構配置図



1) SB1

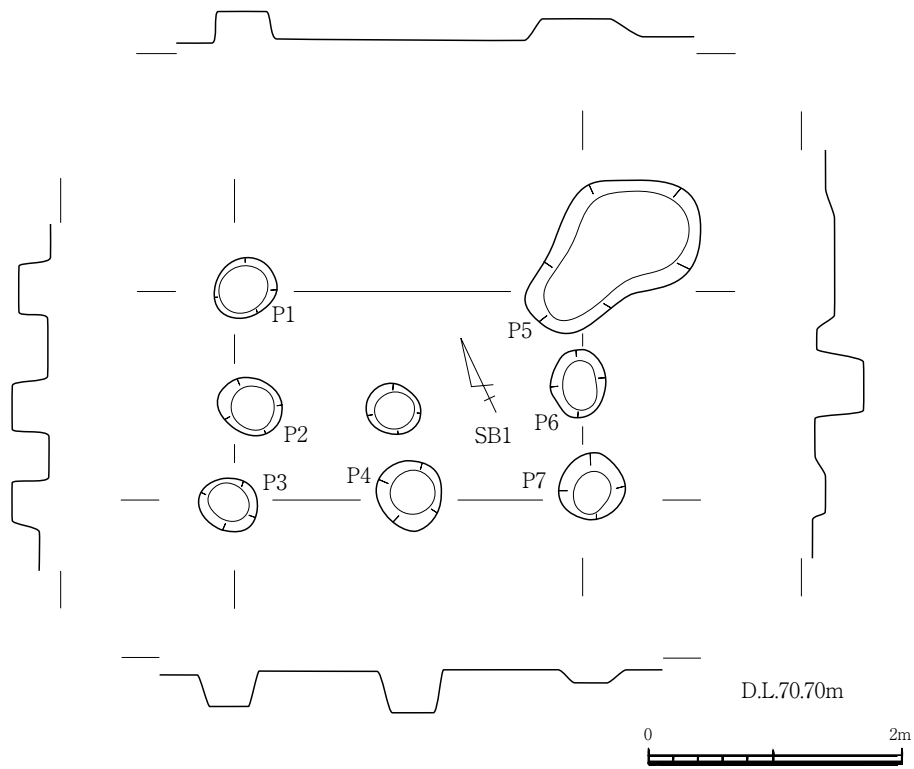
曲輪1の南端部で検出した。2間×2間の掘立柱建物跡で規模は桁行1.70m、梁間2.70～2.85mを測り、桁行の柱間寸法は0.80～0.90m、梁間は1.40mを測る。柱穴のプランは円形で、規模は直径が0.42～0.58m、深さは0.12～0.40mを測る。

柱穴の埋土は褐色土の単層であり、出土遺物は認められなかった。

2) SA1

曲輪1の南部より、SB1の北側で検出した。SA1は曲輪1へのアプローチを上り詰めたところにあたり、北側との空間を区切るように東西方向に延びる。2間の規模を持つ柵列であり、全長2.82m、柱間寸法は0.98～1.05mを測る。柱穴のプランは円形で、規模は直径0.44～0.47m、深さ0.15～0.18mを測る。

埋土は褐色土であり、出土遺物は認められなかった。



(単位はm)

Pit No.	桁行柱間	桁行間	Pit No.	梁間柱間	梁間間	Pit No.	深さ	長径	短径	備考
1-2	0.90	1.70	1-5		2.7	1	0.26	0.50	0.48	
2-3	0.80		3-4	1.45	2.85	2	0.30	0.52	0.44	
			3	0.29	0.48	0.42				
5-6	0.80	1.70	4-7	1.40		4	0.34	0.56	0.52	
6-7	0.90					5	0.16	1.58	0.74	
						6	0.40	0.54	0.44	
						7	0.12	0.52	0.52	

A区SB1計測表

Fig.11 A区SB1平面・エレベーション図及び計測表

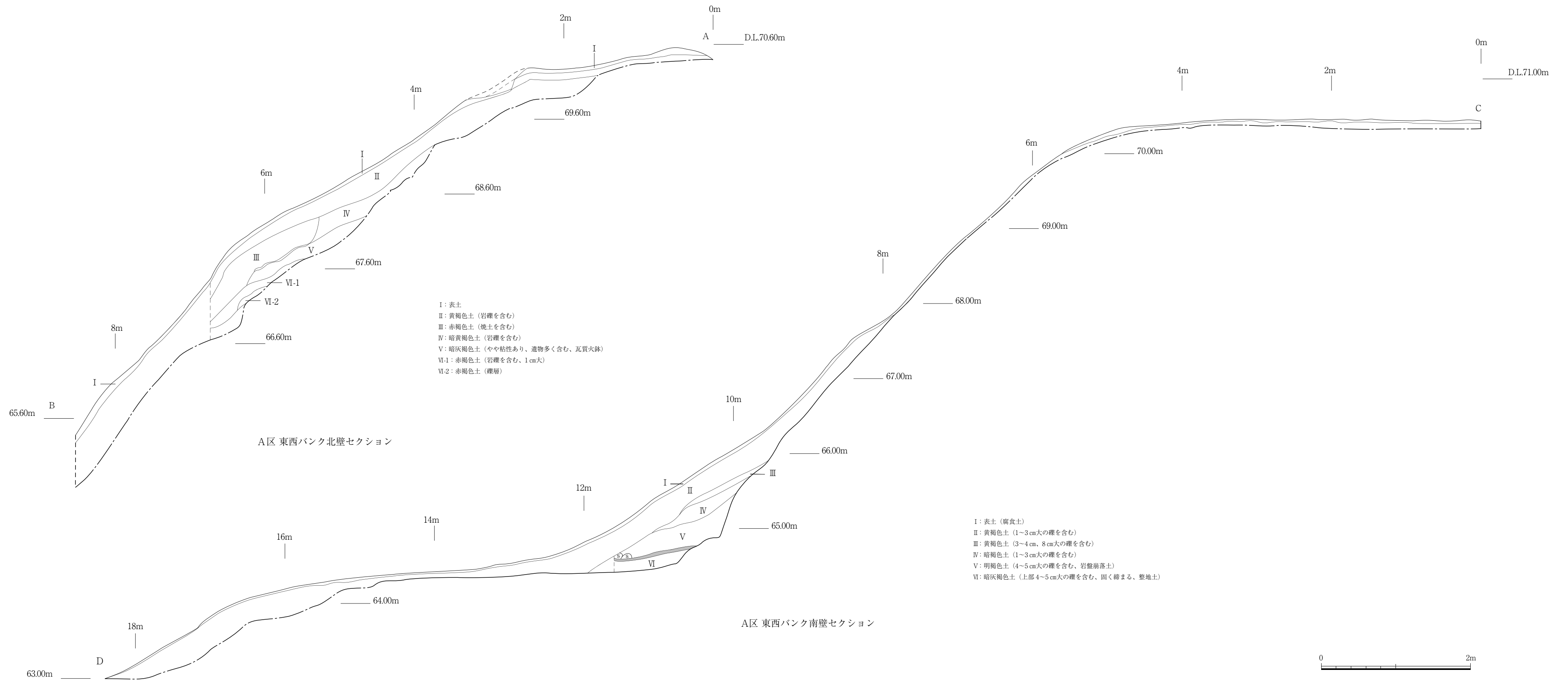


Fig.12 A区東西バンクセクション図



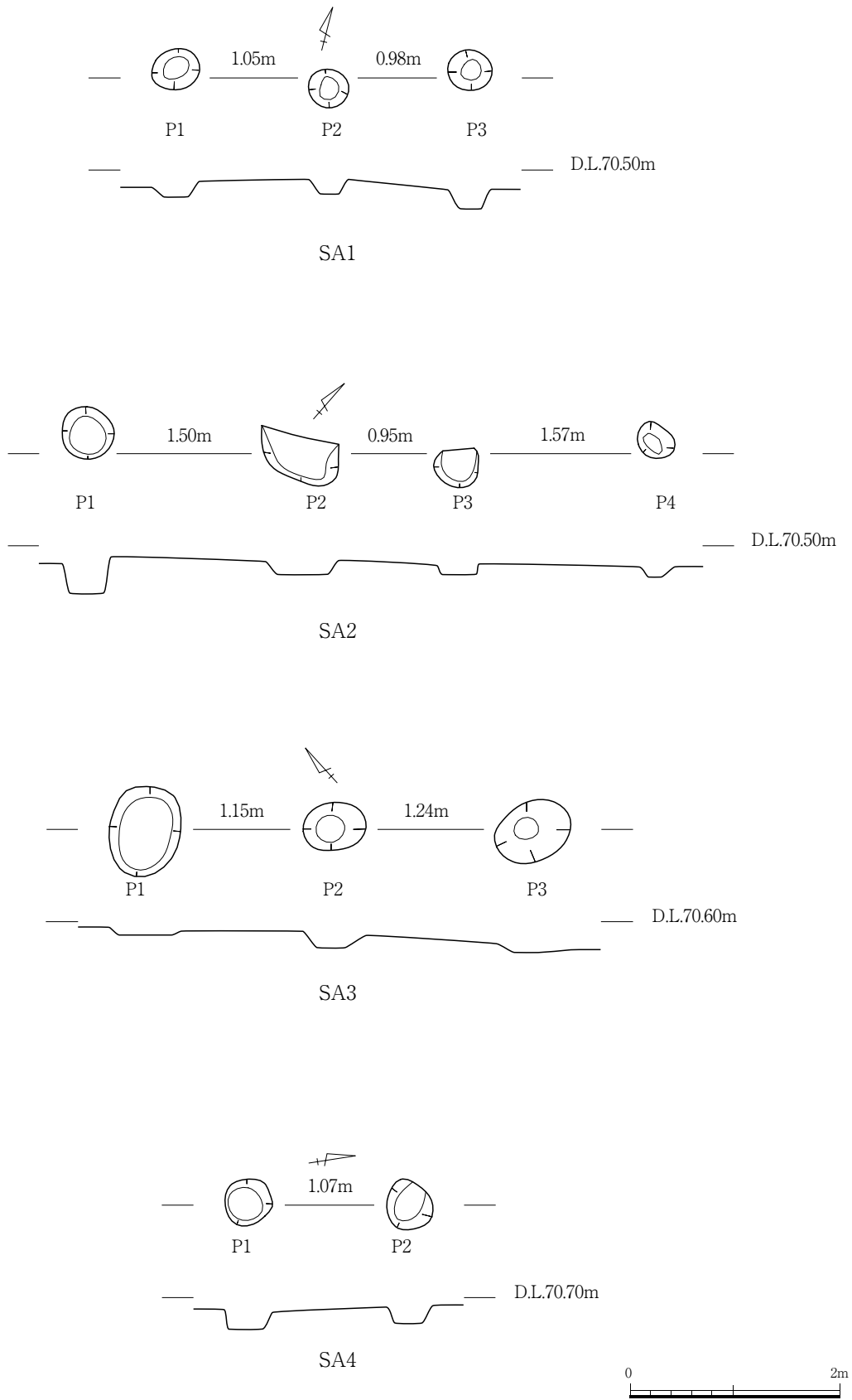


Fig.13 A区 SA1・2・3・4平面・エレベーション図

### 3) SA2

曲輪1の南西部、SB1の北西よりで検出した。西斜面に面した曲輪1の縁辺に沿って柱穴が並ぶ。3間の規模を持つ柵列であり、全長5.40m、柱間寸法は0.95～1.57mを測る。柱穴のプランは円形のもの(P1・P4)不整形のもの(P2・P3)があり、規模は直径0.40m～0.77m前後、深さは0.10～0.35mを測る。P2・3は木根により一部が攪乱されている。埋土は褐色土であり、出土遺物は認められなかった。

後述するSA4と連続し、曲輪1の南西部を囲む柵列になる可能性が考えられる。

### 4) SA3

曲輪1の南部SB1の北側で検出した。2間の規模を持ち、全長3.65m、柱間寸法は1.15～1.24mを測る。柱穴のプランは円形、楕円形を呈し、規模は直径0.62～0.98m、深さは0.04～0.16を測る。他の柵列に比べ、柱穴の堀形の規模が大きい。

埋土は褐色土で、出土遺物は認められなかった。SB1を画する柵列の可能性が考えられる。

### 5) SA4

曲輪1の南西部、SB1の西側で検出した。西斜面に面した曲輪1の縁辺に沿って柱穴が並び、前述したSA2と連続する可能性が考えられる柵列である。規模は1間であり、全長は1.07mを測る。柱穴のプランは円形であり、規模は直径0.44～0.50m、深さ0.16～0.20mを測る。

埋土は褐色土であり、出土遺物は認められなかった。

### 6) SK1

曲輪1の北部、DⅣ-11グリッドで検出した。検出面上では備前焼の甕の破片が集中して多量に出土し、埋土中からも同一個体と考えられる底部破片が出土した。平面プランは不整形であり、北側と東側に突出する。長軸1.50m、短軸0.60～0.70mを測る。深さは0.20～0.23mを測り、断面形は北側の凹みとの境に段があり、北側がややテラス状を呈し、底面はフラットである。二つの土坑の切り合いも考えられるが、埋土は同一の褐色土の単層であり、区別はつかなかった。

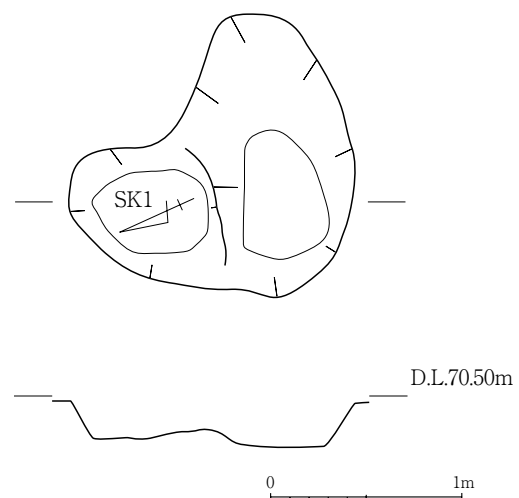


Fig.14 A区SK1平面・エレベーション図



### 7) 通路状遺構

A区の南部東斜面で検出した。B区の南端部にある土塁2の内側の石積み、及びB区SB5・6の中間からアプローチが続いており、それぞれの方向から5.00～6.00mの所で合流し、上に延びる。総延長は12.5m、通路幅は0.50～0.80mを測る。地山をL字型に削り込んで成形しており、B区平場のSB5・6側からのアプローチは北側の上部にも分岐している。この部分は地山の一部が風化してマサ化を呈しており、下部に石積みで補強を行っている。

### (2) B区(曲輪2)

A区の東側、曲輪1に付属する「腰曲輪」に設定した調査区である。A区(曲輪1)との比高差5.50～6.00mを持ち、規模は長さ45.00m、幅5.00～8.00m、面積約446㎡を測り、曲輪1の北側から南東部に沿った平場である。標高は64.00m～64.50mを測る。この腰曲輪の両端部には土塁(土塁1・2)があり、南端の土塁下には規模の大きい竪堀(竪堀1)がある。また、東斜面(E区側)には竪堀群があり、これら斜面の遺構と関係した曲輪である。

B区(曲輪2)の平坦面では、土塁2基(石積み土塁)、虎口状遺構1、掘立柱建物跡(SB6)、土坑(SK1)、性格不明遺構(SX1・2)、ピット(P)を検出した。掘立柱建物跡は全て腰曲輪内側、A区の下端ラインに沿って構築されている特徴がある。

#### 1) SB1

B区(曲輪2)の北端部で検出した2間×2間の東西棟方向の掘立柱建物跡である。規模は桁行2.32～3.32m、梁間5.52～5.85m、床面積は19.422㎡を測り、B区で検出された掘立柱建物跡の中で規模が大きい。

後述ではSB2としているが、柱穴の並び方から建物の建て替えの可能性が考えられる。

#### 2) SB2

B区(曲輪2)の北端部で検出した1間×1間の東西棟方向の掘立柱建物跡である。規模は桁行2.70～2.75m、梁間3.05～3.30mを測り、床面積は9.05㎡である。SB1と重複し検出された。柱穴のプランは円形で直径0.36～0.46m、深さは0.09～0.46mを測る。建物の棟方向はSB1とほぼ、同じでありSB1の柱の建て替えが考えられる。

SB1・2の検出面上では、土師質土器小皿(Fig.52-No.5・13)、土師質土器杯(Fig.54-No.62・63)、備前焼播鉢(Fig.61-No.118)、青磁(Fig.70-No.183・228)、白磁皿(Fig.76-No.265)、青花碗(Fig.76-No.279)、石臼(Fig.82-No.330・331)、煮炊具である土師質土器の羽釜、鉄釘など、集中して遺物の出土がみられた。

#### 3) SB3

B区(曲輪2)の北部、SB1の南側で検出した1間×2間の南北棟方向の掘立柱建物跡である。規模は桁行1.77～1.80m、梁間4.77～4.85mを測り、床面積は8.73㎡を測る。柱間寸法は桁行間1.77～1.88m、



Fig.15 A区通路状遺構配置図



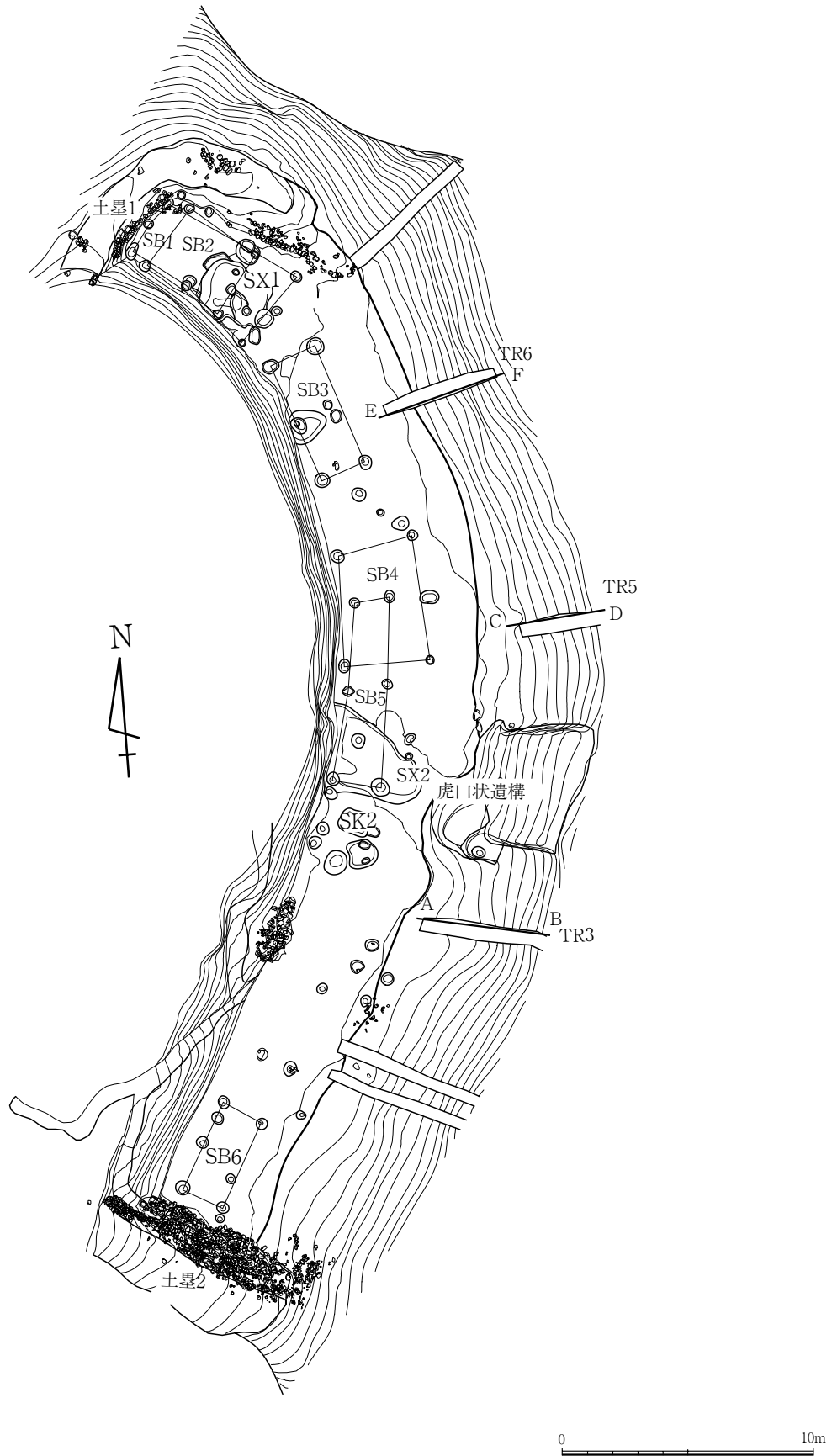
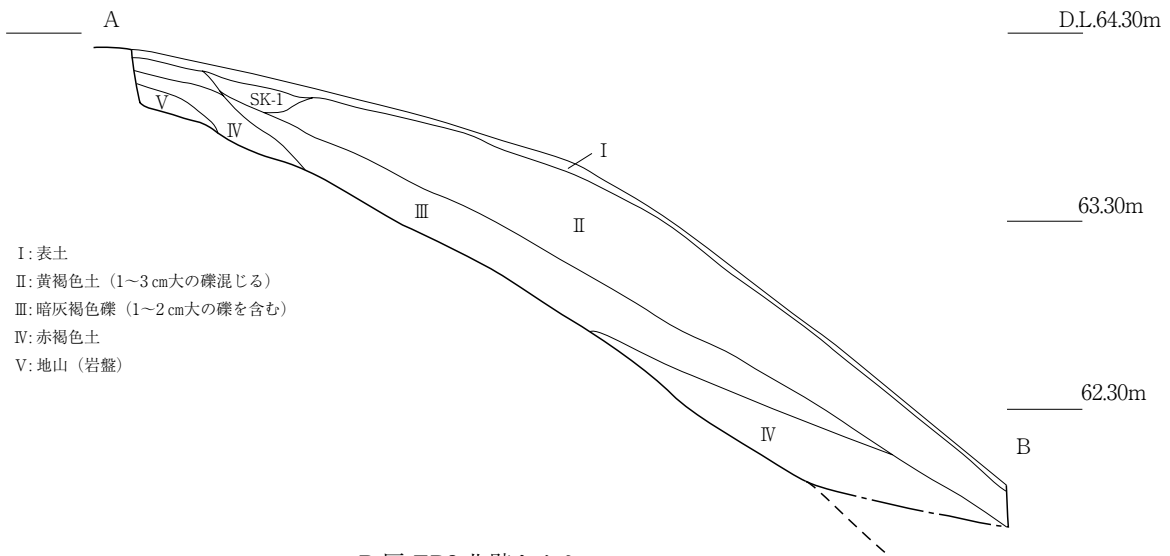
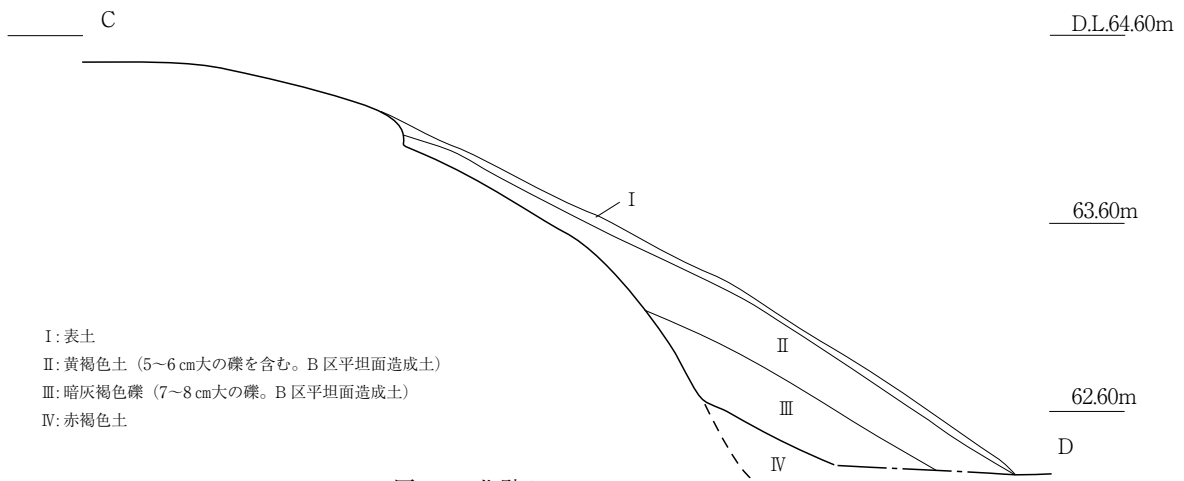


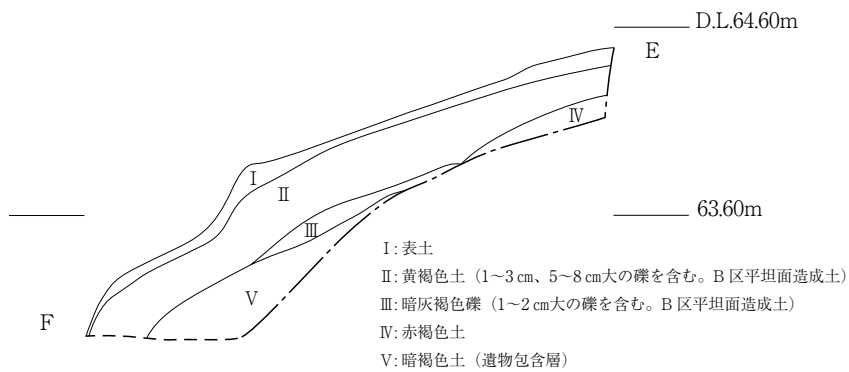
Fig.16 B区(曲輪2)遺構配置図



B区 TR3 北壁セクション



B区 TR5 北壁セクション

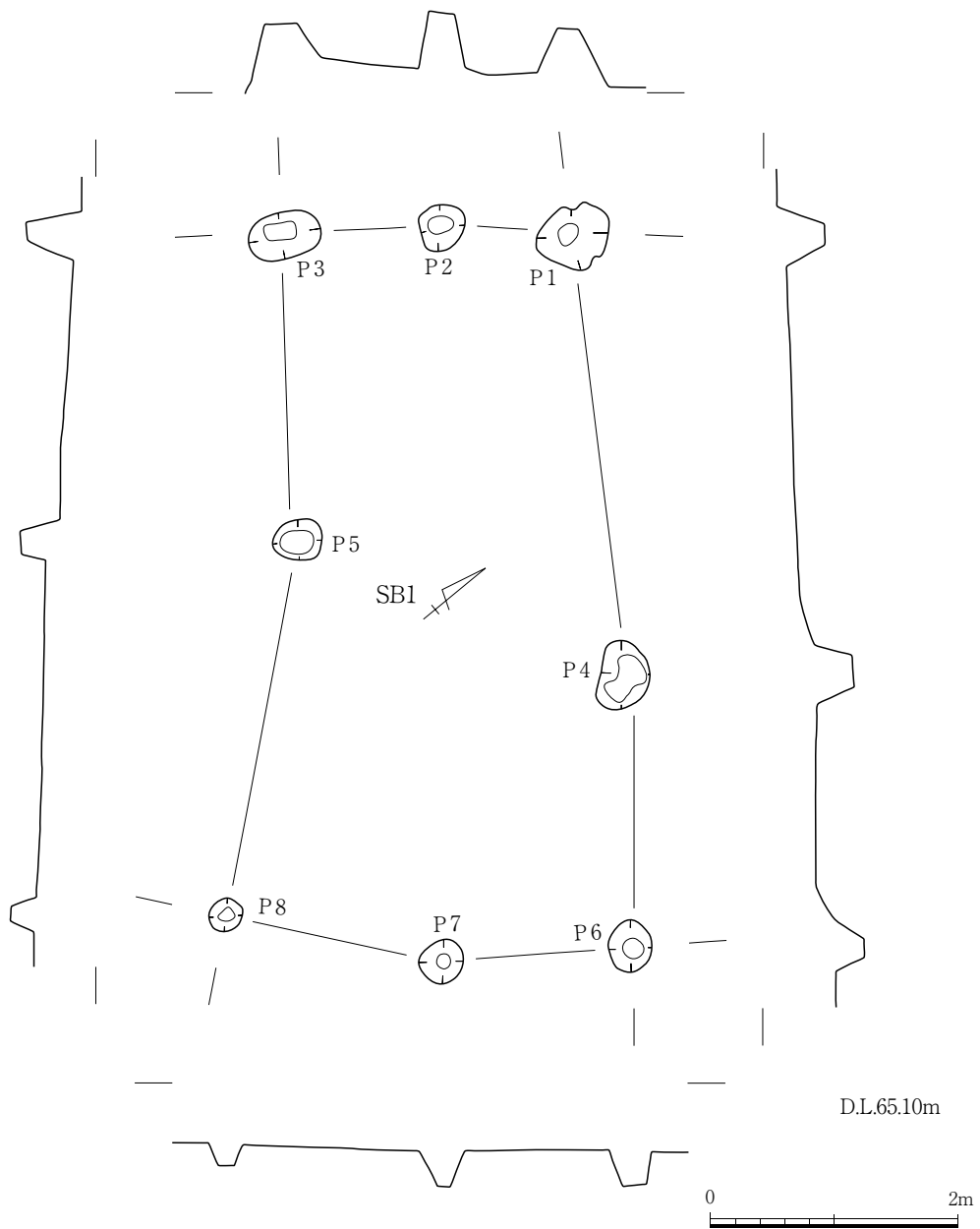


B区 TR6 南壁セクション



Fig.17 B区 TRセクション図1





(単位はm)

Pit No.	桁行柱間	桁行間	Pit No.	梁間柱間	梁間間	Pit No.	深さ	長径	短径	備考
1-2	1.05	2.32	1-4	3.60	5.85	1	0.47	0.62	0.47	
2-3	1.27		4-6	2.25		2	0.47	0.38	0.37	
						3	0.50	0.60	0.37	
6-7	1.55	3.32	3-5	2.52	5.52	4	0.31	0.56	0.41	
7-8	1.77		5-8	3.00		5	0.32	0.41	0.33	
						6	0.30	0.42	0.35	
						7	0.29	0.37	0.34	
						8	0.19	0.28	0.26	

B区SB1計測表

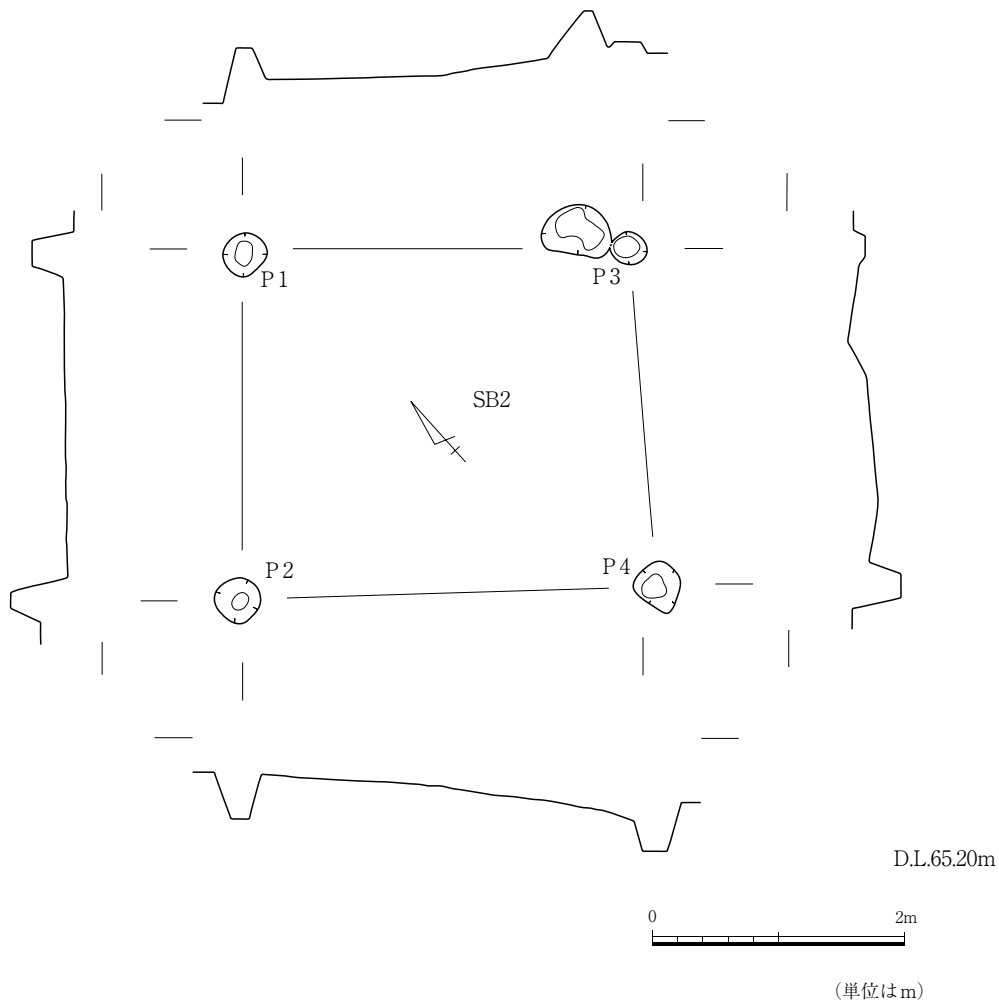
Fig.18 B区SB1平面・エレベーション図及び計測表

梁間間 2.27 ~ 2.50m を測る。柱穴のプランは円形から楕円形であり、直径 0.44 ~ 0.66m、深さは 0.43 ~ 0.61m を測る。P1 ~ 4 の断面で柱痕が確認され、焼土が認められることから焼失した建物跡の可能性が考えられる。P3 は、SK3 に切られる。P3 の柱穴から土師質土器の細片が 16 点出土した。

SB3 を検出した D IV - 14 グリッド周辺には砂混じりの炭化物層の拡がり認められ、鉄釘がまとまって出土した。また、P3 を切る SK3 の埋土の黒褐色を呈した炭化物層と焼土層からも鉄釘が出土している。検出面上の IV 層からは土師質土器杯 (Fig.53-No.49・60)、青磁碗 (Fig.74-No.207・225)、砥石 (Fig.82-No.332) などが出土している。

#### 4) SB4

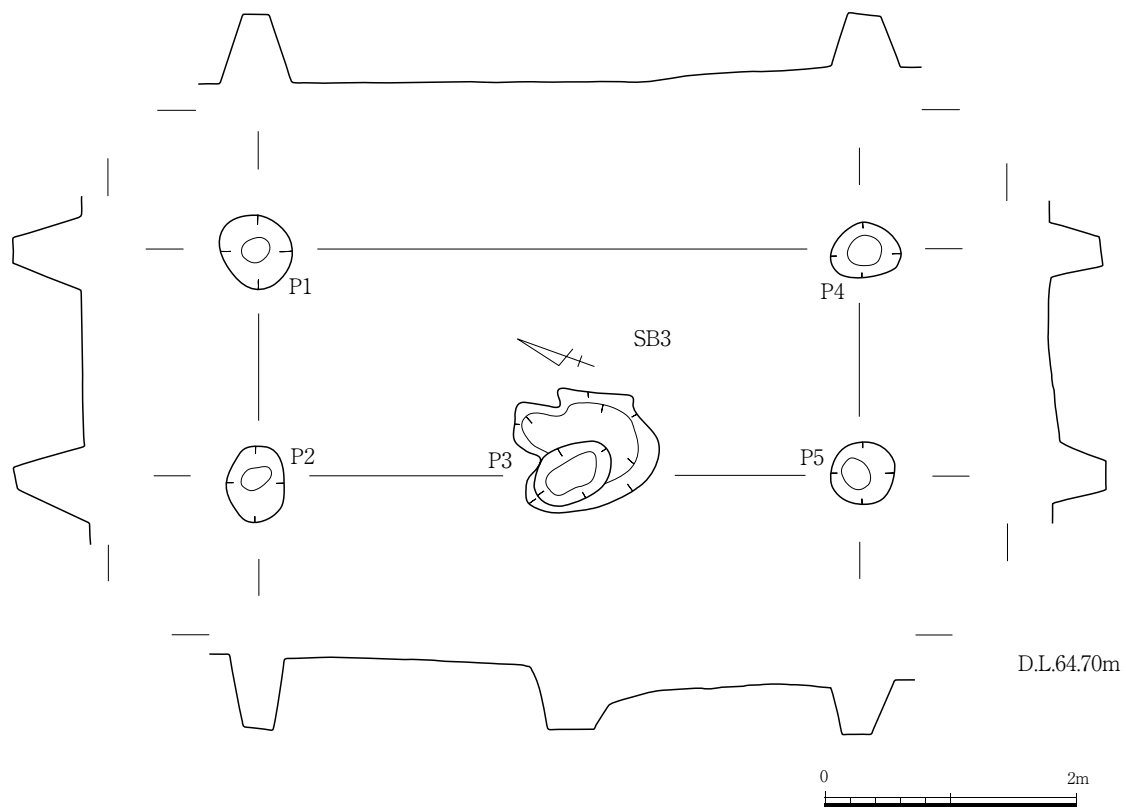
B 区のほぼ中央部、SB3 の南側で検出した 1 間 × 1 間の南北棟方向の掘立柱建物跡である。



Pit No.	桁行柱間	桁行間	Pit No.	梁間柱間	梁間間	Pit No.	深さ	長径	短径	備考
1-2		2.75	1-3		3.05	1	0.43	0.36	0.36	
3-4		2.70	2-4		3.30	2	0.46	0.38	0.37	
						3	0.09	0.30	0.26	
						4	0.39	0.42	0.38	

B 区 SB2 計測表

Fig.19 B 区 SB2 平面・エレベーション図及び計測表



(単位はm)

PitNo.	桁行柱間	桁行間	PitNo.	梁間柱間	梁間間	PitNo.	深さ	長径	短径	備考
1-2		1.80	1-4		4.85	1	0.54	0.61	0.54	
4-5		1.77	2-3	2.50	4.77	2	0.61	0.60	0.45	
			3-4	2.27		3	0.50	0.66	0.45	
						4	0.44	0.56	0.44	
						5	0.43	0.50	0.50	

B区SB3計測表

Fig.20 B区SB3平面・エレベーション図及び計測表

規模は桁行 2.95 ~ 3.25m、梁間 4.25 ~ 4.81mを測り、床面積は 15.63 m<sup>2</sup>を測る。柱穴のプランは円形、もしくは楕円形で直径 0.21 ~ 0.45m、深さ 0.22 ~ 0.54mを測る。P2の上面で土師質土器小皿 (Fig.52-No.8)、青磁碗 (Fig.72-No.216、Fig.73-No.238・240)、青磁盤 (Fig.74-No.258)が出土した。

### 5) SB5

B区の中央部、SB4と重複して検出した1間×1間の細長い南北棟方向の掘立柱建物跡である。規模は桁行 1.32 ~ 1.85m、梁間 6.86 ~ 7.34mを測り、13.58 m<sup>2</sup>を測る。南部は皿状に落ち込んだSX2が伴う。柱穴はA区(曲輪1)の下端ラインに沿って並んでおり、柱間は 3.34 ~ 3.50mを測る。梁間間は 1.32 ~ 1.82mと狭い。柱穴のプランは円形で直径 0.30 ~ 0.42mを平均とするがP2は堀形が 0.55mと大きい。SB5検出面上からは、土師質土器皿 (Fig.52-No.32)、土師質土器杯 (Fig.54-No.65)、土師質土器羽釜 (Fig.55-No.76)、銅製品 (Fig.89-No.458)などが出土している。



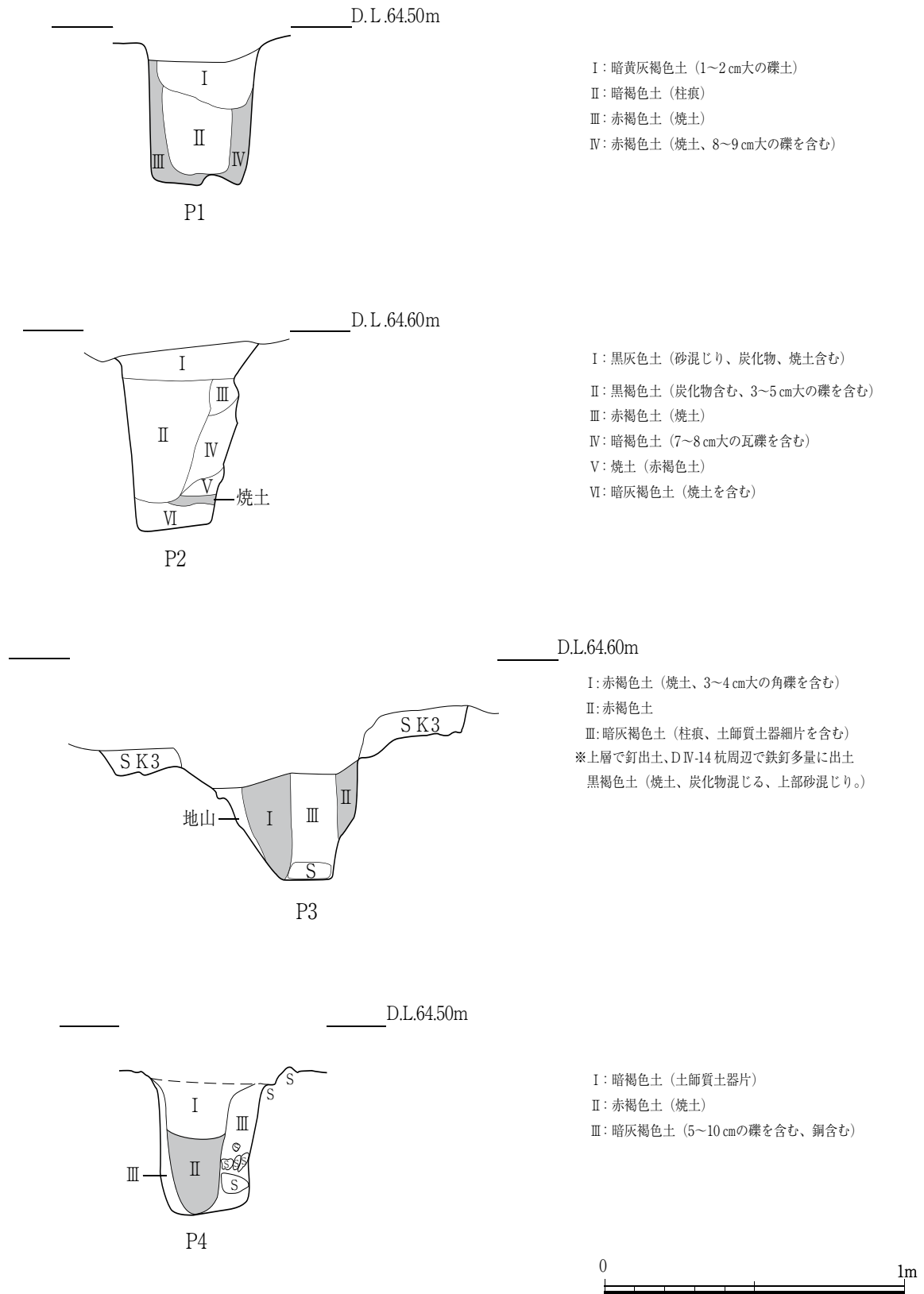
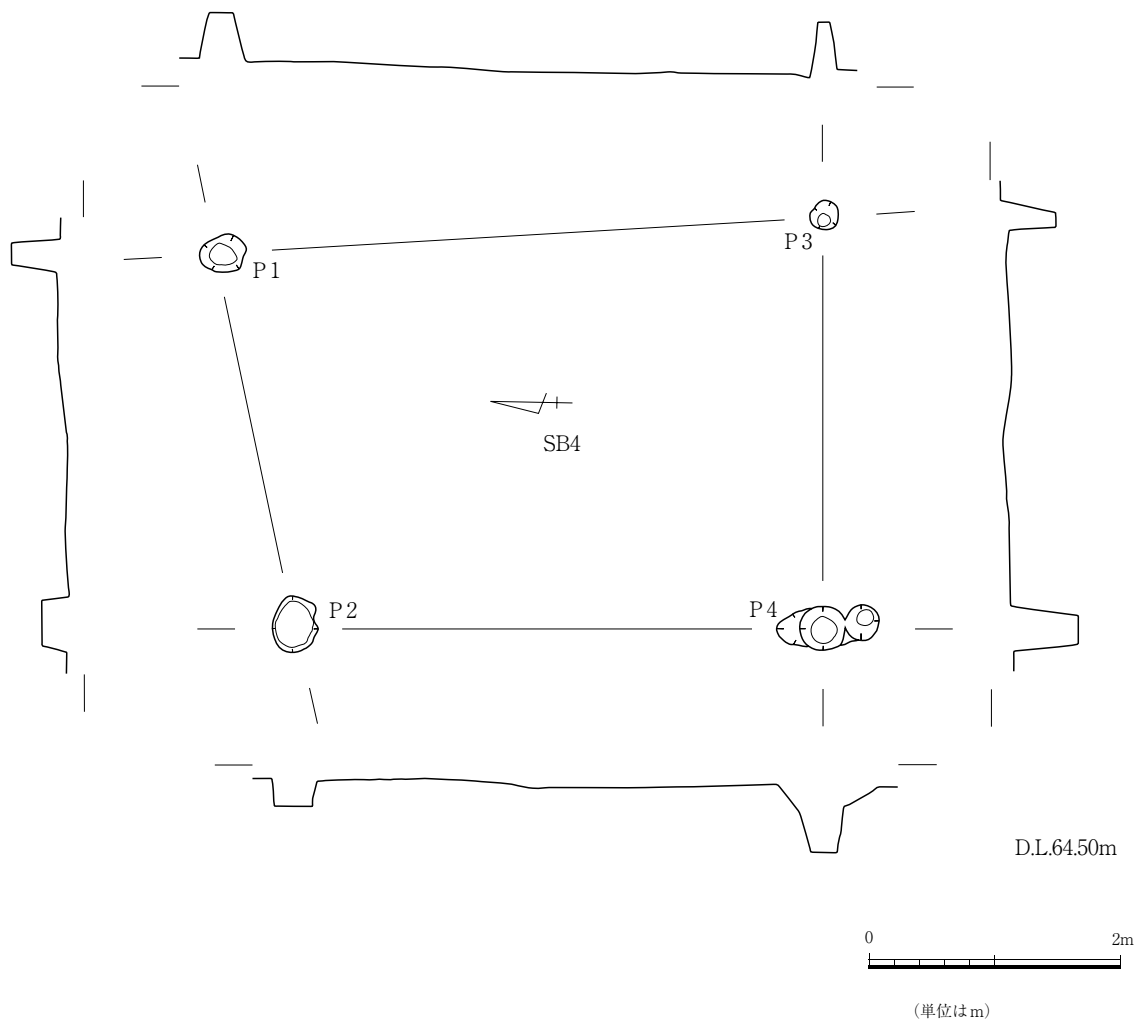


Fig.21 B区SB3Pit セクション図



(単位はm)

Pit No.	桁行柱間	桁行間	Pit No.	梁間柱間	梁間間	Pit No.	深さ	長径	短径	備考
1-2		2.95	1-3		4.81	1	0.40	0.38	0.30	
						2	0.22	0.45	0.35	
3-4		3.25	2-4		4.25	3	0.44	0.23	0.21	
						4	0.54	0.37	0.35	

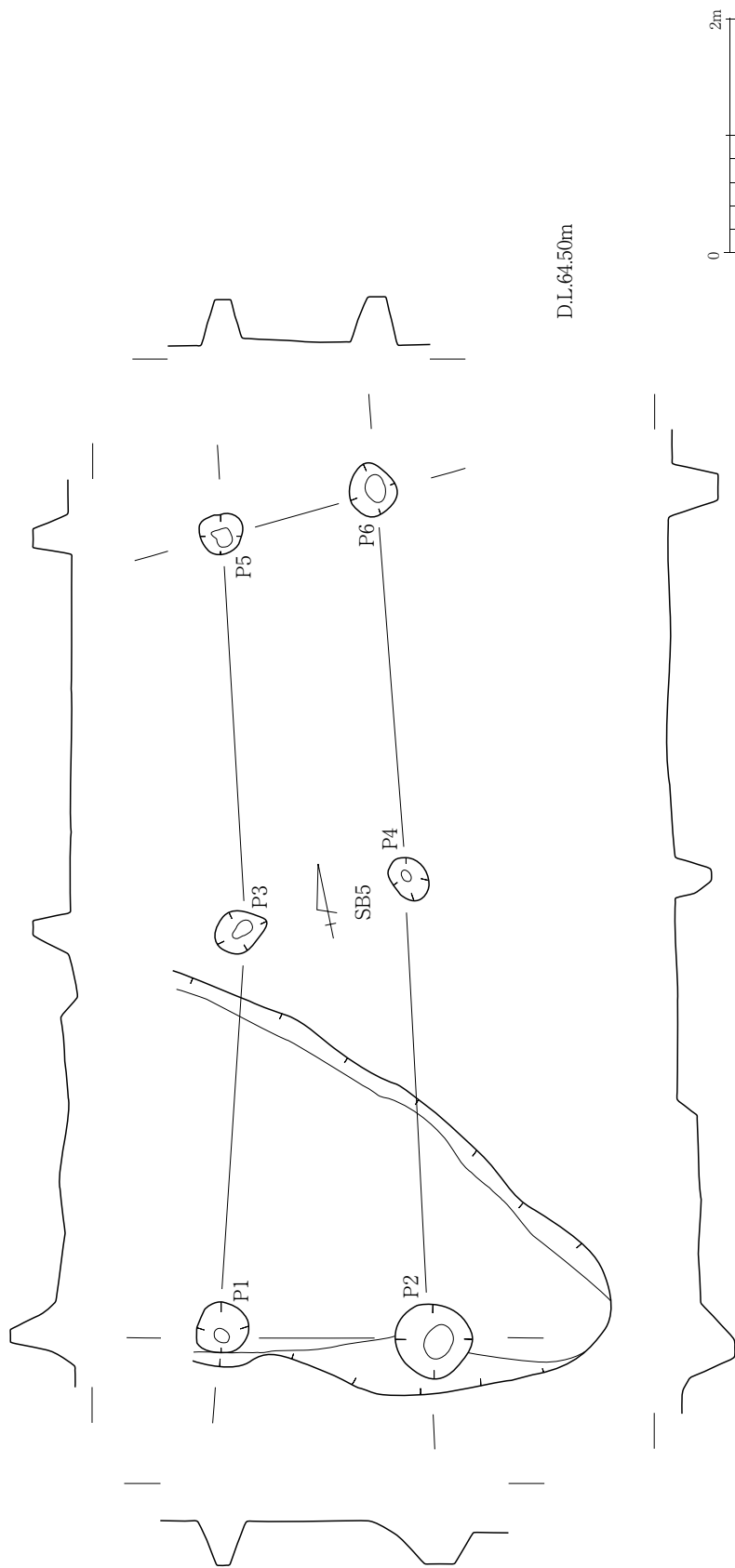
B区SB4計測表

Fig.22 B区SB4平面・エレベーション図及び計測表

また、南部のSX2の埋土からは鉄釘や鉄屑が比較的まとまって出土が見られた。

### 6) SB6

B区の南端、南側土塁(土塁2)に接して検出した1間×2間の南北棟方向の掘立柱建物跡である。規模は桁行3.55～3.70m、梁間1.65～1.70mを測り、6.29㎡を測り、小型である。柱穴のプランはほぼ円形で、直径0.40m前後、深さ0.31～0.42mを測る。土塁2の下でP1・3・4の柱列の南延長部でピットを検出しており、土塁2構築以前にあった建物跡の可能性が考えられる。柱穴からの遺物の出土はなかった。



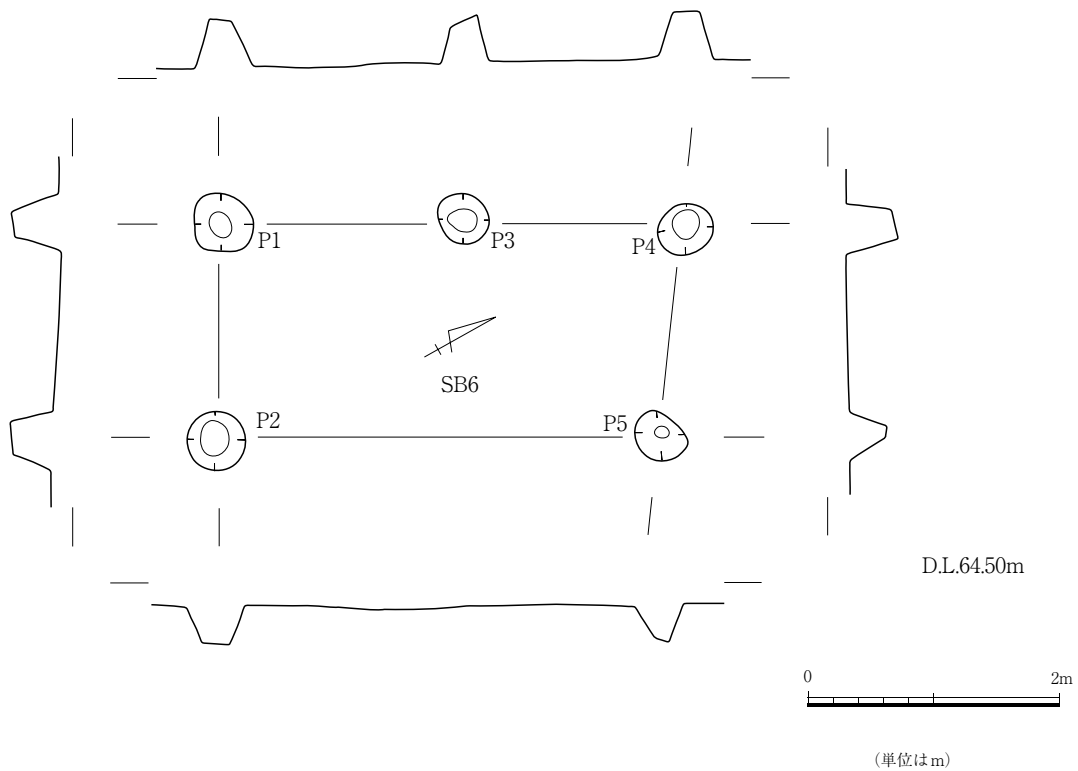
(単位はm)

Pit.No	桁行柱間	桁行間	Pit.No	梁間柱間	梁間間	Pit.No	深さ	長径	短径	備考
1-2		1.85	1-3	3.50	6.86	1	0.42	0.47	0.40	
			3-5	3.34		2	0.40	0.37	0.31	
5-6		1.32	2-4	4.02	7.34	3	0.31	0.39	0.30	
			4-6	3.32		4	0.32	0.46	0.32	
						5	0.38	0.65	0.60	
						6	0.55	0.43	0.42	

B区SB5計測表

Fig.23 SB5平面・エレベーション図及び計測表





Pit No.	桁行柱間	桁行間	Pit No.	梁間柱間	梁間間	Pit No.	深さ	長径	短径	備考
1-2		1.70	1-3	1.95	3.70	1	0.40	0.52	0.46	
			3-4	1.75		2	0.34	0.47	0.46	
4-5		1.65	2-5	3.55		3	0.39	0.43	0.38	
						4	0.42	0.45	0.39	
						5	0.31	0.43	0.34	

B区SB6計測表

Fig.24 B区SB6平面・エレベーション図及び計測表

7) SK2

B区中央部、SB5、SX2の南側、V層下で検出した。平面形は長方形で、長軸1.18m、短軸0.91mを測る。SK2の上層は直径10～20cm大の円礫が集中しており、被熱した石も多く認められる。断面形は逆台形状を呈し、中央部は皿状に凹む。深さは0.16～0.20m、最深部で0.26mを測る。地山の岩盤を掘り込んでおり、側壁は被熱し赤褐色を呈する。埋土は黒褐色を呈する炭化物層と、焼土層が互層に堆積している。土坑内部からは遺物は出土しなかったが、周辺の検出面で鉄屑、鉄釘の出土が見られた。

8) SX1

B区北部、SB1・2の内側で検出した。平面プランは不整形で長軸3.44m、短軸2.18mを測る。地山である岩盤を掘り込んで構築されており、断面形は北側がやや高い皿状を呈し、底面はフラットに整形している。深さ0.24mを測る。埋土は、検出面上に堆積している包含層IV層と同じ暗褐色土であり、炭化物・焼土を多く含んでいる。出土遺物は、鉄釘や鉄屑が出土しており、SB5南部で検出され

たSX2と同じ様な状況である。SB1・2に伴う遺構と考えられる。

### 9) SX2

B区中央部、SB5の内側で検出した。平面プランは不整形で長軸3.72m、短軸2.48mを測る。地山である岩盤を掘り込んで構築されており、断面形は皿状を呈し、底面はフラットに整形している。深さ0.14mを測る。埋土は、検出面上に堆積している包含層IV層と同じ暗褐色土であり、炭化物・焼土を多く含んでいる。出土遺物は、鉄釘や鉄屑が出土しており、SB1・2内部で検出されたSX1と同じ様な状況である。SB5に伴う遺構と考えられる。

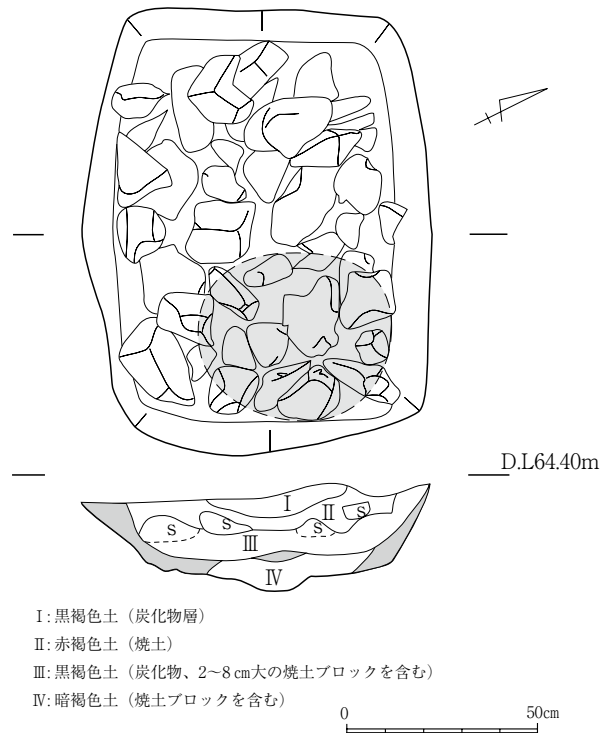


Fig.25 B区 SK2 平面・セクション図

### 10) 虎口状遺構

B区中央部、東側斜面側縁辺で検出した。平面形は円形を呈し、テラス状の平場が二段、認められる。上端幅は2.50~3.15m、下段のテラス幅は2.00mを測り、段の高さは0.38~0.54mを測る。下段のテラスの両脇に直径0.35mのピットが付く。さらに、北側の斜面部に直径0.40~0.45mのピットが並ぶ。それぞれのピット間の距離は2.20~2.25mを測る。テラスの5m下斜面に通路状の平坦面があることから東斜面部からの入口に相当するものとする。

### 11) 土塁1

B区北端を画する土塁であり、「詰」であるA区斜面中央から北東に6.00m延び、東側に折れ6.50m延びる。L字型を呈し、地山を削りだし成形し、上部の盛土部分は石積みで補強を行っている。

この土塁1の北側は「切岸」により急峻な地形を呈しており、土塁上端から北側直下のD区堀切5の底面までの比高差は7.20mを測る。

### 12) 土塁2

B区南端を画する土塁であり、「詰」であるA区斜面から東に9.20m延びる。規模は、上端幅2.00~2.40m、基底部3.60~4.00m、高さ1.00~1.50mを測る。内壁側は直径20~40cm大の川原石の石積みが見られ、二段に整形されている。地山を削りだし、上部の盛土部分は石積みで補強を行っている。この石詰みの内側の段部がA区の通路状遺構へと繋がる。土塁2の南側は直下にC区縦堀1があり、土塁上端から縦堀1の底面までの比高差は3.15mを測る。

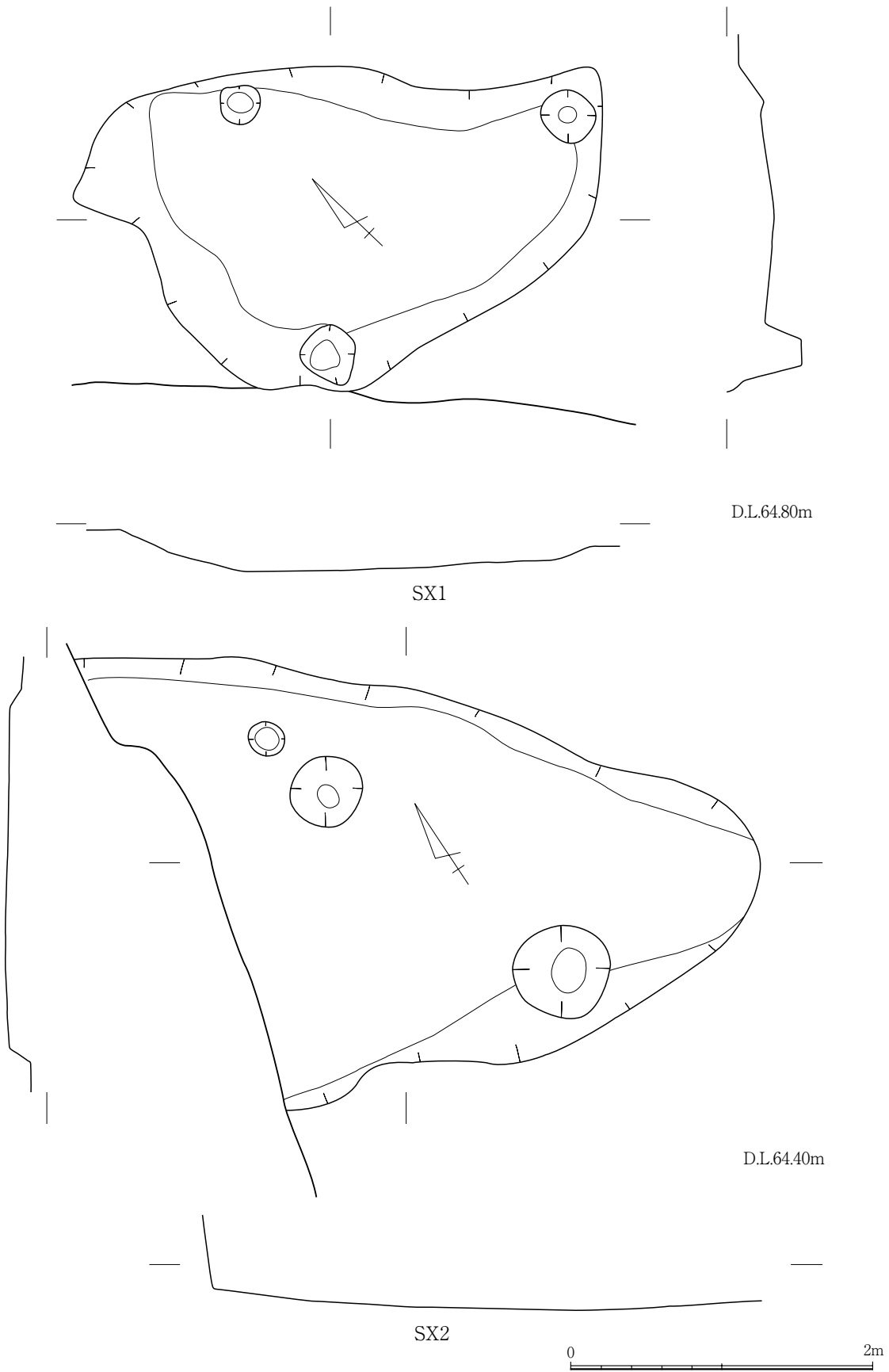


Fig.26 B区 SX1・2平面・エレベーション図



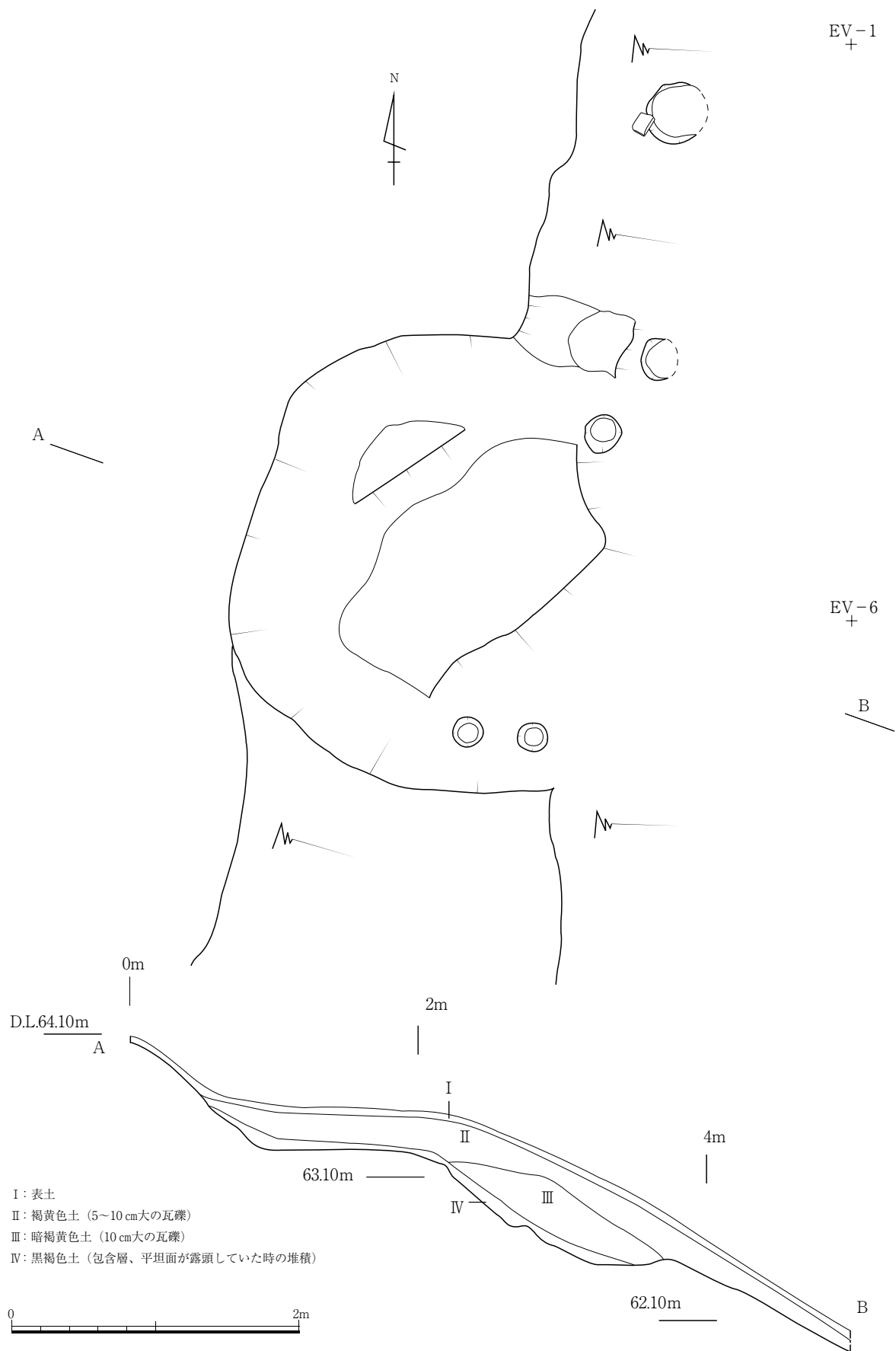


Fig.27 B区虎口平面・セクション図

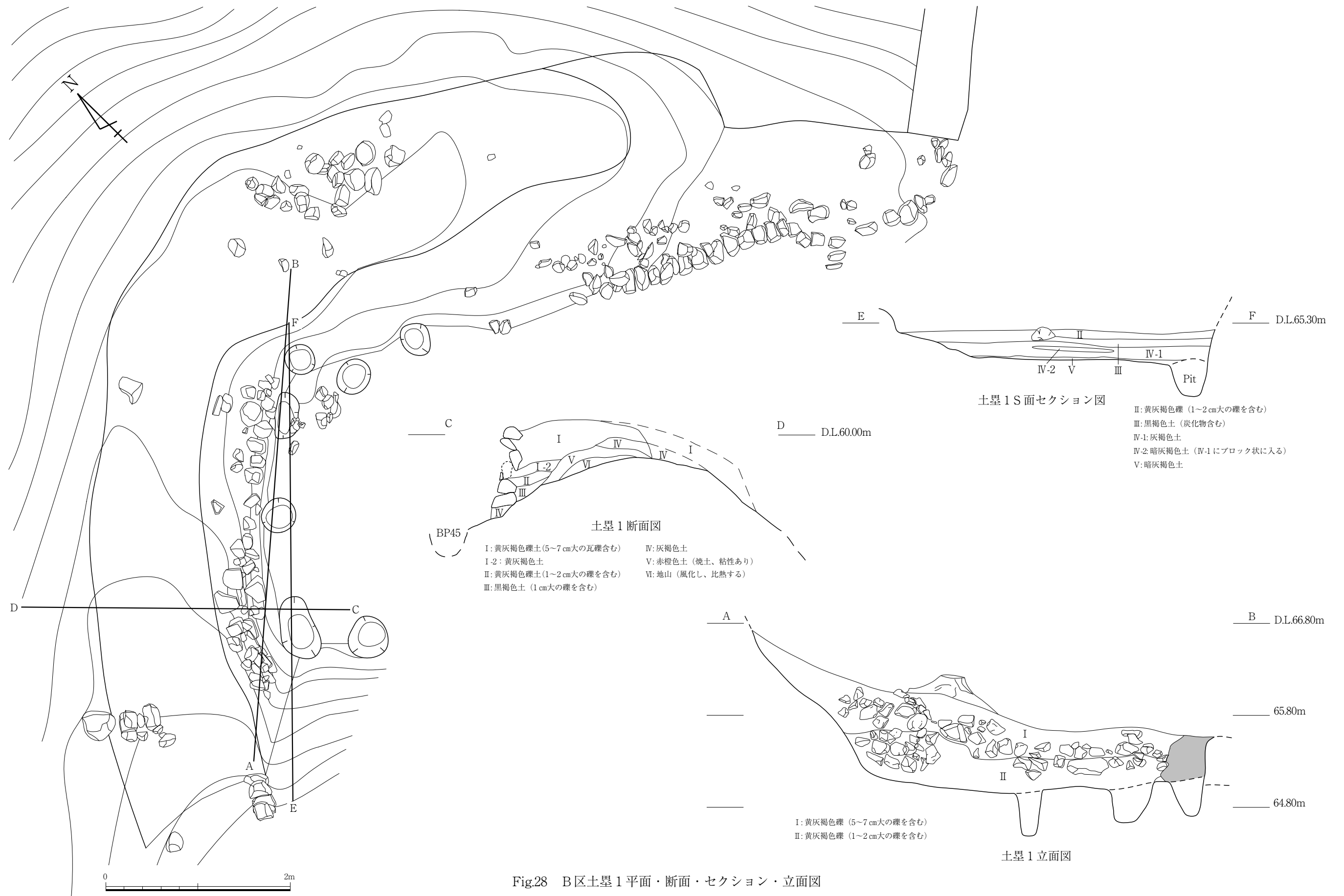
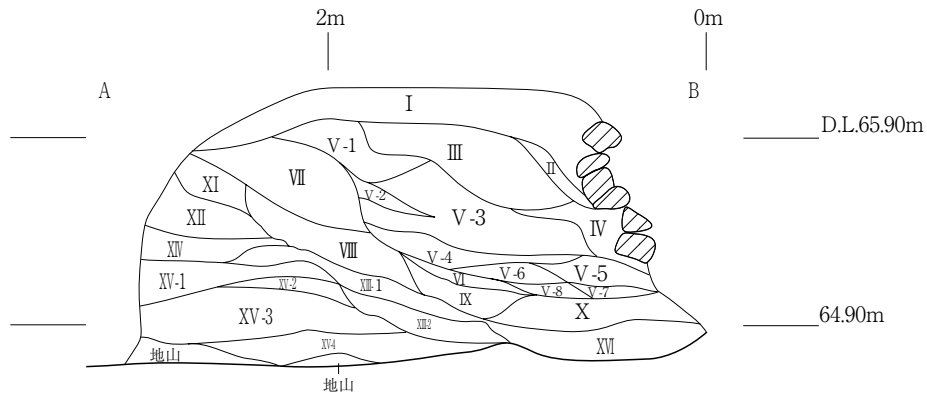


Fig.28 B区土壘1平面・断面・セクション・立面図

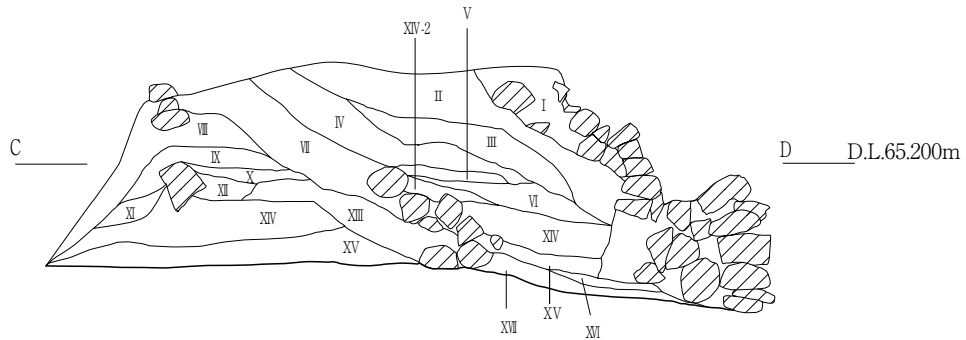


Fig.29 B区土塁2平面・立面図





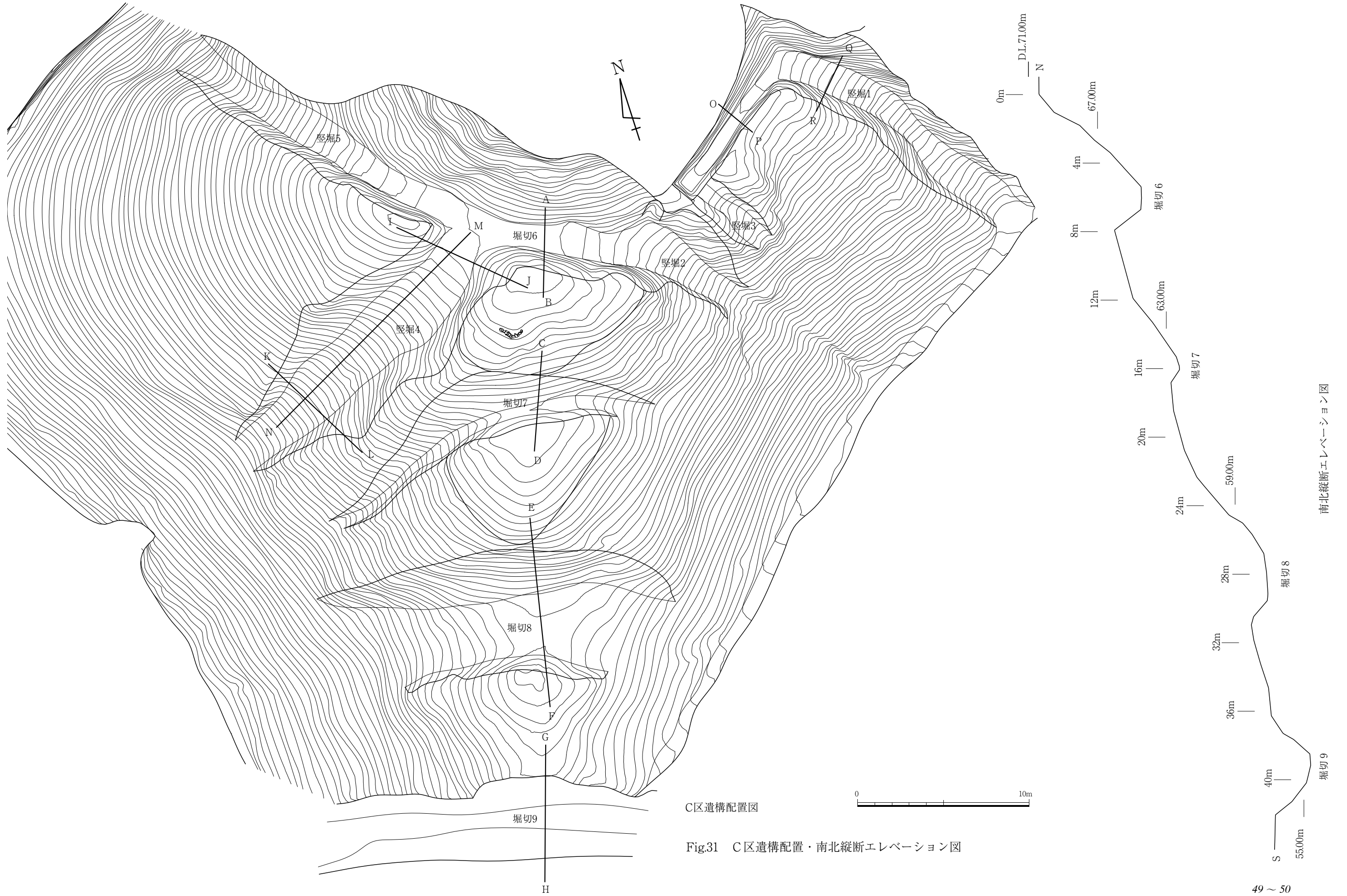
- |   |                            |
|---|----------------------------|
| I: 黄灰色土 (1~2cm大の礫主体、5~7cm大の礫混じる)          | VII: 赤橙色土 (焼土)             |
| II: 暗黄灰色土                                 | IX: 赤橙色土 (1cm大の角礫を含む)      |
| III: 黒褐色土 (5mm~1cm大の礫、遺物含む、土師質土器細片、白磁皿D群) | X: 暗灰褐色礫 (上部炭化物質層)         |
| IV: 暗灰黄色土                                 | XI: 暗灰黄色土                  |
| V-1: 褐灰黄色土 (灰混じり)                         | XII: 暗褐色礫 (5mm~1cm大)       |
| V-2: 灰黄色土 (灰ブロック)                         | XIII-1: 暗灰黄色土              |
| V-3: 黒灰褐色土 (基本的にはIII層と同じ遺物包含層、鉄釘等 (灰混じり)) | XIII-2: 灰黄色土 (灰、1cm大の礫を含む) |
| V-4: 灰黄色土                                 | XIV: 赤橙色礫 (焼土、1cm大の礫)      |
| V-5: 暗黄橙色土                                | XV-1: 赤橙色礫 (1cm大の礫)        |
| V-6: 黒褐色土 (5mm~1cm大の礫を含む)                 | XV-2: 赤橙色土 (焼土)            |
| V-7: 暗黄灰色土                                | XV-3: 赤橙色礫 (1cm大の礫)        |
| V-8: 明褐色土                                 | XV-4: 赤橙色土 (5mm大の礫主体)      |
| VI: 黄色土 (5mm~1cm大の礫を含む、固く締まる)             | XVI: 赤褐色礫 (5mm~1cm大の礫)     |
| VII: 赤褐色土 (1cm大の礫主体、10cm大の礫混じり)           |                            |



- |  |                           |
|--|---------------------------|
| I: 赤橙色礫 (7~8cm大角礫及び10~20cm大の円礫)          | X: 赤橙色礫 (焼土、5cm大の礫)       |
| II: 灰褐色土 (3~4cm大の礫が混じる。内壁盛土。III・IV層取り上げ) | XI: 暗赤灰褐色礫 (2~4cm大の礫)     |
| III: 暗褐色土 (1cm大の礫を含む。III・IV層取り上げ)        | XII: 黄橙褐色礫 (3cm大の礫)       |
| IV: 灰褐色土 (上層は3~4cm大の礫を含む。1cm大の礫が主体)      | XIII: 灰褐色土                |
| V: 暗褐色土 (5cm大の礫を含む、固く締まる)                | XIV: 暗赤褐色礫 (1cm・3~4cm大の礫) |
| VI: 黄橙色土 (焼土混じる)                         | XIV-2: 暗赤褐色土              |
| VII: 赤橙色土 (5cm大の礫を含む)                    | XV: 赤褐色土 (1~5cm大の礫を含む)    |
| VIII: 灰褐色土 (外壁側盛土)                       | XVI: 黒褐色土 (炭化物を含む)        |
| IX: 暗赤褐色礫 (1~3cm大の礫)                     | XVII: 褐灰色土 (整地土)          |



Fig.30 B区南土壘断面図



C区遺構配置図

Fig.31 C区遺構配置・南北縦断エレベーション図

### (3) C区(南尾根部)

調査対象地の南部、主郭から南に延びる尾根及び斜面に設定した調査区である。主郭の南側直下に堀切6があり、さらに南に堀切7～9の3本の堀切が連続する。主郭際の堀切6については竖堀4・5が小尾根の分岐部でU字形を呈した連結をして斜面下まで続く。また、主郭の南部東側直下には塹壕状の横堀があり、竖堀1と連結している。竖堀1・4・5は斜面下まで延びており、主郭に対する進入面を完全に遮断している。C区の南側は調査対象地外ではあるが西山城跡が立地する丘陵の尾根が南方向に一番張り出す部分であり、主要尾根筋はこの分岐を境に南東方向に延びる。

#### 1)堀切6

C区の北端部、主郭のA区(曲輪1)直下に位置する。堀切としての延長は10.50m、西側の竖堀5と東側の竖堀2の延長を併せると総延長35.50mを測る。A区(曲輪1)と堀切6底面の比高差は5.90～6.20mあり、曲輪1側は切岸により傾斜角 $50^{\circ}$ を測り急峻に成形している。上端幅は尾根筋の頂部で5.22m、底面幅は1.50～2.20mを測る。断面形は逆台形で箱堀状を呈する。埋土は曲輪1の切岸の風化礫層が厚く堆積しており、堀切南縁辺に沿って、Ⅲ層中で直径15～20cm大の川原石の集中がみられた。曲輪1からの投げ込みの可能性が考えられる。東側竖堀2との連結部では、横堀1側に小規模なピット状の落ち込みがあり、堀底を伝わり、横堀1側へのアプローチも想定される。尾根筋頂部および斜面部から主郭への進入を完全に遮断する遺構であり、西山城跡の中でも防御性が高い部分といえる。出土遺物は僅少で鉄釘が数点出土した。

#### 2)堀切7

C区北寄り、堀切6と連続する堀切である。西側は竖堀状に延びる。当初の地形では堀切6から8の間には小規模な32.5㎡ほどの平場が確認されていたが、この平場面で検出した。総延長は12.50m、上端幅は3.10～4.23m、底面幅は0.73～1.02mを測る。主郭側と堀底との比高差は2.50mを測る。断面形はU字状を呈し、傾斜角は主郭側 $30^{\circ}$ 、南側 $35^{\circ}$ を測る。埋土は黄褐色から灰褐色を呈した地山岩盤の風化礫が互層に堆積している。出土遺物は皆無であった。

#### 3)堀切8

C区中央部、堀切6の南側に位置する。規模はC区の中で最も大きく、延長20.80m、上端幅で7.50m、底面幅は4.20mを測る。南尾根頂部の中で比高差の大きい部分に構築されており、主郭側と堀底との比高差は4.50mあり、傾斜角は $40\sim 45^{\circ}$ を測る。断面形は逆台形で箱堀状を呈する。埋土は地山の岩盤が風化した礫が互層に堆積がみられた。出土遺物は皆無であった。

#### 4)堀切9

C区の南端に位置し、堀切の南肩は一部、調査対象地外にあたる。規模は、上端幅で5.32m、底面幅は1.82mを測る。深さは尾根頂部の所で2.34～2.42mを測り、断面形はU字形を呈し、底面はフラットに整形し箱堀状を呈する。傾斜角は主郭側が急峻で $70\sim 75^{\circ}$ を測り、南側は $40\sim 45^{\circ}$ を測る。堀切



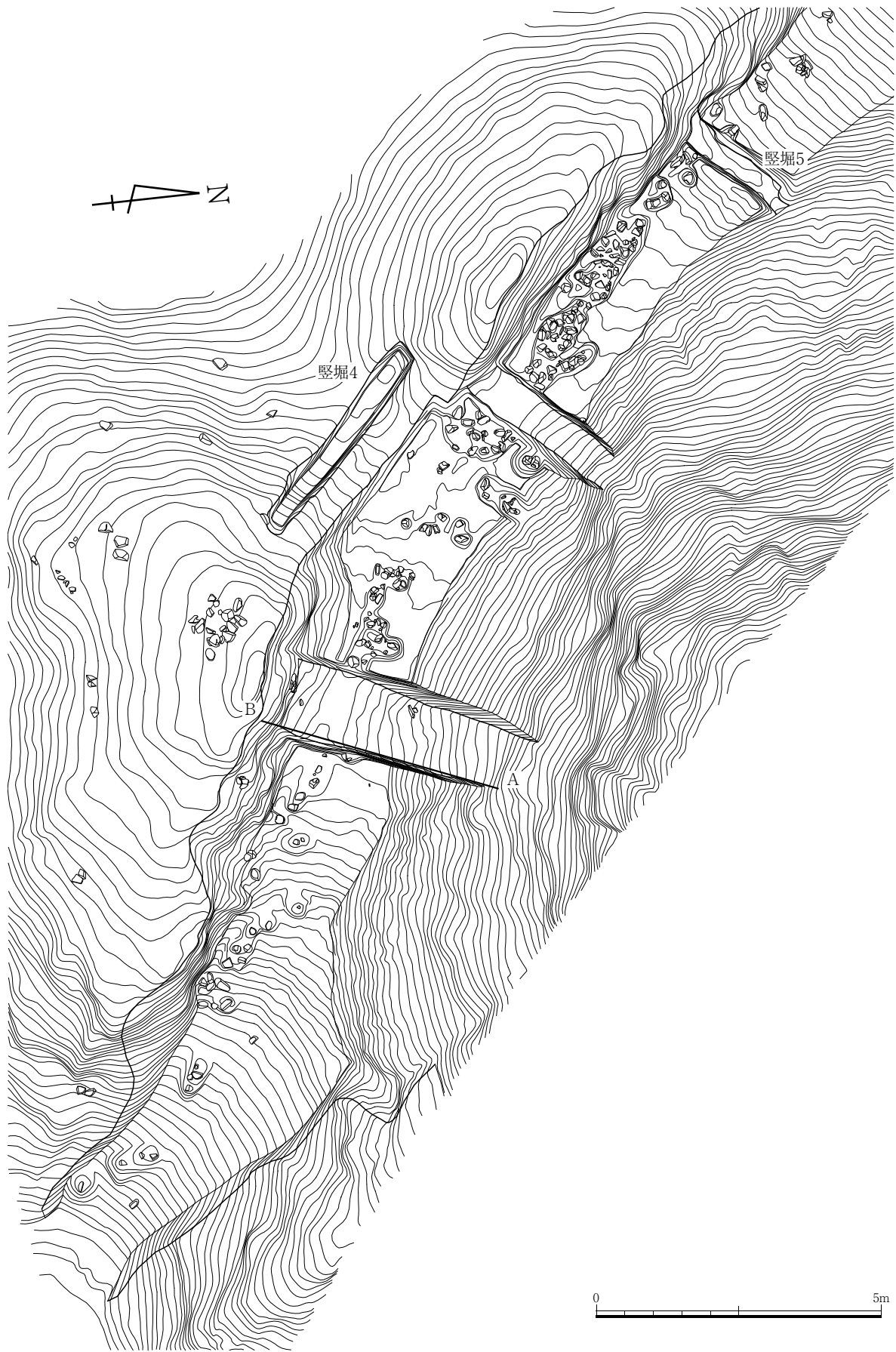
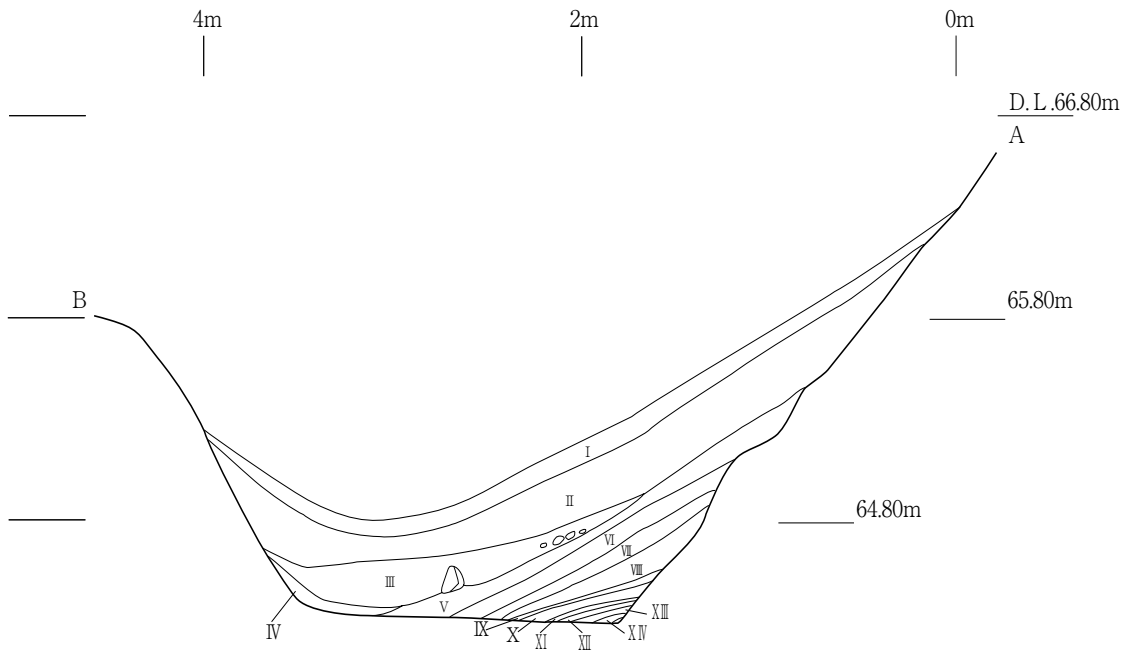
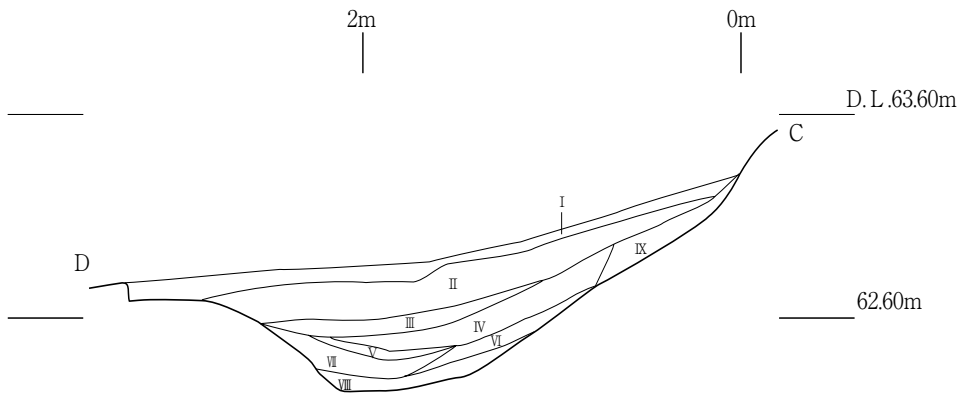


Fig.32 C区掘切6平面图



- |                                      |                           |                           |
|--------------------------------------|---------------------------|---------------------------|
| I: 表土                                | VI: 暗灰褐色礫 (V層との間層に赤橙色土)   | XI: 赤橙色土                  |
| II: 黄灰褐色礫土                           | VII: 暗灰褐色礫 (VI層との間層に赤橙色土) | XII: 暗灰褐色土 (1~2 cm大の礫を含む) |
| III: 暗灰褐色礫 (2~3 cm大の礫。詰切岸風化土)        | VIII: 赤灰褐色砂礫 (詰切岸風化土)     | XIII: 赤橙色土                |
| IV: 暗灰褐色土                            | IX: 赤橙色土 (VIII・X層の間層)     | XIV: 暗灰褐色土 (1~2 cm大の礫を含む) |
| V: 暗灰褐色礫 (1~2 cm大の礫。詰切岸風化土、IIIと互層堆積) | X: 暗灰褐色礫 (1~2 cm大の礫)      |                           |

堀切6



- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| I: 表土               | VI: 暗灰褐色土 (砂礫、地山風化土) |
| II: 暗黄褐色土 (砂礫)      | VII: 黄褐色土 (砂礫)       |
| III: 暗黄褐色土 (やや粘質あり) | VIII: 暗灰褐色土 (粘質あり)   |
| IV: 暗黄灰褐色土 (砂礫)     | IX: 地山               |
| V: 暗黄灰褐色土 (粘質あり)    |                      |

堀切7



Fig.33 C区堀切6・7セクション図

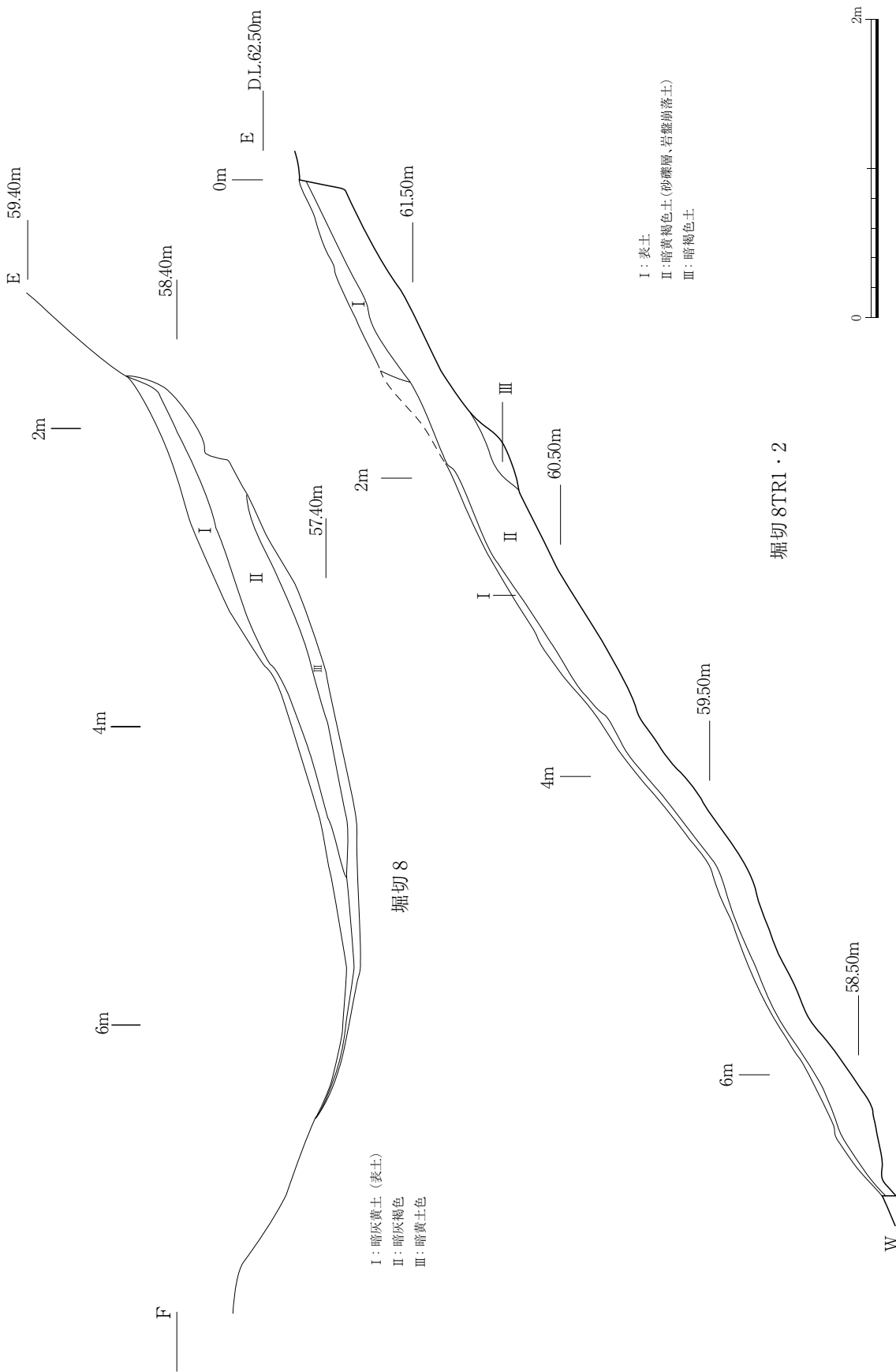


Fig.34 C区堀切8セクション図



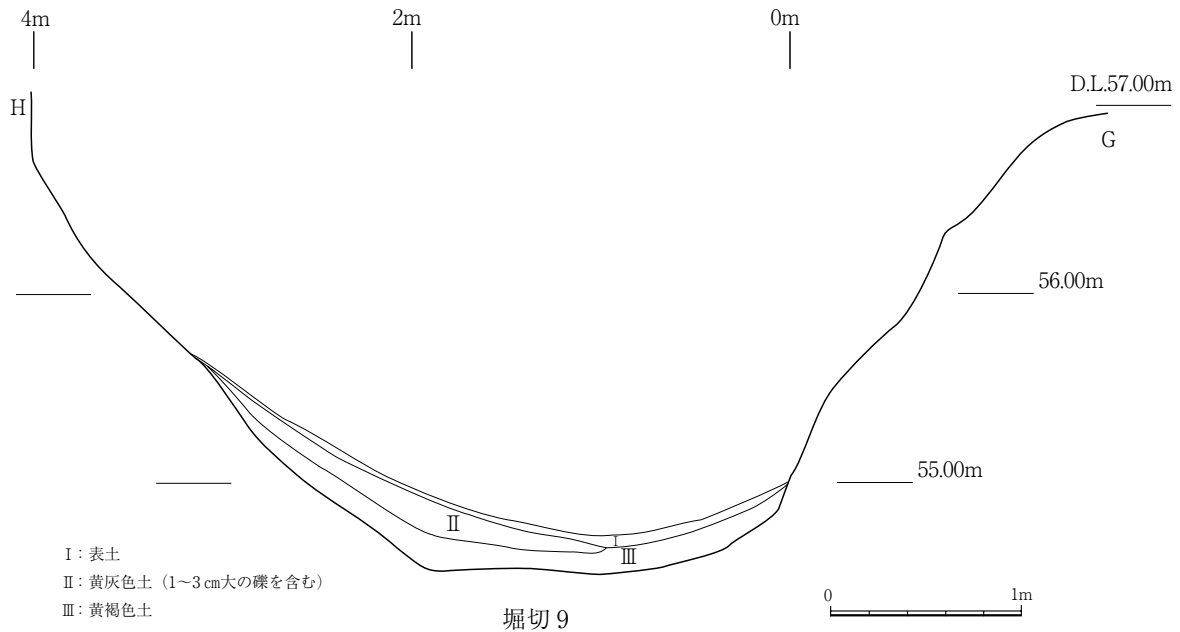


Fig.35 C区堀切9セクション図

9は西山城跡の遺構の中で最南端の遺構であり、西側、東側斜面の下の方まで縦堀が延びている。

埋土は地山の岩盤が風化した礫が堆積している。出土遺物は皆無であった。

#### 5) 横堀1

C区の東斜面、曲輪1直下に位置し、北側は縦堀1につながる。横堀1の南端には浅い縦堀3が付属する。当初は埋もれており、曲輪1の犬走りのな通路として認識されていた。形状は塹壕的であり、規模は延長12.00m、上端幅は1.32m、底面幅は0.74mを測り、堀としての深さは0.94mを測る。断面形は完全な逆台形を呈する。曲輪1から堀底面までの比高差は、6.90mを測り、傾斜角は70°と急峻である。

埋土は曲輪1の切岸成形面の風化した礫が堆積しており、堀底面には「つぶて」と考えられる直径5~20cm大の川原石の集石が認められた。出土遺物は皆無であった。

#### 6) 縦堀1

C区の東斜面、曲輪1直下に位置し、横堀1、曲輪2の土塁2の間に構築されている。規模は延長17.2m、幅は上端で3.48~4.60m、底面幅で1.72~2.02mを測る。深さは0.98~1.24m、主郭側曲輪2の土塁2の天端から堀底面までの比高差は3.24mを測る。底面は平らであり、断面形は逆台形を呈する。埋土は土塁2からの流れ込み土と、横堀1の岩盤風化礫の堆積が認められ、前者には焼土を多く含む。縦堀の傾斜角は50°を越え急峻であり、下方でE区のSD1・2の通路状遺構と切り合う。縦堀1は主郭へ南から東斜面を伝ってくる進入を完全に遮断する施設といえる。

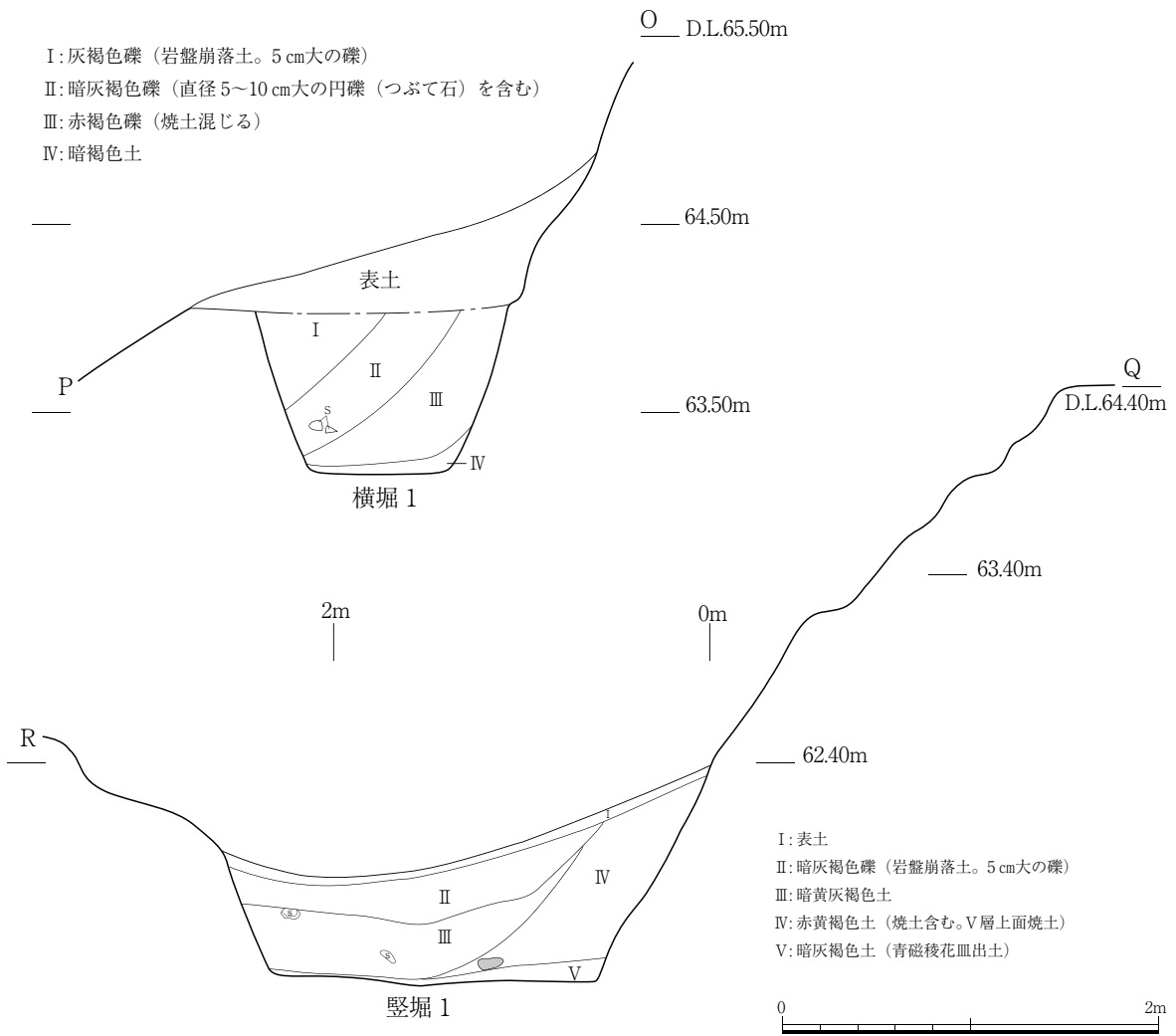
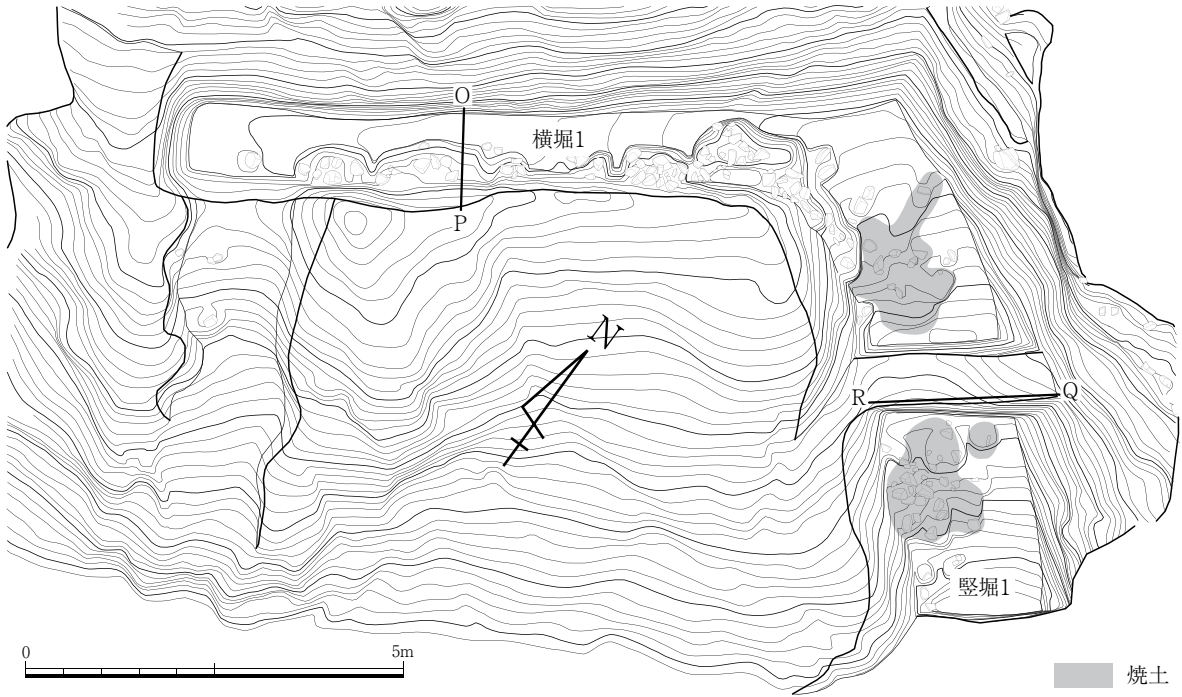


Fig.36 C区横堀1・竖堀1平面・セクション図

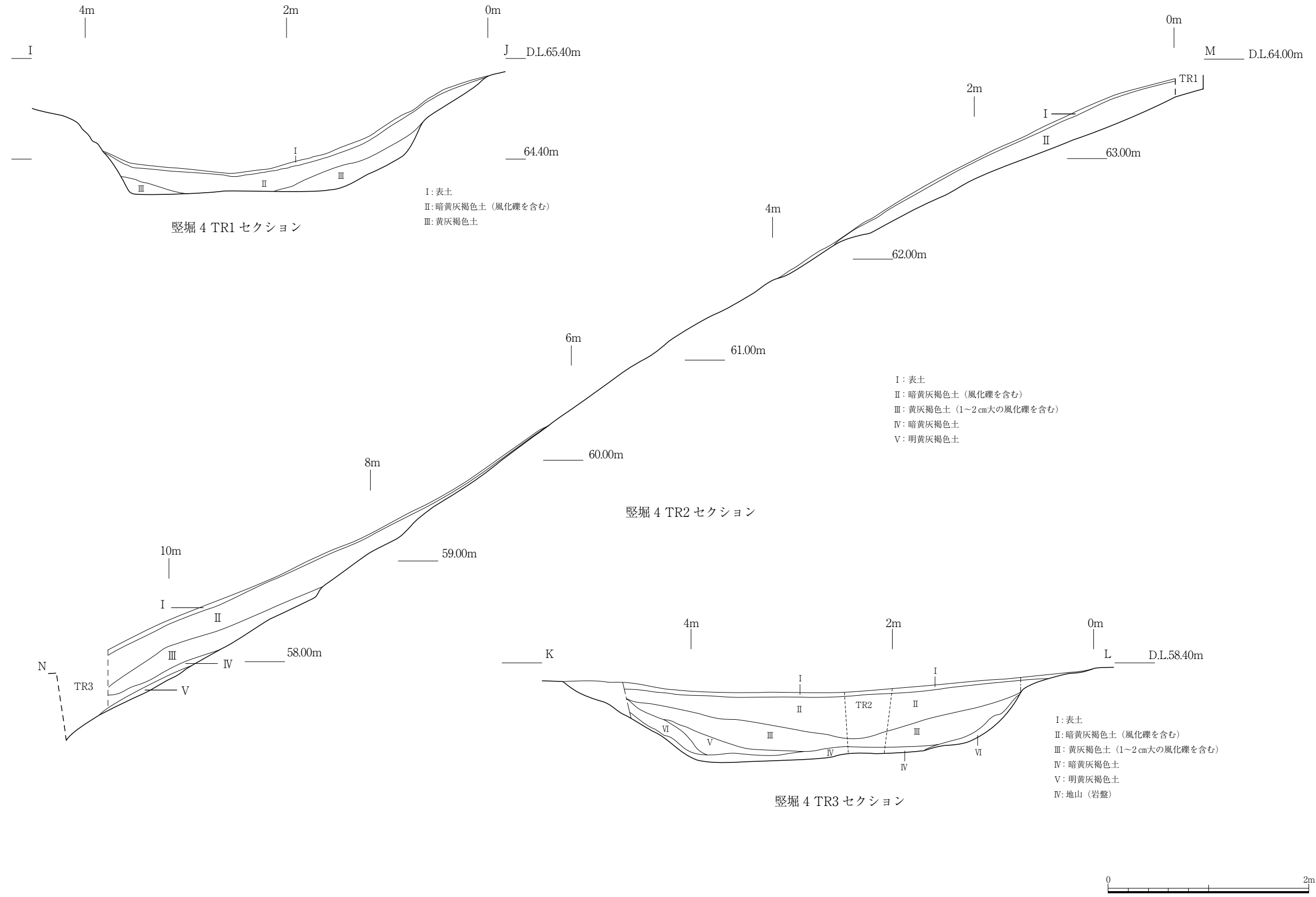


Fig.37 C区堅堀 4TR セクション図



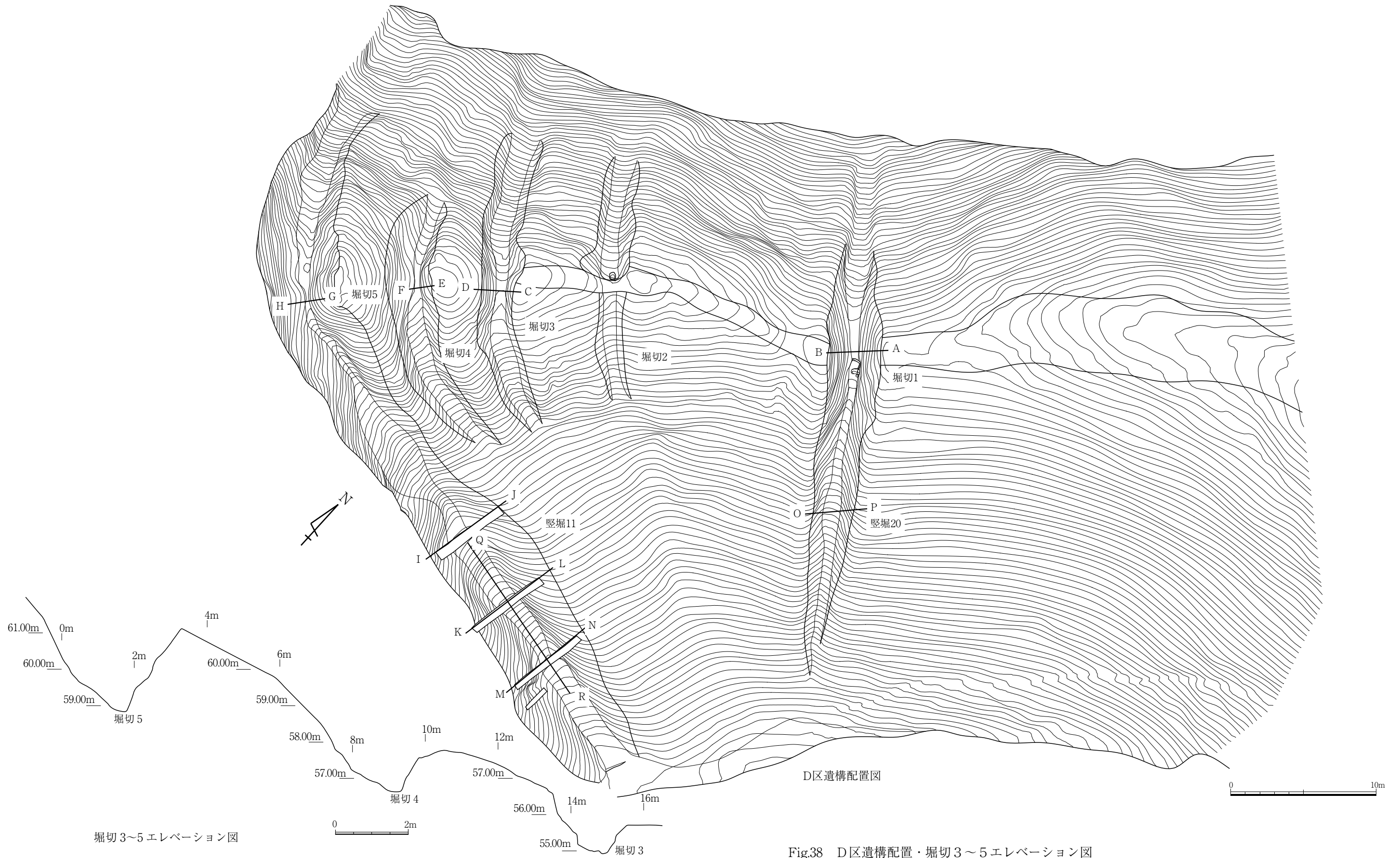


Fig.38 D区遺構配置・堀切3～5エレベーション図

## 7) 豎堀2

C区東斜面、堀切6に連結する豎堀である。豎堀としての延長は7.20mを測り、上端幅は2.24～3.82m、底面幅は1.50～2.82mを測る。深さは1.20～1.42mあり、断面形は逆台形状を呈する。豎堀2の下斜面は急峻であり、傾斜角が50°を越え、自然地形に開口する。

## 8) 豎堀3

C区東斜面、横堀1に直交し、豎堀2に並行する。規模は、上端幅0.95～1.20m、底面幅0.75～0.82mを測り、深さも0.35～0.42mと浅い。性格は不明であるが、横堀1に付属する施設と考えられる。

## 9) 豎堀4

C区西斜面、堀切6から分岐し南西斜面方向に延びる豎堀である。豎堀4の位置は、南に延びる尾根と、西に延びる小尾根の間で谷部を形成するような地形であり、自然地形を利用し、構築しているものと考えられる。規模は延長18.40m、上端幅4.80～6.20m、底面幅2.12～3.20mを測る。傾斜角は35～40°を測り、断面形は浅い逆台形を呈する。堀の堆積は少なく、堀切6の分岐から4mの所は現況の地表面に地山の岩盤が露頭しており、埋土としては地山の風化礫が堆積している。

出土遺物は皆無であった。

## 10) 豎堀5

C区西斜面、堀切6と連結する豎堀である。豎堀としての延長は17.42mを測る。堀の上端幅は3.20～3.86m、底面幅は1.42～2.24mを測る。底面は平らで断面形は逆台形を呈する。深さは1.20～1.36mを測る。豎堀5の下端は急峻な地形に開口する。堀底に堀切6から連続して直径10～20cm大の川原石の集石が認められた。

出土遺物も僅少で、鉄釘が1点出土したのみであった。

## (4) D区(北尾根部)

調査対象地北部、主郭から北東方向に延びる尾根、および北西、南東斜面部に設定した調査区である。標高52.00～61.00mを測る起伏のある尾根筋であり、北西斜面は傾斜角55°を越える急峻な地形を呈している。南東斜面側は、傾斜角30～45°を測る谷地形を呈し、豎堀11・20の裾の方はこの谷部に集約される。

主郭である腰曲輪(B区曲輪2)直下に堀切5があり、さらに北東方向に堀切1～4の合計5本の堀切が連続する。東斜面側には堀切5に連結して豎堀11が構築されている。また、堀切1の東斜面側にも豎堀20が連結し、斜面下方に延びる。

## 1) 堀切1

D区の北東端、標高51.50mを測る尾根上に位置する。西山城跡の北東を画する堀切であり、北東斜面側は豎堀20と連結し斜面下方まで延びる。北東尾根筋、および北東斜面からの進入を遮断する

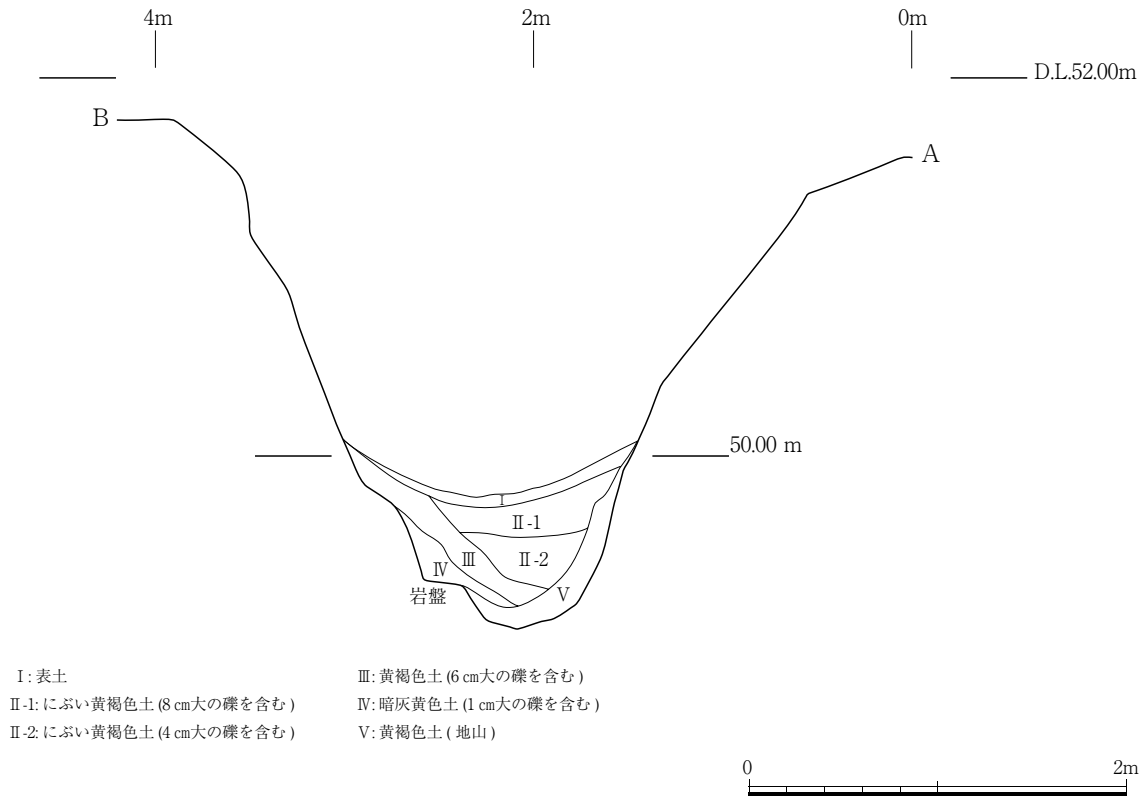


Fig.39 D区堀切1 セクション図

施設である。規模は延長 12.20m、上端幅 3.50～3.80m を測る。豎堀 20 との総延長は 29.80m を測り、東斜面谷部に向かって伸び、北西斜面側は急峻な地形に開口する。断面形は V 字型を呈し、底面幅は 0.35～0.48m を測る。いわゆる「薬研堀」の堀切である。深さは尾根頂部のところで 2.74m を測り、地山の岩盤を深く削り込む。

埋土は、堀切の両岸部分の地山が風化した礫が互層に堆積しているが、斜面は堆積がほとんど認められず、岩盤が露頭している。

## 2) 堀切2

D区の中央部、標高 55.50m を測る尾根上に位置する。堀切1 から尾根筋を南へ 16.00m の地点であり、堀切中央部からやや東斜面に下がった所は土橋状に掘り残す。規模は延長 17.00m で東斜面側 7.20m、西斜面側 8.60m を測る。上端幅は 1.60～2.50m、底面幅は 0.82～1.50m を測る。土橋状の掘り残した部分の幅は 0.80m を測る。

D区の堀切の中では規模が小さい。

## 3) 堀切3

D区の南部、堀切2の南側に位置し、標高は 55.80m を測る。堀切3から南に延びる尾根には起伏の大きい箇所には堀切4・5と合計3本の堀切が連続して構築されている。堀切3から6間での比高差は 5.50m を測り、尾根頂部の傾斜角も主郭側に向けて 35°～50° と急峻である。

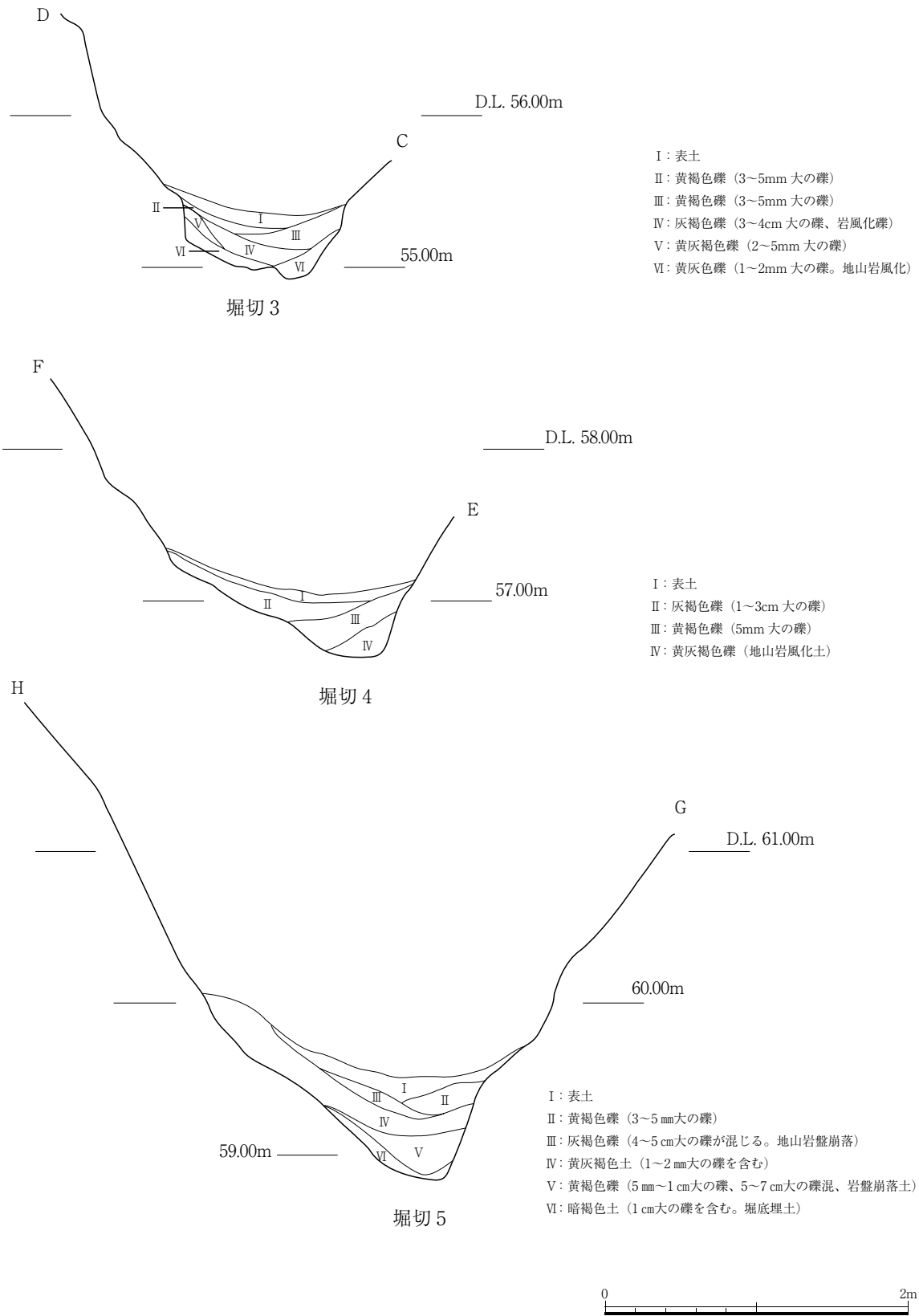


Fig.40 D区堀切3~5セクション図



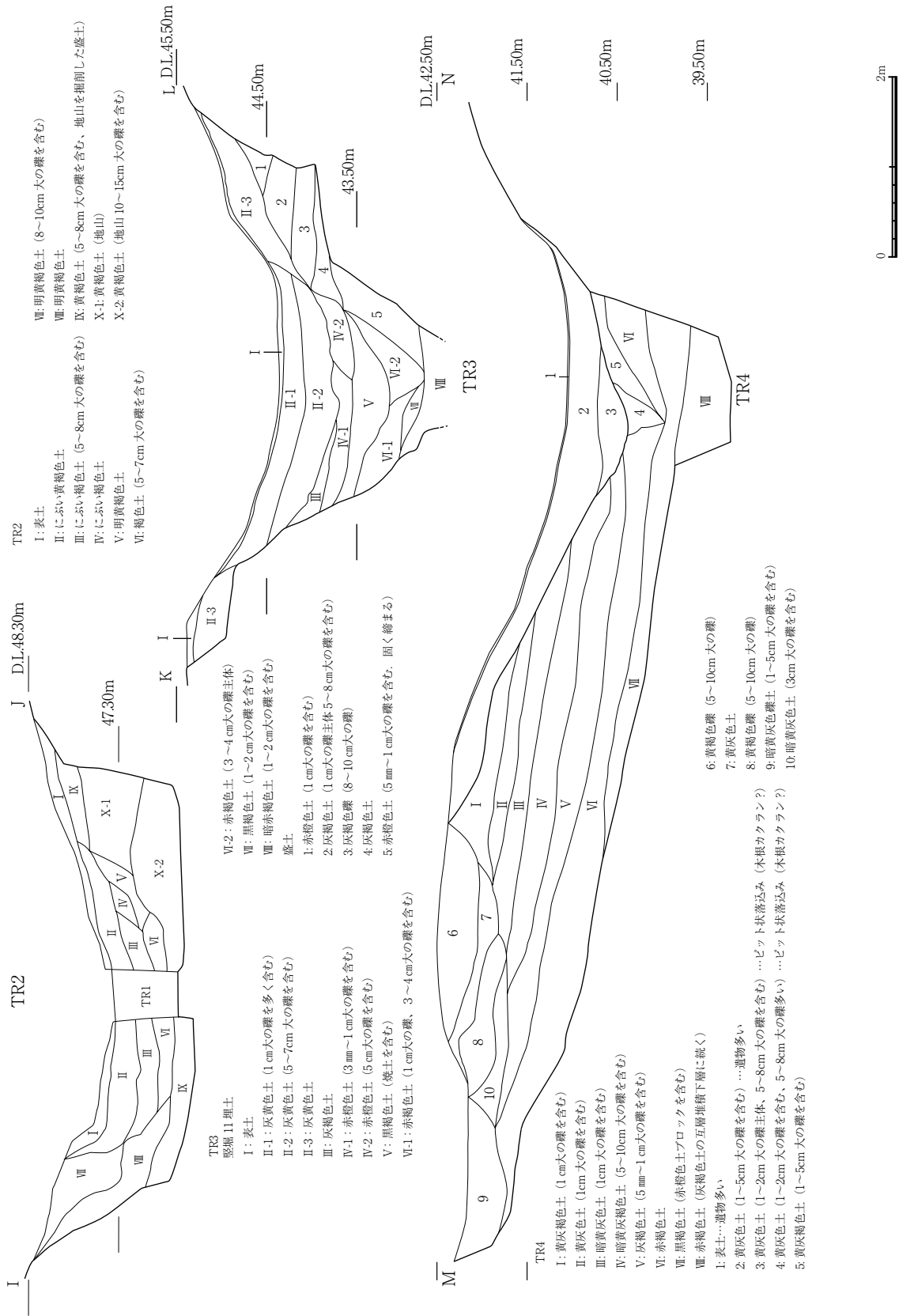


Fig.41 D 区堅堀 11TR2 ~ 4 セクション図

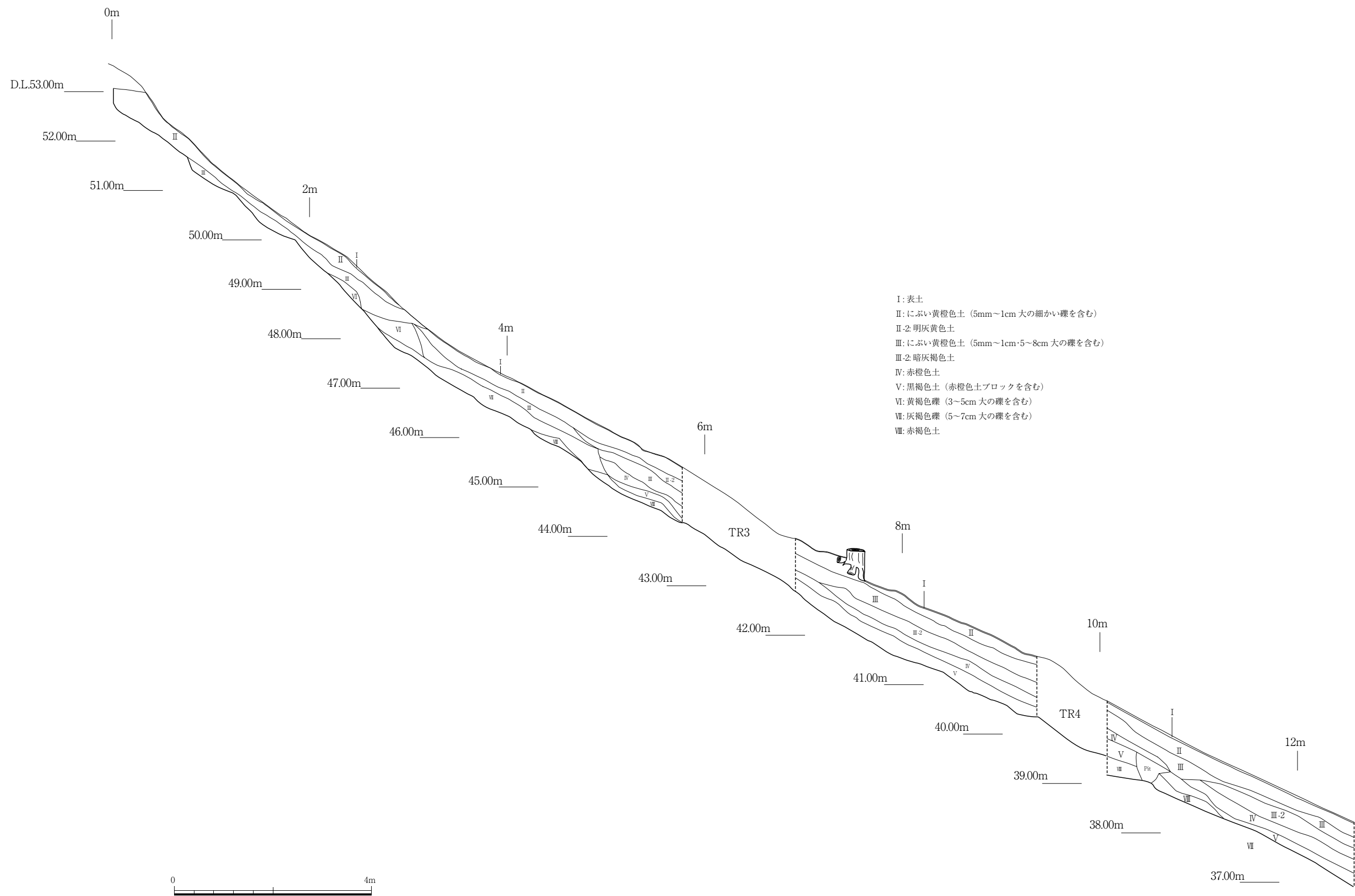


Fig.42 D区竖堀 11 縦断セクション図

堀切3・4間は5.50m、堀切4・5間は7.50mの間隔をとる。堀切3の規模は、延長21.40m、上端幅2.10～3.00m、底面幅0.40m～1.30mを測る。断面形は北側の勾配が急な立ち上がりをするV字型を呈した薬研堀である。

埋土は堀切の両岸の地山岩盤の風化した礫であり、遺物の出土は認められなかった。

#### 4) 堀切4

D区南部、堀切3・5間に位置する。標高は57.50mを測る。規模は延長18.50m、上端幅2.52～3.20m、底面幅0.38～1.42mを測る。断面形は北側の勾配が急な立ち上がりをするV字型を呈した薬研堀である。

埋土は堀切の両岸の地山岩盤が風化した礫であり、遺物の出土は認められなかった。

#### 5) 堀切5

D区南端部、堀切4の南に位置する。標高は60.80mを測り、堀底までの比高差は主郭側が7.20m、北側は2.28mを測る。堀切4から主郭のB区曲輪2にかけては北尾根部で最も起伏がある急峻な地形を呈しており、傾斜角が60°を越える地点に構築されている堀切である。西斜面、東斜面ともに尾根の変化点であることから急峻であり、比較的傾斜が緩い東斜面側は堀切5に連結して豎堀11が斜面下方まで続く。堀切としての規模は延長30.50m、上端幅4.70～5.80m、底面幅0.30～1.42mを測る。断面形は北側の勾配が急な立ち上がりをするV字型を呈し、薬研堀である。

埋土は、堀切の両岸の地山岩盤が風化した礫であり、遺物の出土は認められなかった。

#### 6) 豎堀11

D区南端部、東斜面に位置し、堀切5直下に配置された豎堀である。豎堀11の基端部は堀切5の東斜面裾部(EⅢ-21グリッド)を切って構築されている。規模は延長25.70m、上端幅6.20～6.55m、底面幅は1.57～1.82mを測る。断面形はU字形を呈し、深さは1.60～2.60mを測る。EⅣ-5グリッドから下斜面については、堀の両側に盛土が認められる。

埋土は、基本的に灰黄色礫土(Ⅱ層)、遺物包含層であるⅢ層の灰褐色土、V層の黒褐色土が主体である。部分的に堀の両岸が崩れて黄褐色礫が堆積している。出土遺物はⅡ・Ⅲ層で土師質土器・青磁・備前焼・鉄釘などが出土した。B区からの流れ込みと考えられる。

#### 7) 豎堀20

D区北端部、東斜面に位置し、堀切1直下に配置された豎堀である。豎堀20の基端部はF-23グリッドであり、堀切1の裾部に連結する。規模は延長16.70m、上端幅1.50～3.20m、底面幅0.62～1.20mを測る。断面形はU字形を呈し、深さは0.95～1.56mを測る。

埋土は、黄褐色土が堆積している。

#### (5) E区(東斜面部)

調査対象地東斜面に設定した調査区であり、B区曲輪2、腰曲輪東面の直下に位置する。標高58.00

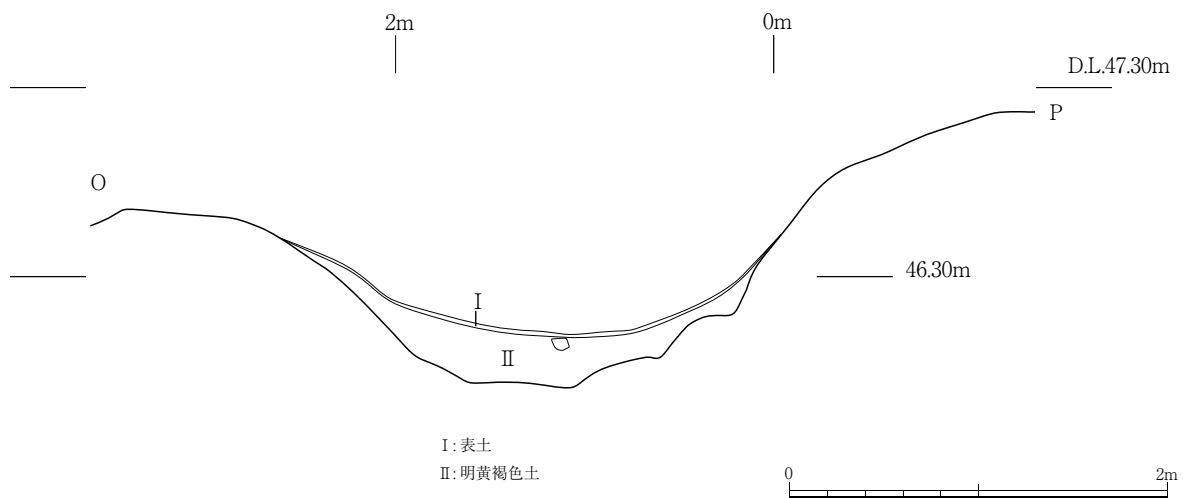


Fig.43 D区豎堀 20 バンクセクション図

～48.00mにかけての斜面部を対象に調査区を設定した。東斜面の傾斜角は45～50°である。検出された遺構は、豎堀8条・SD(通路状遺構)2条であり、標高51.00m以下にみられる豎堀12～16の5条については、連続して構築された畝状豎堀群である。これらの豎堀は調査対象地外の斜面下の方に延びている。

B区虎口の直下にはU字形を呈する豎堀17～19が連続している。平面プランがU字形を呈する豎堀は西山城跡の豎堀の特徴の一つで、各小尾根の基端部に構築されている。E区南端部では、小尾根を横断するSD2条を検出しているが、一つは斜面下からのアプローチと考えられる通路(SD2)と、一つは東斜面部を横断する通路(SD1)と考えられる遺構が検出されている。また、C区豎堀1からの進入に対して横矢をかける性格を持った遺構とも考えられる。

このように、西山城跡東側からの進入を防御する遺構が集中して検出された調査区である。

### 1) 豎堀12

E区南端部、標高53.00mに基端部を持つ豎堀である。当初の踏査時には自然地形として捉えられていたが、トレンチ調査で確認された。規模は、調査対象地内での延長は7.5mを測り、調査対象地外の斜面下までの総延長は20mを越える。幅は3.08～4.20m、断面形はU字形を呈し、深さは1.9mを測る。

埋土は間層に焼土層(IV層)が認められ、上面で備前焼の甕など遺物が集中して出土した。遺物はVI層までに集中し、IX層までは無遺物層であり、IX層ではローリングを受けた土師質土器細片が出土した。

### 2) 豎堀13

E区南端部、東斜面に位置し、豎堀12から7.5m北側に配置された豎堀である。豎堀13の規模は、調査対象地内での延長は4.2mを測り、調査対象地外の斜面下までの総延長は15mを越える。幅は2.25～3.10m、断面形はU字形を呈し、深さは1.0mを測る。



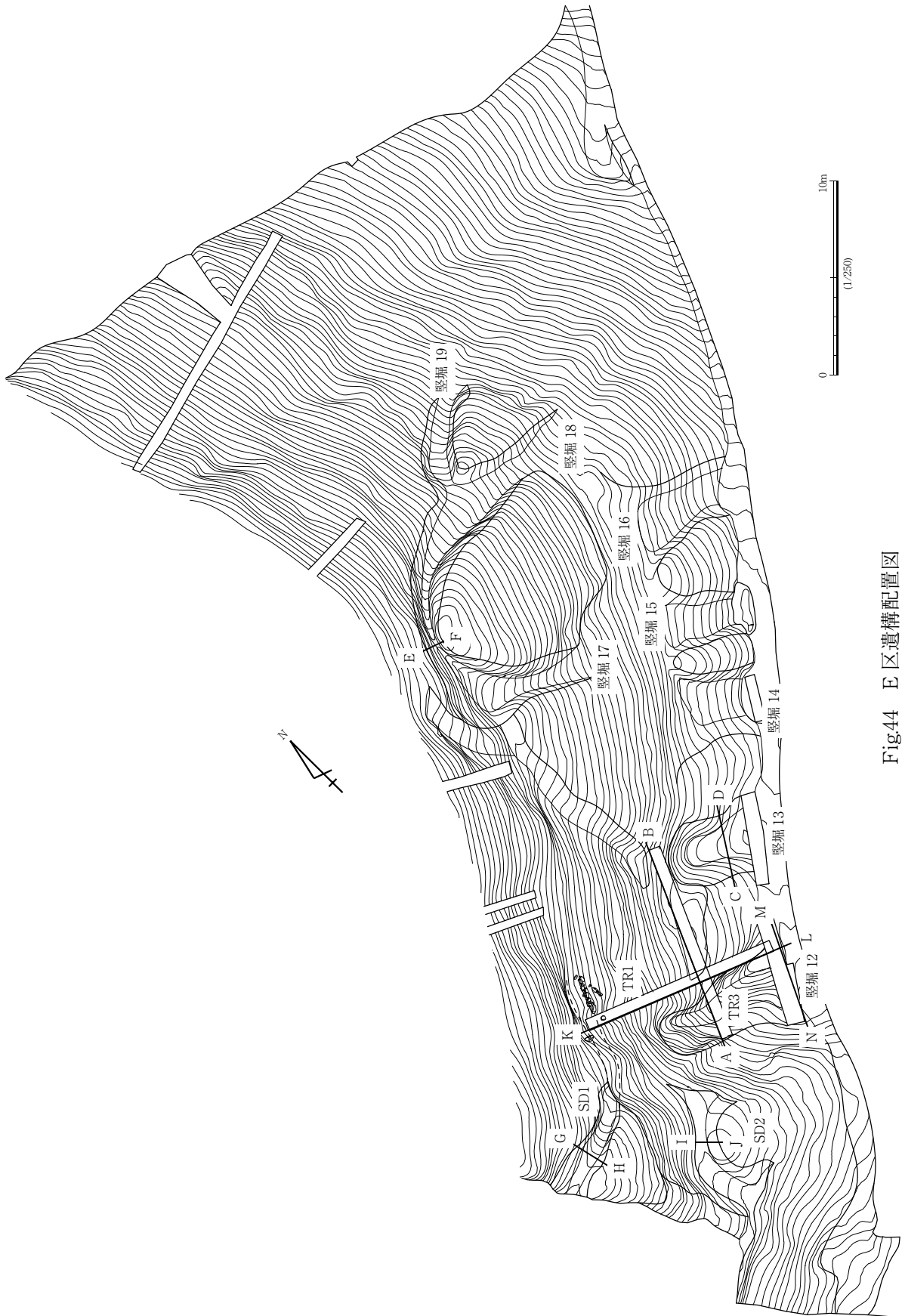


Fig.44 E区遺構配置図

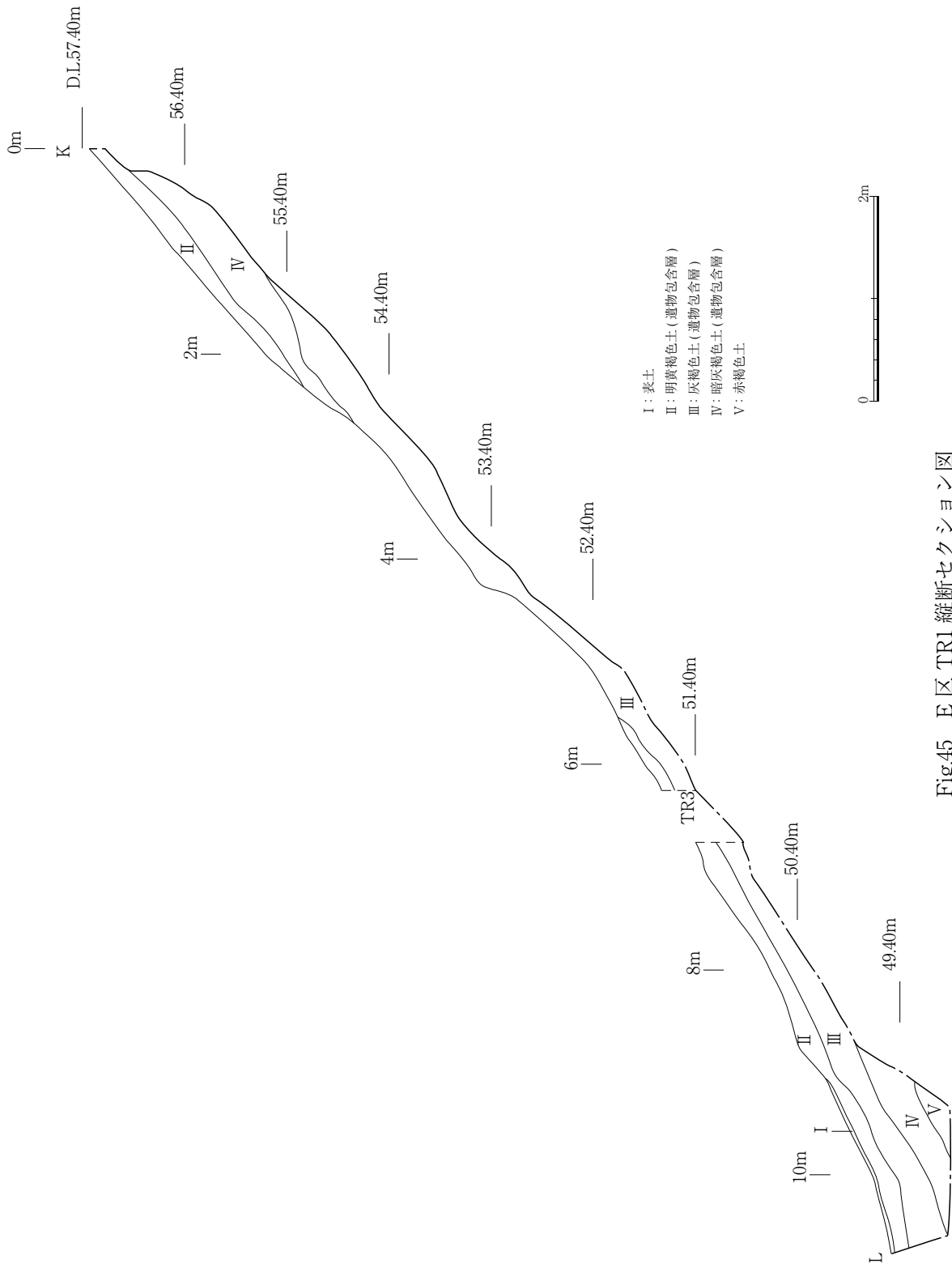


Fig.45 E区 TR1 縦断セクション図

埋土は間層に焼土層(Ⅲ・Ⅴ層)が認められ、上面で備前焼・鉄釘など遺物が集中して出土した。遺物はⅤ層までに集中し、以下は無遺物層である。

### 3) 竪堀14

E区中央部、東斜面に位置し、竪堀13から7.50m北側に配置された竪堀である。竪堀13～15の間隔は4.50～5.50mで連続し、地山の岩盤を削って構築している。竪堀13の規模は、調査対象地内での延長は3.70mを測り、調査対象地外の斜面下までの総延長は18.00mを超える。幅は3.25～3.86m、断面形は浅いU字形を呈し、深さは0.50～0.85mを測る。

埋土は、地山の風化した礫層が堆積しており、その下は岩盤である。

### 4) 竪堀15

E区中央部、東斜面に位置し、竪堀14に並んで4.50m北側に配置された竪堀である。竪堀14の規模は、調査対象地内での延長は4.20mを測り、調査対象地外の斜面下までの総延長は12.00mである。幅は2.10～2.60m、断面形は浅いU字形を呈し、深さは0.45～0.80mを測る。

埋土は、地山の風化した礫層が堆積しており、その下は岩盤である。

### 5) 竪堀16

E区中央部、東斜面に位置し、竪堀15に並んで5.50m北側に配置された竪堀である。竪堀15の規模は、調査対象地内での延長は5.62mを測り、調査対象地外の斜面下までの総延長は8.00mである。幅は2.60～4.20mと基端部が広い。断面形は浅いU字形を呈し、深さは0.54～0.86mを測る。

埋土は、地山の風化した礫層が堆積しており、その下は岩盤である。

### 6) 竪堀17

E区中央部、東斜面に位置し、B区曲輪2、腰曲輪の

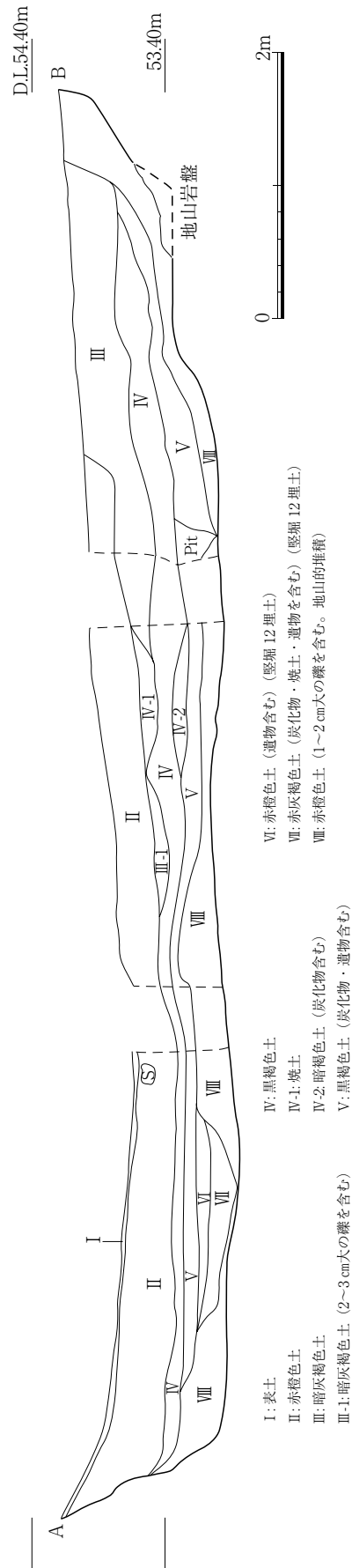


Fig.46 E区 TR3 セクション図

虎口直下に配置された竪堀である。竪堀 17 と 18 は小尾根の基端部で繋がっており、平面プランは U 字形を呈する。規模は屈曲部まで 5.58m、斜面下まで 7.02m 延長 12.30m を測り、幅は基端部で 0.95m、斜面下で 1.95m、深さは 0.60m を測る。基端部の断面形は逆台形状を呈し、斜面部は浅い U 字形を呈する。また、屈曲部に、斜面下の竪堀 13 から続く通路が取り付く。この通路の規模は、幅 0.62~1.20m、延長は 11.80m を測る。通路は竪堀 17 の上場から B 区腰曲輪の虎口に 5.0m 延び止まる。

埋土は、II 層黄褐色土(礫混じり)、III 層(黄灰褐色土)で遺物が出土している。鉄釘、土師質土器片がみられる。また、直径 20~30cm 前後を測る礫の集中が見られる。

### 7) 竪堀 18

E 区中央東より、東斜面に位置し、B 区曲輪 2、腰曲輪の虎口直下に配置された竪堀である。竪堀 17 と 18 は小尾根の基端部で繋がっており、平面プランは U 時形を呈する。規模は屈曲部まで 5.50m、

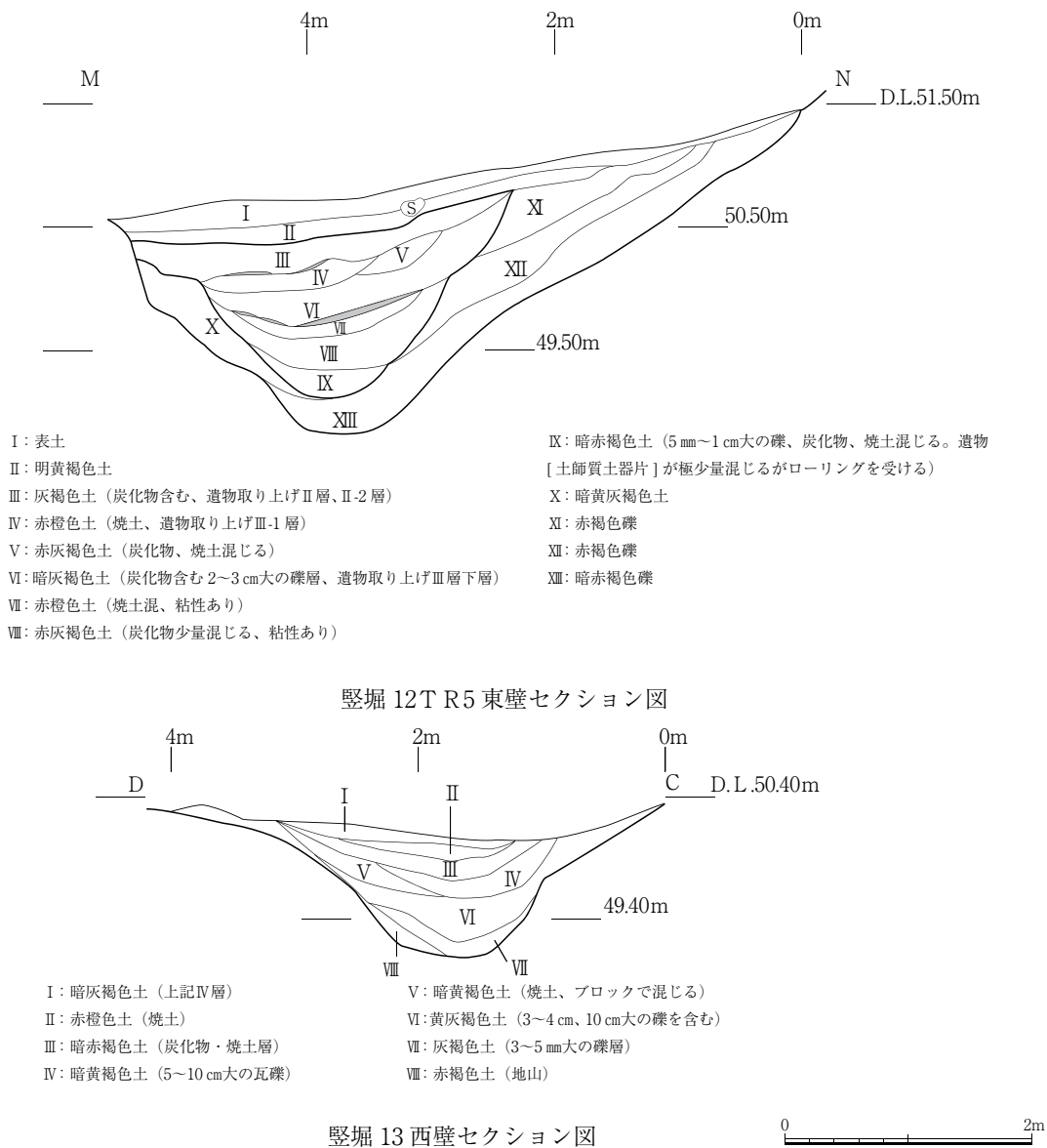


Fig.47 E 区竪堀 12・13 セクション図



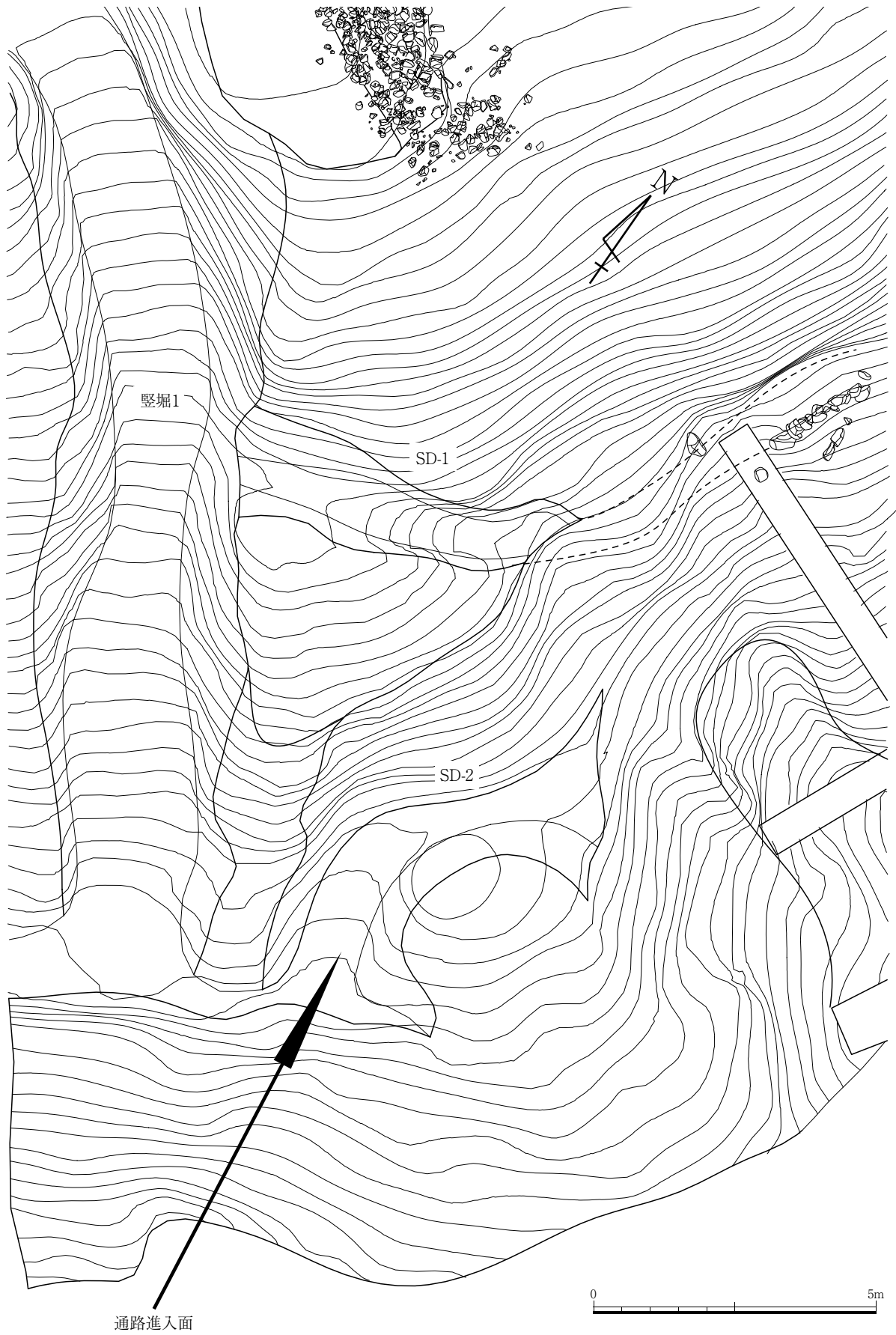


Fig.48 E区南端平面図

斜面下まで7.08m、延長12.5mを測り、幅は基端部で0.95m、斜面下で1.95m、深さは0.60mを測る。基端部の断面形は逆台形状を呈し、斜面部は浅いU字形を呈する。鉄釘など腰曲輪からの流れ込みと思われる遺物が出土した。

また、直径5～15cm大の川原石が基端部の底面直上に集石がみられた。

### 8) 竪堀19

E区中央東より、東斜面に位置し、竪堀18から分岐する竪堀である。竪堀19と18は小尾根の基端部で繋がっており、平面プランはU字形を呈する。規模は屈曲部まで延長5.5m、幅は基端部で0.50m、斜面下で0.95m、深さは0.60mを測る。基端部の断面形は逆台形状を呈し、斜面部は浅いU字形を呈する。

### 9) SD1・2

SD1はE区南端部、東斜面に位置し、B区腰曲輪の土塁2の直下、標高60.03mで検出した。SD2は、SD1の5m直下、標高55.30mで検出した。SD1は、竪堀1の北肩を形成する小尾根を横断して構築されており、E区東斜面を北に延び、通路としての機能も持っていたと思われる。

SD2は調査対象地外の斜面下の方から続く道に繋がっており、さらに竪堀12・13の基端部の上を通り、竪堀17に続く道と繋がっていた可能性がある。

### (6) F区(西斜面部)

調査対象地西斜面に設定した調査区であり、A区曲輪1の直下に位置する。標高63.00m以下の斜面部を対象に調査区を設定した。西斜面の傾斜角は45～55°で急峻である。北西と南西に小尾根があり、谷部が形成されている。西山城跡西斜面の中で唯一、谷状地形を呈する場所である。検出された遺構は竪堀5条であり、平面プランU字形を呈する竪堀7・8と、竪堀間に小規模な平坦面が付く竪堀8～10が、標高61.00～63.00m、詰である曲輪1から比高差7.00～9.00mの斜面に構築されている。平面プランがU字形を呈する竪堀7・8は西山城跡の竪堀の特徴の一つで、各小尾根の基端部に構築されている。竪堀8～10は谷部に連続して構築されており、一部に崩落が認められる。

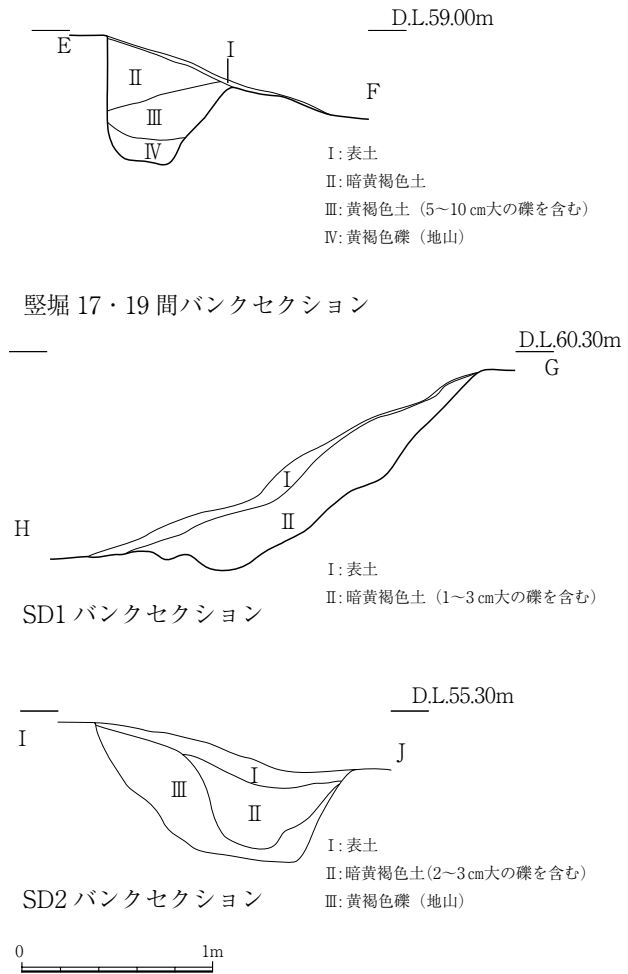


Fig.49 E区バンクセクション図



Fig.50 F区遺構配置図

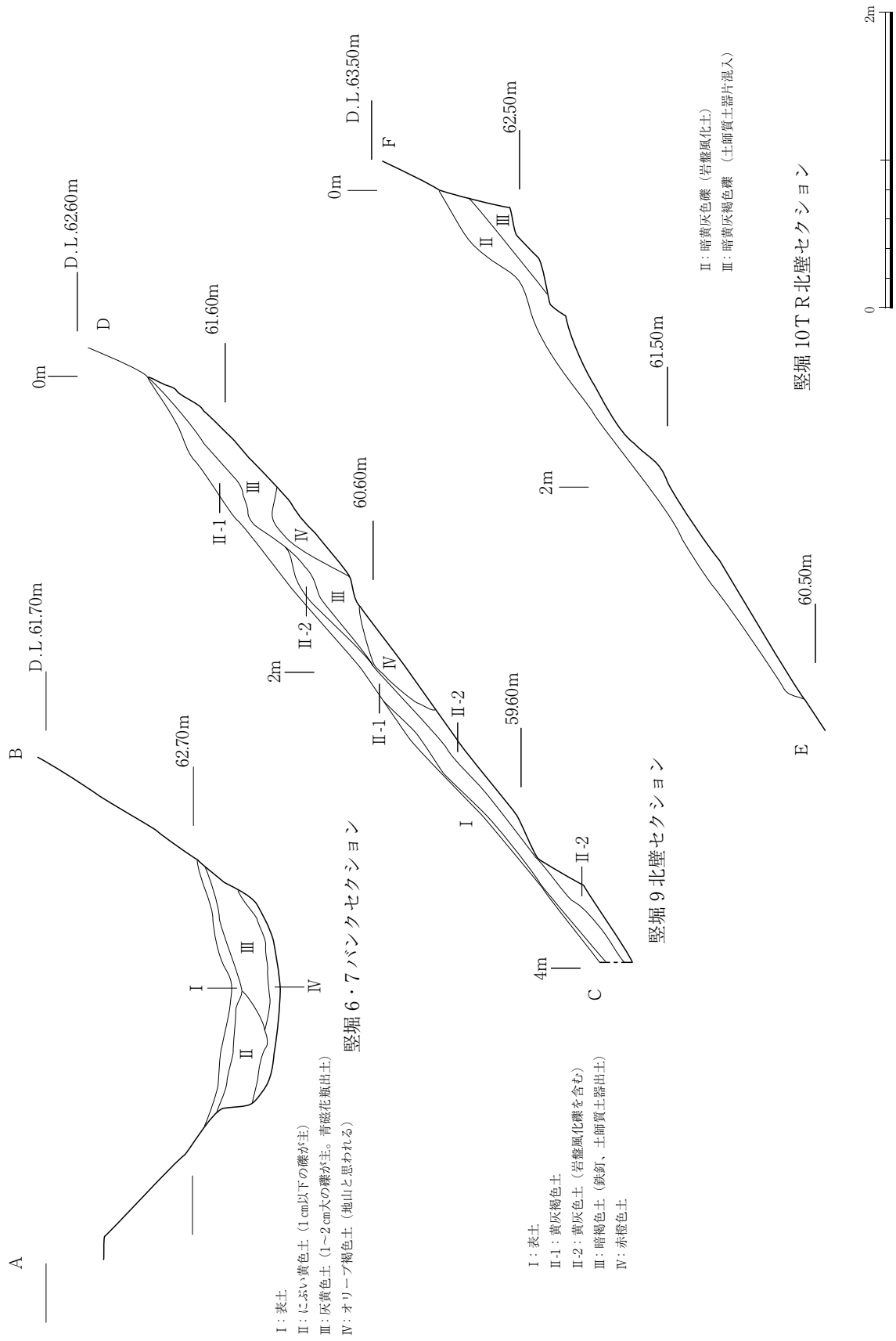


Fig.51 F区竖堀セクション図



### 1) 竪堀6・7

F区北端部、西斜面に位置し、曲輪1の北東部張り出しの直下に構築される竪堀である。北東に延びる小尾根上の起伏のあるところに構築されており、平面プランはU字型を呈する。北東側に延びる竪堀7は、延長14.00m、上端幅2.50～3.90m、底面幅1.10～1.90m、深さ0.33mを測る。南西側に延びる竪堀6は、延長14.80m、上端幅1.90～4.00m、底面幅1.00～1.50m、深さ0.33～0.38mを測る。基端にあたる連結部分は上端幅3.30m、底面幅1.00～1.60m、深さ0.33mを測る。

横堀状に連結する部分は上端幅3.40m～4.60mを測り、底面幅は1.35mを測る。地山埋土は、A区曲輪1からの流れ込みと考えられる灰黄色礫(Ⅲ層)が堆積しており、地山は岩盤である。Ⅲ層中から奢侈品の青磁の花瓶が出土した。

### 2) 竪堀8

F区中央部、西斜面に位置し、曲輪1直下、標高62.00m、比高差8.00mの斜面に配置された竪堀である。竪堀8の北側には竪堀9・10が連続して構築されており、それぞれの竪堀の基端部には小規模な平場が伴う。規模は延長3.52m、上端幅1.88～2.22m、底面幅は0.60～1.44mを測る。北側の竪堀9との間は、5.20mを測り、基端部の平場は長さ2.50m、幅0.60mと小規模である。竪堀の裾は傾斜がきつく、一部崩落しているものと思われる。

### 3) 竪堀9

F区中央部、西斜面に位置し、曲輪1直下、標高62.00m、比高差8.00mの斜面に配置された竪堀である。竪堀9の両側には竪堀8・10が連続して構築されており、それぞれの竪堀の基端部には小規模な平場が伴う。規模は延長4.62m、上端幅1.88～2.24m、底面幅は1.48～1.52mを測る。北側の竪堀9との間は、6.50mを測り、基端部の平場は長さ3.80m、幅0.80～1.00mを測る。竪堀の裾は傾斜がきつく、一部崩落しているものと思われる。

### 4) 竪堀10

F区中央部、西斜面に位置し、曲輪1直下、標高63.00m、比高差7.00mの斜面に配置された竪堀である。竪堀10の南部には竪堀8・9が連続して構築されており、それぞれの竪堀の基端部には小規模な平場が伴う。規模は延長6.62m、上端幅2.00～2.40m、底面幅は1.32～1.52mを測る。北側の竪堀7との間は、10.80mを測り、中間に長さ4.30m、幅1.20～1.50mの平場がある。平場上面で曲輪1からの流れ込みと考えられる土が堆積しており、備前焼の甕片が集中して出土した。竪堀の裾は傾斜がきつく、一部崩落しているものと思われる。

## 第2節 出土遺物

西山城跡から出土した遺物は総点数3,227点(破片数)であり、県内で発掘調査された小規模な城郭と比較しても量的、内容的にみて大きな成果となった。出土遺物の内容は土師質土器、瓦質土器、備前焼、貿易陶磁器、鉄製品、銅製品、古銭、石製品であり、中でも貿易陶磁器類がまとまって出土している。また、鉄犀や羽口など鍛冶に関連するものも出土しており、一定の生産活動が山上で行われていたことが判明した。出土遺物の中で貿易陶磁器(中国製品)の占める割合が多く、城館クラス以上の遺跡でしか出土がみられない青磁花瓶など県内で初めて出土した成果もあった。これらの遺物の大半は主郭のA区(曲輪1)、B区(曲輪2)からの出土であり、各曲輪の機能時期及び使われ方を知る上で貴重である。ここでは、器種ごとに分類し、その内容について述べる。

### (1) 土師質土器

出土遺物の中で占める割合(破片数)が二番目に多いのが土師質土器である。破片数で換算すると895点出土しており、出土遺物の27.7%を占める。内訳は供膳具、煮炊具、暖房具である。

#### 1. 供膳具

小皿・皿・杯に分類する。

##### 1) 小皿(Fig.52No.1～20)

小皿は、口縁部が開くAタイプ(1～11)、口縁部が短く直立するBタイプ(13～20)の2タイプが認められる。12は耳皿である。4・6・8・18は内面及び口唇部から外面の一部にかけてタールが付着しており、灯明皿としての使用が認められる。

##### 2) 皿(Fig.52No.21～Fig.53No.43)

皿は、ロクロ成形(Aタイプ)のものと手づくね成形(Bタイプ)のものがある。ロクロ成形のものは、器形・調整で三種類に細分した。体部が直線的に開くA-1タイプ(21・22)、底部に段を持ち、体部が内湾するA-2タイプ(21～29)、体部が内湾し、底部円柱造りのA-3タイプ(34～41)がある。A-3タイプは精選された胎土で褐色を呈する。A区曲輪1、西山城跡の「詰」に相当する部分で34～39・41が冑の前立と考えられるものと供伴して一括で出土した。30～32は色調が白色系を呈し、京都系土師器皿のGタイプ(伊野分類)と同形態である。体部中位から口縁部にかけて内湾する。また、42・43も白色系を呈する京都系手づくね皿であり、底部に指押さえ痕が顕著である。これらの白色系土器の胎土にはチャートが含まれており、京都系の影響を受けて在地で製作されている物をBタイプとした。

##### 3) 杯(Fig.53No.44～Fig.54No.68)

杯は体部が直線的に立ち上がり、器高の深いものを杯とした。形態的には器高が低く皿と呼べるものもあるが底径・口径指数から杯に分類した。全てロクロ成形、回転ナデ調整、回転糸切りである。底部から段を持ち、体部中位から内湾気味に立ち上がる44～58のタイプと、底径が6.6cm以上を測り、口径の開きと差があまりないタイプ59～61がみられる。62～67は体部上位が欠損しており、形状が不明であるが、底径と口径の差が少なく、器高が深くなるタイプと考えられる。68の胎土は皿A-3タイプと同じで、底部外面は回転糸切り、円柱づくりによるものである。

## 2. 煮炊具

土師質土器の煮炊具は、羽釜が主体を占める。口縁部直下に短い鐳が付き、体部外面に叩き目(平行)が認められるAタイプと、口縁部外面にナデによる凹線が顕著であり、直下に水平な鐳が付くBタイプがある。69はBタイプの口縁部に焼成後の穿孔が認められる。70は鐳部分が丸くおさまる。内面にヘラ状工具によるナデ、外面鐳上位に沈線が認められる。

### 1) 羽釜A (Fig.54No.71～Fig.55No.77)

形態的に従来、播磨型と呼ばれているタイプの羽釜である。71の口縁端部は内傾する面を成し、断面三角形を呈する。口縁部内面にはハケ調整が施される。72の鐳は退化し、口縁部との境が明瞭でなくなる。体部外面の鐳直下のナデの幅も広い。73・74は断面三角形の短い鐳であり、器壁は薄い。75～77の口縁部は内傾し、鐳の形態は断面四角形を呈する。

### 2) 羽釜B (Fig.55No.78～83)

形態的に従来、瓦質の河内・和泉型と呼ばれているタイプの羽釜である。78・79の口縁端部は、外側にやや拡張された面を成す。摘むようにナデ調整が施され、口縁部外面の凹線も明瞭である。鐳は端部がやや上方に反るように調整が施される。胴部外面には横位のヘラ削りが施され、内面はハケ調整が施されている。器壁は薄い。80～83も基本的な調整は78・79と同じであるが、口縁端部の外側への拡張、及び胴部外面ヘラ削り、内面ハケ調整が簡略化されてくる。それに起因し、器壁も厚みを帯びる。胎土はいずれもチャートを含む。

## (2) 瓦質土器

瓦質土器は火鉢・風炉が出土している。破片数で換算すると66点が出土しており、出土遺物の2%を占める。

### 1) 火鉢 (Fig.56No.84～90・Fig.57No.96・97・Fig.58No.101～104)

84は透かし窓が付き、口縁部は内傾する。86～88の口縁部は内側に拡張され端部は水平な面を成す。89は透かし部の上位は欠損している。90は底部は幅4.0cmの平らな脚が付く。96は直立気味に立ち上がり、口縁端部は僅かに外方に肥厚する。口縁部外面に菊花スタンプ紋間に縦方向に3条の沈線が施される。97は内湾し、口縁端部は内傾し面を成す。100～101は方形の火鉢であり、100は底部片、それ以外は口縁部片である。口縁部は内側に水平に拡張され、端部は平らな面を成す。外面は2条の突線間に唐草文が施される。103以外は完全な還元焼成であり、内面にヘラか板状の工具で横位のナデ調整が施される。唐草文は連続しない。103は酸化焰焼成で焼成は不良である。連続する唐草文が施される。

### 2) 風炉 (Fig.57No.91～95)

91～95は風炉の口縁部片である。いずれも口縁部は直立し、端部は外方に拡張され、端部は水平な面を成す。外面には断面三角形を呈した格子状の刻みが施される。95の胴部には口縁部直下に梅花風の透かしが施される。

### 3) その他 (Fig.57No.98・99)

98・99は鉢と考えられる。98は口縁部が横方向のナデにより外面が凹む。端部は上方に尖り気味

に仕上げ、外傾する面を成す。体部内面には播り目として細かい単位の条線が施される。99は口縁端部内側に断面三角形の粘土帯が貼付され、端部は水平な面を成す。いずれも酸化焰焼成で焼成は不良である。

### (3) 備前焼

出土遺物の中で最も多く出土したのが備前焼である。破片数で換算すると1089点、出土遺物の33.7%を占める。播鉢、壺、甕が出土している。

#### 1) 播鉢 (Fig.59No.105～Fig.62No.127)

105・108・109は口縁部が内傾し、端部は面を成す。口唇部は尖り気味に仕上げ、口縁部下端は外方に突き出す。7～8条を基調とする条線が施される。108・109は胎土にチャートが含まれる。106・107は口縁部が上下に拡張され、端部は僅かに面を成す。105は竖堀18、106は竖堀11からの出土である。110・114は口縁部が内傾し、口縁部下端がやや垂下する。口唇部は尖り気味に仕上げる。110は7条の条線が口縁直下まで施された後、斜状の条線が施される。111～113の口唇部は内傾する面を成す。水肥した粘土で、1mmの砂粒を含む胎土であり、器壁は薄く、特に内面の回転ナデ調整痕が明瞭である。115・116はB区曲輪2の中央部、SB4の検出面で出土した。4条から5条単位の条線が口縁下端まで施される。116は酸化焰焼成で、赤灰色を呈する。117は口唇部まで条線が施される。118～124は、水肥された粘土で、胎土に角礫は含まない。器壁が薄く、体部中位から外反する。118・120の口縁部は丸みを帯び、口唇部は内傾する面を成す。口縁外面の凹線も明瞭であり、全体的に細かい単位の回転ナデ調整痕が明瞭である。121は内底部に直径5mm前後の研磨痕が認められ、二次的に転用されたものと思われる。122・123の口縁部は上下に拡張され、口唇部は面を成す。123は酸化焰焼成。124・125は10条単位の条線が放射状に施される。124の胎土は水肥した粘土であり、125の胎土には5～8mmの角礫を含む。126・127は体部片であり、全体の形状は不明であるが、内面の条線が交差する。胎土には3～5mmの礫を含む。

#### 2) 壺 (Fig.63No.129～132・135)

129～132は小型壺であり、頸部から口縁部にかけて僅かに外反する。口縁端部は丸く収め、玉縁状を呈する。135は壺の胴部片であり、胴部上位から中位にかけて平行と波状の櫛描きの条線が施される。

#### 3) 甕 (Fig.63No.133・134・Fig.64No.136～Fig.68No.159)

133・134は水屋甕の口縁部と考えられる。口縁部は短く立ち上がり、端部は外側に短く拡張され面を成す。136～138は甕の底部片である。136・138の外面は板かへら状工具によるナデ調整が施される。137は内外面ともハケ調整が施される。いずれも、外面の底部脇は横位の板かへら状工具によるナデ調整が施される。138の底部脇には1条の沈線が認められる。139～142は甕の口縁部片である。139の口縁部は外側に短く折り曲げ、玉縁状を呈する。140・141の口縁部は短く立ち上がり、外面は平たい面を成す。143～148も甕の口縁部である。143は竖堀11から出土した。口縁部は内傾し、外面は平らな面を成す。144は粘土を外側に折り曲げ、幅の広い縁帯を呈する。145・147の口縁部は短く立ち上がり、断面が方形に近い形状を呈する。148は口縁部を外側に折り曲げ、丸く収め玉縁状



を呈する。胴部外面に板状工具によるナデ調整が施される。149は豎堀11からの出土である。口縁部は玉縁状を呈し、胴部外面にはヘラで描かれた刻書がみられる。150はやや肩部が張り、口縁部は短く立ち上がり、外側に折り曲げ薄い縁帯に仕上げる。151は寸胴に近い胴部から口縁部にかけて窄まり、口縁部は短く立つ。口縁外面は面取りが丁寧に施され、断面形が方形に近い形状を呈する。152～157は甕の底部片である。153・154以外は板状工具によるナデ調整が施される。153・154は外面にハケ調整、内面は横位のナデ調整が施される。155は外面の底部と胴部の粘土帯接合部に沈線が入る。156・157の外面はヘラ状工具により縦方向のナデ調整、内面は156は縦方向、157は横方向のヘラ削りが施される。158はA区曲輪1SK1出土の甕である。SK1内部及び検出面周辺の破片接合資料であり、ほぼ完形に近く復元できた。胴部上位がやや膨らみ、口縁部は外反する。口縁端部は外側に折り曲げ、玉縁状を呈する。外面はヘラ状工具により、底部から胴部中位にかけては縦方向、上位は斜上にナデ調整が施される。内面は胴部中位までハケ調整、上位はヘラ状工具によるナデ調整が施される。胴部上位の内外面の一部に研磨痕が認められる。159は底部片であり、底部と胴部の接合部の外面には貼付痕、内面はナデ調整による段が顕著である。外面はヘラ状工具によるナデ調整、内面はハケ調整が施される。

#### (4) 貿易陶磁器

西山城跡では貿易陶磁器が323点出土している。出土遺物全体の10%を占める。内訳は、青磁が最も多く、245点、白磁が27点、青花(染付)が51点である。

##### 1. 青磁

青磁は、皿、碗、盤、花瓶が出土している。皿は稜花皿が中心である。

##### 1) 皿 (Fig.69No.160～Fig.70No.188)

160～169は稜花皿である。底部から腰折れ、口縁部は外反する。口唇部には抉りが施され、内面に波状文が描かれる。160～162は単位の広い3条の波状文が施される。163～168は口縁部内面に3条の波状文と草花文が施される。165は二次被熱により釉が白濁した色調を呈する。口縁部の抉りの単位は簡略化され少ない。171の内底部は露胎、外底中央部は削りにより凸状を呈する。172は口縁内面にヘラ描きによる1条の波状文、体部には櫛描きによる文様が描かれる。見込みは露胎し、蛇ノ目状を呈する。173の内面には文様が施されていない。172・173ともに口唇部の抉りの幅が広い。174・175は口縁部内面に4条を基調とするくずれた波状文が施される。体部内面の波状文は簡略化される。174の内底部は露胎、外底中央部は削りにより凸状を呈し、171と同様の仕上げ方である。175の内底も露胎、胎土は灰色を呈する。176は口縁内面に草花文の一部が認められる。端部の波状文は認められない。177・178の内底見込みには1条の界線が施される。178は法量が他に比べ大きい。177・178ともに外底部は削りにより中央部が凸状を呈する。179は内面の文様は認められない。口唇部の抉りも簡略化が進む。180は底部片である。内底部にロクロ目が認められ凹みの部分に釉が溜まる。外底部の削りも雑である。181～186は青磁皿である。181・185は高台から腰折れ、口縁部は外反する。181の内底部は露胎、外底部にはトチンの痕が認められる。182～184・186は内湾し、口縁部は丸くおさめる。182は全面施釉、尖り気味の高台が付く。内面見込みには界線が認められる。187・188は皿

の底部片である。断面四角形の低い高台が付く。188は内底部見込みに界線、外底部は蛇ノ目釉剥ぎが施される。

## 2) 碗 (Fig.71No.189～Fig.74No.254)

碗は文様で連弁文、雷文、無文の3タイプがみられる。連弁文は連弁の単位で幅広の連弁(BⅡ:191～194)、やや幅の広い連弁(BⅢ:195～199)、幅の狭い連弁(BⅣ:200～210)、細連弁(BⅤ:211～214)に細分される。189・190は碗の底部片であり、189の内底には草花風の文様が描かれる。高台内面まで施釉され、外底は露胎である。二次被熱を受けている。高台は畳付け外面を削り、断面逆台形状を呈する。190は内面見込み全体が露胎で、外面は高台外面まで施釉されている。高台は断面長方形形状を呈する。189・190とも底部に厚みを持つ。191～194は幅広の連弁文碗である。191は片切彫りにより連弁が施される。192は外面には幅広の連弁が施され、内面には草花風の文様が描かれる。外面の連弁には鑄は認められない。193は碗の底部片である。外面には丸ノミ状工具による連弁文が施され、内面には草花風の文様が施される。高台の畳付けは尖り気味に仕上げる。194も碗の底部片であり、断面四角形の低い高台が付く。外面には幅の広い連弁文が施され、見込みには簡略化した捻花風の文様が描かれる。高台外面まで全面施釉である。底部は厚みを持つ。195～199はやや幅の狭い連弁文が施される。195は片切彫りによる連弁文が施される。剣頭と連弁の単位がやや不揃いである。貫入が認められる。196も片切彫りによる連弁文が施される。連弁の単位は揃い、施釉は厚く施される。197は片切彫りによる連弁文が施されるが剣頭と連弁の単位がずれる。内面は細かい貫入が認められる。198・199は片切彫りによる連弁文が施される。200～210はやや幅のある細連弁文であり、剣頭と連弁の単位にずれが生じる。200・201・205は線描きにより連弁が施される。202・203は片切彫りによる連弁文が施される。203は全体的に釉が薄く施釉されており、外面体部下半は削り痕が認められる。208は片切彫りによる剣先連弁文が施される。剣頭が尖り、連弁との単位が揃っている。209は片切彫りの連弁文が施される。内面は無文、釉調は透明感のある釉が薄く施される。211～214は細連弁文碗であり内湾する。211～213は片切彫り、214は丸ノミ状工具による連弁文が施される。213は剣頭が省略され、連弁の単位も疎らである。214の剣頭は線描きによるが、単位は不揃いである。全面施釉されており、外底部は蛇ノ目状に釉剥ぎを施す。底部は厚みを持つ。215は口縁部外面に1条の界線が巡るが雷文帯のくずれと考えられる。216は口縁部内面に2条の垂下する沈線が認められる。217・218は底部片である。高台外面畳付け部分は削り、尖り気味に仕上げる。217は見込みに蓮花風の印刻花文、218は菊花文のくずれたスタンプが施される。219～238は雷文帯が施される碗である。219は口縁部に雷文帯、体部には草花文が施されている。220はくずれた雷文帯が施される。221・222もくずれた雷文帯が施される。223・224は器壁が薄く、透明感のある釉が施される。225・226は外面に雷文帯、内面に草花文が描かれ、透明感のある釉が施される。227は雷文帯の下に幅の広い連弁が施される。228・233・234は外面に二重線の連弁の区画帯が施され、内面に草花風の文様が認められる。231は口縁部の内外面に連弁文、外面体部下半に丸ノミ状工具による連弁の単位が施され、内面は草花文が印刻される。235～237は底部片である。235は高台外面に二重界線、高台内面まで施釉が施される。236は外面体部下半に唐草文が施される。高台内面まで全面施釉される。237は内面見込みに印刻花文、外底部は蛇ノ目釉剥ぎが施され、砂目の付着が認められる。238の器壁は

薄く、口縁部外面には雷文帯、全体的に透明感のある釉薬が施され、貫入が施される。239～254は無文の青磁碗である。外反するタイプ(D I類:239～245)と、内湾するタイプ(D II類:247～250)が認められる。241は外面口縁部直下に1条の沈線が認められ、内面は無文、釉は全体的に薄く施釉される。242は比較的釉が厚く施釉される。243は透明感のある釉が全面施釉される。貫入が認められる。244は底部片であり、高台は逆台形状を呈する。釉は高台外面まで施釉され、畳付けから外底部にかけては露胎である。245は分厚い底部から内湾し、口縁部は外反する。全体的に透明感のある釉が全面施釉、貫入が入る。二次被熱を受けており、外面の一部が剥離している。246は底部片であり、見込みに印花文、透明感のある釉が全面施釉される。247～252は内湾するタイプである。247は釉が厚く施釉される。248・249は二次被熱により釉が融け、白濁した色調を呈する。250は外面口縁部に1条の沈線が認められる。252は分厚い底部から内湾して立ち上がる。外面高台途中まで全面施釉、外底部は露胎である。釉は全体的に薄く施釉されており、外面のヘラ削り痕が明瞭である。252・253は底部片である。253は見込みに界線が認められる。高台の下端を削り、高台外面は凸状を呈する。254は被熱を受け白濁した色調を呈する。外面はピンホールが認められる。

### 3) 盤 (Fig.75No.255～259)

255～259は盤である。255は無文で内外面に細かい貫入が認められる。256・257は内面に丸ノミによる細かい単位の蓮弁が施される。258は体部内面下半に丸ノミによる蓮弁が施される。全面施釉で体部外面は露胎である。胎土には白い角礫を含む。259は口縁部内面に波状文が施され、体部内面には丸ノミ状工具による幅の広い蓮弁文が施される。全面施釉で、外底部は蛇ノ目状の釉剥ぎが施される。

### 4) その他 (Fig.75No.260～263)

260は花瓶の胴部片であると思われる。外面に麒麟か獅子の文様が陽刻される。釉は内外面に施釉される。261は花瓶の口縁部であると思われる。外面には三角形の文様が連続し、内面には斜状の条線が連続する。262は花瓶の把手と考えられる。全面施釉である。263は花瓶の脚の破片と考えられる。外面には葉の文様が陰刻される。これらは奢侈品であり、県内で初めて出土した。

## 2. 白磁

白磁は皿と杯が出土している。

### 1) 杯 (Fig.76No.271)

271は体部外面に八角の面取りが施される。口縁部は外反し、稜花風に仕上げる。体部は内外面施釉され外面の腰折れ部以下は露胎である。

### 2) 皿 (Fig.76No.264～270・Fig.76No.272～277)

口縁部が内湾するタイプ(265・270・273～277)と外反するタイプ(266～269)が見られる。264～266は透明感のある釉が施釉される。267は口縁部にタールが付着する。270は外底部中央は凸状を呈し、高台外面は削り、高台脇まで全面施釉される。272～274はアーチ状の切り高台で内面見込みに目跡を残す。275の見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされる。高台は輪高台であり、畳付けの釉は削り取る。276は内底部見込みに4カ所目跡が残る。釉は外面体部下位まで施釉され、高台部分は露胎である。外底部に菊花状の墨書が描かれる。277も外面体部下半は露胎、外底部に墨の痕跡が認められる。

### 3. 青花

青花は碗と皿があり、皿が主体に出土している。

#### 1) 碗 (Fig.76No.278～284)

278 は口縁部内外面に界線、外面に比較的濃い呉須で花樹文が描かれる。279 は口縁部内外面に界線、外面に唐草文、内面に雷文帯が施される。280 も内面に雷文くずれの文様が施されている。281 は外面にアラベスク文が施される。282 は外面に牡丹唐草、内面は雷文くずれの文様がみられる。283 も外面に大きな牡丹唐草の文様が施される。284 は碗の底部片であり、見込みに密な唐草文が施される。

#### 2) 皿 (Fig.77No.285～291)

皿は289以外、全て外面牡丹唐草、内面見込みに玉取獅子が施される。285と286は高台内側と外底部に砂の付着が認められる。287は外底部中央に釉剥ぎの跡が認められる。289は内面見込みに十字花文が施される。

#### (5) 国内産陶磁器 (Fig.78No.292～303)

292～297・301・302は磁器であり、298～300・303は陶器である。292は花筒の底部である。内面は露胎、外面は型紙刷りが施される。293は碗である。内外面とも型紙刷りが施される。294は皿であり、内面に朱による文様が施される。295は杯であり、高台外面は三重の界線が施される。296は碗であり、呉須の釉調は濃く、外面には草花文が描かれる。297は碗であり、外面には型紙刷りが施される。298の器形は不明であるが花瓶か水差し状の形態のものであると思われる。外面には銅緑釉が施され、体部下半および内面は露胎である。299は碗の底部であり、内面は露胎、高台畳付の部分は釉を削り取る。高台外面に二重界線が認められる。300の器形は不明であるが内面が露胎であり、花瓶状の形態のものであると思われる。外面は二次被熱により釉が白濁した色調を呈する。301は碗であり、外面には葡萄が描かれる。内面は口縁部と見込みに界線、内底部中央に花文が施される。302は花瓶であり、外面には連続する草花文が描かれる。303は陶器の急須であり、灰釉が施されている。

#### (6) 瀬戸・産地不明 (Fig.79No.304～307)

304は褐釉が施された壺の口縁部である。口縁部は肥厚し玉縁状を呈し、下端が少し下方に垂れる。中国産の茶入れ壺であると思われる。305は瀬戸の灰釉瓶子であり、口縁部は短い頸部から立ち上がり、端部は内傾し断面三角形を呈する。端部外面は凹む。内面は粘土帯接合部に指押さえ痕が顕著である。外面は頸部直下の器表面が一部剥離する。306は炆器の壺の胴部片である。把手部が剥離する。外面は褐灰色を呈する。307の胴部外面は凹線状に調整が施される。口縁部は外方に肥厚し、端部は欠損するが断面三角形を呈すると思われる。色調はにぶい赤褐色から褐灰色を呈し、胎土には3～8mmの角礫を含む炆器である。丹波焼きの甕か？



## (7) 土製品 (Fig.79No.308～315)

308～314は管状土錘である。全長3.7～5.0cm、全幅1.5～1.9cm、孔径0.4～0.6cmを測る。出土地点はB区曲輪2の北部、および北側直下の堀切5から出土している。315は羽口である。欠損しており、全体の形状は不明である。

## (8) 石製品 (Fig.80No.306～Fig.82No.333)

石製品は、茶臼と砥石、硯が出土している。316～323は茶臼(下臼)の受皿部である。全て砂岩製であり外面はハツリ痕を残す。内面はミガキが施され、擦痕が顕著である。324～329は茶臼(上臼)であり、324・325は上縁部である。砂岩製で幅は2.2cmを測る。326・327は茶臼(下臼)の臼面部片と考えられる。砂岩製で分画、ふくみ共に不明である。328・329は茶臼(上臼)である。328の臼面は8分画だがふくみは不明である。外面にはハツリ痕を残す。330は茶臼(上臼)である。砂岩製であり、内外面ともハツリ痕が顕著である。331は茶臼(下臼)であり、器高13.0cm、受皿部から臼面までの高さは4.9cmを測る。臼面部は風化しており分画、ふくみ共に不明であるが、受皿部は擦痕が顕著である。外面に荒いハツリ痕を残す。332は砥石である。中砥石であり、全長は一部欠損しており不明であるが9.0cm以上、全幅は7.8cm、全厚4.0cmを測る。直方体を呈し、四面ともに使い込まれており、特に一側辺が研ぎ減りしている。333は石硯である。短冊形の長方硯である。陸部の破片であり、形状は丸みを帯びた楕円形を呈し、縁の高さは低い。石質は頁岩である。

## (9) 鉄製品 (Fig.83No.334～Fig.88No.448・Fig.89No.455)

鉄製品は釘、鎗鉋が出土している。鉄釘は断面が方形に近い角釘であり頭巻釘である。全長が3.0cm以下の334～347、3.5cm前後を測る348～374、4.0cm大の375～395、4.0cm大後半～5.0cm前後、全幅が0.5cm以上を測る396～423、全長が6.0cm大の426～434、全長が7.0～8.0cm以上を測る435～442がある。442は最も長く全長10.0cmを測る。411は断面が平らな長方形を呈し、楔状の鉄製品であると思われる。418は先端が折れ、木質が付着している。443～446は鎗鉋である。443・444は全長5.64～6.75cm、全幅0.90～1.13cm、全厚0.38～0.40cmを測る。445・446は全長9.60～10.45cm、全幅1.60～1.70cm、全厚0.40～0.45cmを測る。これらの鉄釘は西山城跡のE区堅堀12・13間の小規模な平場周辺、およびB区曲輪2の北部、SB3周辺にも集中が見られた。447は不明であるが基部から肥厚し、先端に向かって細くなる。断面形は四角形を呈する。448も不明であるが板状の形状を示す。残存長で6.60cm、全幅2.20cm、全厚0.36cmを測る。455は小札であり、先端に突起が付き、合計八つの穿孔が認められる。

## (10) 銅製品 (Fig.89No.450～454・No.456～461)

450は胃の前立ではないかと思われる。全長19.50cm、全幅5.40cm、全厚0.05～0.14cmを測り、基部は先端が尖っており、上端は半月状を呈する。A区曲輪1の南部で土師質土器皿の一括と供伴して出土し、祭祀的に使用されたものと考えられる。451・452は甲胃の縁金具であり断面は半裁管状を呈する。453は不明であるが薄い板の表裏に突起が付く。454は飾り金具であり、中央に直径0.90cmの

紐孔が付く。表面に彫金が施される。456は鞘の縁金具と考えられ環状を呈する。全長3.25cm、全幅1.90cmを測る。457は鋏である。断面は四角形を呈し、頭巻である。458はしっかりとした鑄上がりで光沢が残る。容器状を呈する。459は小柄であり、中に材質が残る。460は煙管であり吸口部径は0.95cmを測る。461は筭であり胴部中位で折れ曲がる。胴部表面には扇が三つ重なった彫金が施される。

#### (11) 銅錢 (Fig.90No.462～474)

462～471は銅錢であり10枚が出土している。出土地点はほとんどがA区曲輪1で出土している。465・466の洪武通寶、467～469の永楽通寶が比較的多い。464は嘉定通寶であり、裏面に「六」の字が認められる。468は形状や文字の状態が悪いので模鑄錢の可能性はある。470・471は寛永通寶である。472～474は無文錢であり、直径1.26～2.11cmと小さい。

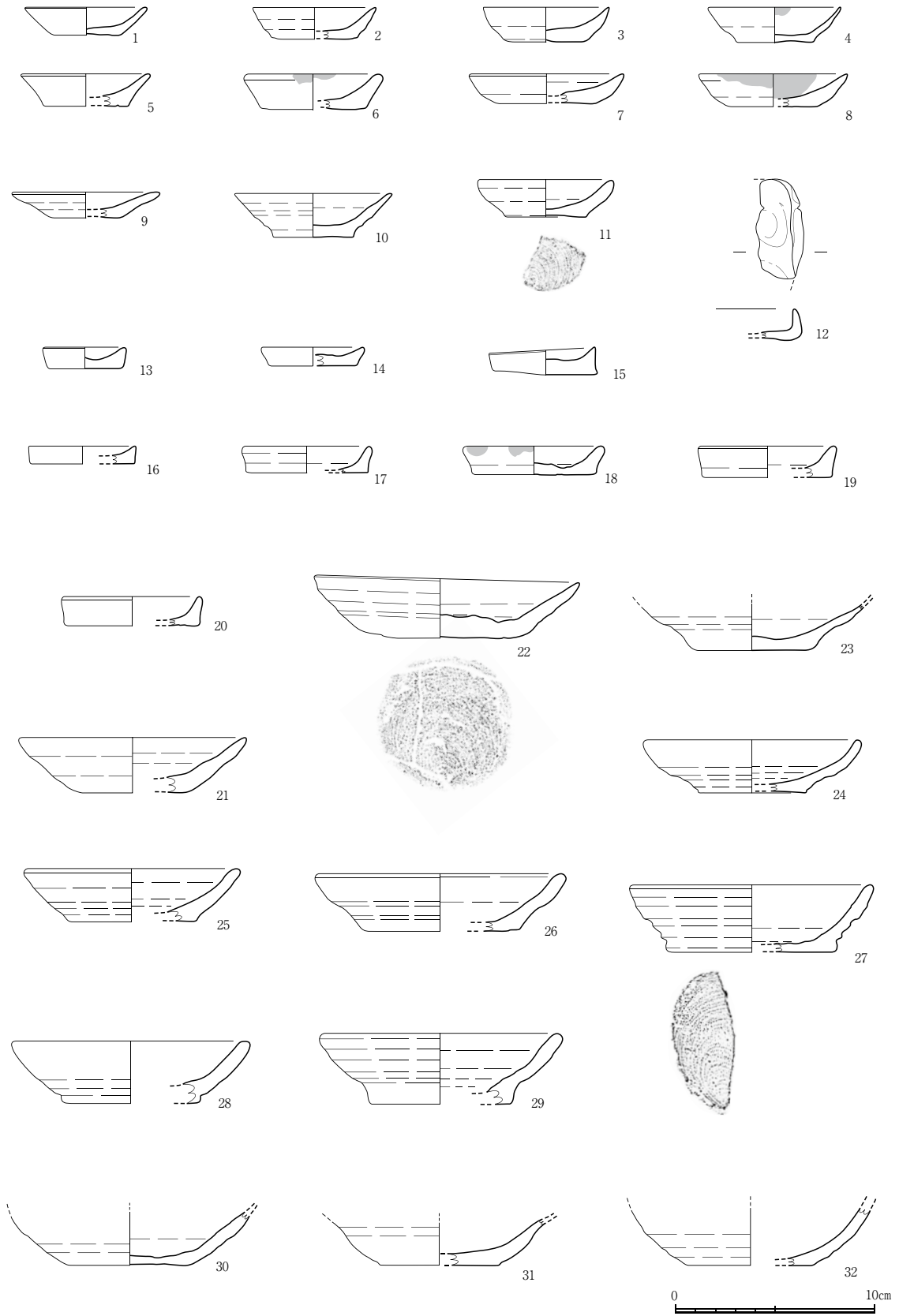


Fig.52 出土遺物実測図1

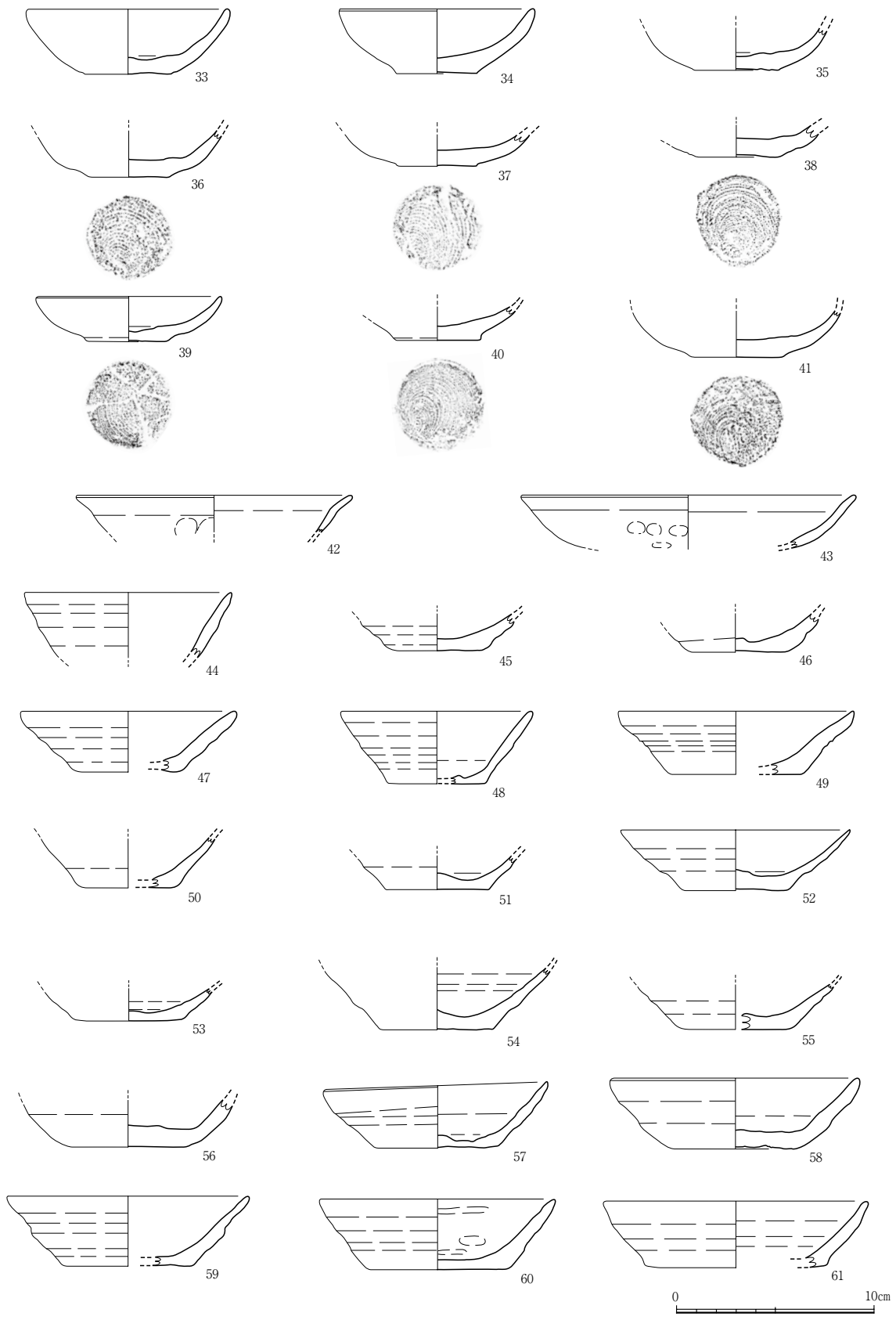


Fig.53 出土遺物実測図 2

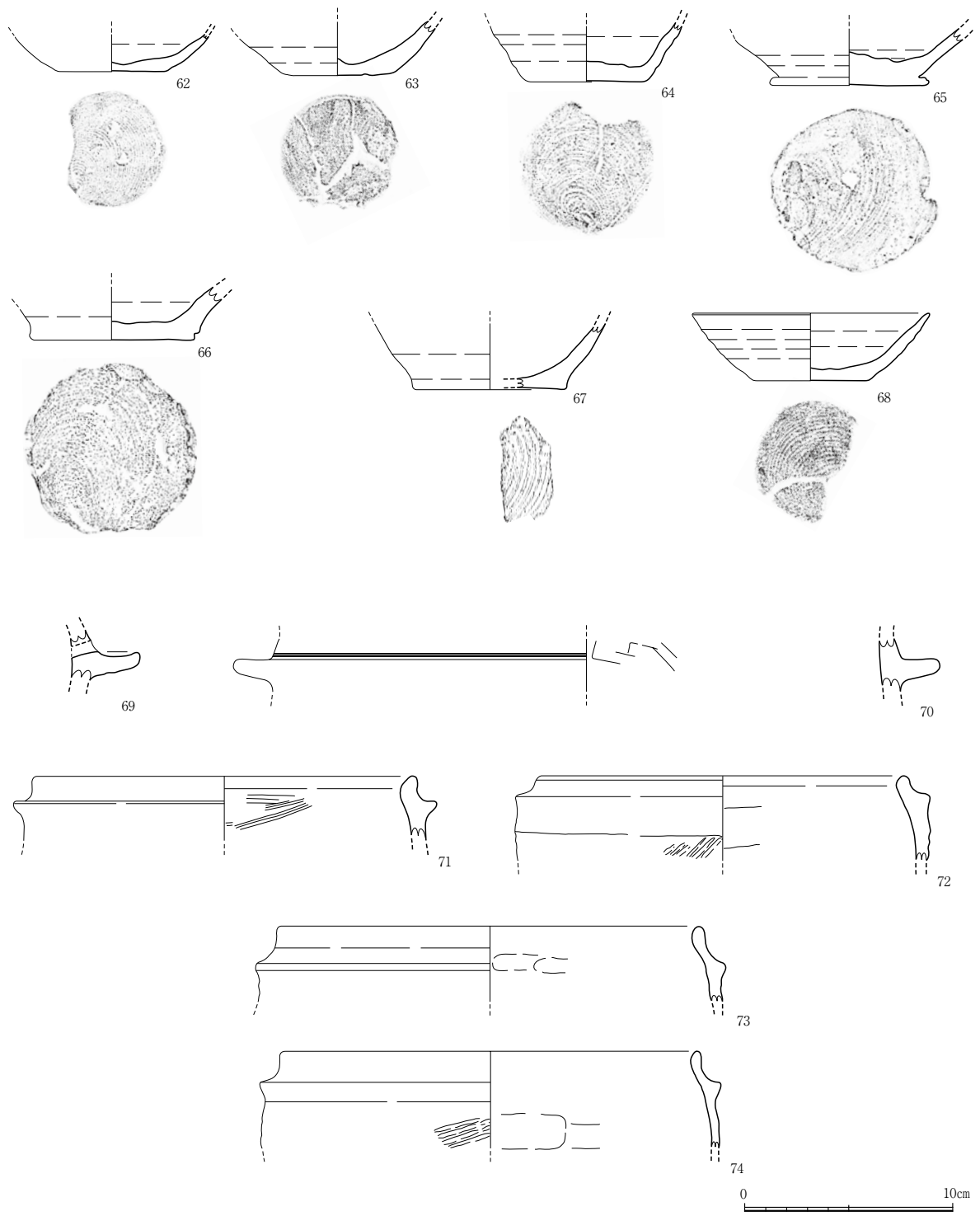


Fig.54 出土遺物実測図 3



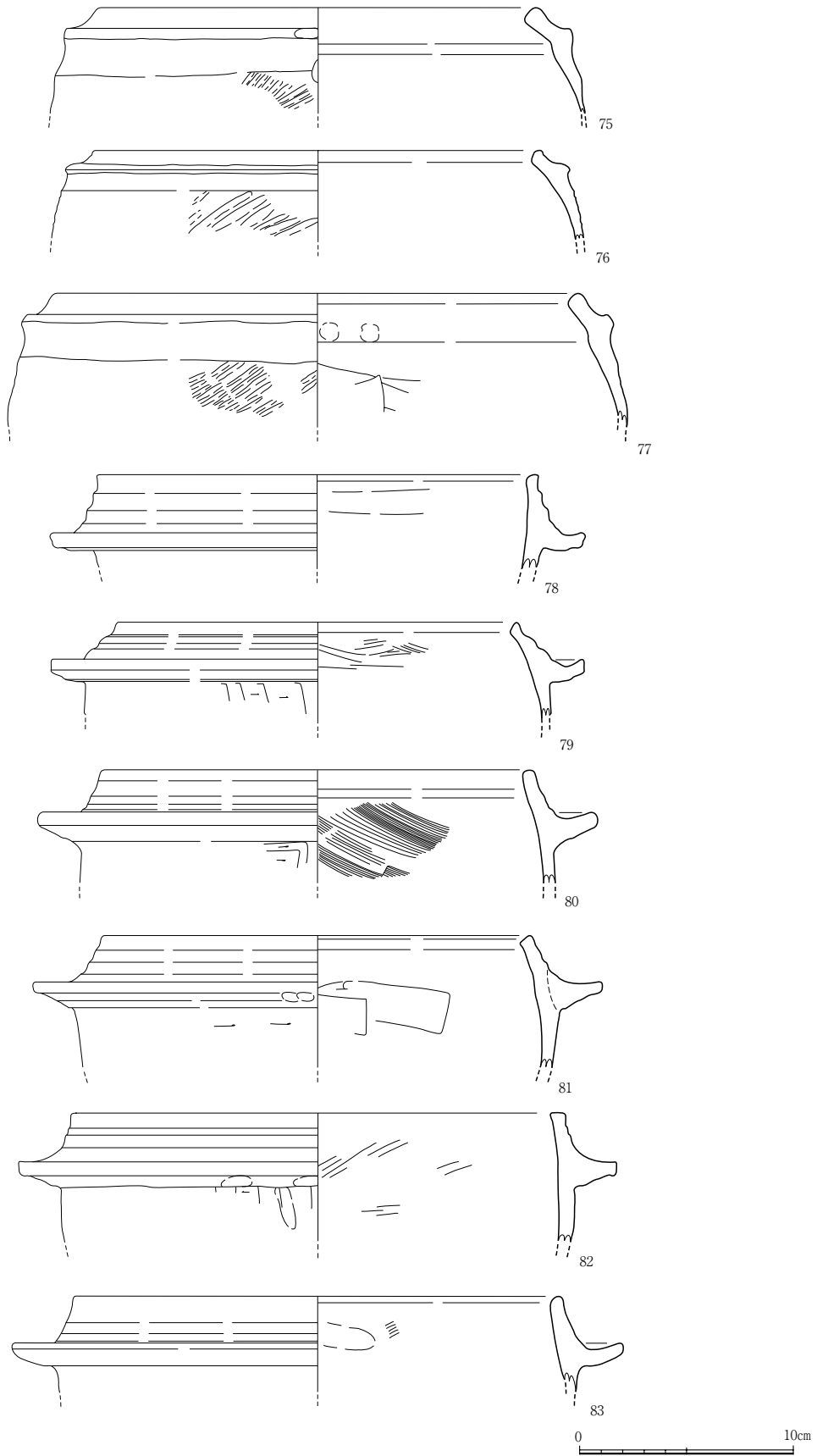


Fig.55 出土遺物実測図4

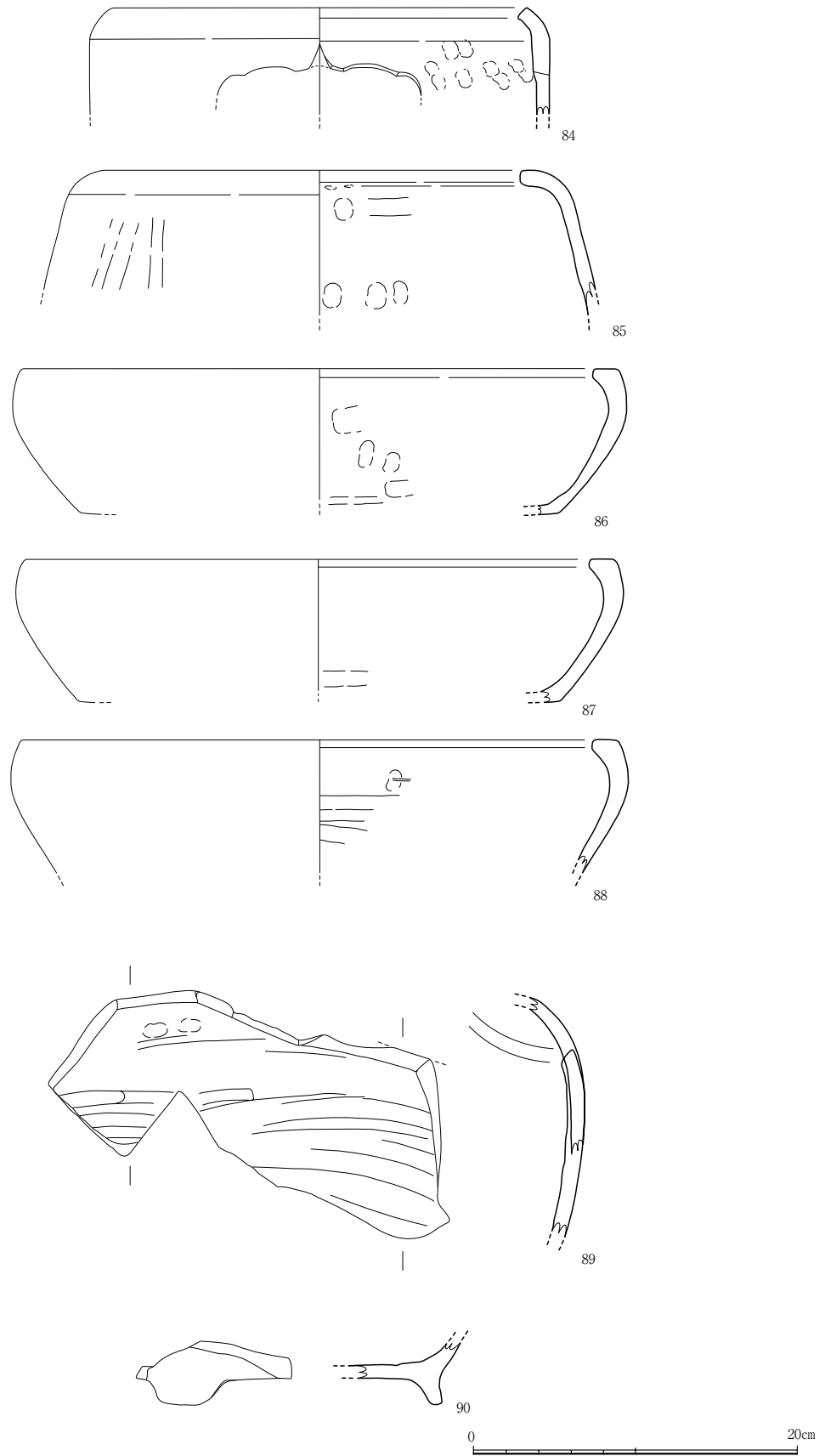


Fig.56 出土遺物実測図 5

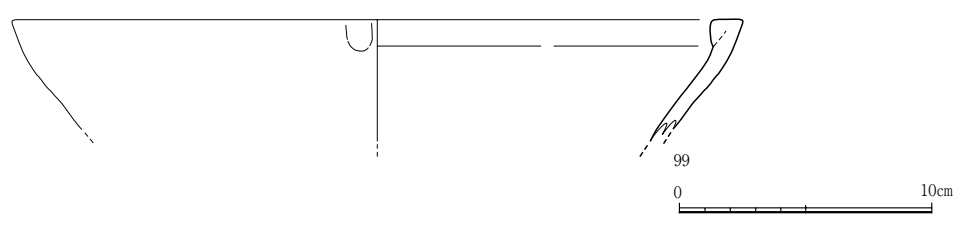
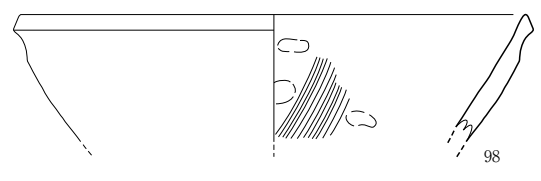
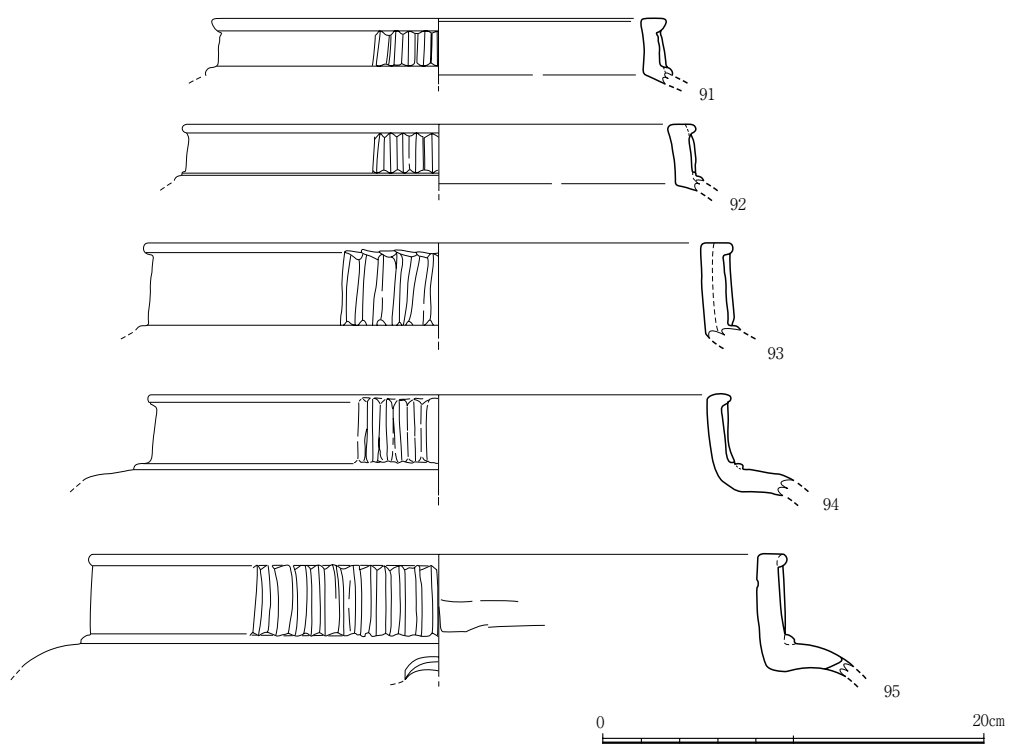


Fig.57 出土遺物実測図 6

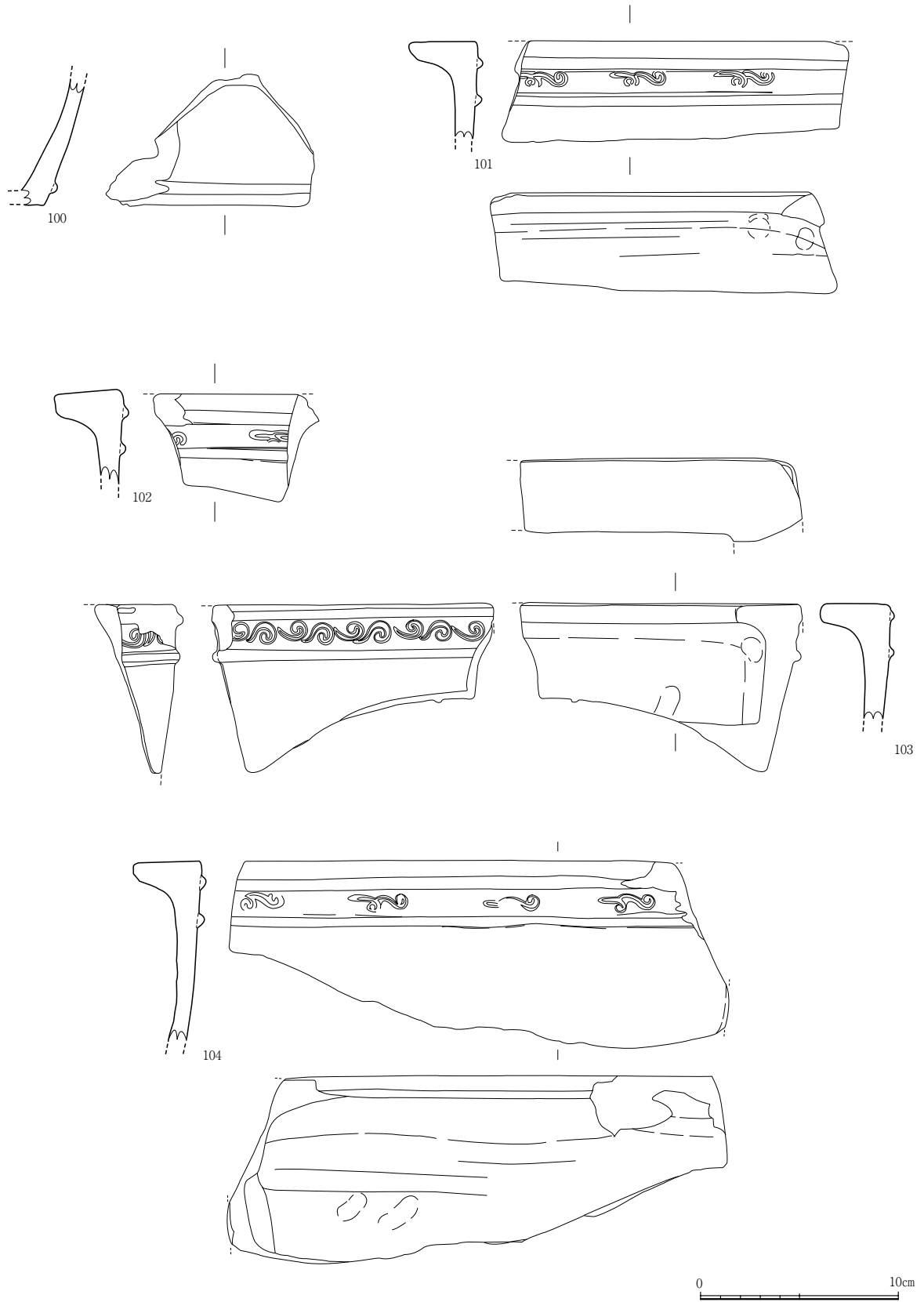


Fig.58 出土遺物実測図7

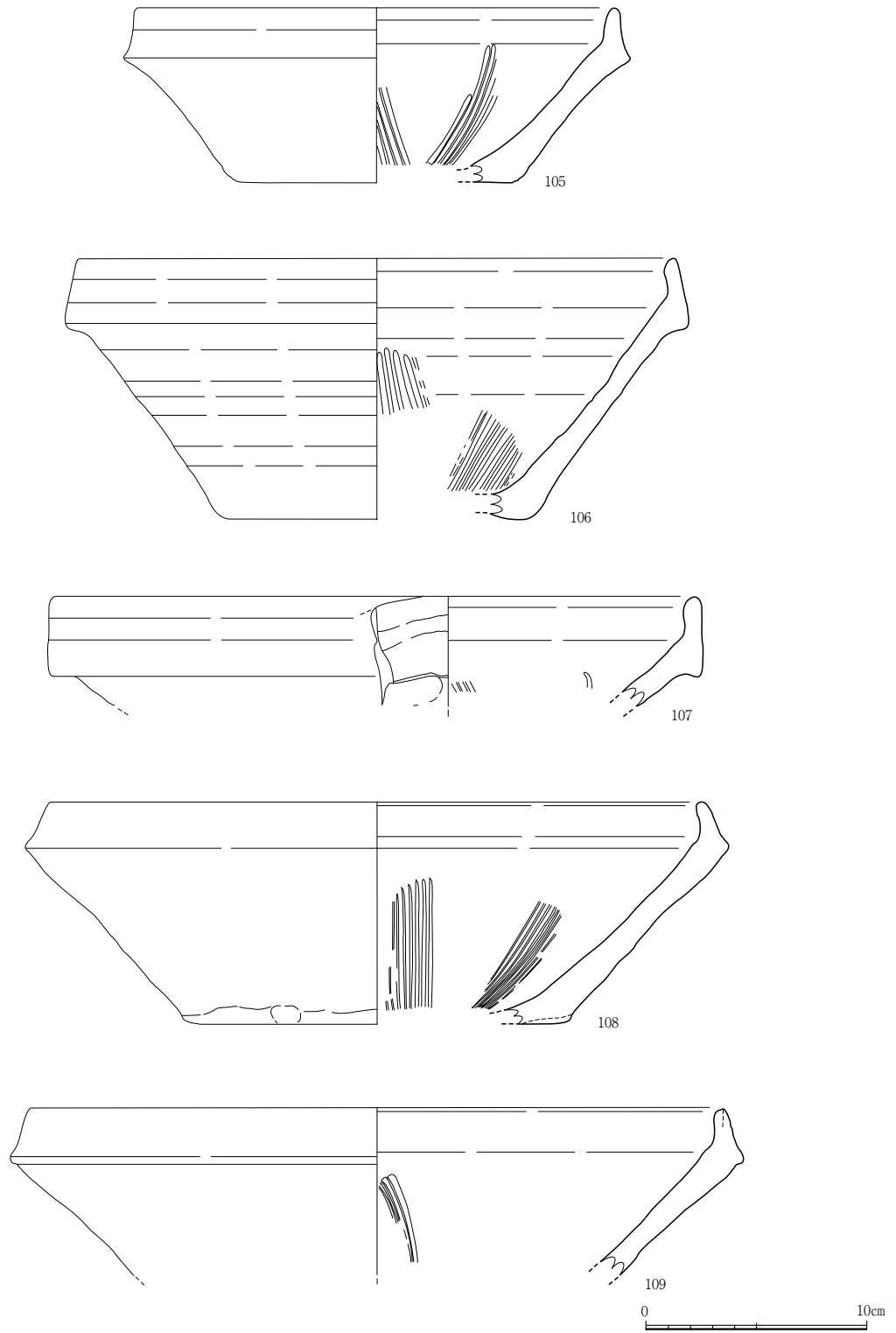


Fig.59 出土遺物実測図 8



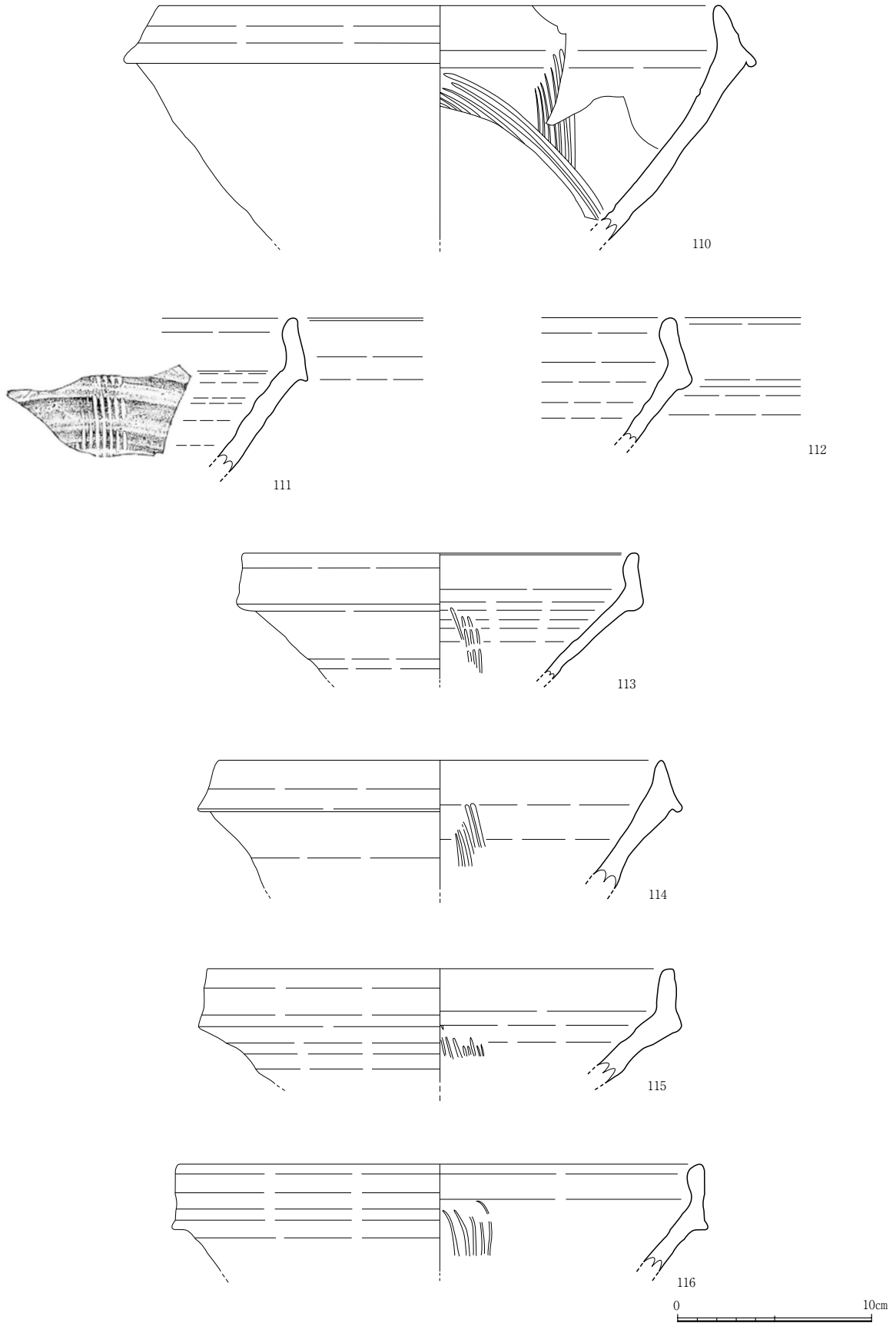


Fig.60 出土遺物実測図9

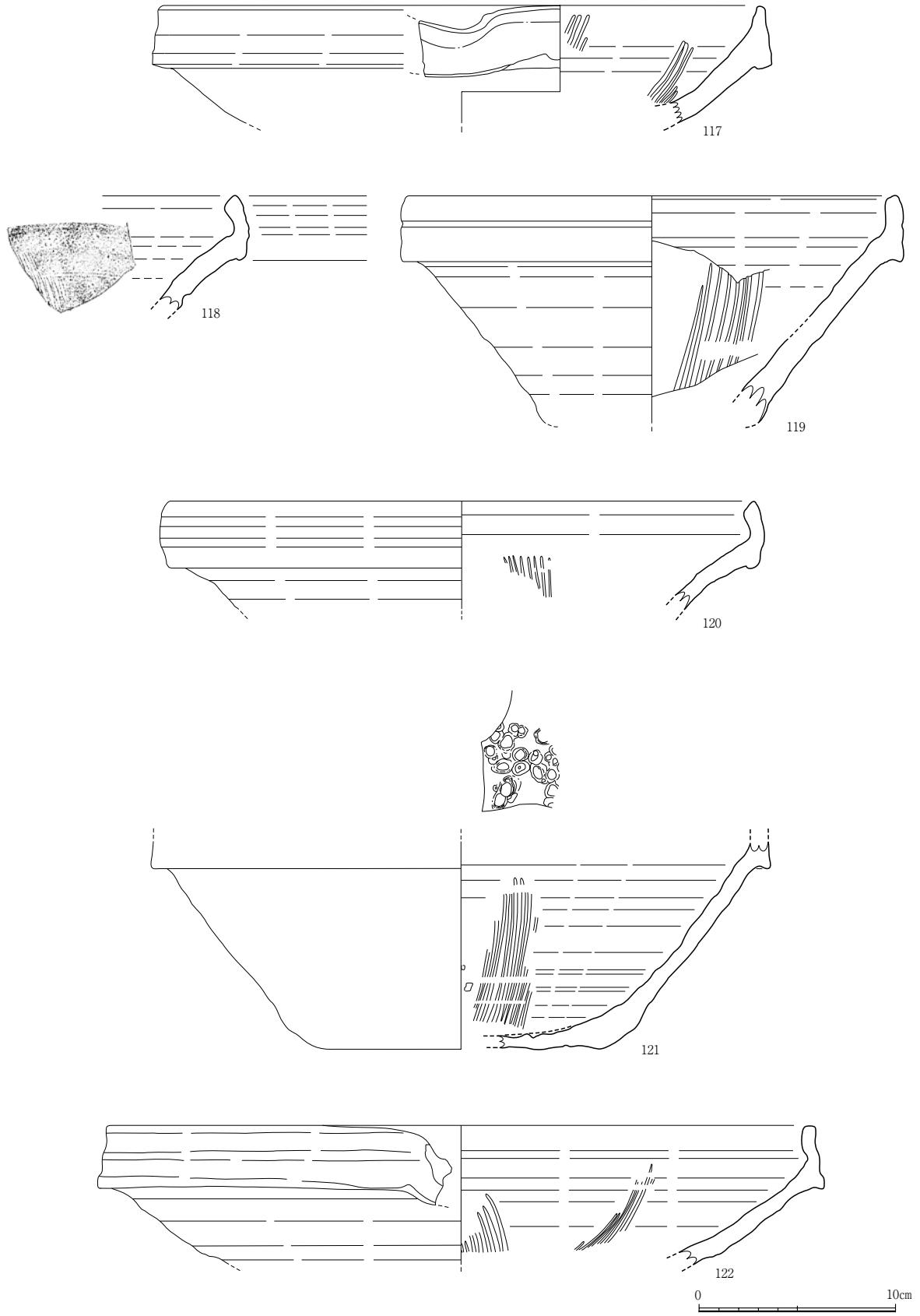


Fig.61 出土遺物実測図 10

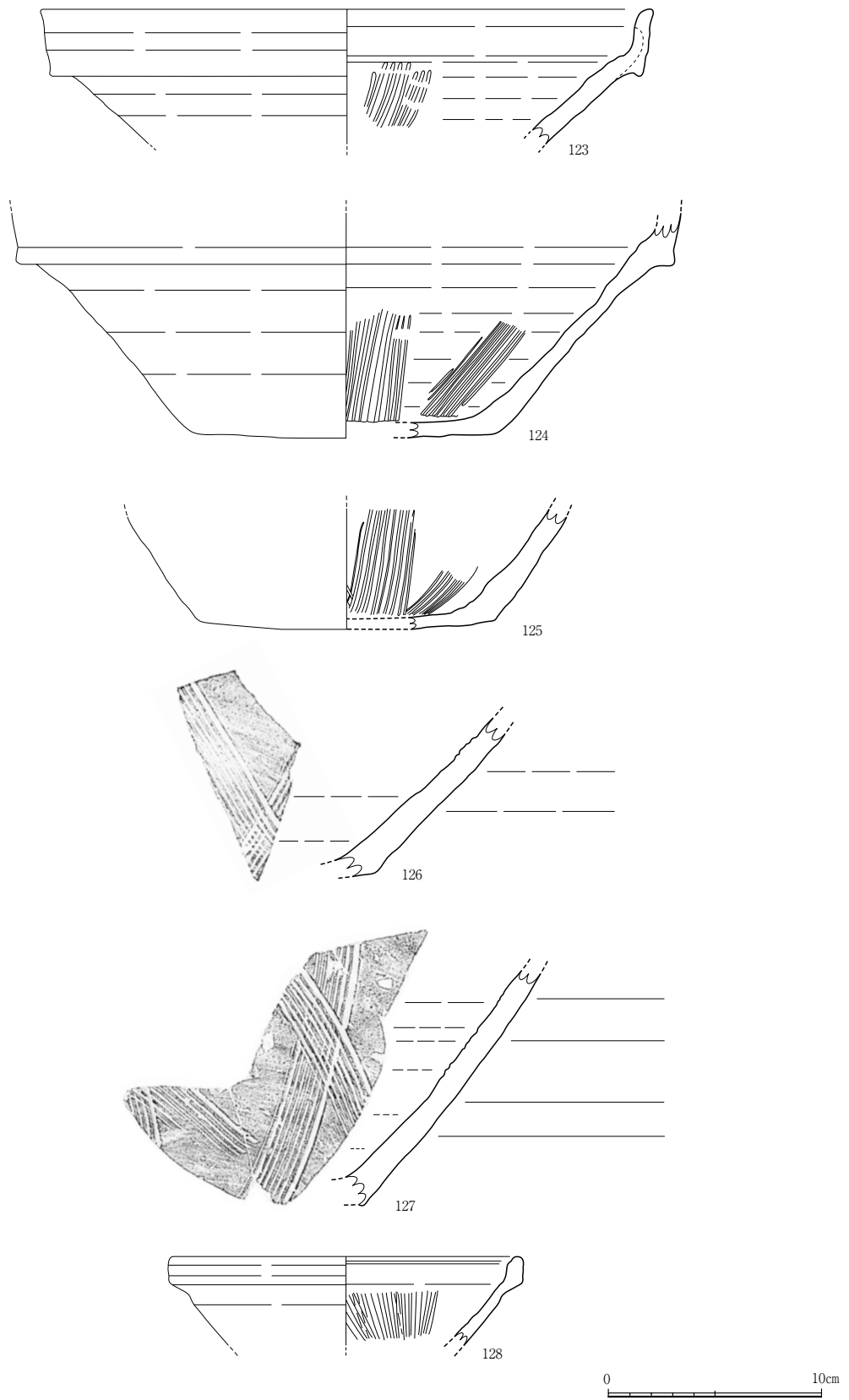


Fig.62 出土遺物実測図 11

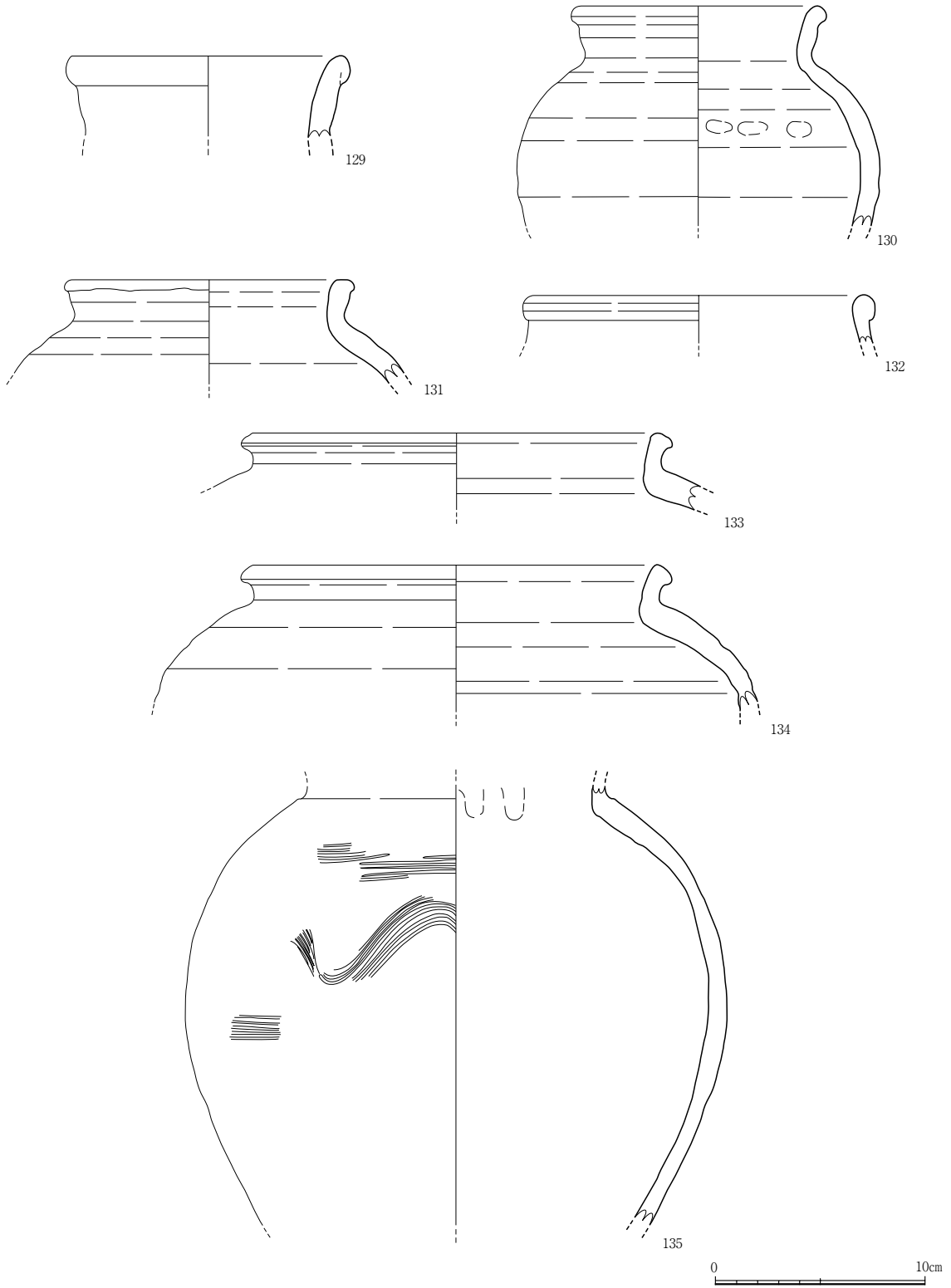


Fig.63 出土遺物実測図 12

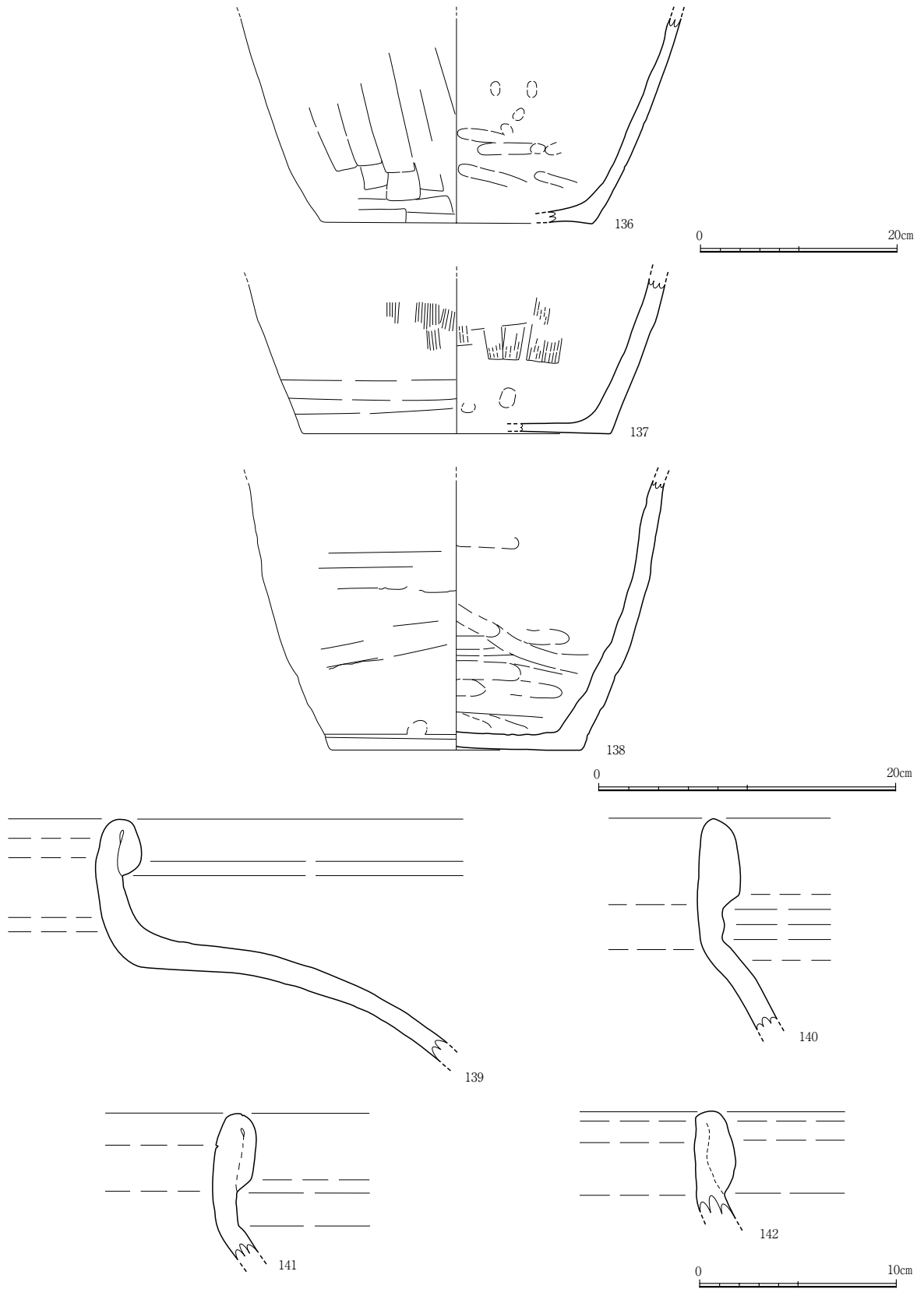


Fig.64 出土遺物実測図 13



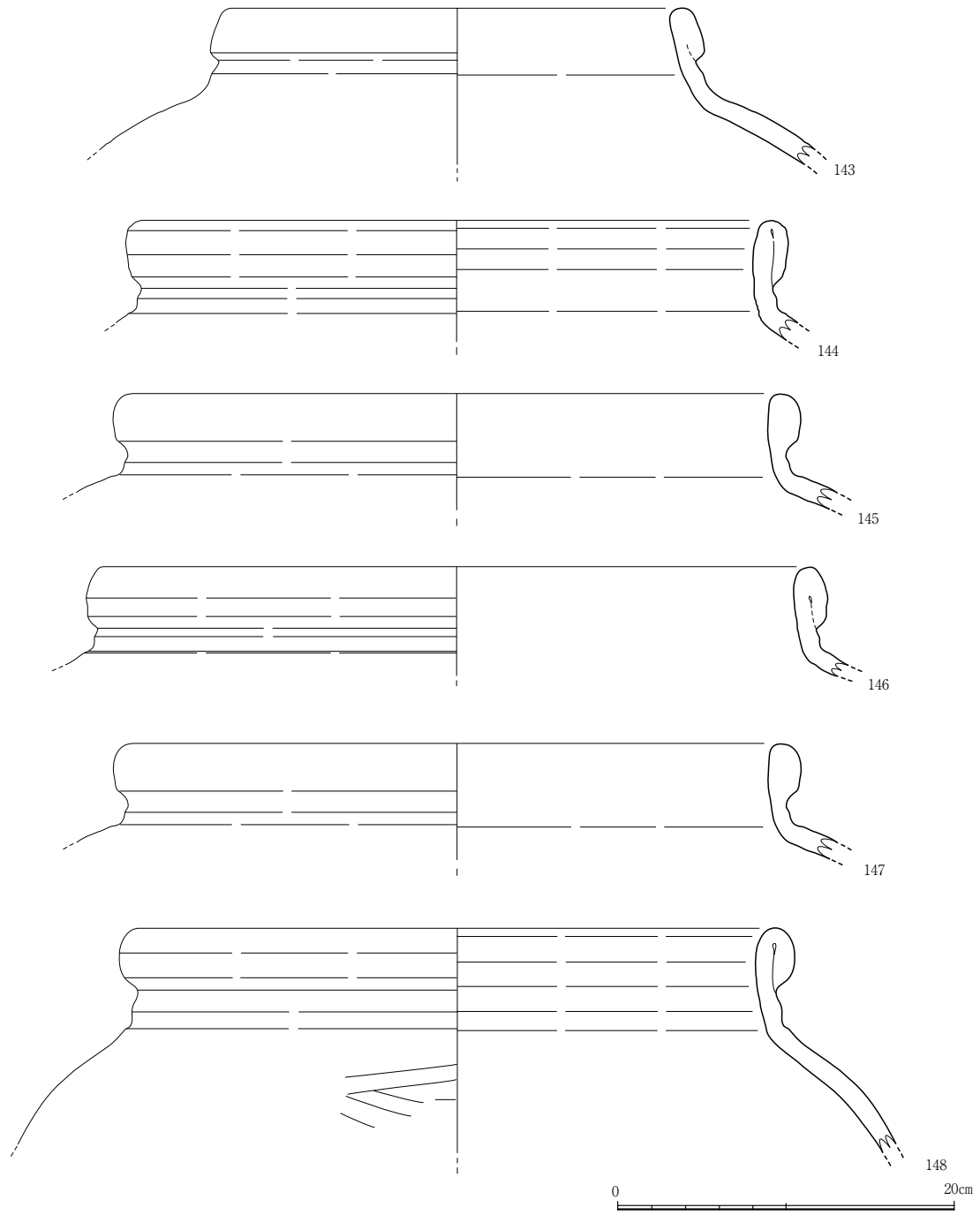


Fig.65 出土遺物実測図 14

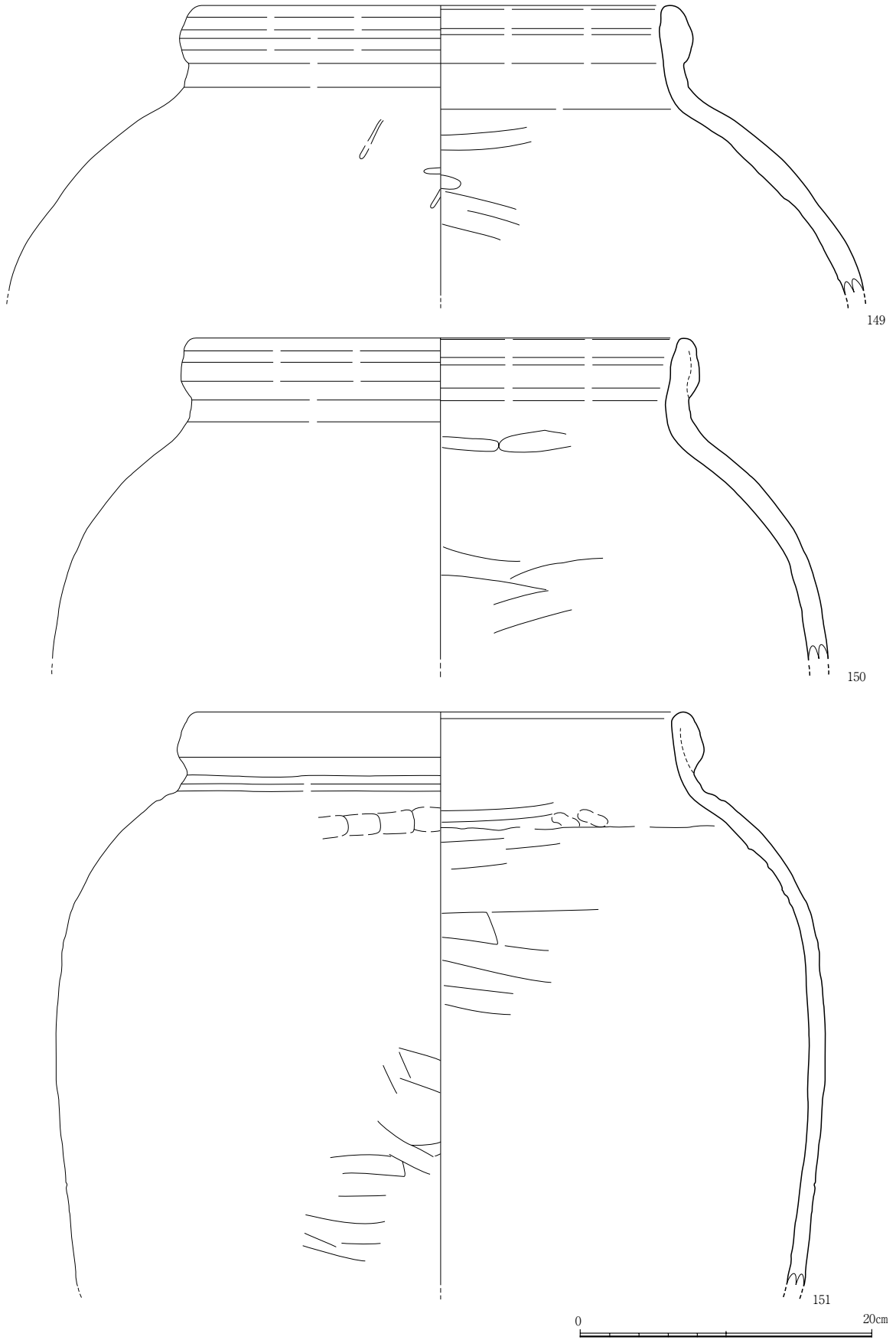


Fig.66 出土遺物実測図 15

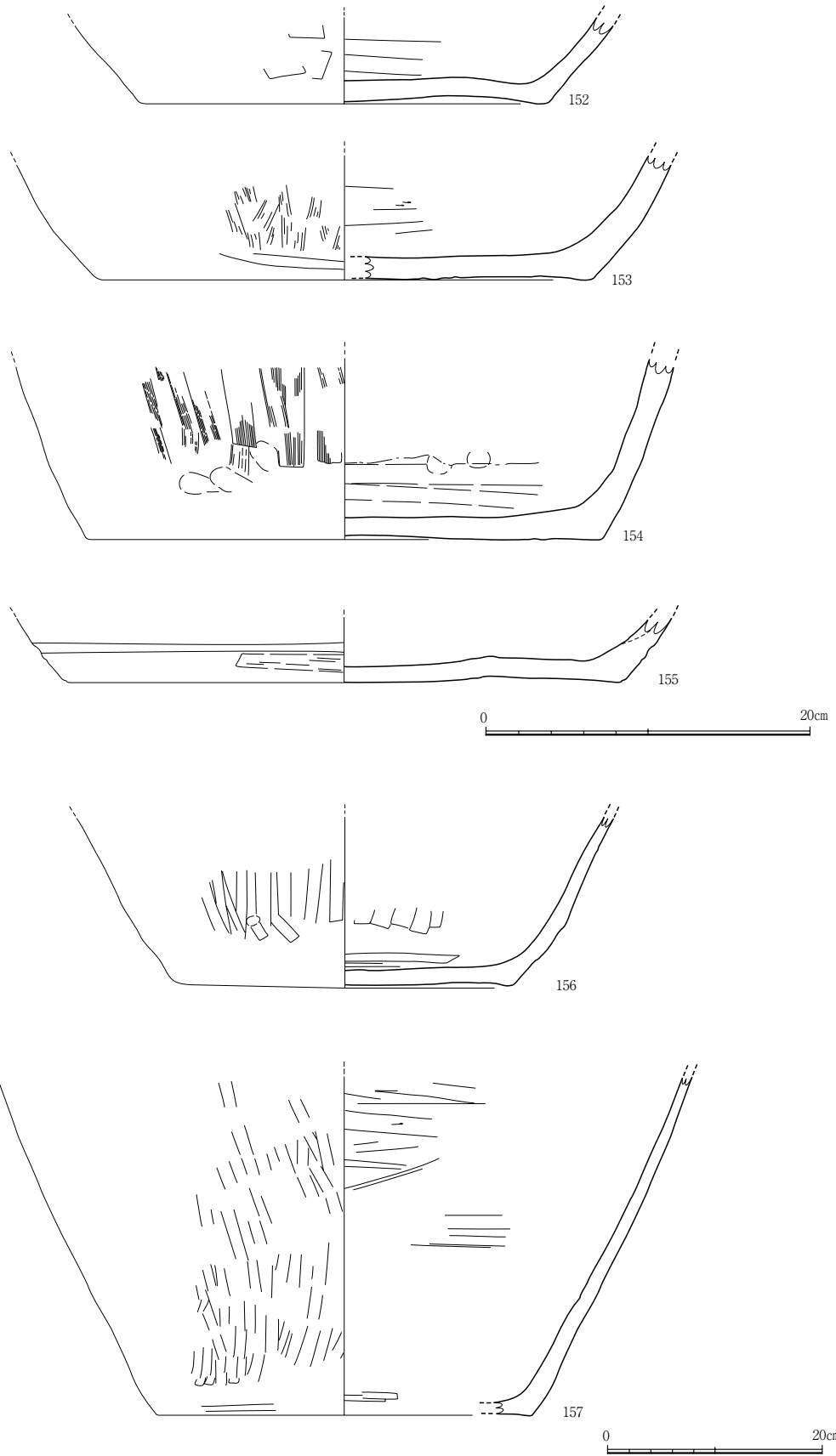


Fig.67 出土遺物実測図 16

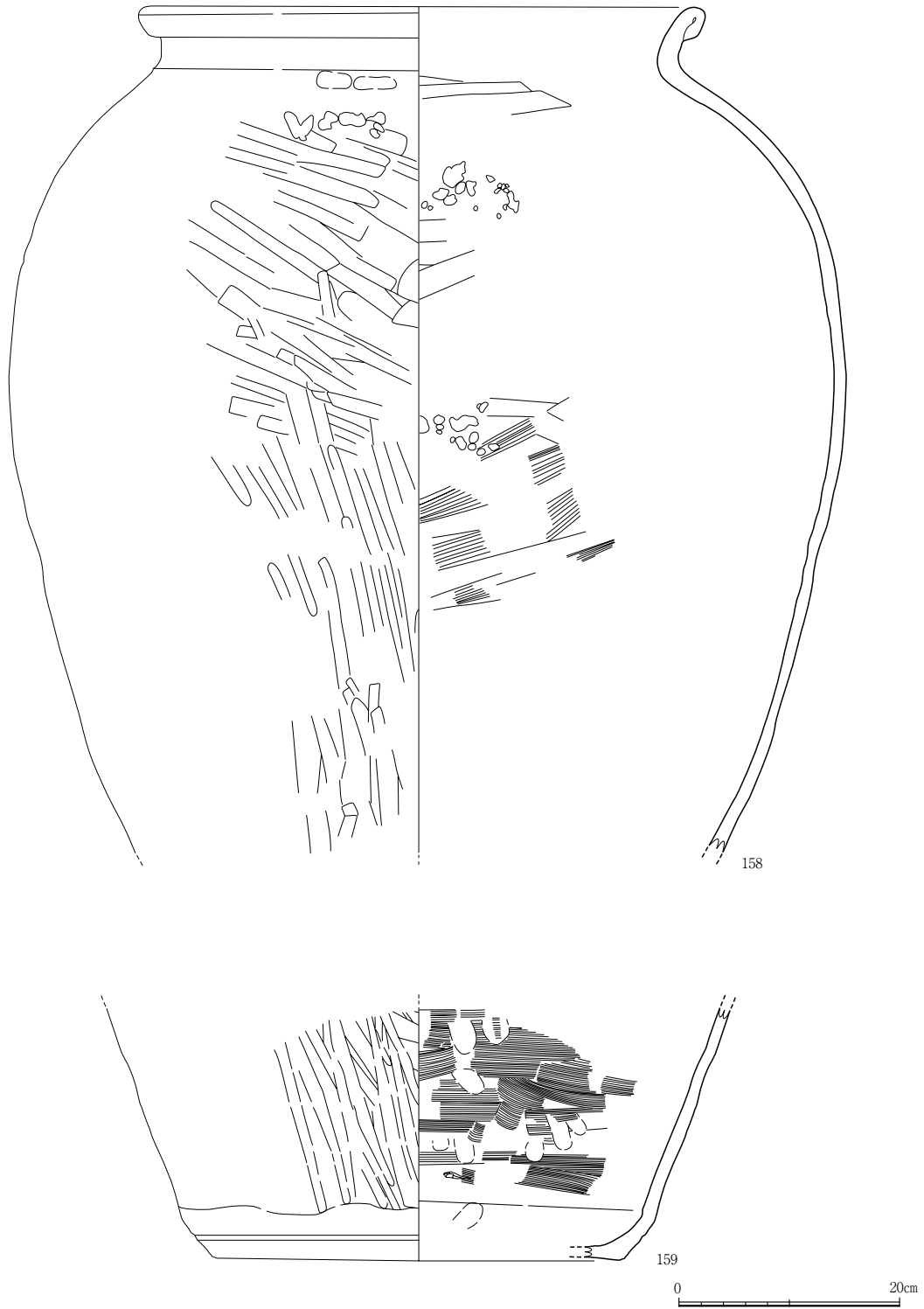


Fig.68 出土遺物実測図 17

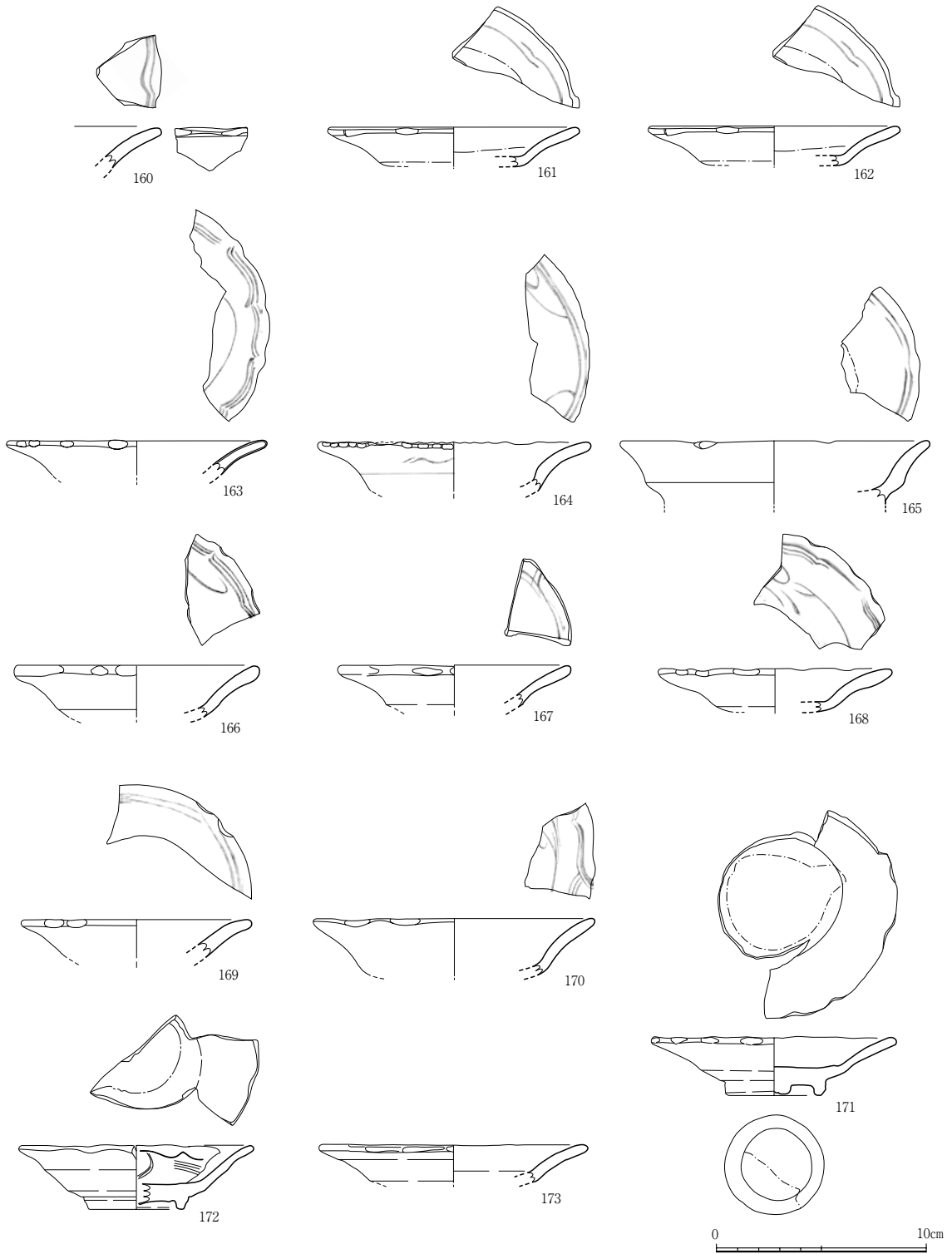


Fig.69 出土遺物実測図 18



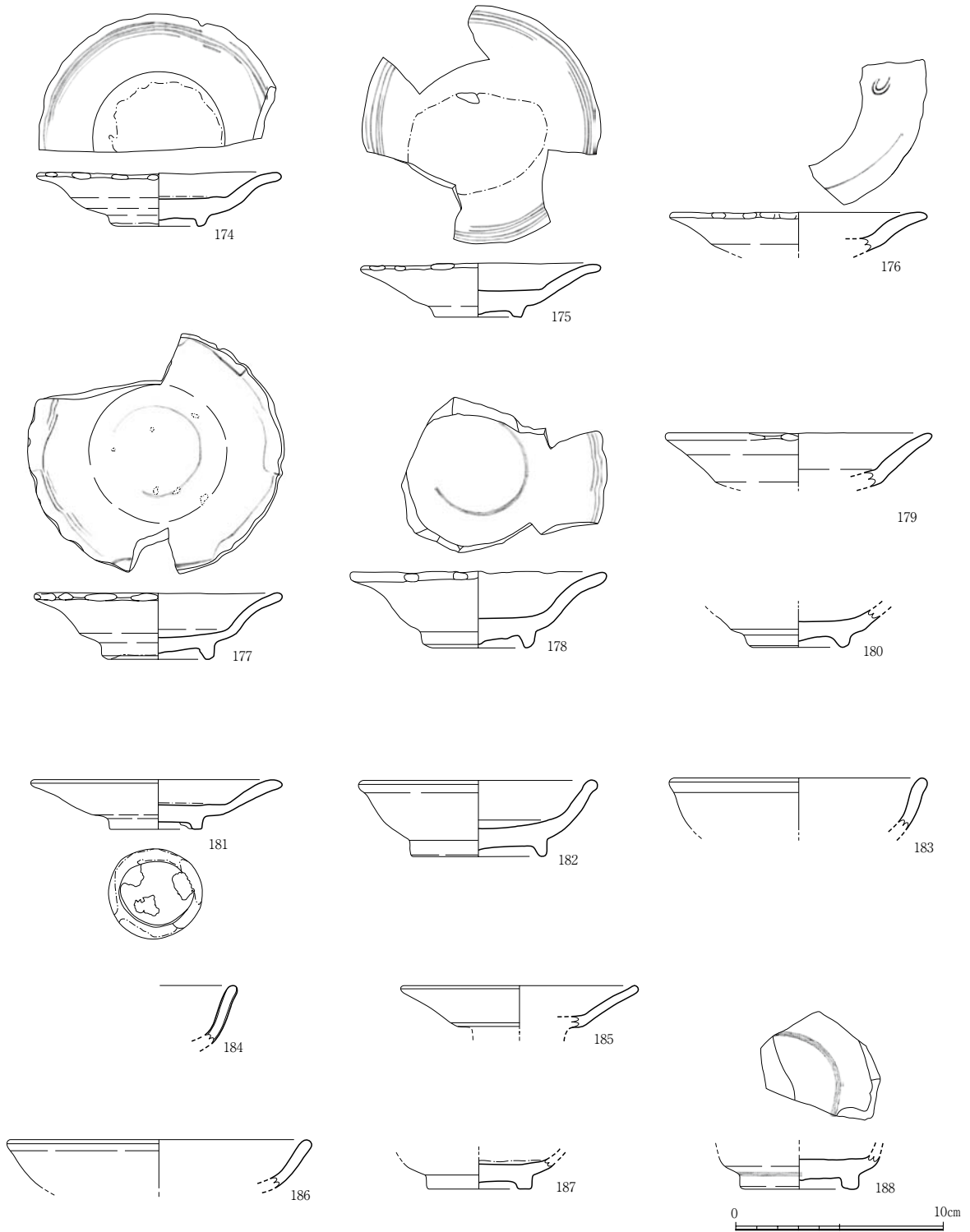


Fig.70 出土遺物実測図 19

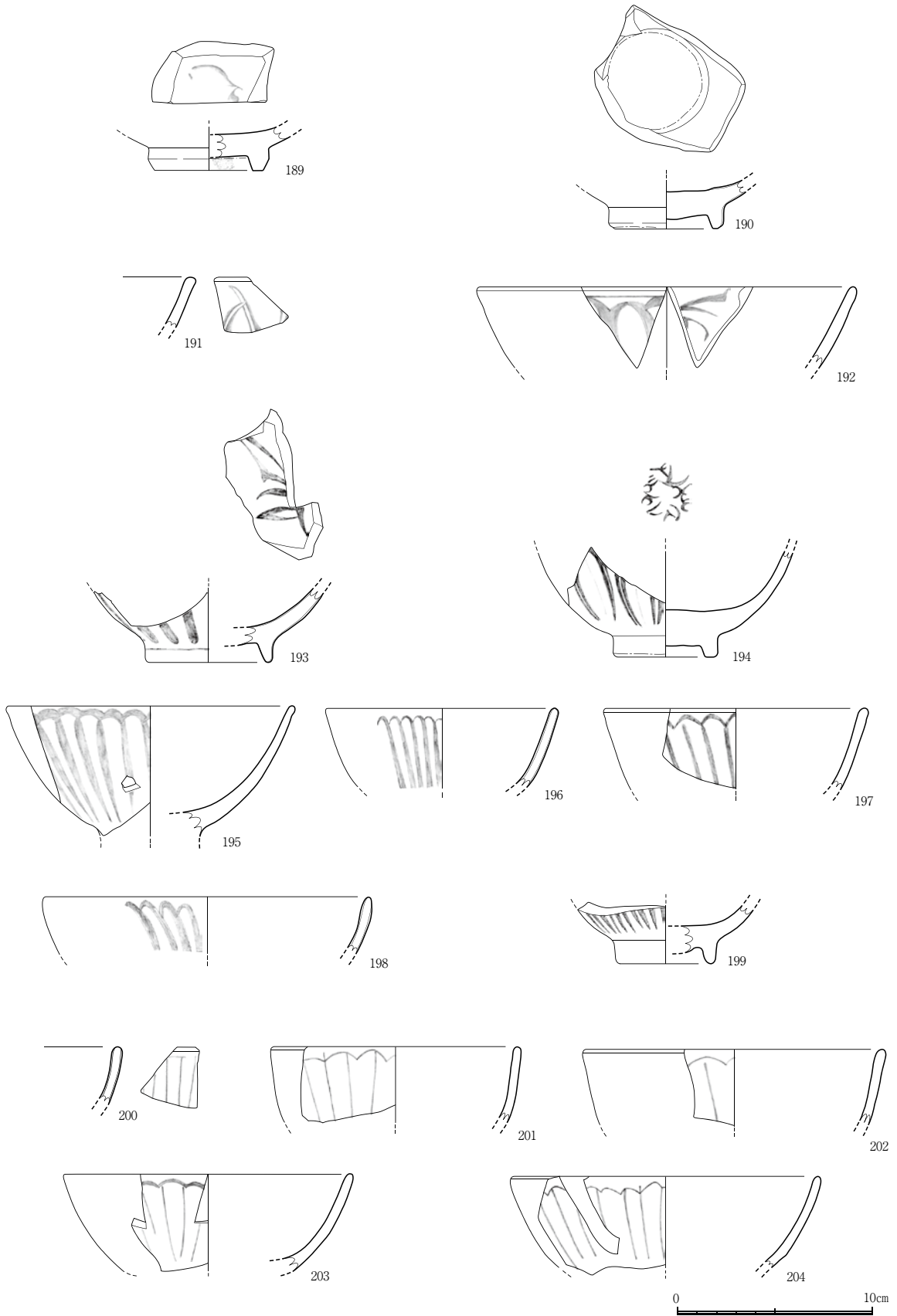


Fig.71 出土遺物実測図 20

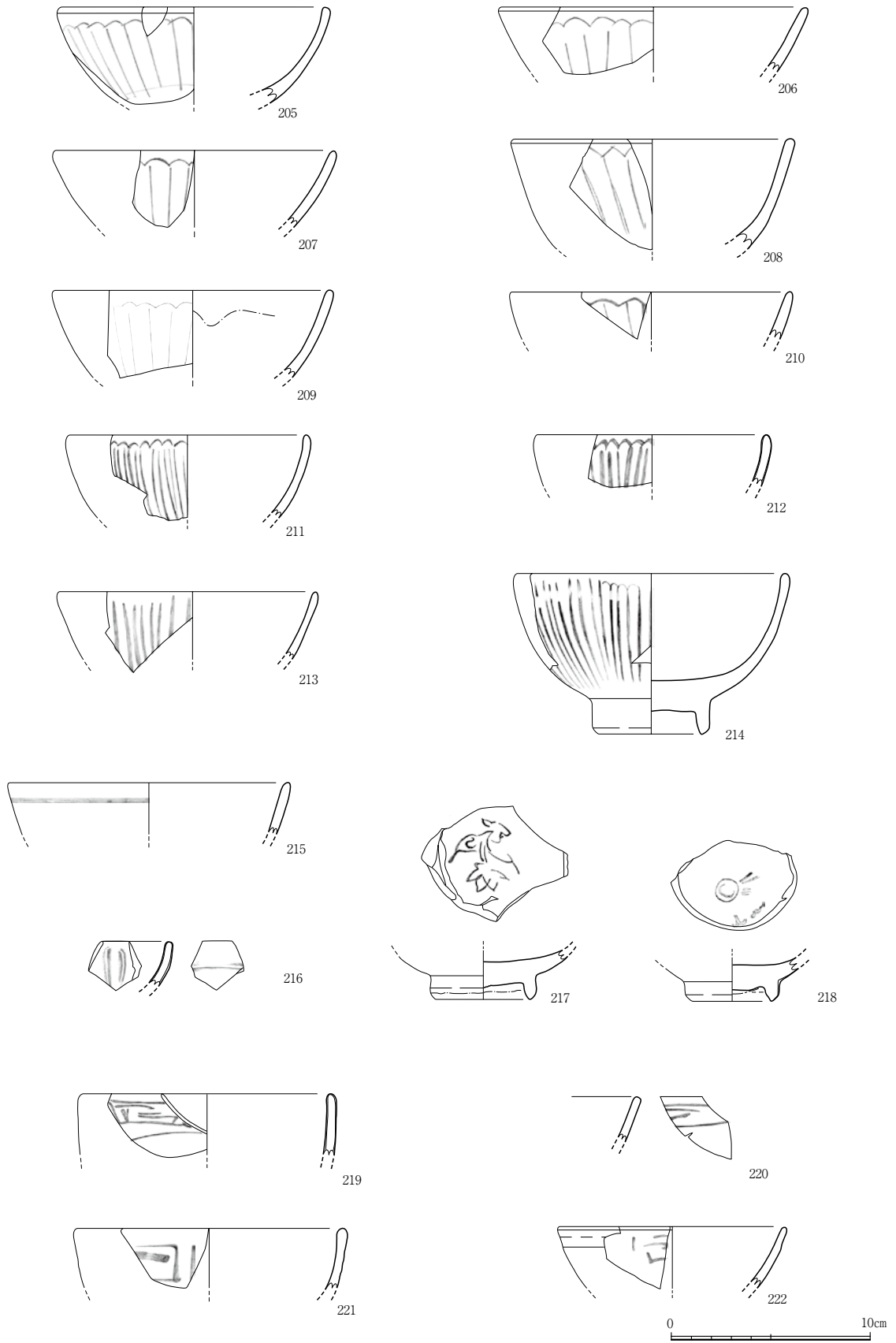


Fig.72 出土遺物実測図 21

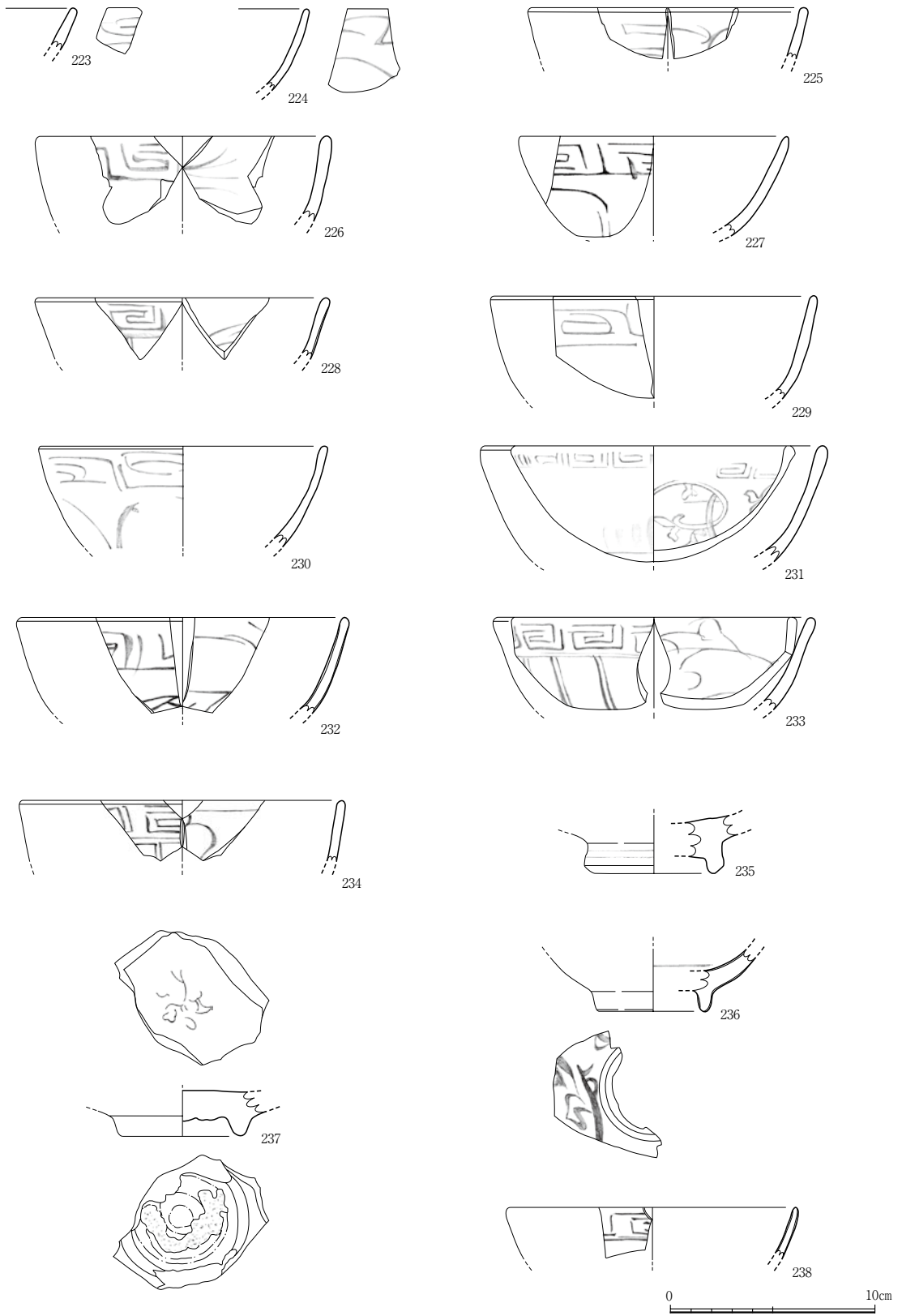


Fig.73 出土遺物実測図 22

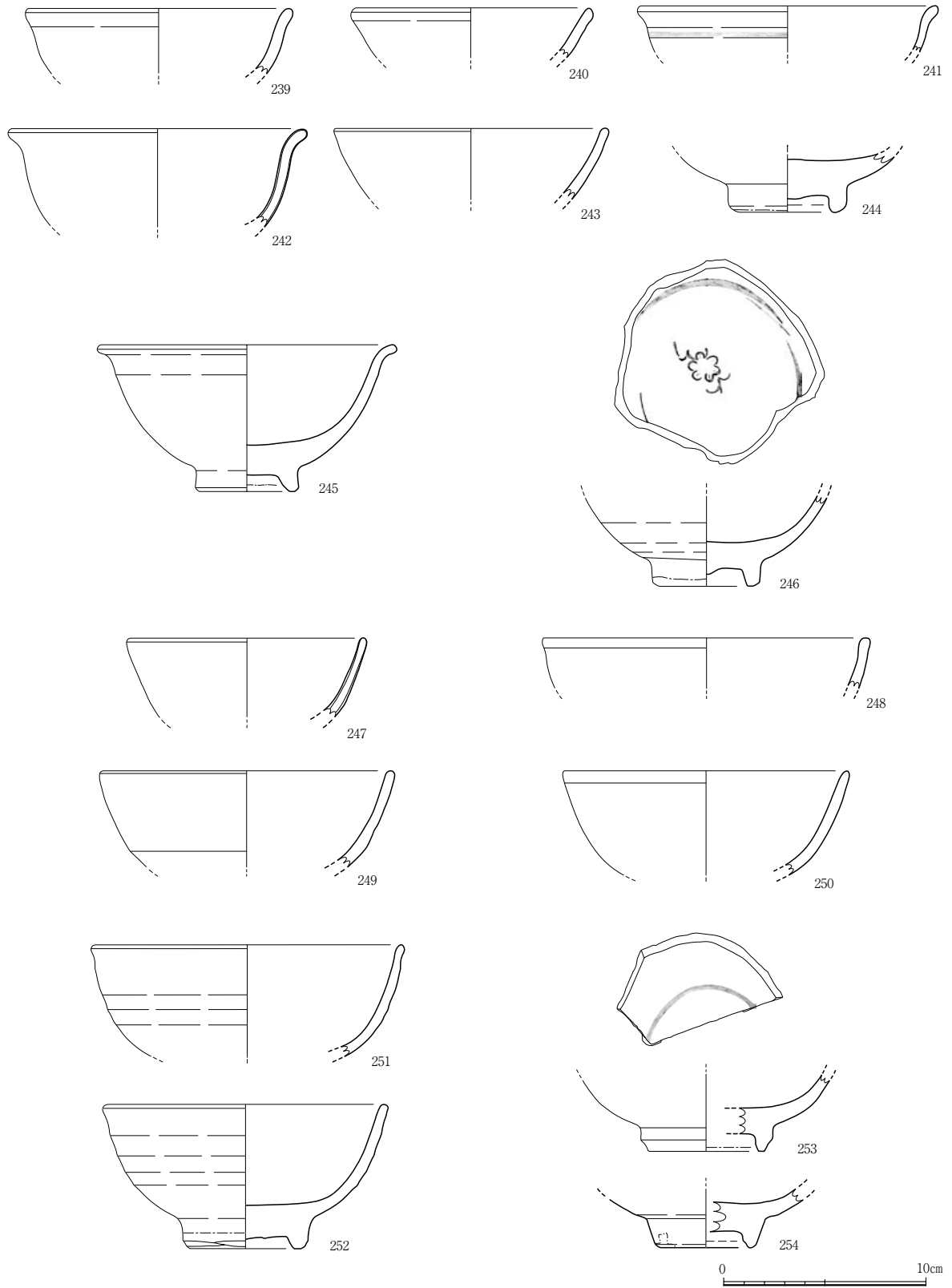


Fig.74 出土遺物実測図 23



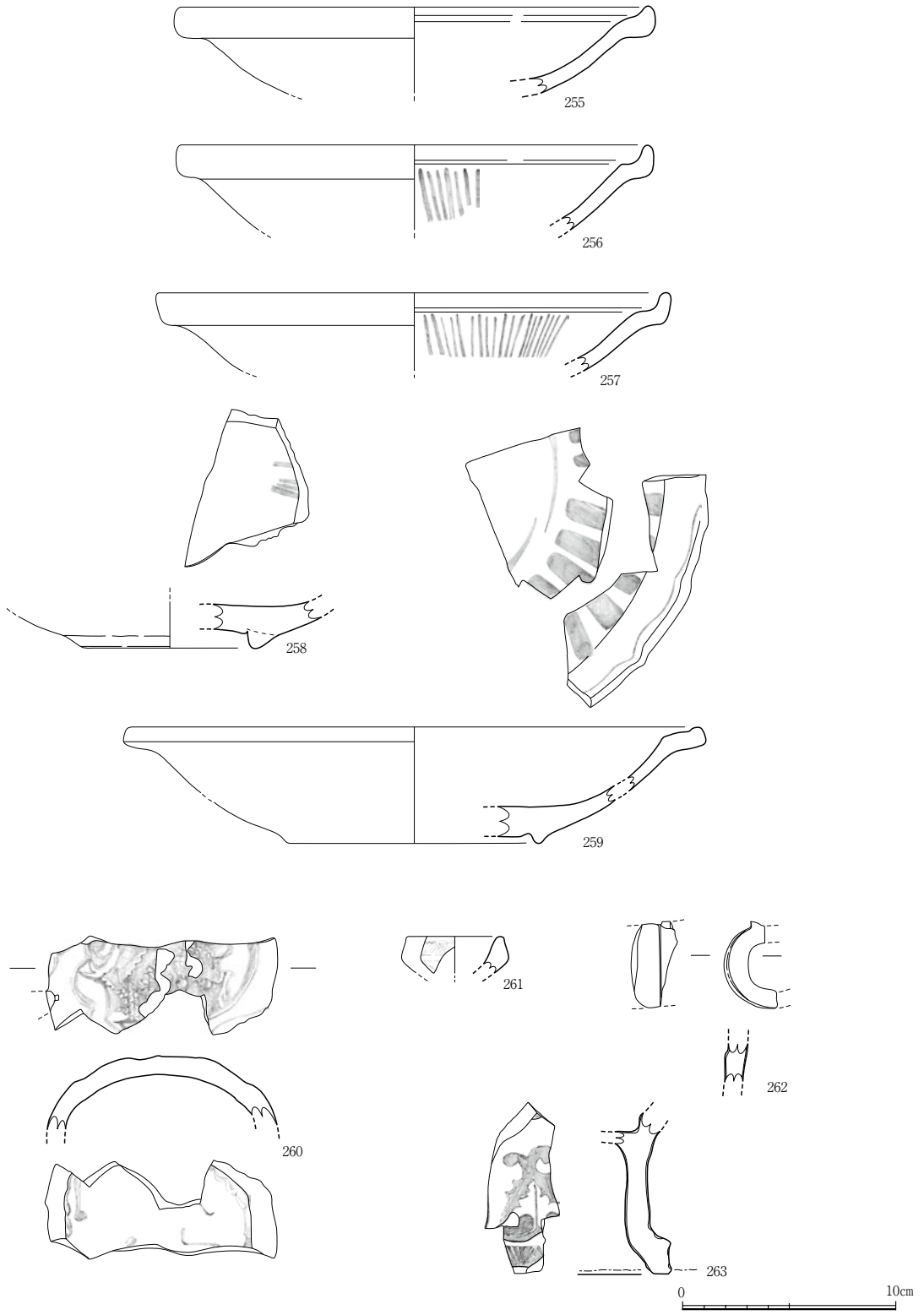


Fig.75 出土遺物実測図 24

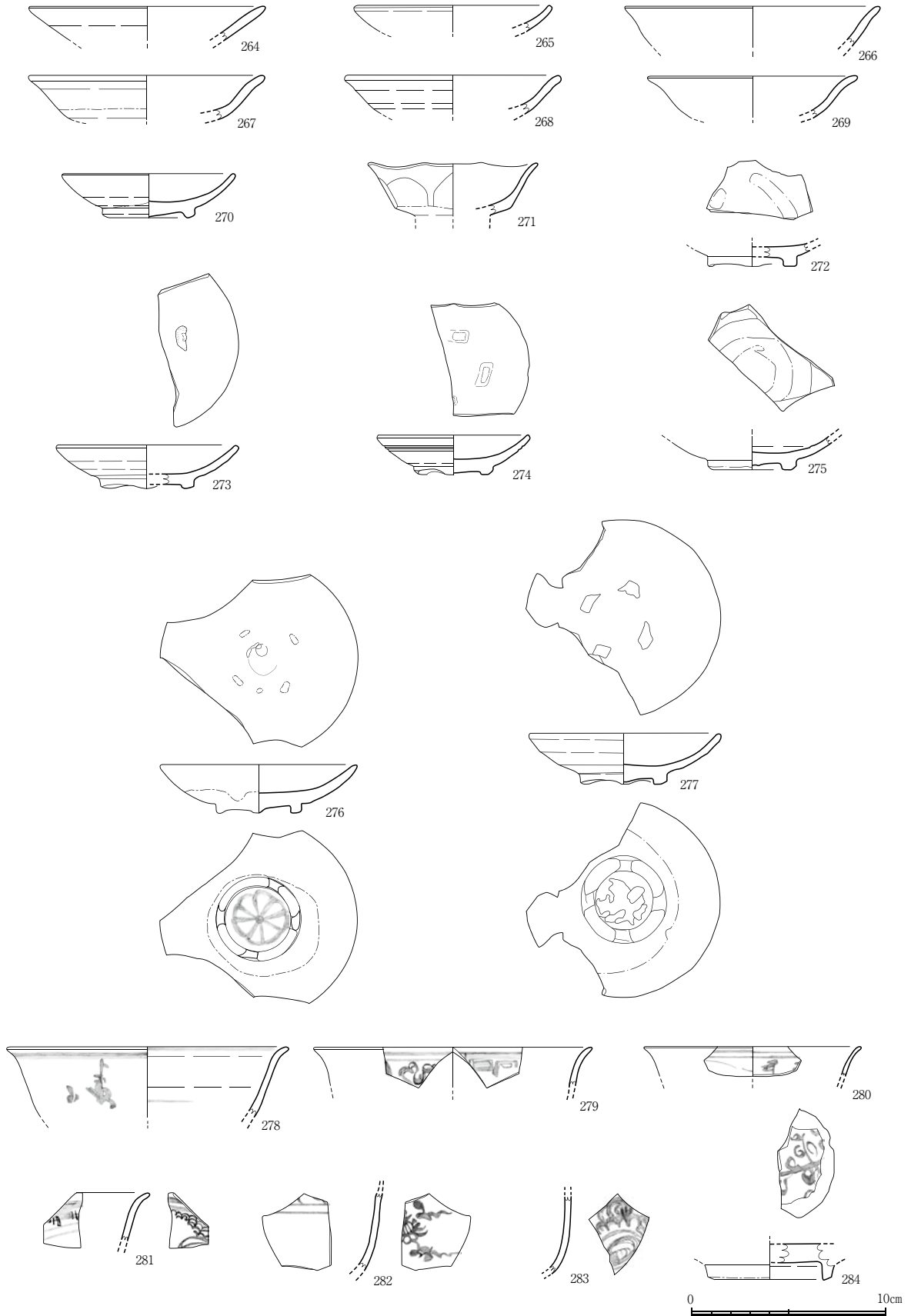


Fig.76 出土遺物実測図 25

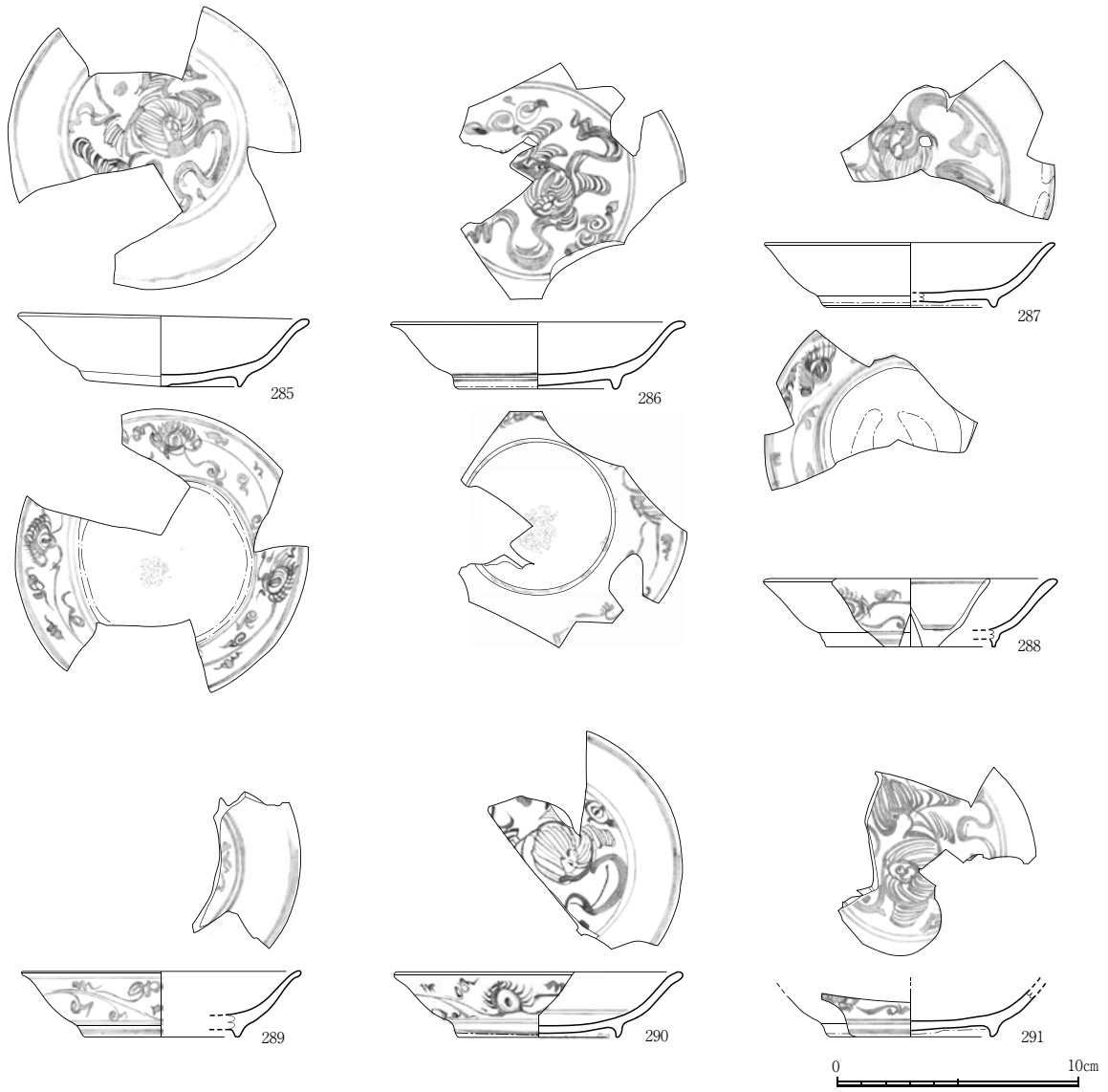


Fig.77 出土遺物実測図 26

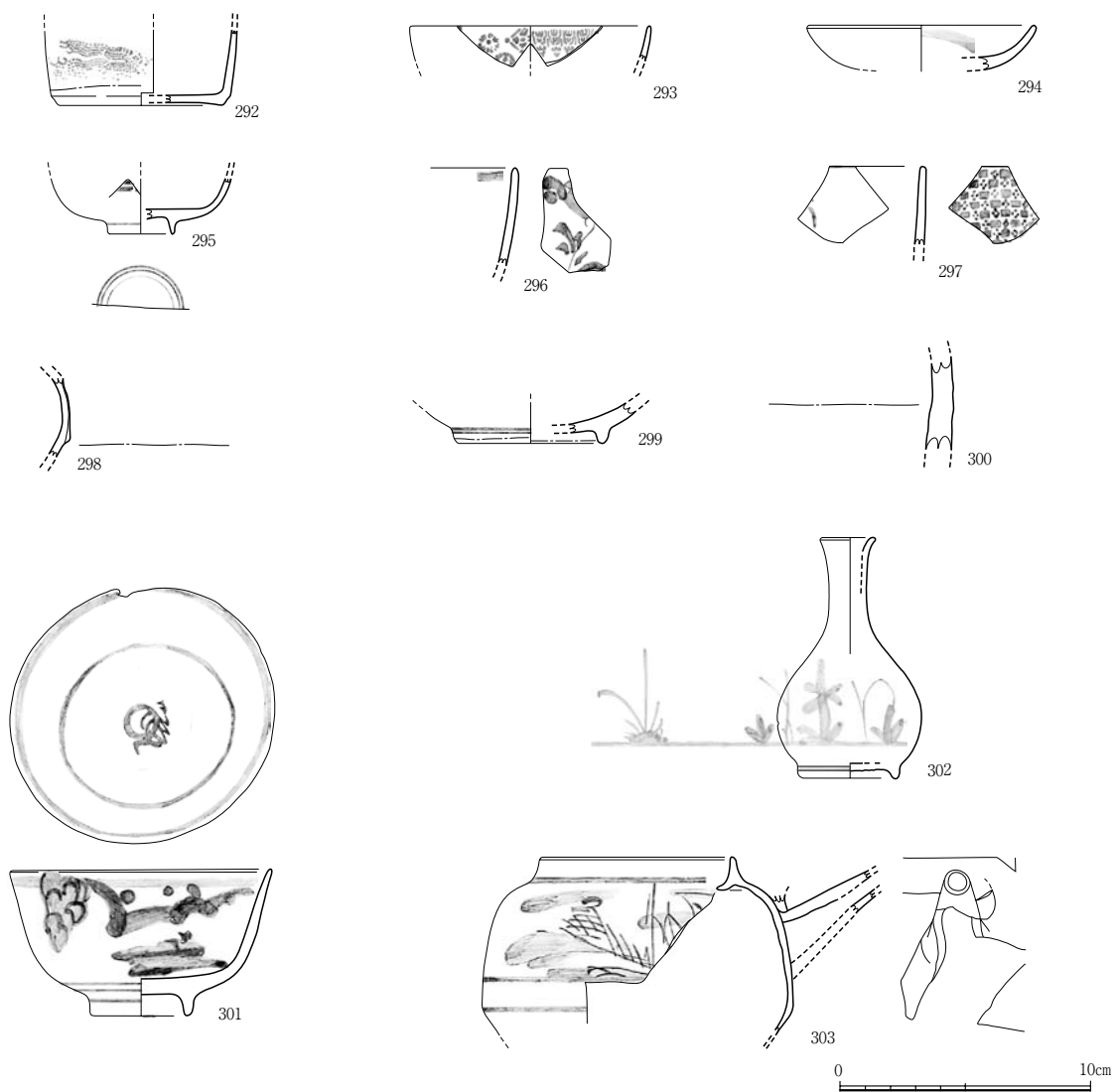


Fig.78 出土遺物実測図 27

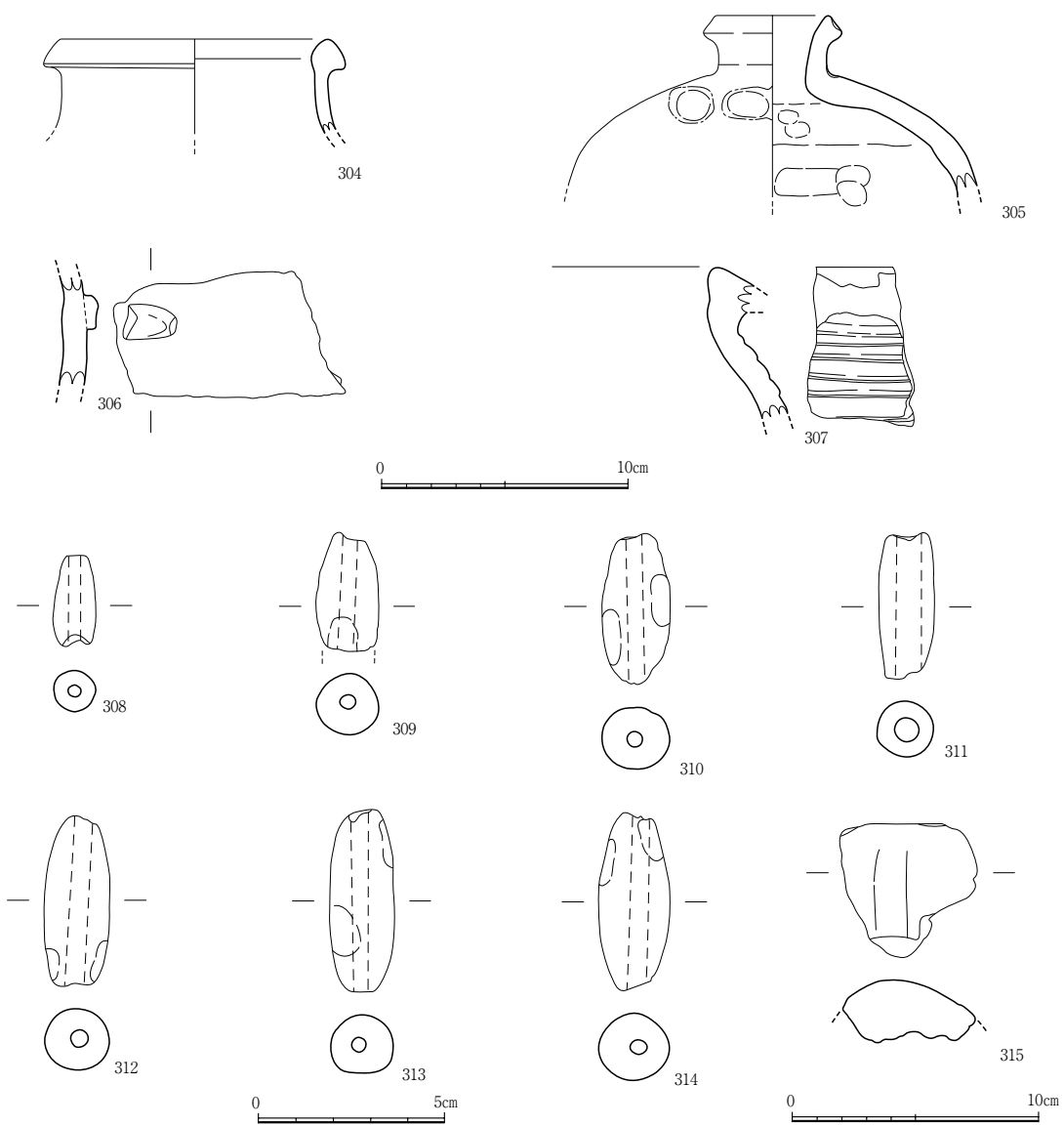


Fig.79 出土遺物実測図 28



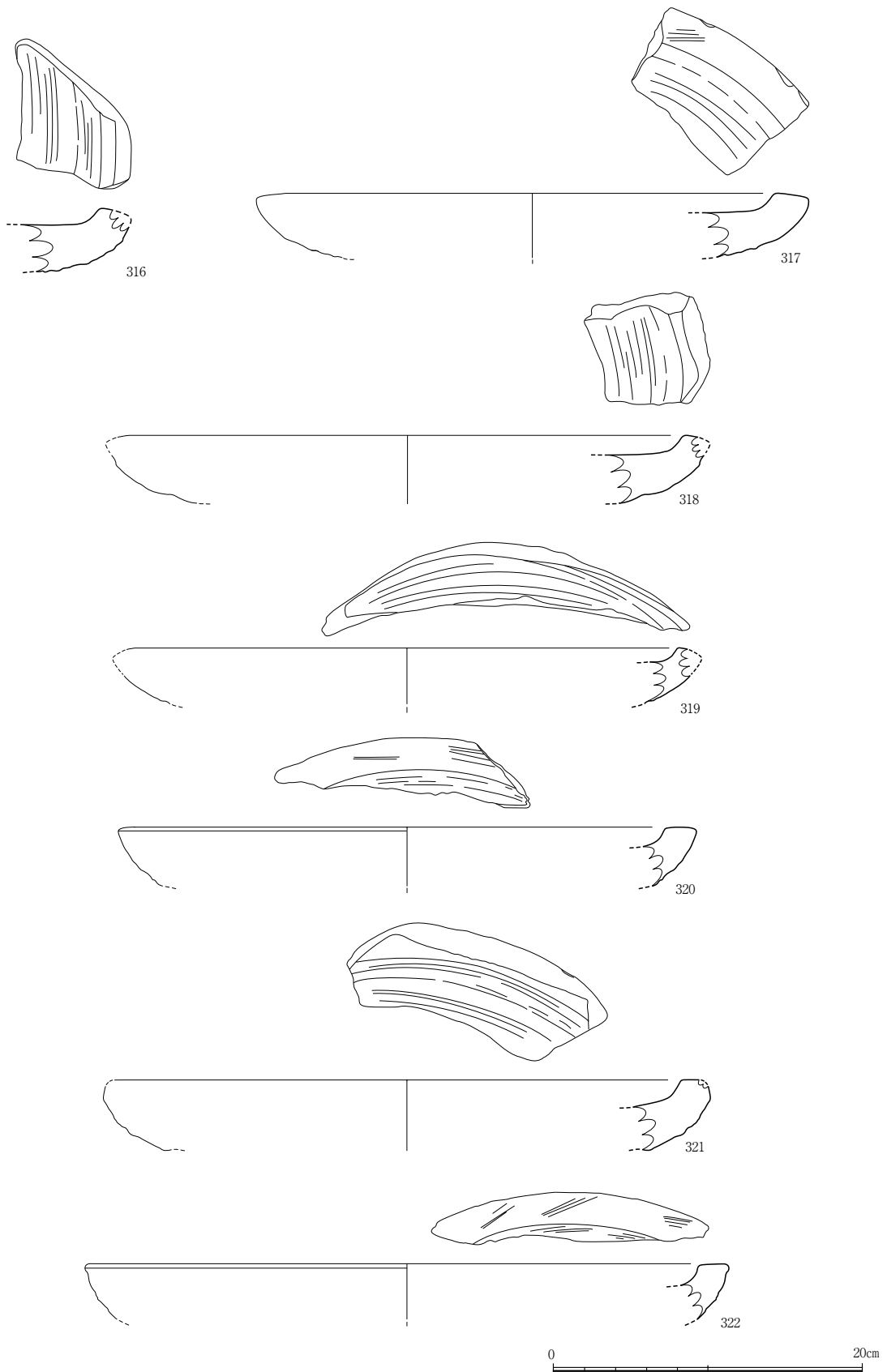


Fig.80 出土遺物実測図 29

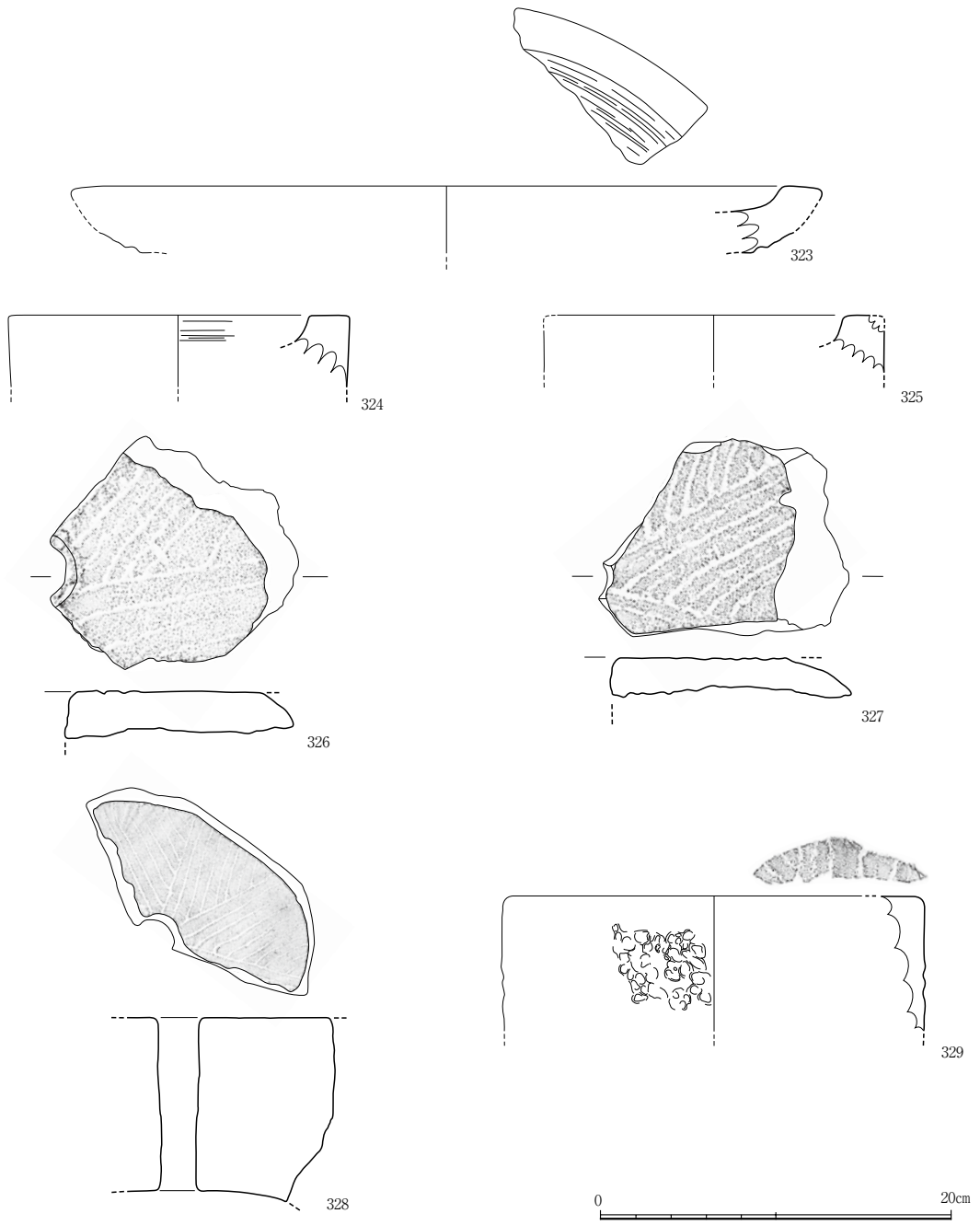


Fig.81 出土遺物実測図 30



Fig.82 出土遺物実測図 31

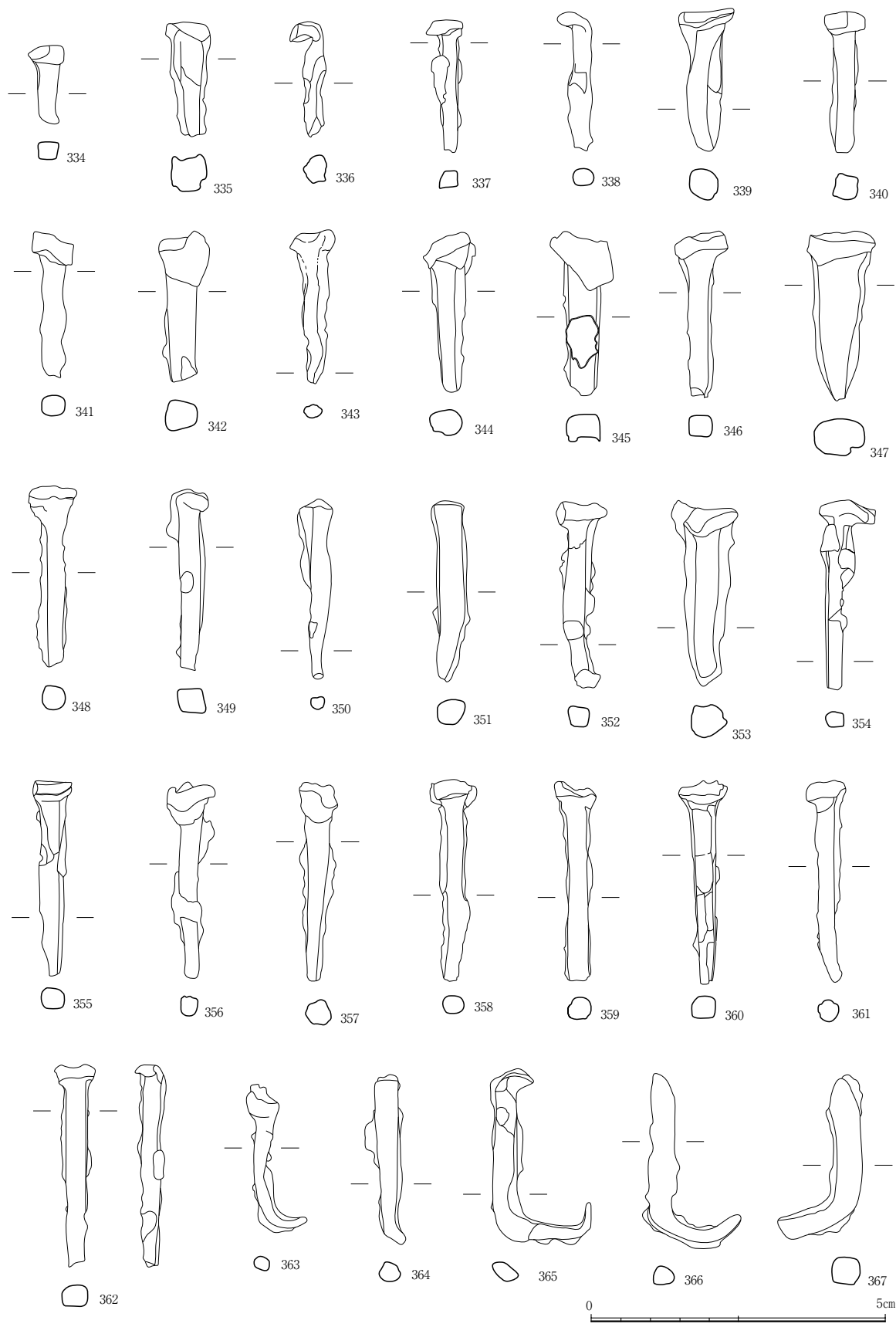


Fig.83 出土遺物実測図 32

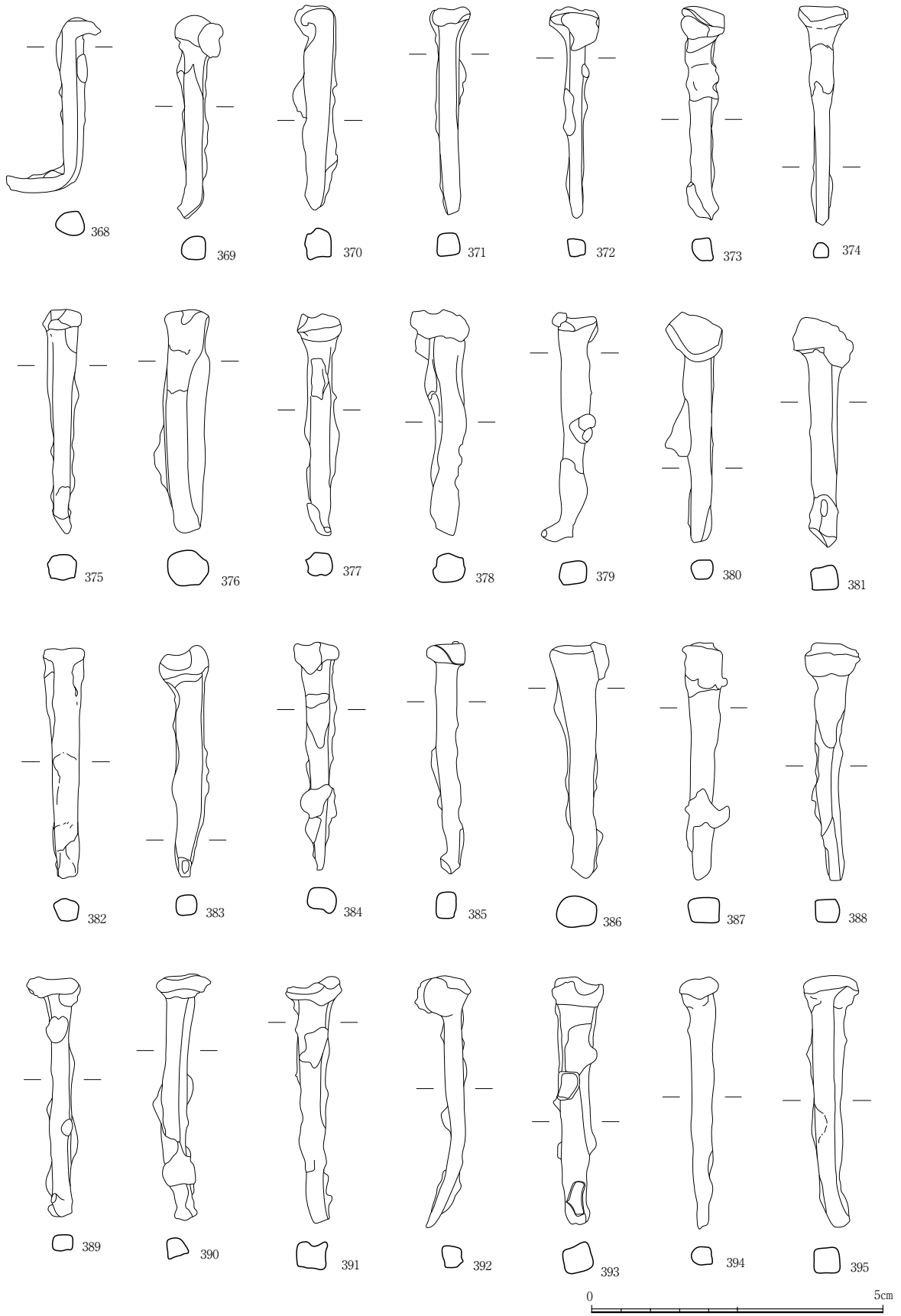


Fig.84 出土遺物実測図 33

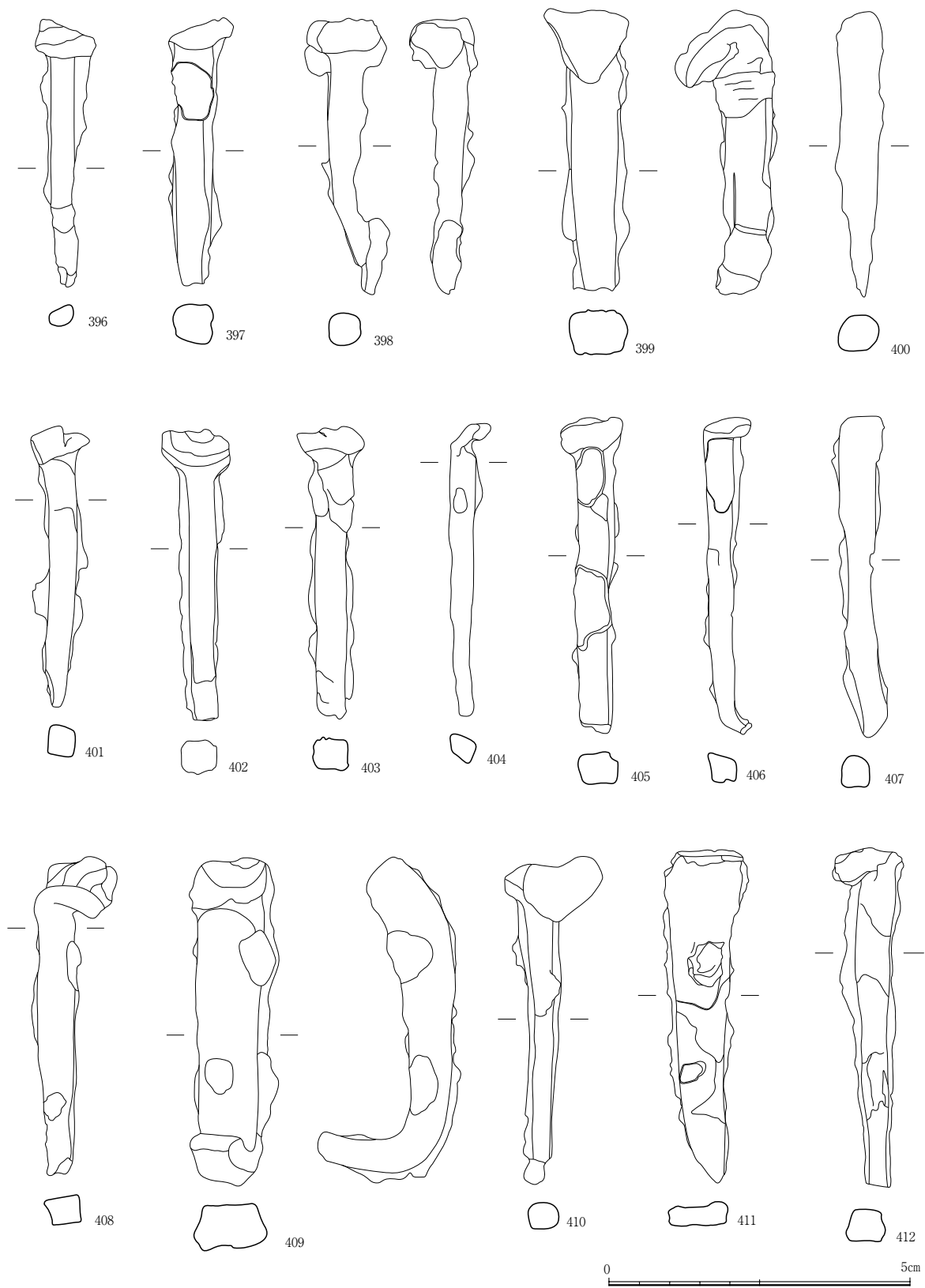


Fig.85 出土遺物実測図 34



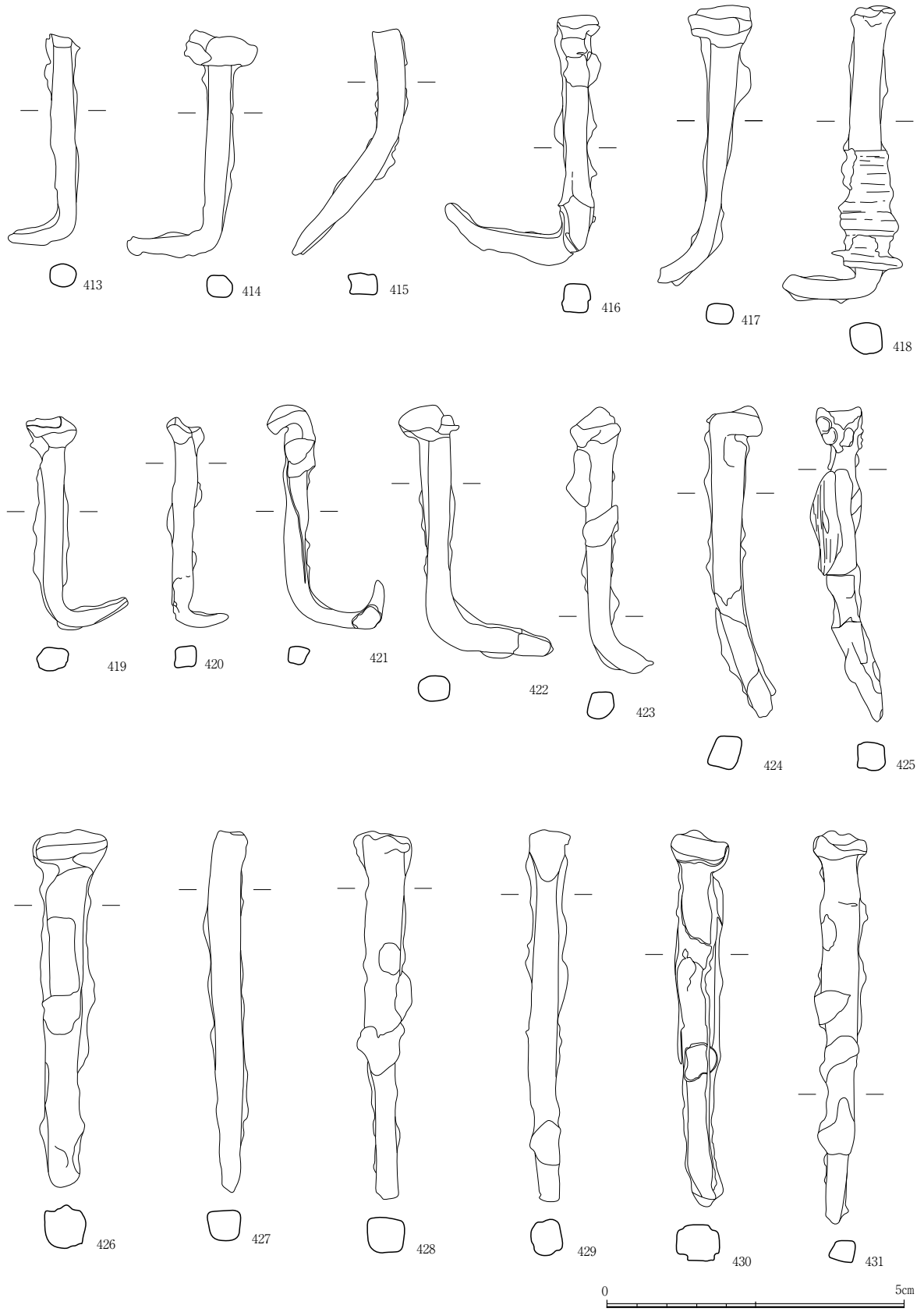


Fig.86 出土遺物実測図 35

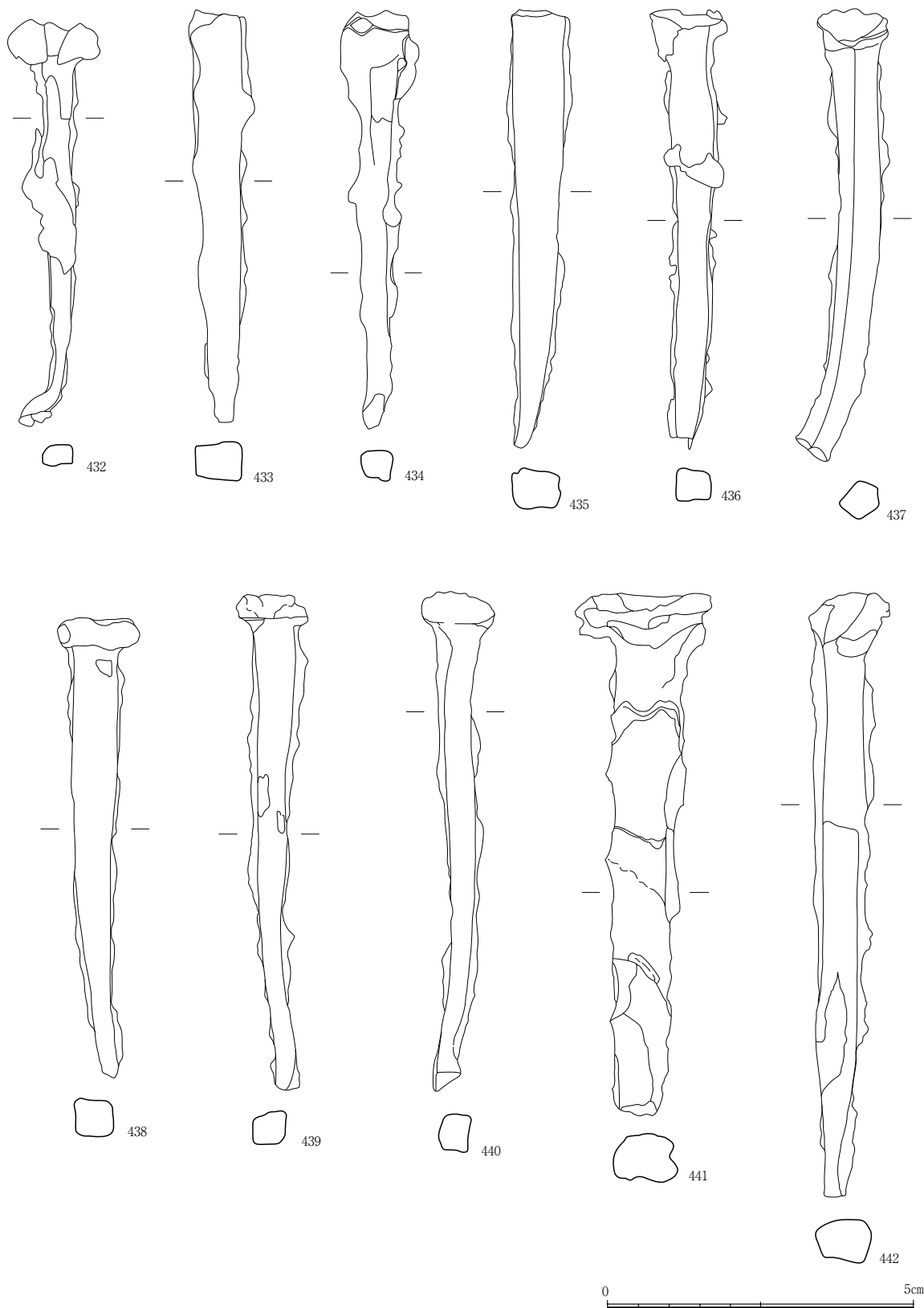


Fig.87 出土遺物実測図 36

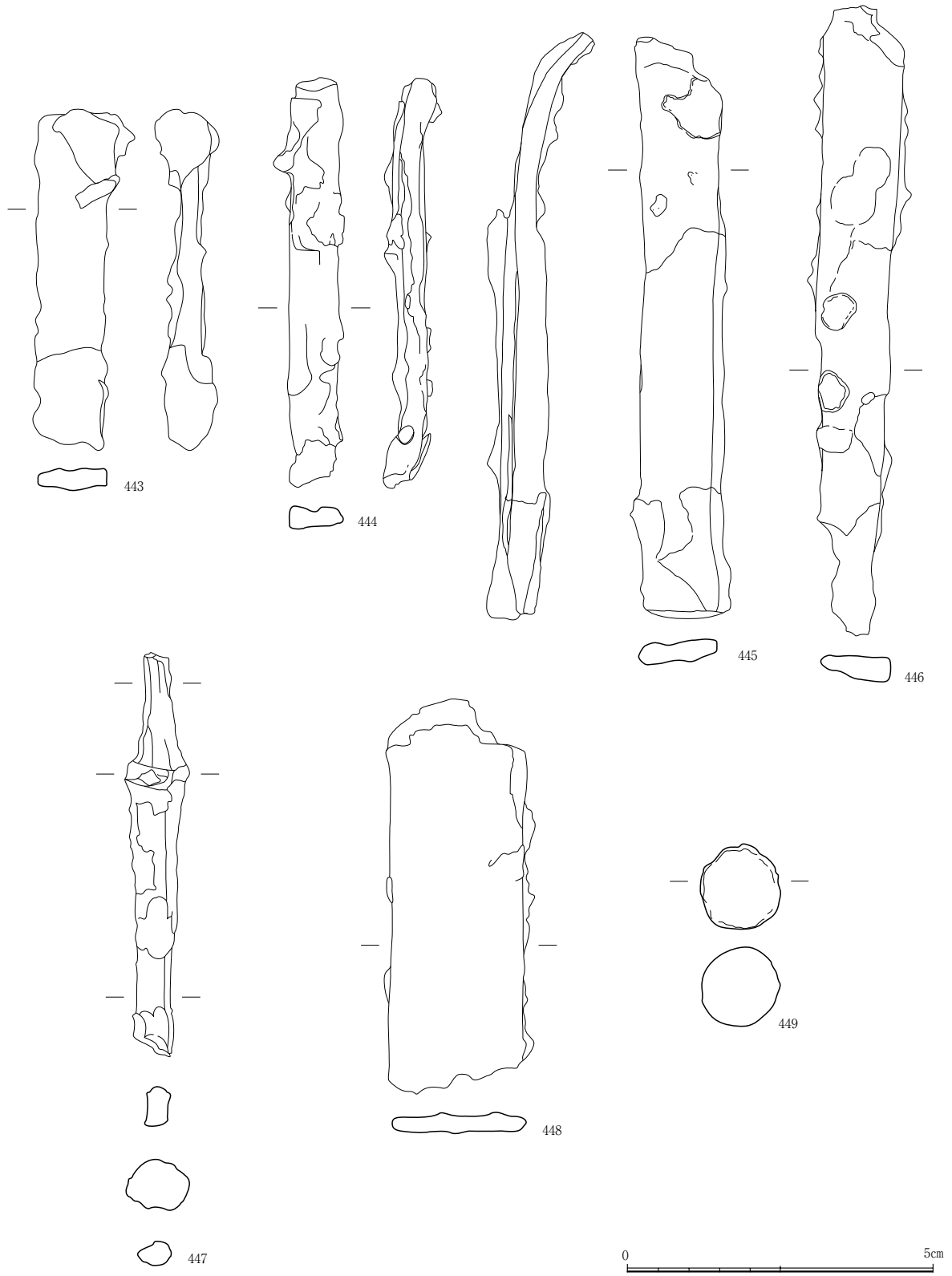


Fig.88 出土遺物実測図 37

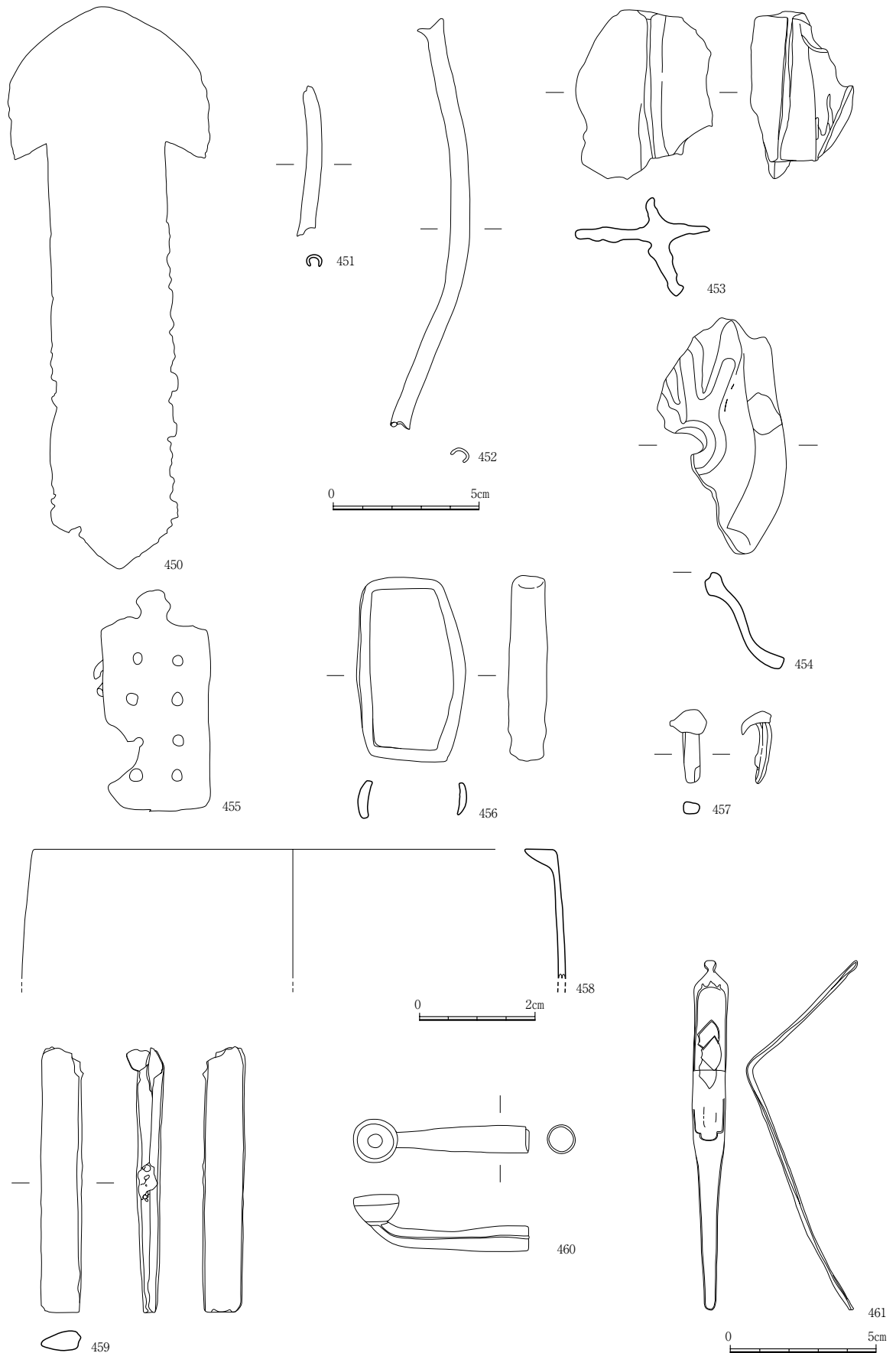


Fig.89 出土遺物実測図 38

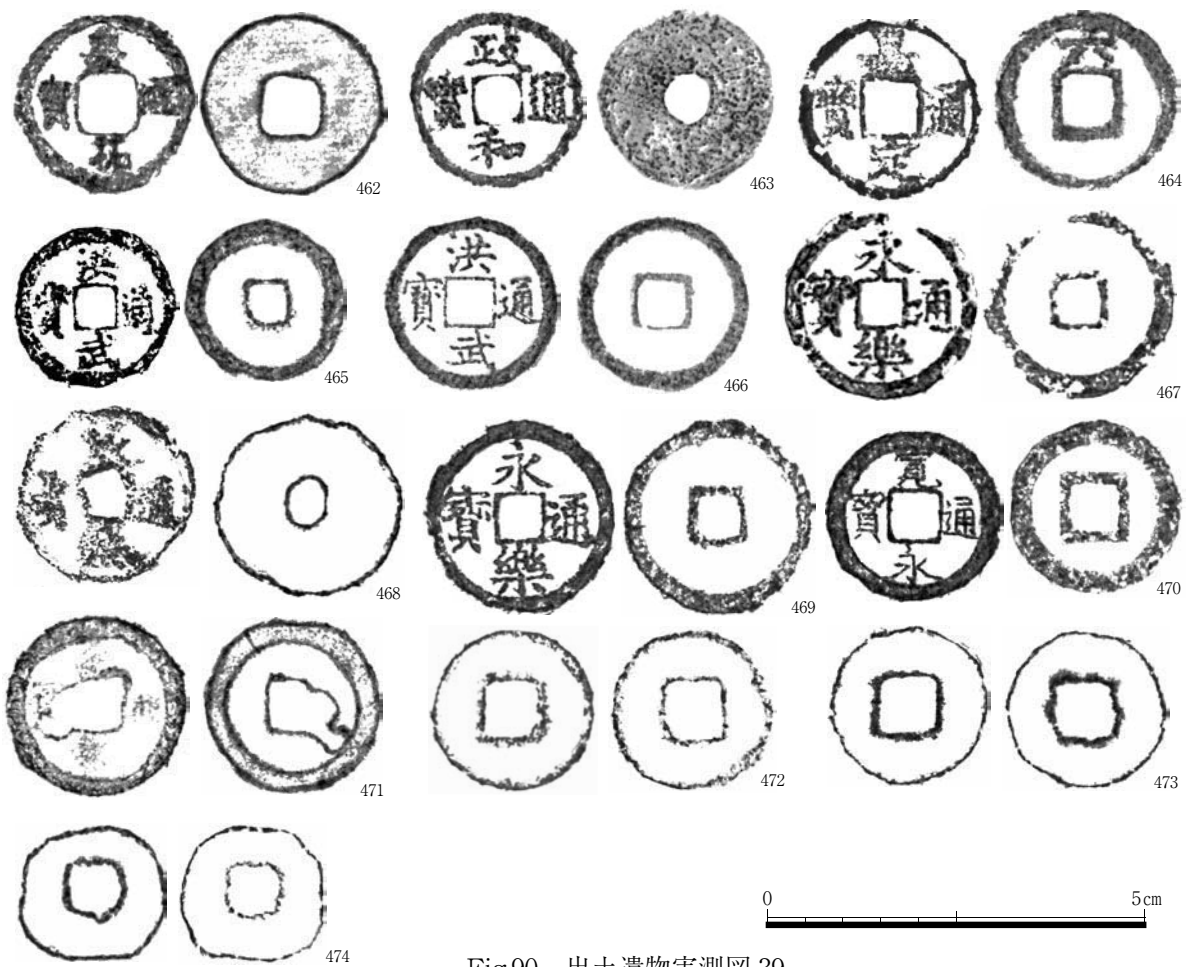


Fig.90 出土遺物実測図 39

No.	銭種	年代	寶	通	直径 (cm)	輪径 (cm)	穿径 (cm)	重量 (g)	出土地点	備考
462	嘉祐通寶	北宋(1056) (真書)	ス?	コ?	2.35	0.25	0.74	1.93	A区I層	銭文が潰れているので文字の判別が難しい。
463	政和通寶	北宋(1111) (分階)	ハ	ユ?	2.37	0.21	0.59	1.76	A区I層	「通」の判別が難しい。
464	嘉定通寶	南宋(1208)	ス	マ	2.38	0.17	0.68	2.25	F区I層	残りの状態は良いが「嘉」と「寶」の文字が潰れている。背面「六」。
465	洪武通寶	明(1368)	ス?	マ	2.15	0.24	0.49	2.59	D区T11埋土	形や文字の状態が良いので渡来銭の可能性あり。
466	洪武通寶	明(1368)	ハ	マ	2.36	0.23	0.57	2.36	A区I層	形や文字の状態が良いので渡来銭の可能性あり。
467	永樂通寶	模(中世末～近世)明(1408)	ス	マ	2.54	0.27	0.54	2.27	D区T11岩直上	劣化が著しく、輪が所々欠損している。
468	永樂通寶	模(中世末～近世)明(1408)	ス?	マ?	2.42	0.25	0.50	1.60	A区IV層	形や文字の状態が悪いので模鑄銭の可能性あり。劣化が激しい。
469	永樂通寶	模(中世末～近世)明(1408)	ス?	マ	2.52	0.26	0.55	2.53	F区	輪が少し欠損しているが形・文字もきれいに鑄造されている。
470	寛永通寶	新寛永(1697～1747) (1767～1781)	ハ	コ	2.30	0.24	0.64	1.93	D区排土	錆も比較的少なく状態は良いが、少し穴あきの箇所あり。
471	寛永通寶	(1636～)	?	コ?	2.32	0.23	0.64	1.93	E区I層	寶側に欠損と湾曲、輪までは達していない。
472	無文銭	中世	-	-	2.11	-	0.74	1.14	A区II層	
473	無文銭	中世	-	-	2.07	-	0.74	1.30	A区II層	ゆがみがある。
474	無文銭?	中世?	-	-	1.86	-	0.64	0.94	-	劣化が激しく歪んでいる。

表1 古銭計測表

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
1	土師質土器	小皿	A	(6.0)	(3.4)	1.4	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。器壁薄い。胎土はチャートと赤色粒を含む。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
2	土師質土器	小皿	A	(6.2)	(4.2)	1.6	E	E VI - 6	竖堀 12	III	轆轤成形。回転ナデ調整。胎土はチャートを含む。焼成不良。	内面 橙 7.5YR6/6 外面 橙 5YR6/8
3	土師質土器	小皿	A	(6.3)	(3.8)	1.7	E	E VI - 2	竖堀 13		口縁部は内湾する。轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり、円柱づくり。	内外面 橙 5YR6/6
4	土師質土器	小皿	A	(6.6)	(3.9)	1.8	B	D IV - 14	曲輪 2 平場	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。口唇部にタール付着。灯明皿。胎土は細砂粒。焼成不良。	内外面 橙 7.5YR6/6
5	土師質土器	小皿	A	(6.2)	(4.2)	1.6	B	D IV - 2	SBI・2	IV	体部は斜上外方に立ち上がる。轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。内面にタール付着。灯明皿。胎土は細砂粒。	内外面 暗灰黄 2.5Y5/2
6	土師質土器	小皿	A	(6.5)	(5.4)	1.8	D	F IV - 7	竖堀 11	III	轆轤成形。回転ナデ調整。口唇部の一部にタールが付着。灯明皿。	内外面 におい橙 7.5YR7/4
7	土師質土器	小皿	A	(7.6)	(5.0)	1.5	A	D IV - 11	曲輪 1 平場	II	口縁端部は尖り気味に仕上る。轆轤成形。回転ナデ調整。	内外面 橙 5YR7/8
8	土師質土器	小皿	A	(7.4)	(4.4)	1.6	B	D IV - 19	SB4	Pマ	口縁端部は尖り気味に仕上る。轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。内外面にタール付着。灯明皿。	内外面 橙 7.5YR6/6
9	土師質土器	小皿	A	(7.2)	(3.8)	1.3	E	E IV - 23	竖堀 19	マ	口縁部は斜上外方に開く。轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。胎土は精緻。焼成良好。	内外面 浅黄橙 10YR8/4
10	土師質土器	杯	A	(7.8)	(4.0)	2.2	D		竖堀 11	マ	轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり、円柱づくり。胎土はチャートを含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/8
11	土師質土器	小皿	A	(6.6)	(4.0)	1.9	F		西斜面	最下	轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。胎土はチャートと赤色粒を含む。	内面 橙 7.5YR7/6 外面 浅黄橙 7.5YR8/4
12	土師質土器	耳皿		全長 5.05	全幅 (2.2)	1.6	E		東斜面		小皿の両側を折り曲げる。片側は欠損。胎土はチャートを含み、焼成不良。	内外面 橙 5YR6/6
13	土師質土器	小皿	B	(4.0)	(3.8)	1.1	B	D IV - 3	SBI・2	IV	口縁部は短く直立する。轆轤成形。回転ナデ調整。底部の内面中央部は凸状を呈する。胎土は細砂粒を含む。焼成不良。	内面 橙 5YR6/6 外面 橙 2.5YR6/6
14	土師質土器	小皿	B	(5.0)	(4.4)	0.9	F	B V - 5	西斜面	II	轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。胎土はチャートを含む。	内外面 橙 7.5YR6/6
15	土師質土器	小皿	B	5.3	5.2	1.4	B	D IV - 19	Pit 13	マ	口縁部は短く直立し、端部は尖り気味に仕上る。轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
16	土師質土器	小皿	B	(5.4)	(5.3)	0.9	F		西斜面		口縁部端は短く直立する。轆轤成形。回転ナデ調整。胎土は細砂粒、焼成不良。	内外面 橙 5YR6/6
17	土師質土器	小皿	B	(6.2)	(6.2)	1.3	A	D IV - 1	西斜面		轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。口縁部は短く直立する。胎土は細砂粒。	内外面 浅黄橙 7.5YR8/6
18	土師質土器	小皿	B	(6.8)	(6.3)	1.4	B	D V - 21	土塁 2	3	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。口縁部は短く直立し、端部は丸く納める。タール付着。灯明皿。	内外面 橙 7.5YR7/6
19	土師質土器	小皿	B	(6.8)	(6.5)	1.6	A	D IV - 1	西斜面		轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。口縁部は短く直立する。胎土はチャートを含む。	内面 橙 7.5YR6/8 外面 橙 7.5YR6/6
20	土師質土器	小皿	B	(6.7)	(6.6)	1.5	A	C V - 4	西斜面	IV	口縁部は短く直立する。	内外面 橙 7.5YR7/6
21	土師質土器	皿	A-1	(11.4)	(5.6)	2.8	E	E VI - 2	竖堀 13	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。胎土はチャートを含み、焼成不良。	内外面 橙 7.5YR6/6
22	土師質土器	皿	A-1	13.2	6	3.2	A	C IV - 24	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。	内外面 橙 5YR6/6
23	土師質土器	皿	A-2	-	(5.8)	(2.3)	A	C IV - 19 C IV - 19	西斜面	IV IV	外方に大きく開く。轆轤成形。回転ナデ調整。胎土は細砂粒で、焼成不良。	内外面 橙 5YR6/8
24	土師質土器	皿	A-2	(10.6)	(5.4)	2.7	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。口縁部は内湾する。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 橙 7.5YR6/6
25	土師質土器	皿	A-2	(10.4)	(6.6)	2.7	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。口縁部は内湾する。	内面 におい橙 7.5YR6/4 外面 におい橙 7.5YR7/4
26	土師質土器	皿	A-2	(12.2)	(8.0)	2.9	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。静止糸きり。口縁部は内湾する。胎土はチャートと石英・砂粒を含む。	内外面 におい黄橙 10YR6/4
27	土師質土器	皿	A-2	(12.0)	(8.4)	3.4	A	C V - 8	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。口縁部は内湾する。	内外面 におい黄橙 10YR6/4

表2 出土遺物観察表 1



図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
28	土師質土器	皿	A-2	(11.6)	(7.0)	3.1	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。口縁部は内湾する。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
29	土師質土器	皿	A-2	(11.8)	(7.0)	3.6	A	C V - 4	西斜面		高台状の底部から内湾して立ち上がり、口唇部は丸く納める。轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸切り。胎土はチャートと石英を含む。	内面 におい橙 5YR6/6 外面 におい橙 5YR7/4
30	土師質土器	皿	B	-	(6.0)	(2.7)	E	E VI - 2	竖堀 13	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸切り。口縁部に向けて外反する。胎土はチャートを含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/8
31	土師質土器	皿	B	-	(6.0)	(2.3)	D	E III - 25	竖堀 11	TR2	内面タール付着。	内外面 浅黄 2.5Y7/3
32	土師質土器	皿	B	-	(6.4)	(2.9)	B	D IV - 24	SB5	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 におい黄橙 10YR6/4
33	土師質土器	皿	A-3	(10.0)	(4.4)	3.3	A	C V - 19	平場 (祭祀)	II	轆轤円柱づくり。ナデ、底部回転糸きり。精選された胎土、細砂礫を含む。	内面 におい黄橙 10YR7/4 外面 におい黄橙 10YR6/4
34	土師質土器	皿	A-3	(9.8)	(4.0)	3.3	A	C V - 19	曲輪 1 平場	II	口縁部は内湾する。轆轤円柱づくり。ナデ調整。底部回転糸きり。精選された胎土、細砂礫を含む。	内面 におい黄橙 10YR6/4 外面 におい黄橙 10YR7/4
35	土師質土器	皿	A-3	-	(4.4)	(2.1)	A	C V - 19	曲輪 1 平場	II	轆轤成形。回転ナデ調整。底部円柱づくり。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
36	土師質土器	皿	A-3	-	(4.0)	2.4	A	C V - 19	曲輪 1 平場	I	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。底部円柱づくり。胎土はチャートと石英を含む。	内面 暗灰黄 2.5Y5/2 外面 におい黄橙 10YR6/4
37	土師質土器	皿	A-3	-	(4.0)	(1.6)	A	C V - 19	曲輪 1 平場	II	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。底部円柱づくり。内底にも糸きり痕が残る。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
38	土師質土器	皿	A-3	-	4.2	(1.6)	A	C V - 19	曲輪 1 平場	II	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。底部円柱づくり。胎土はチャートと石英・細粒を含む。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
39	土師質土器	皿	A-3	(9.4)	4.2	2.3	A	C V - 19	曲輪 1 平場	II	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。口縁部は内湾。底部円柱づくり。内底にも糸きり痕が残る。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
40	土師質土器	皿	A-3	-	4.4	(1.7)	B	D V - 22	土塁 2	V	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。底部円柱づくり。	内面 淡黄橙 10YR8/3 外面 におい橙 10YR7/3
41	土師質土器	皿	A-3	-	(4.4)	(2.4)	A	C V - 19	曲輪 1 平場	II	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸切り。底部円柱づくり。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 におい黄橙 10YR6/4
42	土師質土器	手づくね皿	B	(14.0)	-	(1.9)	A	C IV - 24	西斜面		京都系。口縁部は外反する。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 灰白 2.5Y8/2
43	土師質土器	手づくね皿	B	(17.0)	-	(2.7)	A	D IV - 1	SX4	IV	京都系。外面体部下半に指頭圧痕。口縁部はヨコナデ。	内外面 灰白 10YR8/2
44	土師質土器	杯		(10.4)	-	(3.3)	F	C IV - 23	竖堀 10		胎土はチャートと石英を含む。	内面 橙 5YR6/6 外面 橙 7.5YR6/6
45	土師質土器	杯		-	(4.6)	(1.8)	F	B V - 4	西斜面		轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。胎土はチャート(1~2mm大)を含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/8
46	土師質土器	杯		-	5.0	(1.9)	F		西斜面	III	轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。胎土はチャートと赤色粒を含む。	内外面 橙 7.5YR6/6
47	土師質土器	杯		(10.8)	(5.0)	3.1	F	B IV - 24	西斜面		轆轤成形。回転ナデ調整。胎土はチャートと石英を含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/6
48	土師質土器	杯		(9.6)	(5.0)	3.7	F	C IV - 23	竖堀 10	II	体部は直線的に立ち上がる。轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。内底に轆轤目。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 橙 5YR6/6
49	土師質土器	杯		(12.0)	(6.7)	3.2	B	D IV - 8	SB3	IV	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は上向きで尖り気味に仕上げる。轆轤成形。ナデ調整、底部回転糸きり。胎土は1mm大のチャート・細砂粒を含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/6
50	土師質土器	杯		-	(5.2)	(2.6)	E	E V - 21	東斜面	II	胎土はチャートを含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/8
51	土師質土器	杯		-	(5.2)	(1.7)	F	B IV - 23	西斜面		轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸切り。内底中央部は凸状を呈する。胎土はチャート・石英を含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/8
52	土師質土器	杯		(11.6)	(5.4)	3.1	F	B V - 5	西斜面	II	体部は斜上外方に開く。口縁部は尖り気味に仕上げる。胎土はチャートと石英を含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/8
53	土師質土器	杯		-	(5.6)	(1.6)	F	B V - 5	西斜面	II	胎土はチャートと石英を含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/8

表3 出土遺物観察表 2

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
54	土師質土器	杯		-	(5.6)	(3.1)	B	D IV - 3	曲輪 2 平場	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。底部の内面中央部は凸状を呈する。胎土は細砂粒。焼成不良。	内外面 橙 7.5YR6/6
55	土師質土器	杯		-	(6.0)	(2.3)	E	E VI - 2	東斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸切り。胎土はチャート・石英を含む。焼成不良。	内外面 橙 7.5YR6/6
56	土師質土器	杯		-	(6.0)	(2.4)	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きり。内底に轆轤目。	内外面 橙 5YR6/6
57	土師質土器	杯		11.2	6.2	3.4	A	C V - 5	西斜面	II	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。底部の中央部は凸状を呈する。胎土はチャートを含む。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/6
58	土師質土器	杯		(12.5)	(6.6)	3.6	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。口唇部は尖り気味に仕上げる。	内外面 橙 5YR6/8
59	土師質土器	杯		(12.2)	(6.6)	3.6	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。内底部は欠損して不明だが、中央部が凸状を呈するものと思われる。胎土はチャートと細砂粒。焼成不良。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
60	土師質土器	杯		(11.8)	(7.0)	3.6	B	D IV - 8	SB3	IV	轆轤成形。ナデ調整 (内面は丁寧なナデ)。回転糸きり。体部は直線的に立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。焼成不良。	内外面 橙 5YR6/4
61	土師質土器	杯		(13.4)	(9.2)	3.4	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。	内面 におい橙 7.5YR7/4 外面 におい黄橙 10YR7/2
62	土師質土器	杯		-	(5.4)	(1.8)	B	D IV - 2	SB1・2	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。内底中央部は凸状を呈する。胎土はチャートを含む。	内外面 淡黄 2.5Y8/3
63	土師質土器	杯		-	5.4	(2.6)	B	D IV - 2	SB1・2		轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。内底中央部は凸状を呈する。内外面の一部にタールが付着。胎土は細砂粒。	内面 橙 7.5YR7/6 外面 におい黄橙 10YR6/4
64	土師質土器	杯		-	(5.5)	(2.8)	A	C IV - 24	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。内底に轆轤目。	内外面 におい黄橙 10YR6/4
65	土師質土器	杯		-	(7.6)	(2.7)	B	D IV - 24	SB5	IV	体部は斜上外方に立ち上がる。轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きりで、その際に生じた段がみられる。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 橙 5YR6/6
66	土師質土器	杯		-	7.9	(2.6)	D	E IV - 4	竖堀 11	9	轆轤成形。回転ナデ調整。底部は回転糸きりで、弱い回転力による切り離し、その際に生じた糸きりの合わせ部分にズレがみられる。胎土はチャートと石英を含む。	内外面 橙 7.5YR7/6
67	土師質土器	杯		-	(7.4)	(3.2)	B	D VI - 1	竖堀 1	I	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。胎土は 1 ~ 2mm 大の礫を含む。	内外面 におい黄橙 10YR7/3
68	土師質土器	杯		(11.4)	(5.6)	3.2	A	C V - 4	西斜面	IV	轆轤成形。回転ナデ調整。回転糸きり。胎土は底部円柱づくりと同じで、チャートと石英を含む。焼成良好。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
69	土師質土器	羽釜		-	-	(2.4)	E	E V - 1	虎口状遺構		口縁部に焼成後穿孔。	内面 褐 7.5YR4/4 外面 におい赤褐 5YR5/4
70	土師質土器	羽釜		-	-	(2.5)	E	E IV - 23	竖堀 18	I	河内型とは異なる。鋳部分は丸くおさめる。内面にヘラ状工具によるナデ。胎土は石英・チャートを含む。	内外面 におい褐 7.5YR5/4
71	土師質土器	羽釜		(18.0)	-	(3.1)	B	D VI - 2	土塁 2	II	内面ハケ調整。口縁部端部は内傾する面を成す。鋳は断面三角形。	内面 灰黄褐 10YR4/2 外面 におい黄褐 10YR5/3
72	土師質土器	羽釜		(17.6)	-	(4.1)	A	C V - 25?	東斜面	II	口縁部は強いヨコナデ、鋳の退化が進む。体部はナデと平行タタキ。	内面 におい褐 7.5YR5/4 外面 褐 7.5YR4/3
73	土師質土器	羽釜		(20.2)	-	(3.7)	F		西斜面		胎土はチャートを含む。焼成不良。	内面 におい黄橙 10YR6/4
74	土師質土器	羽釜		(20.0)	-	(4.7)	E	E VI - 3	竖堀 13	IV	口縁部端部は外反する。鋳は断面三角形。体部は平行タタキ。胎土は石英を含む。	内面 浅黄 2.5Y7/3 外面 淡黄 2.5Y8/3
75	土師質土器	羽釜		(20.4)	-	(5.0)	F		西斜面	III	口縁部周辺にタールが付着。口縁部内面は強いヨコナデにより凹む。体部はナデと平行タタキ。胎土は石英・チャート・赤色粒を含む。	内外面 におい黄橙 10YR7/4
76	土師質土器	羽釜		(21.0)	-	(4.1)	B	D V - 4	SB5	II	内面の一部にタール付着。口縁部はヨコナデ、ナデにより鋳をつまみ出す。体部はヨコナデと平行タタキ。精選された胎土、石英を含む。焼成良好。	内面 におい黄橙 10YR6/4 外面 褐色 7.5YR4/3
77	土師質土器	羽釜		(24.5)	-	(6.4)	F	B IV - 22	西斜面	III	胴部内面は板状工具によるナデ。口縁部端部は内傾する面を成す。内面は強いヨコナデにより凹む。鋳以下礫が付着。体部はナデと平行タタキ。胎土は石英とチャートを含む。	内面 におい黄橙 10YR6/4 外面 におい黄褐 10YR5/3

表4 出土遺物観察表 3

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	造構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
78	土師質土器	羽釜		(20.2)	-	(4.5)	D	E III - 23	竪堀 11	マ	口縁部端部は内傾する面を成す。凹線状を3状呈する。鈔は短く反り、端部は面を成す。煤が付着。胎土は石英とチャートを含む。	内面 暗灰黄 2.5Y4/2 外面 灰黄 2.5Y5/2
79	土師質土器	羽釜		(18.6)	-	(4.7)	E	E IV - 3	東斜面	暗灰褐色	口縁部端部は内傾する面を成す。口縁部外面は凹線状になる。鈔部分は上に反る。体部は横位の削り。胎土は石英・チャートを含む。	内面 暗灰黄 2.5Y4/2 外面 浅黄 2.5Y7/3
80	土師質土器	羽釜		(20.0)	-	(5.3)	E	E VI - 6	竪堀 12	II	鈔の下からタール・煤付着。胴部外面は横方向の削り、内面は斜めのハケ。胎土は石英・チャートを含む。	内外面 におい褐 7.5YR5/4
81	土師質土器	羽釜		(20.0)	-	(6.2)	A	C V - 4 C V - 4	西斜面	IV IV	内面にヘラ状工具によるナデ。口縁部に凹線。体部に削り。鈔以下に煤付着。胎土は石英・チャートを含む。焼成は良好。	内面 明黄褐 10YR6/6 外面 におい黄橙 10YR5/3
82	土師質土器	羽釜		(22.0)	-	(6.1)	A	C IV - 24	西斜面		口縁部外面は、凹線状に3条のナデ。あとナデ（口縁部内面は斜めのハケ、胴部内面は横位のハケ）。外面鈔の下は横位のケズリ。胴部から鈔の下面タール痕。胎土は1~2mm大チャート・石英を含む。焼成不良。	内面 黄褐 2.5YR5/3 外面 黄灰 2.5Y5/1
83	土師質土器	羽釜		(22.6)	-	(4.5)	E	E IV - 19	竪堀 19	マ	内面に横方向のナデ。口縁部端部、鈔端部は丸く納める。口縁部に凹線が入る。外面鈔以下横方向の削り。胎土は石英とチャートを含む。	内外面 におい褐 7.5YR5/4
84	瓦質	火鉢		(25.8)	-	(6.7)	A	C IV - 19	西斜面	II	口縁部は内傾し、端部は面を成す。内外面に横位のナデ、体部内面に指頭圧痕、透かし。焼成不良。胎土は砂粒を含まない赤色粒。	内外面 灰 N4/
85	瓦質	火鉢		(25.4)	-	(9.1)	A	C IV - 24 C IV - 24	西斜面	IV IV	口縁部内面にナデ調整、外面はヨコナデ。体部内面はヨコナデと指頭圧痕。外面は板状工具によるタテ方向のナデ。	内面 におい黄 2.5Y6/3 外面 灰 7.5Y5/1
86	瓦質	火鉢		(34.2)	(29.8)	(9.1)	E	E VI - 6 E VI - 6	竪堀 12	II-2 III	口縁部は内湾し、端部は水平な面を成す。ナデ調整。胎土は石英とチャートを含む。	内面 明褐 7.5YR5/6 外面 におい黄橙 10YR7/4
87	瓦質	火鉢		(34.0)	(30.0)	(8.9)	E	E VI - 6	竪堀 12	III下	口縁部は内湾し、端部は水平な面を成す。	内面 明黄褐 10YR6/6 外面 におい黄橙 10YR7/4
88	瓦質	火鉢		(34.2)	-	(8.3)	E	E VI - 6	竪堀 12	III	口縁部は内湾し、端部は水平な面を成す。酸化焰焼成の瓦質と思われる。器表面は炭素吸着。内面はナデによる擦痕。	内外面 暗灰黄 2.5Y5/2
89	瓦質	火鉢		-	-	(11.7)	F	F			体部内面は板状工具によるナデ。透かし部分あり。	内面 褐灰 10YR5/1 外面 暗灰黄 2.5Y5/2
90	瓦質	火鉢脚		-	----- -	(3.9)	E	E VI - 7	竪堀 12	III下	酸化焰焼成の瓦質と思われる。内外面は炭素吸着。外底部に回転糸切りと思われる痕。平らな脚が付く。胎土は石英とチャートを含む。	内面 オリーブ黒 7.5Y3/1 外面 黄褐 2.5Y5/3
91	瓦質	風炉		(21.6)	-	(3.5)	F		西斜面		口縁部は直立し、端部は外側に拡張され水平な面を成す。口縁部内面はヨコナデ、外面は断面三角形を呈した格子状の刻み。胎土は細砂粒。	内面 におい黄橙 10YR6/4 外面 黄灰 2.5Y4/1
92	瓦質	風炉		(24.6)	-	(3.6)	F		西斜面		口縁部端部は面を成す。2条の粘土帯貼付けによる突帯間に格子状の刻みが施される。内面はヨコナデ。	内面 におい黄橙 10YR6/4 外面 暗灰黄 2.5Y5/2
93	瓦質	風炉		(28.0)	-	(5.1)	F		西斜面	III	口縁部外面に粘土帯貼付けによる突帯間に格子状の刻みが施される。胎土は細砂粒。	内面 浅黄 2.5Y7/3 外面 浅黄 2.5Y8/4
94	瓦質	風炉		(29.0)	-	(5.4)	E		東斜面		口縁部は直立し、端部は外側に拡張され水平な面を成す。口縁部外面には格子状の刻み。胎土は石英とチャートが含まれる。	内外面 浅黄 2.5Y7/3
95	瓦質	風炉		(34.0)	-	(6.6)	F	B IV - 17	西斜面	III	口縁部は直立し、端部は外側に拡張され水平な面を成す。口縁部外面には突帯を貼付け、格子状の刻みを施す。体部には透かし。	内外面 浅黄 2.5Y7/3
96	瓦質	火鉢		(11.8)	-	(3.7)	F				口縁部外面に沈線による区画帯を配し、菊花のスタンプが施される。外面に煤が付着。	内面 におい黄橙 10YR7/4 外面 浅黄 2.5Y7/4
97	瓦質	火鉢		-	-	(8.1)	A	C V - 4	西斜面	IV	口縁部は面取り。体部外面は磨き。胎土は水肥した土を使用。焼成良好。	内面 オリーブ黒 5Y3/1 外面 黒 5Y2/1

表5 出土遺物観察表 4

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
98	瓦質	播鉢		(20.0)	-	(5.1)	A	C V - 5	西斜面		口縁部は面を成し、ヨコナデ。内面に単位の細いハケ状工具による条線が認められる。胎土は石英とチャートが含まれる。焼成不良。	内面 灰 7.5Y4/1 外面 灰黄褐 10YR6/2
99	瓦質	鉢		(26.6)	-	(4.9)	F		西斜面	Ⅲ	口縁部内面端部に断面三角形の粘土帯を貼付け。上端は水平な面を成す。胎土はチャートを含む。焼成不良。	内面 淡黄 2.5Y8/3 外面 灰白 2.5Y8/2
100	瓦質	浅鉢 IV類		-	-	(6.5)	D	E IV - 5	竪堀 11	Ⅲ	内面煤付着。底部外面に1条の突帯が巡る。焼成良好。	内外面 灰白 5Y7/2
101	瓦質	火鉢		-	-	(5.0)	A	C V - 4	西斜面	Ⅳ	2条の粘土帯突帯間に唐草文が施される。内面板状工具による横方向のナデ。	内面 灰 7.5Y5/1 外面 灰 7.5Y6/1
102	瓦質	火鉢		-	-	(4.8)	E				2条突帯間に唐草文が施される。	内面 灰黄 2.5Y7/2 外面 灰黄 2.5Y6/2
103	瓦質	火鉢		-	-	(8.5)	B	D V - 12	南バンク	Ⅳ	2条突帯間に唐草文が施される。外面に離れ砂。胎土は石英とチャートが含まれる。焼成不良。	内面 におい黄 2.5Y6/3 外面 黄灰 2.5Y4/1
104	瓦質土器	火鉢		-	-	(9.5)	A	C V - 4	西斜面	Ⅱ	口縁部は内側に突出し、上部は平らな面を成す。2条突帯間に唐草文。内面はナデ調整 (ヘラか板による)。焼成良好。	内面 灰 N4/ 外面 灰 N5/ 断面 灰 N8/
105	備前	播鉢		(21.6)	(13.0)	8.0	E E E	E V - 2 E IV - 23 E IV - 4	竪堀 18 竪堀 18 東斜面	I II	口縁部は上方に短く拡張する。内面は5条一単位の条線。	内外面 明赤褐 2.5YR5/6
106	備前	播鉢		(27.0)	(14.0)	(12.0)	D	E III - 25	竪堀 11	II・III間	口縁部は上方に拡張され、外面は面を成す。回転ナデ痕が顕著。	内面 灰 10Y6/1 外面 灰黄褐 10YR5/2
107	備前	播鉢		(29.0)	-	(5.0)	F	B IV - 17	西斜面	Ⅲ	口縁部は上方に拡張され、端部は丸みを帯びる。	内面 灰 N4/ 外面 におい赤褐 2.5YR4/3
108	備前	播鉢		(29.6)	(17.4)	10.1	B	D V - 19	東斜面	Ⅱ	底部接合部に指頭圧痕。内面は使用痕が認められる。8条一単位の条線。胎土は1mm大の礫、石英・チャートを含む。在地産か?	内面 におい黄橙 10YR6/4 外面 におい褐 7.5YR5/3 断面 灰黄褐 10YR6/2
109	備前	播鉢		(31.6)	-	(7.6)	B		東斜面	I	胎土は2mm大の礫、石英・チャートを含む。在地産か?	内面 におい褐 7.5YR5/3 外面 におい赤褐 5YR5/3 断面 におい褐 7.5YR5/3
110	備前	播鉢		(28.6)	-	(12.2)	B B B B	D IV - 3 D V - 14	SB1・2 曲輪2平場 東斜面 東斜面	IV II	7条一単位の条線が、口縁直下まで施される。放射状条線が施された後、斜めに条線が施される。焼成はやや酸化焙状態。胎土は、3.5mm~7mm大の角礫を少量含む。	内面 橙 2.5YR6/6 外面 明赤褐 2.5YR5/6
111	備前	播鉢		-	-	(8.0)	B E E	D IV - 3 E VI - 1 E VI - 2	SB1・2 東斜面 東斜面	IV IV II	口縁部内面に使用痕が認められる。	内面 におい赤褐 2.5YR5/4 外面 明赤褐 2.5YR5/6 断面 におい赤褐 2.5YR5/3
112	備前	播鉢		-	-	(6.5)	A A	C IV - 24 C IV - 20	西斜面 西斜面	II	胎土は1mm大の白礫を含む。	内外面 赤灰 10R4/2 断面 灰 5Y5/1
113	備前	播鉢		(27.0)	-	(8.8)	A A A A B	C V - 4 C IV - 24 C IV - 24 D III - 23	西斜面 西斜面 西斜面 曲輪2平場	III III IV IV	内面にナデ痕が顕著、4条の掃り目、使用痕が認められる。体部内面にナデ、砂粒が動く (右回り)。胎土は1mm大の砂粒4mm大の角礫 (長石) 砂粒が多い。体部の器壁が薄い。焼成良好。	内外面 暗赤灰 2.5YR3/1 断面 におい褐 7.5YR5/3
114	備前	播鉢		(22.8)	-	(6.6)	A	C IV - 20	西斜面	II	胎土は1mm~2mm大の角礫含む。	内外面 赤褐 10R4/3 断面 灰黄 2.5Y7/2
115	備前	播鉢		(24.0)	-	(5.9)	B	D IV - 15	曲輪2平場 Pit 1	マ	胎土は1mm大の角礫を含む。	内面 黄灰 2.5Y6/1 外面 褐灰 7.5YR5/3 断面 褐灰 7.5YR5/2
116	備前	播鉢		(26.8)	-	(5.5)	A B	D IV - 11 D IV - 19	曲輪1平場 SB4	I I	体部下半生焼け。	内外面 赤灰 10YR4/2 断面 赤灰 10YR4/2
117	備前	播鉢		(30.4)	-	(6.0)	A A	C V - 4 C V - 4	西斜面	III III	5条1単位の斜位の掃り目が口唇部まで施される。内外面とも轆轤ナデ調整 (右回転)。使用痕あり。焼成不良。胎土には1mm大、3mm大、8mm大の礫が含まれる。体部の器壁は厚い。	内外面 灰褐 5YR4/2 断面 暗赤褐 5YR3/2
118	備前	播鉢		-	-	(5.8)	B	D IV - 2	SB1・2	IV	口縁部は丸みを帯びながら上方に拡張される。口縁端部は内傾する面を成す。胎土は精緻、水肥された粘土で角礫は含まない。	内面 灰褐 5YR4/2 外面 暗黄灰 2.5Y5/2 断面 黄灰 2.5Y4/1、 黄灰 2.5Y5/2
119	備前	播鉢		(25.0)	-	(11.7)	F F F F	B IV - 25 B IV - 22	西斜面 西斜面 西斜面	マ III III III	8条一単位の幅広の条線。口縁部外面に1条の沈線。胎土は細砂粒で礫は含まない。焼成は酸化焙焼成。	内外面 浅黄橙 10YR8/4

表6 出土遺物観察表 5

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	造 構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
120	備前	播鉢		(29.8)	-	(5.5)	B D D	D IV-9 F IV-2 E III-25	SB3 壱堀 11 壱堀 11	IV II II	ナデ調整。口縁部は丸みを帯びながら上方に拡張され、端部は内傾する面を成す。口縁部外面は強い凹線あり。8条一単位の播り目(細く深い条線)。胎土は精緻、水肥された粘土で角礫含まない。	内面 褐灰 5YR4/1 外面 灰赤 2.5YR4/2 断面 灰黄褐 10YR4/2、 灰 5Y6/1
121	備前	播鉢		-	(14.2)	(10.7)	E E E E E	E VI-1 E VI-2 E VI-2 E V-22	東斜面 東斜面 壱堀 13	V IV IV	底部に直径 5 mm 前後を測る研磨痕が認められる。転用か。	内面 灰赤 2.5YR4/2 外面 におい橙 2.5YR6/4
122	備前	播鉢		(36.0)	-	(7.2)	F F F F	B V-5 B V-4 B IV-25	西斜面	II III	条線が口縁部内面まで施される。	内面 におい赤褐 2.5YR5/3 外面 におい赤褐 2.5YR5/4
123	備前	播鉢		(28.6)	-	(6.3)	B E D D	E IV-21 E VI-3 E VI-5 F VI-2	東斜面 壱堀 13 壱堀 11 壱堀 11	II IV II	8条一単位の条線が口縁部直下まで施される。口縁部は赤褐色、体部は生焼け。	内外面 におい赤褐 5YR4/3 断面 におい赤褐 5YR4/3
124	備前	播鉢		-	(14.0)	(10.6)	A A C E	C IV-20 C IV-20 C IV-19 E III-23	西斜面 西斜面 西斜面 壱堀 11	IV IV I III	内外面ともナデが顕著。胎土は水肥された粘土、角礫含まない。	内面 褐 7.5YR4/3 外面 におい赤褐 2.5YR5/3 断面 におい赤褐 2.5YR5/3
125	備前	播鉢		-	(14.0)	(5.7)	B B B D D E	D IV-3 D IV-9 D IV-2 E III-24 E III-21 E IV-2	SB1・2 SB3 SB1・2 壱堀 11 壱堀 11 東斜面	IV IV IV X	10条一単位の条線が放射線状に施される。焼成は酸化焰。胎土は 5 mm ~ 8 mm 大の角礫含む。	内面 明赤褐 2.5YR5/6 外面 におい褐 7.5YR5/3 断面 灰 10Y6/1
126	備前	播鉢		-	-	(7.5)	B D E	D V-22 E III-23 F IV-6	西斜面 壱堀 11 東斜面	I 縦断 IVマ	底部から体部下半にかけて条線が交差する。	内面 におい赤褐 5YR4/3 外面 褐灰 7.5YR4/1 断面 におい赤褐 5YR4/4
127	備前	播鉢		-	-	(11.1)	B B D E	D IV-10 D IV-10 D IV-3 E III-23・ IV3・FV-12	東斜面 東斜面 SB1・2 壱堀 11 東斜面	表 I I IV上 マ II	体部中位で条線が交差する。	内面 明赤褐 2.5YR5/6 外面 におい橙 5YR6/3 断面 橙 5YR6/6
128	堺	播鉢		(16.0)	-	(4.2)	D	F III-19	東斜面	II I直 下	口縁部内面に 1 条の沈線。外面は 2 条の凹線、目赤褐色。10条 1 単位の条線が全面に入る。	内外面 赤褐 10R4/4
129	備前	壺		(13.0)	-	(3.9)	A	D V-12	東斜面		口縁部は直立気味であり、端部は丸く納めた玉縁状を呈する。胎土は 1 ~ 3 mm 大長石含む角礫。	内外面 暗赤褐
130	備前	壺		(10.6)	-	(10.6)	D D D D	F IV-2 F IV-2 F IV-2 F IV-3	壱堀 11	II ? II II II	胴部は球形を呈し、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は玉縁状を呈する。	内面 褐灰 10YR5/1 外面 灰褐 5YR4/2
131	備前	壺		(12.2)	-	(5.0)	F F		西斜面	III	口縁部は直立気味に短く立ち、端部は外側に短く折れる。体部外面に自然釉。	内面 灰 N5/ 外面 浅黄 5Y7/3
132	備前	壺		(21.0)	-	(3.1)	A	D V-1	曲輪 1 平場		内外面とも横位のナデ。口縁部は玉縁状を成す。胎土は角礫を含まない。	内面 灰 N4/ 外面 暗赤灰 2.5YR3/1
133	備前	水屋甕		(19.4)	-	(3.7)	F	B V-5	西斜面	I	口縁部は短く直立し、端部は外側に短く拡張され面を成す。ナデ調整。	内面 におい赤褐 5YR4/3 外面 黒褐 10YR3/2
134	備前	水屋甕		(19.4)	-	(7.0)	F F	C V-5	西斜面		口縁端部は外側に短く拡張され、面を成す。ナデ調整。	内面 灰褐 5YR5/2 外面 灰褐 5YR4/2
135	備前	壺		-	胴径 25.9	(21.2)	F F F F	B V-5 B IV-24 B V-4	西斜面	I I- II	胴部中位から上位にかけて櫛描きによる波状文、条線が施される。	内面 灰 5Y5/1 外面 オリーブ黒 5Y3/1
136	備前	甕底部		-	(27.5)	(21.0)	D D D E E E E E E E E	F IV-1 F IV-2 E IV-2 E VI-6 E V-22 E V-22 E V-22 E V-22 E V-22 E V-22 E VI-2	壱堀 11 壱堀 11 壱堀 11 東斜面 壱堀 12 壱堀 13 壱堀 13 壱堀 13 壱堀 13 壱堀 13 壱堀 13 壱堀 13	II II IV III	胴部外面は板状工具によるナデ。内面は横位のナデ。	内面 褐灰 10YR4/1 外面 明赤褐 2.5YR5/6

表7 出土遺物観察表 6



図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	造構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
137	備前	甕底部		-	(20.9)	(10.6)	A A A A A F F F F F F F	C IV - 20 C IV - 19  C III - 23 C V - 3 B V - 5 B V - 5 B IV - 24 B IV - 24	西斜面 西斜面 竪堀 7 西斜面 西斜面 西斜面 西斜面		胴部外面はハケ調整。底部脇は横位のナデ調整。内面ハケ調整。	内面 灰 5Y4/1 外面 灰赤 10R4/2
138	備前	甕底部		-	(17.0)	(18.4)	F F F F F	B V - 5 B V - 5 B IV - 23	西斜面 西斜面 西斜面	I II	胴部下半はやや膨らむ。内外面とも横位のナデ調整。	内面 灰褐 5YR4/2 外面 灰黄 2.5YR6/2
139	備前	甕		-	-	(12.5)	D D D D D	D IV - 11 E III - 25 F IV - 2 F IV - 3 F IV - 2	曲輪 1 平場 竪堀 11 竪堀 11 竪堀 11 竪堀 11	上 40 cm TR2&3m II II II	口縁部は短く直立し、外側に折り曲げ玉縁状を呈する。ナデ調整。	内面 黄灰 2.5Y4/1 外面 褐 7.5YR4/3
140	備前	甕		-	-	(10.9)	F	C III - 25	SX3	I	口縁部は直立し、外面は面を成す。ナデ調整。	内面 灰褐 5YR4/2 外面 黄灰 2.5YR4/1
141	備前	甕		-	-	(7.5)	A A	D IV - 11	曲輪 1 平場	I	口縁部は外側に折り曲げ外面は面を成す。ナデ調整。	内面 黄灰 2.5YR5/1 外面 黄灰 2.5YR4/1
142	備前	甕		-	-	(5.5)	F	B V - 4	西斜面	II	口縁内面が平らな面を成す。ナデ調整。	内面 灰褐 5YR5/2 外面 灰赤 2.5YR4/2
143	備前	甕		(26.2)	-	(9.4)	E D D	E VI - 2 F IV - 2 F IV - 3	東斜面 竪堀 11 竪堀 11	IV II II	口縁部は内径し、断面四角形を呈する。ナデ調整。	内面 赤褐 10R5/3 外面 赤褐 10R4/3
144	備前	甕		(37.7)	-	(7.3)	F	C IV - 8	竪堀 6	II	口縁部は折り曲げ、玉縁状を呈する。	内外面 橙 2.5YR6/6
145	備前	甕		(39.1)	-	(6.9)	E	E VI - 1	東斜面	IV	口縁部は短く直立し、断面四角形を呈する。	内外面 におい橙 5YR6/3
146	備前	甕		(42.0)	-	(6.6)	A E	D V - 6 E VI - 1	曲輪 1 平場 東斜面	I II - 2	口縁部は直立し、玉縁状を呈する。	内外面 暗赤褐 5YR3/3
147	備前	甕		(31.5)	-	(8.6)	B D D	D V - 19 E III - 24 F IV - 2	東斜面 竪堀 11 竪堀 11	II II・III 間 II	口縁部は直立し、断面四角形を呈する。ナデ調整。	内面 におい赤褐 2.5YR5/4 外面 におい赤褐 2.5YR4/4
148	備前	甕		(38.0)	-	(13.5)	D D D E E E	E III - 24 E III - 25 F IV - 3 D VI - 4 E VI - 6 E VI - 6	竪堀 11 竪堀 11 竪堀 11 東斜面 竪堀 12 竪堀 12	II I III 下 III	口縁部は短く直立し、外側に折り曲げ玉縁状を呈する。頸部は強いナデにより凸状を呈する。	内面 におい赤褐 2.5YR5/4 外面 におい赤褐 2.5YR4/3
149	備前	甕		(31.0)	-	(20.1)	D D D D D D D D D F	E III - 25 F IV - 2 F IV - 2 E VI - 5	竪堀 11 竪堀 11 竪堀 11 竪堀 11	II・III III	口縁部は短く直立し、内面は面を成す。頸部は強い横ナデにより凹む。胴部外面に「大」の字と思われるヘラ記号がみられる。ナデ調整。	内面 におい橙 7.5YR6/4 外面 におい赤褐 2.5YR5/4
150	備前	甕		(33.0)	-	(22.3)	F F F F	B V - 5 B V - 5 B V - 5 B IV - 24	西斜面	I II II II	口縁部は短く直立し、内面は面を成す。頸部は強い横ナデにより凹む。ナデ調整。	内面 におい赤褐 5YR5/3 外面 におい赤褐 5YR4/3
151	備前	甕		(33.2)	-	(39.7)	A A A A A A A A A A A A A A A A B B B F	D IV - 11 D IV - 11 D IV - 16 D IV - 11 D IV - 11 D IV - 11 D IV - 11 D IV - 11 D IV - 11 D IV - 11 D IV - 16 D IV - 16 D IV - 16 D V - 23 D IV - 3 D IV - 3 C IV - 9	曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 西斜面 西斜面 西斜面 東斜面 SB1・2 竪堀 6		寸胴形の胴部から緩やかに内湾し、口縁部は短く直立する。口縁外面はやや内傾する面を成す。全体的に横位のナデ調整が施され、頸部直下には指押さええの痕が連続する。	内面 暗赤褐 2.5YR3/3 外面 灰褐 7.5YR4/2
152	備前	甕底部		-	(25.4)	(5.4)	A A A A F F F	D IV - 16 D IV - 16 D IV - 11 C IV - 23 C V - 3	曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 曲輪 1 平場 竪堀 10 竪堀 9 西斜面	I I I II	内外面とも板状工具によるナデ調整。	内面 褐灰 7.5YR4/1 外面 褐 7.5YR4/3

表 8 出土遺物観察表 7



図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	造構	層位	特徴(成形・調整・文様)	色調(釉調)
153	備前	甕底部		-	(30.5)	(7.8)	A	D IV - 16	曲輪1平場	I	外面はハケ調整、内面はナデ調整が施される。	内面 におい黄橙 25YR6/4 外面 明赤褐 5YR5/6
						A	D IV - 16	曲輪1平場	I			
						A	D IV - 16	曲輪1平場	II			
						A	C IV - 19	西斜面	IV			
						B	D IV - 3	SB1・2	I			
						B	D IV - 2	SB1・2	II			
						B	D III - 23	曲輪2平場	II			
						F	B V - 5	西斜面	II			
						F	C III - 25	SX3	II			
154	備前	甕底部		-	(32.0)	(11.3)	F	B V - 4	西斜面	I	外面はハケ調整、底部脇はナデ調整が施される。内面はナデ調整が施される。	内面 橙 7.5YR7/6 外面 灰黄褐 10YR6/2
						F	B V - 5	西斜面	II			
						F	B V - 4	西斜面	II			
						F	B V - 4	西斜面	II			
						F	B V - 4	西斜面	II			
						F	B IV - 23	西斜面	II			
155	備前	甕底部		-	(34.4)	(4.0)	D	E III - 24	堅堀 11	X	底部と胴部の接合部が沈線状に凹む。	内面 灰白 5Y7/2 外面 灰 5Y6/1
						D	F IV - 3		II			
156	備前	甕底部		-	(31.4)	(16.1)	D	E III - 24	堅堀 11	II・III	平らな底部からやや膨らみ斜上方に立ち上がる。板状工具によるナデ調整。	内面 におい橙 5YR6/3 外面 明赤褐 25YR5/6
						D	F IV - 1	堅堀 11	間			
						D	E IV - 5	堅堀 11	II			
						D	E III - 25	堅堀 11	III			
						D	F IV - 1	堅堀 11	IV			
						D			II			
						E	D VI - 4	東斜面	I			
						E	E VI - 6	堅堀 12	III - 2			
						E	E VI - 7	堅堀 12	III			
						E	D VI - 10	堅堀 12	II			
						E	D VI - 5	東斜面	II			
						E	E VI - 6	堅堀 12	II			
						E	E VI - 1	東斜面	III			
						E	E VI - 7	堅堀 12	I			
						E	E VI - 6	堅堀 12	II - 2			
157	備前	甕底部		-	(34.8)	(31.6)	A	D IV - 16	曲輪1平場	I	外面板状工具による縦位のナデ調整、内面は横位のナデ調整が施される。	内面 黄灰 2.5YR5/1 外面 黒褐 10YR2/2
						A	D IV - 11	曲輪1平場	I			
						A	D IV - 16	曲輪1平場	I			
						A	D V - 6	曲輪1平場	I			
						A	D IV - 11	曲輪1平場	I			
						A	D IV - 16	曲輪1平場	I			
						A	D IV - 11	曲輪1平場	II			
						A	D IV - 16	曲輪1平場	II			
						A	C IV - 20	曲輪1平場	II			
						A	C IV - 19	西斜面	IV			
						A	C IV - 19	西斜面	I			
						A	D IV - 1	西斜面	II			
						A	D IV - 11	曲輪1平場				
						B	D V - 8	曲輪2平場	I			
						F	C III - 25	西斜面	I			
						F	C III - 25	西斜面	II			
						F	C IV - 4	堅堀 7	II			
						F	C IV - 9	堅堀 6・7	II			
						F	C IV - 8	堅堀 6	II			
						F	C III - 24	堅堀 7	II			
						F	C IV - 8	堅堀 6	II			
						F	C IV - 8	堅堀 6	II			
						F	C IV - 13	西斜面	I			
						F	C IV - 8	堅堀 6	II			
						F	C IV - 8	堅堀 6	II			
						F	C V - 1	西斜面				
						F	B IV - 25	西斜面	II			
						F	C III - 25	西斜面	II			
						?						
158	備前	甕	I	61.7	-	(76.6)	A	D IV - 11	曲輪 1 SK 1		上部が膨らみ、口縁部は外反する。口縁端部は外側に短く折り曲げ玉縁状を呈する。内面に研磨痕。	内面 暗赤褐 2.5YR3/2 外面 暗赤褐 2.5YR3/3
159	備前	甕底部		-	(37.4)	(22.9)	D	E VI - 6	堅堀 11	マ	底部と胴部の接合部が沈線状に凹む。外面は板状工具による縦位のナデ、内面は横位のナデ調整。	内面 におい赤褐 2.5YR5/3 外面 褐灰 10YR5/1
						E	E VI - 6	堅堀 12	III			
						E	E VI - 6	堅堀 12	III下			
						E	E VI - 6	堅堀 12	III下			
						E	E VI - 6	堅堀 12	III下			
160	青磁	稜花瓶	I	-	-	(20)	A	D V - 1	曲輪 1 平場	I	口縁部端部には抉りが入り、内面には波状文が施される。精選された胎土。焼成良好。釉薬は丁寧に施されているが、二次被熱を受けている。	釉調 灰オリーブ 5Y6/2 断面 灰黄 2.5Y6/2

表9 出土遺物観察表 8

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
161	青磁	稜花皿	I	(11.8)	-	(1.9)	A	D IV - 16	曲輪1 平場	I	口縁部端部には挟りが入り、内面には波状文が施される。粗成1mm以下の砂粒含む。焼成良好。釉調は二次被熱を受け白濁する。内外面とも体部下半は露胎。	釉調 断面 灰オリーブ 7.5Y6/2 灰白 5Y7/2
162	青磁	稜花皿	I	(11.0)	-	(2.0)	B	D V - 23	土塁2	II ?	口縁部端部には挟りが入り、内面には波状文が施される。粗成1mm以下の砂粒含む。焼成良好。釉調は二次被熱を受け白濁する。全面施釉。	釉調 断面 灰オリーブ 5Y6/2 灰白 2.5Y7/2
163	青磁	稜花皿	I	(12.2)	-	(1.6)	B A D E	D IV - 3 C IV - 14 東斜面 F IV - 18 東斜面	SBI・2 西斜面 東斜面 東斜面	IV I 排土 II	内面は3条を基調とする波状文。透明感のある釉薬が全面施釉され、貫入が認められる。胎土は土質。	釉調 断面 オリーブ灰 5GY6/1 灰白 5Y7/2
164	青磁	稜花皿	I	(13.0)	-	(2.3)	B B	D IV - 3 D III - 22	SBI・2 土塁1	II III	内面には、波状文と草花風の文様が施される。貫入がはいる。胎土は土質。	釉調 断面 明オリーブ灰 5GY7/1 灰黄 2.5Y7/2
165	青磁	稜花皿	I	(14.4)	-	(3.0)	E		東斜面 竪堀群	表採	内面は波状文。内底部は露胎。二次被熱により白濁する。胎土は黒。	釉調 断面 灰 7.5Y6/1 暗灰黄 2.5Y5/2
166	青磁	稜花皿	I	(11.4)	-	(2.5)	A	C IV - 19	西斜面	IV	内面に波状文が施される。内面見込みに界線。	釉調 断面 灰オリーブ 7.5Y6/2 灰白 10Y7/1
167	青磁	稜花皿	I	(10.8)	-	(2.0)					内面は波状文くずれ。胎土は土質。	釉調 断面 灰オリーブ 7.5Y6/2 灰白 2.5Y7/1
168	青磁	稜花皿	I	(10.6)	-	(3.1)	F	C V - 11	西斜面	I	口縁部内面に波状文、体部内面に草花文。見込に界線。全面施釉。貫入がはいる。胎土は土質。	釉調 断面 オリーブ灰 にぶい黄橙 10YR7/3
169	青磁	稜花皿	I	(10.8)	-	(1.8)	E	D VI - 10	東斜面	II	二次被熱を受けている。貫入がはいる。釉調は黄色っぽい。	釉調 断面 オリーブ灰 2.5GY6/1 灰 5Y6/1
170	青磁	稜花皿	I	(13.0)	-	(2.7)	F	C V - 7	竪堀 8	I	内面にはっきりとした波状文が施される。	釉調 断面 明緑灰 7.5GY6/1 灰白 10YR8/2
171	青磁	稜花皿	I	(11.6)	4.5	2.8	B B F	C IV - 25 C IV - 25 C III - 10	西斜面 西斜面 西斜面	II II II	内面に波状文は施されない。二次被熱により釉薬が溶解し、白濁する。内底部露胎。外底中央部は凸状を呈する。	釉調 断面 灰黄 2.5Y6/2 浅黄 2.5Y7/3
172	青磁	稜花皿	I	(11.0)	(4.6)	3.1	E E	E V - 22 E V - 22	竪堀 13 竪堀 13	IV IV	口縁内面はヘラ描きによる1条の波状文。体部には櫛描きによる波状文が施される。内底見込と外底は露胎。二次被熱により、釉が白濁する。	釉調 断面 明黄褐 10YR7/6 にぶい黄橙 10YR7/4
173	青磁	稜花皿	I	(12.4)	-	(1.8)	A A F	D IV - 11 D IV - 16	曲輪1平場 曲輪1平場	I	内面には波状文は施されない。胎土は黒っぽい。二次被熱を受けている。	釉調 断面 灰白 7.5Y7/17.5Y7/2 灰 5Y6/1
174	青磁	稜花皿	I	(11.4)	高台径 (4.0)	2.6	A F	D IV - 1 C III - 25	曲輪1平場 西斜面	II II	内面に4条を基調とする波状文くずれ。全体的に透明感のある釉薬が高台外面まで全面施釉。内底部は露胎。外底中央部は凸状を呈する。	釉調 断面 オリーブ灰 5GY6/1 灰白 N6/
175	青磁	稜花皿	I	11.0	4.2	2.6	A A F F F F	C IV - 6 C IV - 5 C III - 25 B V - 5 B V - 4 C III - 9	西斜面 西斜面 西斜面 西斜面 西斜面 西斜面	II II II II II	内面に4条を基調とする波状文くずれ。全体的に透明感のある釉薬が高台外面まで全面施釉。内底部は露胎。胎土は黒っぽい。	釉調 断面 オリーブ灰 5GY5/1 灰 7.5Y6/1
176	青磁	稜花皿	I	(11.4)	-	(1.9)	D	F IV - 3	竪堀 11	II	口縁部内面に草花文、端部の波状文は認められない。	釉調 断面 灰オリーブ 7.5Y5/2 灰 N6/
177	青磁	稜花皿	II	11.6	4.8	3.2	B E F	D III - 24 E VI - 2	東斜面 東斜面 西斜面	I	三条を基調とする波状文が口縁内面に施される。見込みに1条の界線が施される。全面施釉。高台内面及び外底部は削りだし、中心部が凸状の露胎。焼成良好。	釉調 断面 オリーブ灰 2.5GY6/1 灰 7.5Y6/1
178	青磁	稜花皿	II	(12.2)	(4.6)	3.7	B B	D IV - 4 C VI - 7	土塁1 堀切 6	IV マ	内面に3条を基調とする波状文が施される。内底見込みに1条の界線が巡る。外底中央部は凸状を呈する。全体的に黄色っぽいオリーブ色の釉が高台外面まで全面施釉される。二次被熱を受けている。胎土は土質。	内外面 断面 明黄褐 2.5Y6/6 橙 7.5YR7/6
179	青磁	稜花皿	II	(12.4)	-	(2.6)	A A A C	D IV - 11 D IV - 6 C IV - 5 C VI - 17	曲輪1平場 曲輪1平場 西斜面 東斜面	II II II 最下層	内面には波状文は施されない。釉薬は二次被熱を受け白濁する。胎土は土質。	釉調 断面 浅黄 2.5Y7/3、 にぶい黄 2.5Y6/3 浅黄 2.5Y7/4
180	青磁	稜花皿	II	-	(4.4)	(1.8)	A F	C IV - 19 C IV - 13	西斜面 西斜面	IV I	内底部に轆轤目が認められ、凹状の部分に釉薬が溜まる。外底部は雑な削り出し。胎土は土質。	釉調 断面 オリーブ灰 2.5GY6/1 灰黄 2.5Y7/2

表 10 出土遺物観察表 9

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
181	青磁	丸皿	Ⅲ	(10.8)	(4.5)	2.4	A B F F	D IV - 6 D IV - 3 C III - 25 C III - 9	曲輪1平場 SB1・2 西斜面 西斜面	Ⅱ Ⅳ Ⅱ Ⅱ	内底部見込みは露胎。外底部高台の一部にトチンの跡。	釉調 灰オリーブ 7.5Y5/2 断面 灰 7.5Y5/1
182	青磁	丸皿	Ⅲ	(11.0)	(6.4)	3.7	A A F	C V - 4 C V - 5 B IV - 22	西斜面 西斜面 西斜面	I I I・II	高台内底及び外底まで全面施釉。尖り気味の高台が付く。内面見込みに界線。細い貫入がはいる。胎土は土質。	釉調 オリーブ灰 5Y6/4 断面 淡黄 2.5Y8/3
183	青磁	丸皿	Ⅲ	(12.0)	-	(2.5)	B	D IV - 3	SB1・2	Ⅳ	口縁部は僅かに外反する。	釉調 オリーブ灰 10Y6/2 断面 灰白 5Y7/1
184	青磁	丸皿	Ⅲ	-	-	(2.8)	B	D III - 23	土壘 1	Ⅱ	内面は貫入が認められる。胎土は長石のような礫を含む。	釉調 オリーブ灰 10Y6/2 断面 灰白 7.5Y8/1
185	青磁	丸皿	Ⅲ	(11.2)	-	(2.1)	A F F	C IV - 10 B V - 5	西斜面 西斜面 土壘1西下	Ⅱ I	口縁部は直線。全面施釉、二次被熱により黄色っぽく変色。	釉調 灰オリーブ 10Y5/2 断面 灰白 2.5Y7/1
186	青磁	丸皿	Ⅳ	(14.4)	-	(2.3)	F	B IV - 23	西斜面	Ⅱ	無文。口縁部は王冠状に肥厚する。	釉調 オリーブ灰 10Y6/2 断面 灰白 N8/
187	青磁	皿底部	Ⅳ	-	(5.0)	(1.5)	E	E V - 22	堅堀 13	Ⅳ	内底露胎、外面は高台外まで施釉。断面胎土は土質。	釉調 にぶい黄橙 10YR7/4 断面 浅黄橙 10YR8/3
188	青磁	皿底部	Ⅳ	-	(5.4)	(1.6)	E	E VI - 7	堅堀 12	Ⅲ下	内底部見込みに一条の界線。外底蛇ノ目釉剥き。胎土は土質。	釉調 オリーブ灰 10Y6/2 断面 灰黄 2.5Y7/2
189	青磁	碗	B 群	-	(5.6)	(2.3)	A	C V - 4	西斜面	Ⅱ	内面見込みに草花風の文様。高台内面まで施釉し、外底は露胎。二次被熱を受けている。胎土は土質。	釉調 オリーブ灰 10Y6/2 断面 灰黄 2.5Y7/2
190	青磁	碗	B 群	-	(5.2)	(2.5)	E	E VI - 6	堅堀 12	Ⅲ下	内底見込みは露胎。外面は高台外面まで施釉。内底見込及び外底部は露胎。	釉調 明緑灰 7.5GY7/1 断面 灰白 2.5Y8/2
191	青磁	碗	B II 群	-	-	(2.6)		曲輪 2 平場			片切彫による幅広の蓮弁文。	釉調 オリーブ灰 10Y5/2 断面 灰白 10Y7/1
192	青磁	碗	B II 群	(19.2)	-	(4.2)	E	E IV - 2	TR6	マ	幅広の蓮弁文、中心の鑄はない。草花文。	釉調 灰オリーブ 7.5Y4/2 断面 灰白 N7/
193	青磁	碗	B II 群	-	(6.3)	(3.8)	E E	E VI - 6 F IV - 6	東斜面 東斜面	Ⅱ マ	外面丸鑿状工具による蓮弁文。内面は草花風の文様が陰刻される。	釉調 明緑灰 10GY8/1 断面 灰白 2.5Y8/2
194	青磁	碗	B II 群	-	(5.0)	(5.5)	D E E	E III - 23 E IV - 23 E IV - 4	堅堀 11 東斜面 東斜面	マ I II	外面幅広の蓮弁文。内面見込みに印花文。高台外面まで全面施釉。高台内面は露胎。酸化焰により赤褐色を呈する。	釉調 オリーブ灰 10Y5/2 断面 灰白 2.5Y7/1
195	青磁	碗	B III 群	(14.7)	-	(6.7)	F F A	C IV - 4 C IV - 4 C IV - 5	堅堀 7 堅堀 7 西斜面	Ⅱ Ⅱ Ⅱ	片切彫りの蓮弁文、剣頭と蓮弁の単位はやや不揃い。貫入が認められる。胎土は土質。	釉調 灰オリーブ 7.5Y5/2 断面 灰白 2.5Y7/1
196	青磁	碗	B III 群	(11.5)	-	(4.1)	F F	B V - 5	西斜面	Ⅱ	片切彫による蓮弁文、蓮弁の単位は揃う。比較的釉は厚く施釉される。二次被熱を受け、気泡ができています。胎土は磁器、精緻。	釉調 灰オリーブ 7.5Y5/2 断面 灰白 2.5Y8/1
197	青磁	碗	B III 群	(13.0)	-	(4.2)	F	B IV - 18	西斜面	Ⅲ	片切彫りによる蓮弁文。剣頭と蓮弁の単位にズレ。内面は細い貫入。胎土は精緻。	釉調 灰オリーブ 10Y6/2 断面 灰黄 2.5Y7/2
198	青磁	碗	B III 群	(16.5)	-	(3.0)	D	E III - 16	堅堀 11	マ	片切彫りによる蓮弁文。	釉調 暗オリーブ 5Y4/3 断面 灰白 5Y7/1
199	青磁	碗	B III 群	-	(4.8)	(3.0)	F F	B V - 5	西斜面	I 排土	外面片切彫りによる蓮弁文。	釉調 オリーブ灰 10Y5/2 断面 灰白 5Y7/1
200	青磁	碗	B IV 群	-	-	(3.0)	A	C IV - 24	西斜面	Ⅱ	線描き細蓮弁文。貫入がはいる。	釉調 オリーブ灰 2.5GY6/1 断面 灰 5Y6/1
201	青磁	碗	B IV 群	(12.4)	-	(3.8)	A A	D V - 1 D V - 6	曲輪 1平場	I I	外面は線描きによる蓮弁文、蓮弁の単位不規則。内面は無文。二次被熱を受けている。	釉調 オリーブ灰 2.5GY6/1 断面 灰 5Y6/1
202	青磁	碗	B IV 群	(15.2)	-	(3.9)	A	D V - 11	曲輪 1 平場		外面片切彫りによる蓮弁文。釉調は薄く、二次被熱のためか一部白濁する。	釉調 灰オリーブ 7.5Y5/2 断面 灰オリーブ 7.5Y6/1
203	青磁	碗	B IV 群	(14.6)	-	(5.0)	F E B E E E	B IV - 23 E VI - 1 D IV - 4 E IV - 9 E IV - 9	西斜面 東斜面 曲輪 2平場 東斜面 東斜面	Ⅱ I I I 排土	片切蓮弁文の単位がずれる。全体的に薄く施釉されており、外面体部下半は横位の削り痕が認められる。	釉調 オリーブ灰 5GY6/1 断面 灰 7.5Y6/1
204	青磁	碗	B IV 群	(15.6)	-	(4.7)	C F A	D VI - 1 C V - 3	堅堀 1 西斜面	マ I	透明感のある釉薬が全面施釉され、貫入が細かく入る。	釉調 オリーブ灰 5GY6/1 断面 灰 5Y6/1
205	青磁	碗	B IV 群	(13.4)	-	(4.9)	E E E E E	E VI - 6 E VI - 6 D VI - 10 E VI - 6 E VI - 6	堅堀 12 堅堀 12 堅堀 12 堅堀 12 堅堀 12	Ⅲ Ⅱ-2 Ⅱ I I	剣先蓮弁文、剣頭と蓮弁の単位ややずれが生じる。体部下位に一条の界線。透明感のある釉が全面施釉される。貫入が認められる。	釉調 緑灰 7.5GY6/1 断面 灰白 N8/
206	青磁	碗	B IV 群	(15.4)	-	(3.3)	E E	E V - 7 E V - 1	堅堀 17 虎口状遺構下	マ Ⅱ?	線描き蓮弁文、蓮弁の単位と剣頭が揃っていない。	釉調 灰オリーブ 7.5Y4/2 断面 灰 N6/

表 11 出土遺物観察表 10

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
207	青磁	碗	B IV群	(14.0)	-	(3.9)	B	D IV - 9	SB3	I	片切彫による蓮弁文。透明感のある釉薬が全面施釉される。貫入がはいる。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 5Y7/2
208	青磁	碗	B IV群	(13.6)	-	(5.6)	B	D IV - 1	西斜面	II	片切彫による剣先蓮弁文。	釉調断面 灰オリーブ 7.5Y6/2 灰白 5Y7/2
209	青磁	碗	B IV群	(14.0)	-	(4.4)	A	C IV - 24	西斜面	II	外面は片切彫による蓮弁文、蓮弁の単位不規則。内面は無文。釉調は透明感のある釉が薄く施される。	釉調断面 灰オリーブ 7.5Y5/2 黄灰 2.5Y6/1
210	青磁	碗	B IV群	(14.0)	-	(2.3)	B	D III - 23	土壘 1	II	剣先と蓮弁の単位がずれる。	釉調断面 明緑灰 10GY7/1 灰白 7.5Y7/1
211	青磁	碗	B V群	(12.0)	-	(4.3)	F F	B V - 5	西斜面 西斜面	II VI-I	細蓮弁文。片切彫による蓮弁文。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 5Y7/1
212	青磁	碗	B V群	(11.6)	-	(2.6)	E	D V - 25?	東斜面	表採	細蓮弁文。片切彫による蓮弁文。	釉調断面 灰オリーブ 7.5Y4/2 灰白 N8/
213	青磁	碗	B V群	(12.4)	-	(3.4)	E E	E VI - 1 E V - 22	東斜面 竪堀 13	II V	片切彫による蓮弁文、剣頭は施されない。非常に細い貫入がはいる。	釉調断面 明緑灰 7.5GY7/1 灰白 5Y7/2
214	青磁	碗	B V群	(13.5)	(5.2)	8.1	E D E	E V - 22 E III - 25 E V - 21	竪堀 13 竪堀 11 東斜面	IV (X') V	丸鑿状工具による蓮弁文、剣頭は線描きによるが単位はバラツキがある。高台内面まで全面施釉、外底部は蛇の目釉剥き。	釉調断面 灰白 10Y7/2、 灰オリーブ 5Y6/2 明黄褐 10YR7/6
215	青磁	碗	C群	(14.0)	-	(2.6)	A	D IV - 7	東斜面	I	口縁部外面に1条の界線(雷文帯の一部)が認められる。貫入がはいる。	釉調断面 灰オリーブ 5Y4/2 灰 5Y6/1
216	青磁	碗	C群	-	-	(2.5)	B	D IV - 19	SB4	I	内面は口縁部から2条の垂下する沈線が認められる。外面はやや稜をなす部分あり。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 10Y7/1
217	青磁	碗	C群	-	(4.8)	(2.5)	D D D	E III - 23 E III - 23 E III - 23	竪堀 11 竪堀 11 竪堀 11	マ 図VI 図VI	見込みに蓮花文が施される、陰刻花文。釉は高台内面途中まで施される。外底は露胎。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰黄 2.5Y7/2
218	青磁	碗	C群	-	(4.0)	(2.2)	F	B IV - 24	西斜面	マ	見込み中央に菊花状のスタンプ文。釉は高台内面まで全面施釉。高台は尖り気味。	釉調断面 オリーブ灰 10Y6/2 灰白 2.5Y7/1
219	青磁	碗	C群	(12.4)	-	(3.1)	E		竪堀 11 南	排土	口縁部は雷文帯、体部は草花文が施されている。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 5Y5/2
220	青磁	碗	C2群	-	-	(2.3)	E E	E V - 9 E IV - 23	東斜面 竪堀 18	I マ	雷文帯崩れ。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 N8/
221	青磁	碗	C2群	(13.4)	-	(3.1)	B	D III - 22	土壘 1	IV	雷文帯。	釉調断面 灰オリーブ 7.5Y6/2 灰白 5Y7/2
222	青磁	碗	C2群	(10.4)	-	(3.1)	B	D IV - 2	土壘 1	II 黒褐	雷文崩れ。口縁部は強いヨコナデのため外面が凹む。	釉調断面 オリーブ灰 10Y6/2 灰白 7.5Y8/1
223	青磁	碗	C2 - I群	-	-	(2.0)	A	C IV - 24	西斜面	IV	器壁薄い。透明感のある釉薬が全面施釉される。雷文帯。	釉調断面 オリーブ灰 2.5GY6/1 灰白 5Y7/1
224	青磁	碗	C2 - I群	-	-	(4.0)	B E	D IV - 24 E IV - 3	SB5 東斜面	I II	雷文帯崩れ、体部に草花文。器壁は薄い。	釉調断面 オリーブ灰 10Y6/2 灰白 N8/
225	青磁	碗	C2 - I群	(13.0)	-	(2.5)	B	D IV - 14	SB3	I	外面雷文帯、内面草花文。全体的に透明感のある釉薬が施される。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 N7/
226	青磁	碗	C2 - I群	(14.0)	-	(4.0)	A F	B IV - 25	曲輪1平場 西斜面	I II	内面は草花文、外面は雷文帯。	釉調断面 緑灰 7.5GY6/1 灰白 10Y7/1
227	青磁	碗	C2 - I群	(13.0)	-	(4.9)	A	C V - 4	西斜面	IV	雷文帯。体部に幅広の蓮弁文の単位が認められる。	釉調断面 オリーブ灰 10Y6/2 灰白 10Y7/1
228	青磁	碗	C2 - I群	(14.0)	-	(3.0)	B	D IV - 3	SB1・2	IV	外面に雷文帯、体部は蓮弁の区画体。内面は草花風の文様。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 10Y7/1
229	青磁	碗	C2 - I群	(15.4)	-	(5.0)	C	D VI - 7	竪堀 1	マ	口縁部外面に雷文帯。全体的に透明感のある釉薬が薄く全面施釉される。貫入がはいる。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 浅黄 5Y7/3
230	青磁	碗	C2 - I群	(14.0)	-	(4.9)	B B B	D IV - 14 D IV - 15 D IV - 15	SB3 曲輪2平場 曲輪2平場	I II II	口縁部外面にヘラ状工具による雷文帯が施される。体部下半に幅広の蓮弁文が施される。内面文様なし。釉薬は丁寧にかけられている。内外ともに貫入あり。	釉調断面 オリーブ灰 10Y6/2 灰白 2.5Y8/2
231	青磁	碗	C2 - I群	(16.6)	-	(4.7)	A B	C IV - 15 D IV - 15	西斜面 曲輪2平場	IV II	外面雷文帯を施す。体部は下半に丸ノミによる蓮弁文。内面は雷文と草花風の文様が陰刻される。釉が厚く施される。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 7.5Y8/1
232	青磁	碗	C2 - I群	(15.8)	-	(4.2)	A	C V - 4	西斜面	I	外面雷文帯を施す。体部は下半に草花風の文様。内面草花風の文様。片切彫り。釉が厚く施される。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰 5Y6/1
233	青磁	碗	C2 - I群	(15.3)	-	(4.5)	A	C IV - 24	西斜面	II	口縁外面に雷文帯、体部は区画状の蓮弁文。内面は草花文。片切彫り。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 5Y7/1
234	青磁	碗	C2 - I群	(15.6)	-	(3.0)	A		曲輪1平場	I	外面雷文帯、口縁下体部には2条の線により区画が施される。内面草花文。透明感のある釉薬が薄く施される。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰 7.5Y6/1

表 12 出土遺物観察表 11





図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
255	青磁	盤		(22.0)	-	(4.1)	B B B	D IV - 14 D IV - 14 D IV - 14	SB3	I I II	精選された胎土。焼成良好。内外面ともに貫入がはいる。	釉調断面 オリーブ灰 10Y6/2 灰白 2.5Y8/2
256	青磁	盤		(22.0)	-	(4.0)	A	C IV - 19	西斜面	IV	体部内面は細い線描き、丸鑿状工具による蓮弁文。	釉調断面 オリーブ灰 10Y6/2 灰白 7.5Y7/1
257	青磁	盤		(13.4)	-	(3.7)	A	C IV - 24	西斜面	IV	体部内面は細い線描き、丸鑿状工具による蓮弁文。	釉調断面 オリーブ灰 10Y6/2 浅黄 2.5Y7/4
258	青磁	盤		-	(8.0)	(2.2)	B	D IV - 19	SB4	I	体部内面下半に丸鑿状工具による蓮弁文が施される。全面施釉。外底中央が露胎。二次被熱を受け胎土が浅黄色に変色。胎土に3mm大の白い角礫が含まれる。	釉調断面 におい黄 2.5Y6/4 浅黄 2.5Y7/4
259	青磁	盤		(26.7)	高台径 (11.7)	5.5	B E B B E E	D IV - 14 E IV - 19 D IV - 9 D IV - 8 E IV - 17 E IV - 17	SB3 堅堀 19 SB3 SB3 東斜面 東斜面	II マ I IV I I	口縁部内面に波状文が施され、体部内面には丸鑿状工具による幅の広い蓮弁が施される。全面施釉、外底部は蛇の目状の釉剥ぎ。	釉調断面 灰オリーブ 7.5Y5/2 灰白 7.5Y7/2
260	青磁	花瓶		-	-	(3.5)	A A F E	C V - 5 C V - 3 F IV - 11	西斜面 堅堀 9 東斜面	II I II	内外面とも施釉。外面に麒麟か獅子の文様が陽刻される。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰 7.5Y7/1
261	青磁	花瓶		(4.0)	-	(1.7)	F	C IV - 23	堅堀 10	I	口縁外面に三角形の文様が連続する。内側には斜状の条線が施される。	釉調断面 明緑灰 7.5GY7/1 灰白 N8/
262	青磁	花瓶		全長 (4.1)	全幅 2.1	全厚 (1.0)	F		西斜面		取っ手状を呈する。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 7.5Y7/1
263	青磁	花瓶		-	-	(7.6)	F F	C IV - 8 B IV - 24	堅堀 6 西斜面	II マ	脚部と考えられ、外面に印刻文が認められる。	釉調断面 オリーブ灰 10Y5/2 灰白 7.5Y7/1
264	白磁	皿	I	(12.0)	-	(1.8)	B	D V - 18	曲輪 2 平場	I	透明感のある釉が施されている。	釉調断面 灰白 10YR7/1 灰白 10YR7/1
265	白磁	皿	I	(10.0)	-	(1.4)	B	D IV - 2	SB1・2	V	透明感のある釉葉。貫入がはいる。胎土は白っぽい。	釉調断面 灰白 10Y8/1、 10Y7/1 灰白 5Y7/1
266	白磁	皿	I	(13.0)	-	(2.1)	A A A	C IV - 14 C V - 4 C IV - 14	西斜面	I II I	透明感のある釉葉が施されている。貫入がはいる。	釉調断面 灰白 5Y7/1 灰白 5Y7/1
267	白磁	皿	I b	(12.0)	-	(2.3)	A A	C IV - 19 C IV - 19	西斜面	I I	口縁部にタールが付着。外面露胎。透明感のある乳白色を呈した釉葉が薄く施される。	釉調断面 灰白 2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1
268	白磁	皿	I	(11.0)	-	(2.0)	B		土塁 2	5	透明感のある乳白色を呈した釉葉が薄く施される。	釉調断面 灰白 7.5Y8/1 灰白 5Y8/1
269	白磁	皿	I	(10.4)	-	(2.2)					口縁部は外反し、透明感のある乳白色を呈した釉葉が薄く施される。	釉調断面 灰白 N8/ 灰白 7.5Y8/1
270	白磁	皿	I b	(8.6)	(4.2)	2.3	F	B III - 20	西斜面	I	外底中央部は凸状を呈し、高台外面は削り。外面高台脇まで全面施釉。二重被熱により釉が剥落する。	釉調断面 灰白 5Y8/1 灰白 5Y8/1
271	白磁	八角皿	II	(8.7)	-	(2.8)	A	C V - 8	西斜面	IV	体部は面取り。釉葉は内面全面施釉。外面は体部上位まで施釉し、腰折れ以下は露胎。胎土は土質。	釉調断面 浅黄橙 10YR8/4、 淡黄 2.5Y8/3 におい黄橙 10YR7/4
272	白磁	皿	I b	-	(4.4)	(1.2)	A B	C V - 3 D IV - 3	西斜面 SB1・2	I IV	内底見込に細長い目跡が残る。外面高台脇まで全面施釉。	釉調断面 淡黄 2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/3
273	白磁	皿	I a	(9.2)	(4.0)	2.3		C V - 4	西斜面	IV	内底に目跡。胎土は土質。全面施釉。	釉調断面 灰白 2.5Y8/2 におい黄橙 10YR7/4
274	白磁	皿	I a	(7.6)	(3.6)	2.1	F	B IV - 23	西斜面	II	内面見込みに目跡。外面体部上位に二重界線。全面施釉。	釉調断面 灰白 7.5Y8/1 灰白 10Y8/1
275	白磁	皿	I b	-	(4.1)	(1.7)	B	D V - 21	土塁 2	4	高台外面まで全面施釉。見込みは蛇ノ目、釉剥ぎ。畳付の釉は削り取り、外底部は露胎。胎土は土質。	釉調断面 灰白 5Y8/1 浅黄橙 10YR8/3
276	白磁	皿	I b	10.0	4.4	2.5	A	C V - 9	西斜面	IV	内底見込みに4箇所目跡が残る。削りだし切高台。凸状に釉葉が付着する。釉葉は内面全体、外面は体部中位～下位まで施釉。高台部分は露胎。外底部に菊花状の文様が墨書される。	釉調断面 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3
277	白磁	皿	I b	9.8	4.5	2.6	A A B	C V - 4 C V - 4	西斜面 西斜面 土塁 1	IV IV IV	内底見込みに4箇所目跡。高台の凸部一箇所に釉葉が付着。外底部は墨の痕跡及びタールが付着。外面体部下半は露胎。釉葉は乳白色。	釉調断面 灰白 2.5Y8/2 浅黄橙 10YR8/4
278	青花	碗		(14.4)	-	(3.6)	A E E	C IV - 5 E V - 22 E VI - 1	西斜面 堅堀 13 東斜面	II IV V	口縁部内外面に界線。外面に比較的濃いコバルトの呉須の釉で、花樹文が描かれている。	釉調断面 明青灰 5 B 7/1 灰白 7.5Y8/1
279	青花	碗		(14.4)	-	(2.0)	B	D IV - 3	SB1・2	IV	口縁部内外面に二重界線。外面唐草文。内面雷文帯。呉須が薄く文様にじむ。	釉調断面 明青灰 5 B 7/1 灰白 7.5Y8/1

表 14 出土遺物観察表 13



図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
280	青花	碗		(11.2)	-	(1.5)	E	E IV - 23	竖堀 18	I	口縁部内外面に二重界線。口縁部内面界線下に雷文崩れ。	釉調 明青灰 5G7/1 断面 灰白 7.5Y8/1
281	青花	碗		-	-	(2.5)	F	C V - 7	竖堀 8	I	外面アラバスク模様。内面雷文崩れか？	釉調 明青灰 5 B 7/1 断面 灰白 5Y8/2
282	青花	碗	B 群	-	-	(4.0)	B	D VI - 2	土塁 2	I	外面に牡丹唐草、内面に二重界線と雷文帯崩れの文様が施される。内外面ともに貫入がはいる。	釉調 明青灰 10BG7/1 断面 灰白 7.5Y8/1
283	青花	碗		-	-	(4.0)	F				牡丹唐草	釉調 明青灰 5BG7/1 断面 灰白 7.5Y8/1
284	青花	碗		-	(5.6)	(1.9)	E		東斜面		見込みに密な唐草文。胎土は土質。	釉調 灰白 7.5YR8/2 断面 灰白 7.5YR7/4
285	青花	皿		11.9	6.5	3.1	A A F F F F F F F	C IV - 5 D IV - 1 C III - 25 C IV - 4 B IV - 23 C V - 5 付近	西斜面 SX4 SX3 竖堀 7 西斜面 西斜面	I II I II I	外面に牡丹唐草内面見込みに玉取獅子がかかれる。界線は、口縁端部の内外面に1条、見込みの玉取獅子を囲むように2条、高台脇に2条、高台外面に1条、呉須の釉調は薄い。透明釉は丁寧にかかり、畳付の釉を削り取る。口唇部内面に長さ4cm幅0.7cmの砂の付着物あり。高台内面と外底部中央に砂の付着物あり(重ね焼)。胎土には精選されたものが使用されている。	釉調 青灰 10BG8/1 断面 灰白 7.5Y8/1
286	青花	皿		(12.0)	(6.6)	2.8	A A F F F F F F F	D IV - 17 D IV - 6 C III - 25 C III - 25 C III - 25 C IV - 10 C IV - 4 C IV - 4	曲輪1平場 曲輪1平場 西斜面 西斜面 西斜面 西斜面 竖堀 7 竖堀 7	I II I I I II II II	高台外底部に砂付着。	釉調 明オリープ灰 5GY7/1 断面 灰白 7.5Y8/1
287	青花	皿		(12.0)	(7.0)	(2.7)	B F F	D IV - 3 C III - 24	竖堀 7 竖堀 7	II II マ	口縁内面・見込の一部にも目痕。外底部釉剥ぎの痕(蛇ノ目状)。呉須の釉調は濃いコバルトブルー。高台～高台脇、内底見込みに二重界線。口縁端部内外面に界線。	釉調 明緑灰 5G7/1 断面 灰白 7.5Y8/1
288	青花	皿		(11.8)	(7.0)	2.8	D	F IV - 1	竖堀 11	II	内面文様は口縁と見込みに界線。外面は牡丹唐草、高台脇に界線。呉須の釉調はやや濃いコバルト色。	釉調 明青灰 10BG7/1 断面 灰白 7.5Y8/1
289	青花	皿	B 群	(11.4)	(6.4)	2.7	E E D	E VI - 6 E VI - 7 F IV - 2	竖堀 12 竖堀 12 竖堀 11	II III II	外面は牡丹唐草、内面は見込みに界線と十字花文。胎土は土質。高台外面下端の釉を削り取る。	外面 灰白 7.5Y8/2 断面 灰白 2.5Y8/2
290	青花	皿	B 群	(11.6)	(6.7)	2.7	B E E	E VI - 6 E VI - 7	TR7 竖堀 12 竖堀 12	II III下	外面牡丹唐草、内面見込みに玉取獅子。高台外面に砂目付着。	内外面 明オリープ灰 5GY7/1 断面 灰黄 2.5Y7/2
291	青花	皿	B 1群	-	(6.8)	(2.0)	B D D	E III - 25	土塁 1 竖堀 11 竖堀 11	II	外面に牡丹唐草、高台脇二重界線。内面に二重界線と玉取獅子。釉調は濃い藍色、畳付の釉は削り取る。	外面 明青灰 5BG7/1 断面 灰白 7.5Y8/1
292	磁器	花筒		-	(6.6)	(3.0)	D		堀切 5	II下	型紙刷り。内面露胎。	釉調 灰白 7.5Y8/1、N8/ 断面 灰白 N8/
293	磁器	茶碗		(9.6)	-	(1.4)	E	F IV - 8	東斜面	II	内外面とも型紙刷り。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/
294	磁器	皿		(9.0)	-	(1.8)	D	F III - 12	東斜面	I	内湾する。朱による文様。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/
295	磁器	お猪口		-	(2.5)	(2.2)	D		堀切 3		高台外面三重界線。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/
296	磁器	茶碗		-	-	(3.9)	E	F IV - 12	東斜面		呉須の釉調は濃いコバルト。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/
297	磁器	茶碗		-	-	(3.2)	D				型紙刷り。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/
298	陶器	水差し		-	-	(3.2)					銅緑釉が外面に施される。体部下半は露胎。内面露胎。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/
299	磁器	碗		-	(5.8)	(1.6)	B	D V - 8	曲輪 2	I	内面は露胎。高台畳付の部分は削り取る。高台外面に二重界線。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/
300	陶器	瓶 (胴部)		-	-	(3.8)	A	C V - 10	曲輪 1	I	外面は二重被熱により変色。	釉調 灰 N7/ 断面 灰白 7.5Y7/1
301	磁器	碗		10.4	3.8	5.9	E	D VI - 15	SD2	I	外面に葡萄文。内面は口縁部と見込みに界線、内底部中央に花文。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/
302	磁器	花瓶		2.0	3.8	9.7	A	D IV - 22	曲輪 1		外面草花文。	釉調 灰白 N8/ 断面 灰白 N8/

表 15 出土遺物観察表 14

図版 No.	器種	器形	分類	口径全長 (cm)	底径全幅 (cm)	器高全厚 (cm)	調査区	グリッド	造構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
303	陶器	絵柄付き急須		(7.6)	-	(7.1)	A A A A A A A A A A	C V - 24 C V - 19 C V - 19 C V - 19 C V - 19 C V - 19 C V - 19 C V - 19	曲輪 1	I I I I I I I I	全体に灰釉が施される。	釉調 灰白 2.5Y8/3 断面 灰白 7.5Y8/1
304	褐釉壺	壺		(10.8)	-	(3.9)	A A A	C V - 4 C V - 8 C V - 8	西斜面	IV IV IV	口縁部は肥厚し、玉縁状を呈する。中国産	内外面 黒褐 7.5Y3/2 断面 におい黄橙 10YR7/2
305	瀬戸	梅瓶		(4.6)	-	(7.4)	F F	B V - 5 B IV - 22	西斜面	II I・II間	外面頸部直下に剥離痕。内面粘土帯接合部に指押え顕著。	釉調 暗オリーブ 7.5Y4/3 断面 灰白 2.5Y7/1
306	炆器	壺		-	-	(4.5)	D	E IV - 5	竪堀 11	II	把手部が剥離する。	内面 灰 5Y5/1 外面 褐灰 10YR6/1
307	丹波	甕		-	-	(6.2)	E D	F IV - 12 F III - 16	東斜面	II 表採	胴部外面に凹線。口縁部は外方に肥厚し、端部は欠損するが断面三角形を呈する。	内面 におい赤褐 2.5YR4/3 外面 褐灰 7.5YR4/1
308	土製品	土錘		全長 3.70	全幅 1.70	全厚 1.70	B	D IV - 15	曲輪 2 平場	II	孔径 0.50 cm 重量 10.6g	外面 におい黄橙
309	土師器	土錘		全長 (3.20)	全幅 1.70	全厚 1.65	B	D IV - 15	曲輪 2 平場	II	孔径 0.45cm 重量 8.24g	外面 灰黄 2.5Y6/2
310	土師器	土錘		全長 4.10	全幅 1.85	全厚 1.70	D	E IV - 3	竪堀 11		孔径 0.40cm 重量 10.83g	外面 におい黄橙 10YR7/3
311	土製品	土錘		全長 4.00	全幅 1.50	全厚 1.50	B	D V - 21	土塁 2	I	孔径 0.60 cm 重量 6.10g	外面 におい黄橙 10YR7/4
312	土師器	土錘		全長 4.65	全幅 1.75	全厚 1.65	D		堀切 5西	マ	孔径 0.50 cm 重量 13.71g	外面 灰黄 2.5Y6/2
313	土師器	土錘		全長 5.00	全幅 1.70	全厚 1.60	D	D III - 13	堀切 5西	マ	孔径 0.40 cm 重量 14.44g	外面 浅黄橙 10YR8/4
314	土師器	土錘		全長 4.80	全幅 1.90	全厚 1.90	D	D III - 14	堀切 5	I	孔径 0.45 cm 重量 14.26g	外面 浅黄橙 10YR8/3
315	土製品	羽口		全長 (5.50)	(5.45)	-	F	B IV - 18	西斜面	III		外面 におい黄橙 10YR7/4
316	石製品	石臼	下白 (受皿)	-	-	(4.2)	F					
317	石製品	石臼	下白 (受皿)	(32.0)	-	(4.2)	A	C IV - 20	西斜面	I		
318	石製品	石臼	下白 (受皿)	(36.6)	-	(4.4)	A	C IV - 19	西斜面	I		
319	石製品	石臼	下白 (受皿)	(35.4)	-	(3.6)	D	F IV - 2	竪堀 11	II		
320	石製品	石臼	下白 (受皿)	(35.0)	-	(3.9)	D	F IV - 2	竪堀 11	II		
321	石製品	石臼	下白 (受皿)	(36.0)	-	(4.7)	F		西斜面			
322	石製品	石臼	下白 (受皿)	(40.0)	-	(3.7)	E	E V - 22	竪堀 13	IV		
323	石製品	石臼	下白 (受皿)	(39.0)	-	(3.9)	F		西斜面			
324	石製品	石臼	上白	直径 19.7	-	(4.2)	D	F IV - 3	竪堀 11	II		
325	石製品	石臼	上白	直径 19.7	-	(3.3)	A	D V - 1	曲輪 1 平場	II		
326	石製品	石臼	上白	残存長 (13.4)	-	全厚 (2.7)	B	D IV - 19	SB4	I	砂岩製。下半以下欠損。軸受けの部分周縁に使用痕。	
327	石製品	石臼	上白	残存長 (13.8)	-	全厚 (2.3)	A	D IV - 17	曲輪 1 平場	II		
328	石製品	石臼	上白	-	-	(10.7)	B	D V - 22	土塁 2			
329	石製品	石臼	上白	直径 24.2	-	(7.8)	B	D IV - 3	SB1・2	IV		
330	石製品	石臼	上白	直径 33.2	-	(10.3)	B	D IV - 3	SB1・2	II		
331	石製品	石臼	下白 (受皿)	直径 (20.5)	-	(13.0)	B		土塁 2			
332	石製品	砥石		全長 9.00	全幅 7.80	全厚 4.00	B	D IV - 14	SB3	I	砂岩製。重量 318g	
333	石製品	硯		全長 9.40	全幅 6.00	全厚 1.40	F F	B V - 4 B V - 4	西斜面	II II		
334	鉄製品	鉄釘		全長 (1.30)	全幅 0.60	全厚 0.30	B		虎口	マ	重量 0.40g	

表 16 出土遺物観察表 15

図版 No.	器種	器形	分類	口径 全長 (cm)	底径 全幅 (cm)	器高 全厚 (cm)	調査 区	グリッド	遺 構	層位	特徴 (成形・調整・文様)	色調 (釉調)
335	鉄製品	鉄釘		全長 (1.95)	全幅 0.80	全厚 0.65	B	D IV - 14	Pit 9	マⅢ	重量 1.10g	
336	鉄製品	鉄釘		全長 (2.00)	全幅 0.65	全厚 0.40	E	E VI - 3	竪堀 13		重量 0.76g	
337	鉄製品	鉄釘		全長 (2.30)	全幅 0.60	全厚 0.30	C	D VI - 1	竪堀 1		重量 0.46g	
338	鉄製品	鉄釘		全長 (2.35)	全幅 0.60	全厚 0.29	E	E V - 22	竪堀 13	Ⅳ	重量 0.61g	
339	鉄製品	鉄釘		全長 (2.40)	全幅 1.00	全厚 0.55	B		土塁 2		重量 1.60g	
340	鉄製品	鉄釘		全長 (2.45)	全幅 0.70	全厚 0.45	B	D IV - 14	曲輪 2 Pit 9	マ	重量 1.02g	
341	鉄製品	鉄釘		全長 (2.50)	全幅 0.70	全厚 0.36	E	E V - 22	竪堀 13		重量 0.87g	
342	鉄製品	鉄釘		全長 (2.55)	全幅 0.90	全厚 0.50	B	D IV - 8	Pit 10	マ	重量 1.50g	
343	鉄製品	鉄釘		全長 (2.65)	全幅 0.75	全厚 (0.25)	B	D V - 13・ 14	曲輪 2 Pit57	マ	重量 0.87g	
344	鉄製品	鉄釘		全長 (2.70)	全幅 0.90	全厚 0.45	B		土塁 2		重量 1.30g	
345	鉄製品	鉄釘		全長 (2.83)	全幅 1.10	全厚 0.46	C	D VI - 2	竪堀 1	底	重量 2.21g	
346	鉄製品	鉄釘		全長 (2.87)	全幅 0.90	全厚 0.38	C	D VI - 2	竪堀 1	底	重量 1.49	
347	鉄製品	鉄釘		全長 (2.90)	全幅 1.15	全厚 0.60	B		土塁 2		重量 4.00g	
348	鉄製品	鉄釘		全長 (3.10)	全幅 0.80	全厚 0.40	E	E V - 22	竪堀 13	マ	重量 1.40g	
349	鉄製品	鉄釘		全長 (3.10)	全幅 0.70	全厚 0.50	F		西斜面	マ Ⅰ～Ⅱ	重量 1.43g	
350	鉄製品	鉄釘		全長 (3.10)	全幅 0.55	全厚 0.20	D	E III - 22	竪堀 11	マ	重量 0.60g	
351	鉄製品	鉄釘		全長 (3.10)	全幅 0.65	全厚 0.40	B	D V - 22	土塁 2	Ⅳ	重量 1.10g	
352	鉄製品	鉄釘		全長 (3.20)	全幅 0.90	全厚 0.35	D	E III - 23	竪堀 11	マ	重量 1.90g	
353	鉄製品	鉄釘		全長 (3.20)	全幅 1.15	全厚 0.60	B		土塁 2		重量 2.70g	
354	鉄製品	鉄釘		全長 (3.30)	全幅 1.10	全厚 0.29	B	D IV - 3	SB2	Ⅳ	重量 1.03g	
355	鉄製品	鉄釘		全長 (3.35)	全幅 0.70	全厚 0.35	A	D IV - 1	SX4	Ⅱ	重量 1.58g	
356	鉄製品	鉄釘		全長 (3.40)	全幅 0.80	全厚 0.35	D	E III - 23	竪堀 11	断面 図 VI	重量 1.20g	
357	鉄製品	鉄釘		全長 (3.40)	全幅 0.60	全厚 0.45	F	B IV - 25	西斜面	Ⅱ	重量 1.39g	
358	鉄製品	鉄釘		全長 (3.45)	全幅 0.80	全厚 0.30	E	E VI - 7	竪堀 12	Ⅲ下	重量 1.18g	
359	鉄製品	鉄釘		全長 (3.45)	全幅 0.75	全厚 0.40	E	E VI - 7	竪堀 12	Ⅲ下	重量 1.21g	
360	鉄製品	鉄釘		全長 (3.49)	全幅 0.85	全厚 0.39	A	D V - 1	曲輪 1 平場		重量 1.92g	
361	鉄製品	鉄釘		全長 (3.50)	全幅 0.70	全厚 0.40	E	E IV - 24	竪堀 18	V下	重量 0.77g	
362	鉄製品	鉄釘		全長 (3.50)	全幅 0.70	全厚 0.36	E	E VI - 6	竪堀 12	Ⅱ	重量 1.14g	
363	鉄製品	鉄釘		全長 (2.60)	全幅 0.60	全厚 0.25	D	E III - 25	竪堀 11	Ⅲ	重量 0.60g	
364	鉄製品	鉄釘		全長 (2.90)	全幅 0.70	全厚 0.35	B	D IV - 4	Pit 40	マ	重量 1.10g	
365	鉄製品	鉄釘		全長 (3.10)	全幅 0.75	全厚 0.30	E	E V - 22	竪堀 13		重量 1.16g	
366	鉄製品	鉄釘		全長 (3.05)	全幅 0.55	全厚 0.32	E	E V - 7	竪堀 17	マ	重量 1.24g	
367	鉄製品	鉄釘		全長 (2.85)	全幅 0.50	全厚 0.50	B	D V - 4	曲輪 2 SK2・ Pit5	マ	重量 1.70g	
368	鉄製品	鉄釘		全長 (3.05)	全幅 0.70	全厚 0.45	E	E V - 22	竪堀 13		重量 1.15g	
369	鉄製品	鉄釘		全長 (3.54)	全幅 0.85	全厚 0.40	E	E VI - 1	東斜面		重量 1.63g	
370	鉄製品	鉄釘		全長 (3.58)	全幅 0.70	全厚 0.55	E	E V - 7	竪堀 17	マ	重量 2.05g	

表 17 出土遺物観察表 16

図版 No.	器種	器形	分類	口径 全長 (cm)	底径 全幅 (cm)	器高 全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴(成形・調整・文様)	色調(釉調)
371	鉄製品	鉄釘		全長 (3.65)	全幅 0.37	全厚 0.40	B	D IV - 8	SB3	IV	重量 1.62g	
372	鉄製品	鉄釘		全長 (3.70)	全幅 0.85	全厚 0.30	B	D IV - 8	SB3	IV	重量 1.23g	
373	鉄製品	鉄釘		全長 (3.70)	全幅 1.00	全厚 0.40	F		西斜面	III	重量 1.66g	
374	鉄製品	鉄釘		全長 (3.80)	全幅 0.90	全厚 0.25	E	E V - 22	豎堀 13	V	重量 1.26g	
375	鉄製品	鉄釘		全長 (3.90)	全幅 0.70	全厚 0.45	E	E VI - 2	豎堀 13	マ	重量 1.69g	
376	鉄製品	鉄釘		全長 (3.90)	全幅 0.90	全厚 0.70	B	D V - 10	虎口状遺構 Pit 52		重量 5.00g	
377	鉄製品	鉄釘		全長 (3.90)	全幅 0.80	全厚 0.45	F	B IV - 24	西斜面	II	重量 1.84g	
378	鉄製品	鉄釘		全長 (3.95)	全幅 1.00	全厚 0.50	A	C IV - 24	西斜面	IV	重量 2.72g	
379	鉄製品	鉄釘		全長 (4.00)	全幅 0.80	全厚 0.40	F	C V - 2	豎堀 9	IV	重量 2.01g	
380	鉄製品	鉄釘		全長 (4.00)	全幅 1.00	全厚 0.32	A	D IV - 6	曲輪 1 平場	II	重量 2.41g	
381	鉄製品	鉄釘		全長 (4.00)	全幅 1.10	全厚 0.45	D	F IV - 1	豎堀 11	II	重量 2.80g	
382	鉄製品	鉄釘		全長 (4.00)	全幅 0.75	全厚 0.40	E	E V - 22	豎堀 13	V	重量 1.58g	
383	鉄製品	鉄釘		全長 (4.00)	全幅 0.80	全厚 0.36	E	E VI - 2	豎堀 13	IV	重量 2.36g	
384	鉄製品	鉄釘		全長 (4.00)	全幅 0.75	全厚 0.50	F	C V - 3	豎堀 9		重量 1.75g	
385	鉄製品	鉄釘		全長 (4.03)	全幅 0.70	全厚 0.47	E	E VI - 6	豎堀 12	III下	重量 1.54g	
386	鉄製品	鉄釘		全長 (4.10)	全幅 1.00	全厚 0.55	B	D III - 22	土塁 1	IV	重量 2.10g	
387	鉄製品	鉄釘		全長 (4.10)	全幅 0.75	全厚 0.45	C		堀切 6	II	重量 2.10g	
388	鉄製品	鉄釘		全長 (4.15)	全幅 1.00	全厚 0.40	A	C IV - 20	西斜面		重量 2.91g	
389	鉄製品	鉄釘		全長 (4.20)	全幅 0.90	全厚 0.30	B	D IV - 9	SB3	IV	重量 1.89g	
390	鉄製品	鉄釘		全長 (4.30)	全幅 0.90	全厚 0.35	D	F IV - 1	豎堀 11	II	重量 1.50g	
391	鉄製品	鉄釘		全長 (4.30)	全幅 1.00	全厚 0.48	E	E V - 7	豎堀 17	マ (上層)	重量 1.99g	
392	鉄製品	鉄釘		全長 (4.30)	全幅 1.00	全厚 0.35	B	D IV - 9	SB3	IV	重量 1.30g	
393	鉄製品	鉄釘		全長 (4.30)	全幅 0.90	全厚 0.60	B		土塁 2	2	重量 2.80g	
394	鉄製品	鉄釘		全長 (4.36)	全幅 0.65	全厚 0.32	E	E VI - 1	東斜面	V	重量 1.45g	
395	鉄製品	鉄釘		全長 (4.40)	全幅 0.80	全厚 0.45	E	E V - 22	豎堀 13	V	重量 2.56g	
396	鉄製品	鉄釘		全長 (4.50)	全幅 1.00	全厚 0.35	F	B V - 4	西斜面	マ	重量 3.15g	
397	鉄製品	鉄釘		全長 (4.52)	全幅 1.10	全厚 0.67	F		西斜面		重量 5.75g	
398	鉄製品	鉄釘		全長 (4.65)	全幅 1.40	全厚 0.54	E	E V - 21	東斜面	V	重量 3.46g	
399	鉄製品	鉄釘		全長 (4.75)	全幅 1.40	全厚 0.75	E	E VI - 2	豎堀 13		重量 11.66g	
400	鉄製品	鉄釘		全長 (4.77)	全幅 0.67	全厚 0.62	E	E VI - 1	東斜面	V	重量 3.62g	
401	鉄製品	鉄釘		全長 (4.75)	全幅 1.00	全厚 0.55	F	C V - 2	豎堀 9	III	重量 3.74g	
402	鉄製品	鉄釘		全長 (4.90)	全幅 1.15	全厚 0.55	F	C V - 8	豎堀 9	II	重量 5.05g	
403	鉄製品	鉄釘		全長 (4.90)	全幅 1.10	全厚 0.60	F	B V - 5	西斜面	II	重量 4.40g	
404	鉄製品	鉄釘		全長 (5.00)	全幅 0.60	全厚 0.50	F	C IV - 7	豎堀 6	マ II	重量 2.34g	
405	鉄製品	鉄釘		全長 (5.30)	全幅 1.05	全厚 0.5	C	B VI - 10	堀切 6	IV	重量 4.70g	
406	鉄製品	鉄釘		全長 (5.30)	全幅 0.80	全厚 0.50	F		西斜面	III	重量 2.68g	
407	鉄製品	鉄釘		全長 (5.40)	全幅 0.80	全厚 0.53	E	E VI - 6	豎堀 12	III下	重量 4.34g	

表 18 出土遺物観察表 17

図版 No.	器種	器形	分類	口径 全長 (cm)	底径 全幅 (cm)	器高 全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴(成形・調整・文様)	色調(釉調)
408	鉄製品	鉄釘		全長 (5.40)	全幅 1.40	全厚 0.65	F				重量 5.58g	
409	鉄製品	鉄釘		全長 (5.50)	全幅 1.40	全厚 0.80	F		西斜面	マ I~II	重量 20.46g	
410	鉄製品	鉄釘		全長 (5.55)	全幅 1.65	全厚 0.45	D	E III - 24	竪堀 11	大きく III	重量 4.60g	
411	鉄製品	鉄釘		全長 (5.60)	全幅 1.40	全厚 0.40	E	E VI - 2	竪堀 13	V	重量 7.16g	
412	鉄製品	鉄釘		全長 (5.75)	全幅 1.20	全厚 0.65	E	E VI - 2	竪堀 13		重量 7.92g	
413	鉄製品	鉄釘		全長 (3.58)	全幅 0.43	全厚 0.39	E	E VI - 6	竪堀 12	II - 2	重量 1.36g	
414	鉄製品	鉄釘		全長 (3.87)	全幅 1.30	全厚 0.38	E	E VI - 2	竪堀 13	IV	重量 2.24g	
415	鉄製品	鉄釘		全長 (3.90)	全幅 0.50	全厚 0.35	C	B VI - 10	堀切 6	IV	重量 1.60g	
416	鉄製品	鉄釘		全長 (4.27)	全幅 0.70	全厚 0.50	F		西斜面		重量 3.64g	
417	鉄製品	鉄釘		全長 (4.80)	全幅 1.10	全厚 0.35	F	C IV - 23	竪堀 10	マ	重量 3.18g	
418	鉄製品	鉄釘		全長 (5.10)	全幅 1.00	全厚 0.60	B	D V - 22	土塁 2		重量 3.83g	
419	鉄製品	鉄釘		全長 (3.60)	全幅 0.85	全厚 0.45	D	D III - 20	堀切 5 東	マ	重量 1.60g	
420	鉄製品	鉄釘		全長 (3.60)	全幅 0.60	全厚 0.40	D	F IV - 2	竪堀 11	II	重量 1.00g	
421	鉄製品	鉄釘		全長 (3.80)	全幅 0.80	全厚 0.30	D	F IV - 2	竪堀 11	II	重量 2.00g	
422	鉄製品	鉄釘		全長 (4.35)	全幅 1.00	全厚 0.45	D	E III - 24	竪堀 11	II・III間	重量 2.80g	
423	鉄製品	鉄釘		全長 (4.60)	全幅 0.80	全厚 0.45	D	E III - 24	竪堀 11	II	重量 3.80g	
424	鉄製品	鉄釘		全長 (5.30)	全幅 0.90	全厚 0.60	F	C V - 5 付近	西斜面		重量 5.28g	
425	鉄製品	鉄釘		全長 (5.39)	全幅 0.90	全厚 0.50	E	E VI - 2	竪堀 13	IV	重量 3.64g	
426	鉄製品	鉄釘		全長 (6.10)	全幅 1.30	全厚 0.75	F	B IV - 25	西斜面	マ	重量 8.44g	
427	鉄製品	鉄釘		全長 (6.15)	全幅 0.65	全厚 0.50	D		竪堀 11	マ	重量 5.23g	
428	鉄製品	鉄釘		全長 (6.30)	全幅 1.00	全厚 0.60	D	E IV - 3	竪堀 11	マ	重量 3.90g	
429	鉄製品	鉄釘		全長 (6.33)	全幅 0.70	全厚 6.02	E	E VI - 6	竪堀 12	V	重量 4.65g	
430	鉄製品	鉄釘		全長 (6.43)	全幅 0.80	全厚 0.62	E	E VI - 6	竪堀 12	IV - 1	重量 8.20g	
431	鉄製品	鉄釘		全長 (6.70)	全幅 0.80	全厚 0.35	D		竪堀 11	マ	重量 5.39g	
432	鉄製品	鉄釘		全長 (6.73)	全幅 1.50	全厚 0.33	B	D IV - 3	SB1・2	IV	重量 5.84g	
433	鉄製品	鉄釘		全長 (6.85)	全幅 1.05	全厚 0.69	B	D IV - 20	曲輪 2 平場	I	重量 13.77g	
434	鉄製品	鉄釘		全長 (6.90)	全幅 1.30	全厚 0.51	A	C V - 4	西斜面	IV	重量 8.79g	
435	鉄製品	鉄釘		全長 (7.25)	全幅 1.10	全厚 0.70	F	C V - 3	西斜面		重量 14.12g	
436	鉄製品	鉄釘		全長 (7.30)	全幅 1.20	全厚 0.53	B	D IV - 2	SB1・2	II	重量 12.70g	
437	鉄製品	鉄釘		全長 (7.50)	全幅 1.20	全厚 0.65	F	B IV - 24	SB5	II	重量 9.32g	
438	鉄製品	鉄釘		全長 (7.60)	全幅 1.30	全厚 0.65	E	E VI - 7	竪堀 12	III下	重量 9.18g	
439	鉄製品	鉄釘		全長 (8.25)	全幅 1.20	全厚 0.55	F		西斜面		重量 9.48g	
440	鉄製品	鉄釘		全長 (8.30)	全幅 1.20	全厚 0.65	F	B IV - 24	西斜面	マ	重量 7.81g	
441	鉄製品	鉄釘		全長 (8.65)	全幅 2.30	全厚 0.80	A	C IV - 19	西斜面	IV	重量 21.20g	
442	鉄製品	鉄釘		全長 (10.00)	全幅 1.30	全厚 0.70	E	E V - 22	竪堀 13	IV	重量 15.10g	
443	鉄製品	鉢		全長 (5.64)	全幅 1.60	全厚 0.38	E	E IV - 23	竪堀 18	マ	重量 7.60g	
444	鉄製品	鉢		全長 (6.75)	全幅 0.90	全厚 0.40	A				重量 7.56g	

表 19 出土遺物観察表 18

図版 No.	器種	器形	分類	口径 全長 (cm)	底径 全幅 (cm)	器高 全厚 (cm)	調査区	グリッド	遺構	層位	特徴(成形・調整・文様)	色調(釉調)
445	鉄製品	鉈		全長 (9.60)	全幅 1.50	全厚 0.40	E		虎口状 遺構斜面	マ	重量 22.93g	
446	鉄製品	鉈		全長 (10.45)	全幅 1.70	全厚 0.45	B	D V - 17	東斜面	I	重量 13.00g	
447	鉄製品	不明		全長 (6.7)	全幅 0.45 ~ 1.05	全厚 0.4 ~ 0.8	E	E VI - 7	竪堀 12	III 下	重量 8.38g	
448	鉄製品	不明		全長 (6.60)	全幅 2.20	全厚 0.36	B	D IV - 3	SBI・2		重量 13.42g	
449	鉛製品	鉛弾		全長 1.4	全幅 1.3	全厚 1.3	D	E IV - 3	竪堀 11	マ	重量 6.69g	
450	銅製品	前盾		全長 19.50	全幅 6.90	全厚 0.05 ~ 0.14	A	C V - 19	平場 (祭祀)	II	重量 44.10g	
451	銅製品	覆輪		全長 5.21	全幅 0.52	全厚 0.40	A	C IV - 24	西斜面	IV	重量 2.56g	
452	銅製品	覆輪		全長 14.30	全幅 0.65	全厚 0.50	A	D IV - 1	SX4	II	重量 16.89g	
453	銅製品	不明		全長 2.95	全幅 2.40	全厚 1.20	D	F IV - 3	竪堀 11	II	重量 5.12g	
454	銅製品	銅製品		全長 (4.10)	全幅 (2.20)	全厚 (1.70)	D	F IV - 2	竪堀 11	IV	重量 9.06g	
455	銅製品	鍍金具		全長 3.80	全幅 1.90	全厚 0.15	A	D IV - 16	曲輪 1 平場		重量 3.29g	
456	銅製品	縁(刀)		全長 3.25	全幅 1.90	全厚 0.65	B	D V - 12	東斜面		重量 4.14g	
457	銅製品	鋏		全長 1.30	全幅 0.70	全厚 0.20	E	E VI - 1	東斜面	IV	重量 0.44g	
458	銅製品	銅製品		全長 8.00	-	全厚 2.25	B	D IV - 24	SB5	I	重量 4.47g	
459	銅製品	煙管		全長 6.08	全幅 1.50	全厚 0.95	B	D IV - 15	曲輪 2 平場		重量 6.57g	
460	銅製品	小柄		全長 9.25	全幅 1.40	全厚 0.65	E	D VI - 4	東斜面	II	重量 20.98g	
461	銅製品	弁		全長 12.1	全幅 1.20	-	B	D V - 18	曲輪 2 平場		重量 12.85g	

表 20 出土遺物観察表 19



## 第V章 考察(まとめ)

今回の調査は西山城跡の尾根、斜面部を含めた城跡全域の調査が行われ、堀切や豎堀といった防御目的のために造られた遺構の構造を解明することができた。最終的に城域全体の約90%を発掘調査したことになり、一つの城の全体を発掘する事例としては最大規模であった。特に、山の斜面部を含めての調査事例は類例が少なく城の全体構造を解明するうえで貴重な発掘調査となった。西山城跡は中世の山城として非常に残りが良く、典型的な中世の山城のモデルとしてみるができる。

ここでは、調査で明らかとなった遺構および遺物からみた西山城跡の機能時期、性格等を考察してみたい。

### 第1節 遺構から見た西山城跡

今回の調査では、防御目的のために配置された堀切・豎堀などが数多く見つかった。また、これらの堀に付属する小規模な平場(テラス)の存在が明らかとなり西山城跡の特徴的な遺構の構造パターンとして捉えることができた。主郭を中心としたこれらの防御施設について遺構ごとにみていきたい。

#### 1. 曲輪

西山城跡の主郭は「詰」に相当する曲輪1と、それに付属する「腰曲輪」の曲輪2で構成される。標高70.50m前後を測る丘陵の頂部に山を削平して構築されている。

##### (1) 曲輪1「詰」

曲輪1は南北41.20m、幅4.50～8.50m、面積420㎡を測る平場である。調査の結果、西側斜面部は盛土の土留めに使用したと考えられる直径20～30cm前後を測る石積みが斜面の一部に残存していたが、中央部は造成した盛土下の斜面が崩れた堆積状況および断面を呈しており、曲輪1造成時の削平した土で西側谷部の地形の窪んだ部分を造成していたことが明らかとなった。形状は現況で西側の谷地形に沿って弧状を呈しているが、確認された石積みラインで旧曲輪地形を復元すると、当時の曲輪面積は現況よりも80㎡ほど広がっていたものと思われる。曲輪1では掘立柱建物(SB1)を南端で1棟検出している。曲輪1から南には下段に平場は無く、堀切6が直下に配置されている。曲輪1の北部直下は腰曲輪の曲輪2の平場があり、土塁1に囲まれたSB1が配置されて、曲輪2北端直下に堀切5が構築されている。また、曲輪1の北端部では備前焼の甕片がまとまって出土したSK1が検出されており、出土遺物も曲輪中央部から北部にかけて集中が見られる。SB1が検出された南部は遺物がほとんど出土していない。これらのSBの配置、規模、及び遺物の出土状況から見て、曲輪1で検出されたSB1は恒常的な性格の建物ではなく、南尾根及び南東斜面を重視した物見櫓的建物ではないかと思われる。

##### (2) 曲輪2「腰曲輪」

曲輪2は、A区(曲輪1)との比高差4.00～5.00mを持ち、規模は長さ45.00m、幅5.00～8.00m、面

積約446㎡を測り、曲輪1の北側から南東部にかけて弧状に沿った平場である。主郭部分が詰と腰曲輪で構成される県内の15～16世紀前半代の山城をみると西山城跡と同じように詰との比高差が5.00m前後を測る<sup>1)</sup>。曲輪2は北と南東の両端に土塁を構えており、北側はL字形に地山を削り成形している。土塁の内側には掘立柱建物(SB1・2)を構えており、出土遺物からみて備前焼の播鉢や甕、土師質土器の羽釜など雑器類が多く出土していることから恒常的な生活の場として使われていたと思われる。曲輪2では掘立柱建物跡を6棟検出しているが、SB1・2を除いて梁間の規模が1間で曲輪1の直下に配置されている。SB3～SB5まで連続して構築されている特徴があり、臨時的な兵舎の性格が想定される<sup>2)</sup>。また、床面及び柱穴では焼土が認められ焼失したことが窺える。南部の土塁は盛土で構築されているが、焼土や炭化物が認められること、土塁下でピットが検出されていることから、南部C区の横堀1、堅堀1とセットで構築された可能性が考えられる。つまり、腰曲輪の機能のひとつである主郭部への通路としての機能を堀で遮断することで立て籠もるための場として改変されたことが考えられる。

これらの主郭部で検出された建物は15世紀代である。

## 2. 堀切

堀切は、北尾根部で5本、南尾根部で4本、合計9本の堀切が確認されている。この内、北尾根部にある堀切3～5、南尾根部の堀切6～8は連続して構築されている。西山城跡の主郭は山の頂部に配置されており、主郭を完全に遮断するためにこれらの連続堀切は配置されている。北尾根、南尾根とも主郭へのアプローチが一番急峻なところに配置されており、地形を利用し、主郭側を「切岸」(勾配を急峻にする)に成形することで遮断効果を高めているといえる。また、発掘調査で明らかとなった堀の断面をみると、北尾根部の堀切3～5はV字形を呈した「薬研堀」であり、堀の形態としては古い様相を示す。これに対し南尾根部の堀切6～8は、逆台形、U字形を呈しており相違がみられる。南尾根部の連続堀切は、後に改修された可能性が考えられる。主郭部の直下にあたる堀切5は堅堀11に連結し、堀切6は堅堀2・5に連結させることで尾根筋、斜面からの侵入を完全に遮断しており、堅堀を構築した際に堀切6は堀の規格を改修したものと思われる。

## 3. 堅堀

堅堀は、合計20本が確認された。配置をみると東斜面部(E区)に集中がみられ、特に、堅堀12～16については5本の堅堀を連続して構成する畝状堅堀群である。標高51.00～53.00m、曲輪2からの比高差12.00～14.00mを測る位置に配置されており、斜面下方まで続く。この畝状堅堀群を挟み、南北両端に規模の大きい堅堀1と堅堀11が腰曲輪と同じ標高から配置されている。畝状堅堀群12～16と両端の堅堀1・11は時期差が考えられ、西山城跡では前者の畝状堅堀群が古い段階に配置されている。D区の堀切5と堅堀11の切り合い、B区南部土塁2とC区堅堀1の構築時期と併せてみても、東斜面からの侵入に備えた畝状堅堀群に加え、南北尾根筋から斜面伝いの侵入を遮断する目的が重視され、それに備えた縄張りに変化していることが窺える。また、堅堀17～19、C区の堅堀4・5、F区の堅堀6・7については、主郭からそれぞれ派生する小尾根基部を平面U字形に掘り連結して配置している。西山城跡の特徴的な遺構として捉えることができるが、これらの堅堀も古い段階の堅堀として位置付けられる。これらの堅堀群は縄張りからみれば津野氏の居城である津野町(旧葉山村)

の姫野々城跡をはじめ、中土佐町(旧大野見村)の大野見城跡など高岡郡内の山城に比較的多くみられる<sup>3)</sup>。いずれも高岡郡一帯を治めていた津野氏と、幡多の方から勢力を拡大していく一条氏との攻防があったとされる城であり、天文年間の高岡郡内の一条氏と津野氏の攻防を知る上でも重要な成果があった。

## 第2節 出土遺物から見た西山城跡

西山城跡から出土した遺物は、総点数3,227点(破片数)を数える。城の規模、性格からみて県内で発掘調査された城郭と比較しても量的、内容的にみて大きな成果となった。出土遺物の内容は土師質土器、瓦質土器、備前焼、貿易陶磁器、鉄製品、銅製品、古銭、石製品であり、中でも貿易陶磁器類がまとめて出土している。日常雑器類(播鉢・甕・火鉢など)や茶道具(風炉・茶臼・四耳壺など)が出土しており、当時の生活を知る貴重な物が出土した。また、鉄犀や羽口など鍛冶に関連するものも出土しており、一定の生産活動が山上で行われていたことが判明した。出土遺物の中で貿易陶磁器(中国製品)の占める割合が多く、城館クラス以上の遺跡でしか出土がみられない青磁花瓶などの奢侈品がみられることから有力者の存在が考えられる。

### 1. 遺物出土状況からみた地点の機能

これらの遺物の出土地点(Fig.91)をみれば、大半が主郭のA区(曲輪1)、B区(曲輪2)からの出土であり、各曲輪の機能時期及び使われ方を知る上で貴重である。A区(曲輪1)では、中央部から北部に集中(地点1～3)がみられ、備前焼甕片が集中して出土したSK1を中心に西斜面に流れ込むように出土がみられた。貿易陶磁器の中でも奢侈品などが曲輪1中央部および西斜面への流れ込み土の中から出土していることから重要品は西山城跡の「詰」である曲輪1に保管されていた可能性が考えられる。また、冑の前立と考えられる銅製品と、土師質土器皿がまとめて出土した曲輪1南部(地点4)は古銭もまとめて出土しており、祭祀、儀礼が行われた空間と考えられる。B区(曲輪2)では北端部SB1・2に集中して出土がみられる。内容も播鉢などの調理具や、羽釜などの煮炊具などの雑器類がみられ、恒常的な空間として捉えることができる。また、鉄犀、砥石など鍛冶関連遺物もみられ一定の生産活動を行っていたことが窺える。これらの鍛冶関連遺物、および鉄釘も西山城跡では多く出土しており、B区(曲輪2)の北端部、及び、E区(東斜面部)の塹堀12・13間の小規模な平場部分で集中がみられる。築城の際に使用する鉄釘などを現地で生産していた場所として位置付けられる。

### 2. 貿易陶磁器からみた帰属時期

貿易陶磁器では青磁が最も多く、全体の7割を占める。青磁では碗が全体の63%を占める。碗の内訳は連弁文のB群が50%を占め、ついで雷文帯のC群が35%、無文の端反り碗であるD群が6%、無文の内湾する碗のE群9%を占めている<sup>4)</sup>。青磁碗の組成にみられる時期は15世紀前半代が主体を占めている。次に白磁は皿が主に出土している。切高台を持つ丸皿と、八角形の面を持つ杯などD群

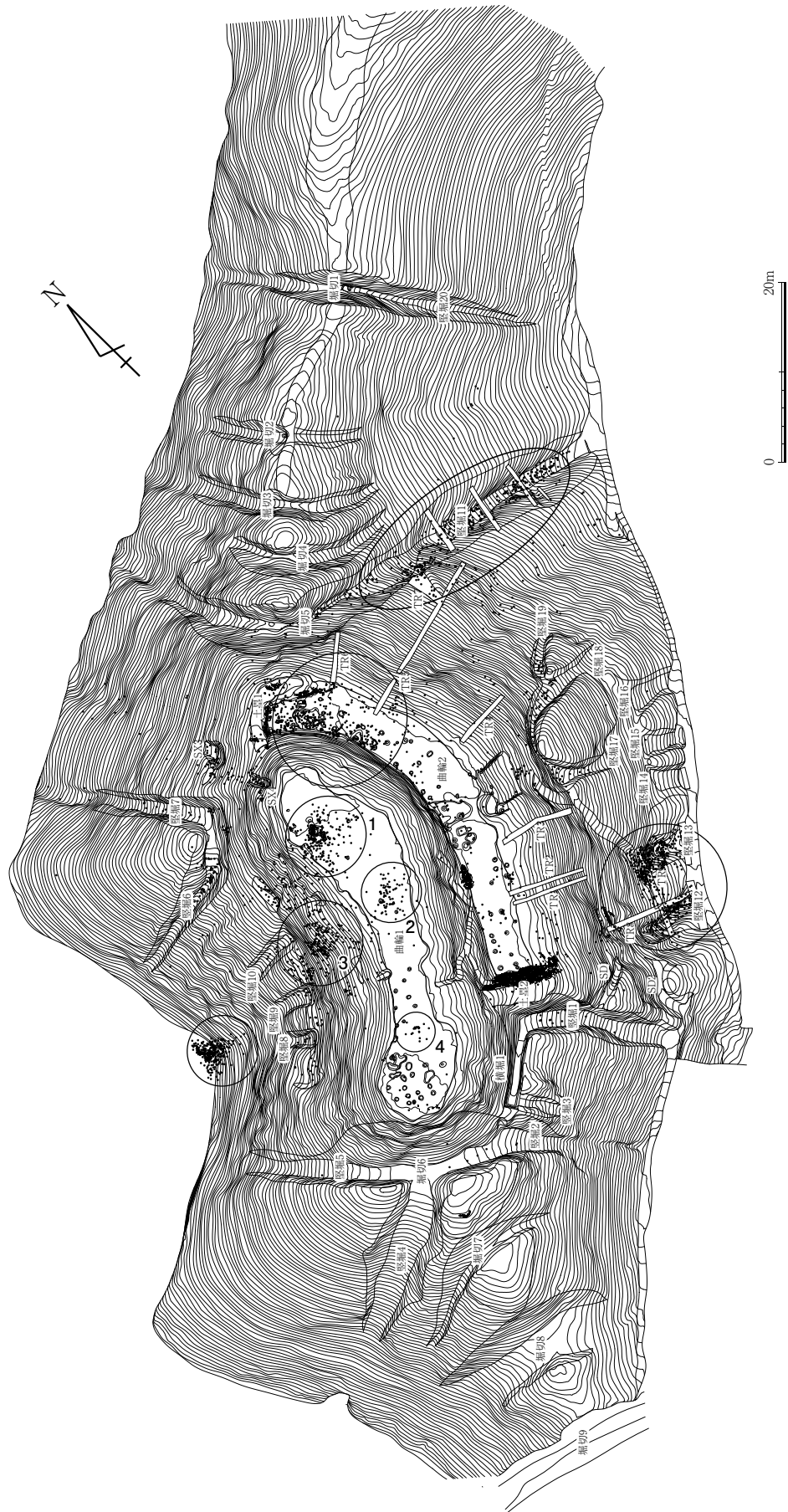


Fig.91 西山城跡遺構全体及び遺物出土状況図

が主体を占める。端反り皿のE群が全体の20%を占める。時期は15世紀中葉から後半代である。青花は、碗と皿がみられ、B群の皿が主体を占める。碗もB群が主体を占め、青花の組成にみられる年代は15世紀後半代である。

以上の貿易陶磁器の組成にみられる帰属時期は15世紀前半代と、15世紀後半～16世紀前半代の2時期が考えられる。県内の城郭から出土した貿易陶磁器の組成からみて、青花のC群がみられないことから、16世紀初頭頃までの年代が考えられ、15世紀代を中心に機能していたことが明らかとなった。

### 3. 調理具・煮炊具からみた西山城跡の機能時期

調理具である備前焼の播鉢をみてみたい。IV期(間壁編年)が主体を占めるが、胎土をみると角礫を多く含むものと、水肥した粘土を使用し、器壁が薄いタイプのもがみられ、後者が主体を占める。重根分類によるIVb期に該当し、15世紀後半代が主体である<sup>5)</sup>。IVa期のものは酸化焰焼成のものが多く、良品とは言えない。いずれも全て使用痕が認められ恒常的に使用していた物と思われる。また、僅少であるが在地産と思われる瓦質の播鉢も出土しており14世紀末～15世紀前半代を示す製品もみられる。

次に煮炊具をみると羽釜・火鉢・風炉が出土している。羽釜は土師質土器であり、水平な鏝が付く河内・和泉型と、短い鏝が付き、胴部外面に平行叩き目が残る播磨型がみられる<sup>6)</sup>。河内・和泉型は畿内の瓦質製品の影響を受けて在地で生産されていると考えられるものであり、形態は森島分類のE型式に類似する<sup>7)</sup>。胴部外面、鏝直下の横方向のケズリなど調整手法は踏襲している。胎土にチャートの角礫がみられることから製作技法を踏襲して在地の土を使って製作されたものと思われる。播磨型は胴部中位に最大径があるものが中心であり、15世紀後半のものが主体を占める。県内の城郭から出土した羽釜をみれば、河内・和泉型から播磨型に主体が移行し、16世紀代に入ると鏝の退化した播磨型のタイプが中心になる傾向がある。西山城跡で出土した羽釜は15世紀中葉～後半代に位置付けることができる。生活道具である調理具・煮炊具、貯蔵具である甕などが山上で使用されるのが15世紀中葉から後半段階に中心があることから、西山城跡が恒常的に機能している段階がこの頃に位置付けられる。

以上、出土遺物の帰属時期を整理してみると、西山城跡の活動時期の中心は15世紀前半～中葉と、15世紀後半～16世紀前半までの二時期であることが判明した。また、14世紀代に遡る遺物も出土しており、南北朝期にも城としての機能を果たしていたことが明らかとなった。

## 第3節 縄張りからみた西山城跡

西山城跡に見られる特徴的な遺構として堅堀群が挙げられるが、周辺では津野町の姫野々城跡、須崎市岡本城跡、中土佐町(旧大野見村)の大野見城跡など高岡郡内に集中が見られる。この堅堀群の遺構は戦国期の16世紀後半代に構築される例が多いが、西山城跡及び周辺地域の城に見られる堅堀群の中には、天文年間頃に構築されている可能性のものがああり、今回の西山城跡の調査成果で裏



Fig.92 鉄滓出土位置図



No.	区(グリッド)	遺構・層位		取上 No.	全長 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)	
1	A C V-9	西斜面	バンク直上	12A -1	4.6	1.9		8.85
2	A C IV-20	西斜面	IV	12A -No.なし	2.7	2.2		34.59
3	B D V-9	曲輪2 SK1	マ	12B -1	7.0	2.8		140.30
4	B D IV-8	SB3	IV	12B -2	2.9	1.7		13.08
5	B D IV-8	SB3	IV	12B -3	(3.4)	(1.3)		38.38
6	B D IV-2	SB1・2	IV	12B -4	2.7	1.3		7.14
7	B D IV-9	SB3	IV	12B -5	(4.5)	2.2		16.97
8	B D IV-9	SB3	IV	12B -6	1.9	1.0		2.85
9	B D V-13	曲輪2 平場	IV	12B -7	6.0	2.8		63.56
10	B D V-14	曲輪2 平場	IV	12B -8	3.3	1.1		15.81
11	B D V-4	SB5	IV	12B -9	2.5	1.0		4.18
12	B D V-22	土塁2	III	12B -10	3.2	2.1		24.18
13	B D V-21	土塁2	IV	12B -11	7.8	3.9		139.00
14	B D VI-2	土塁2		12B -No.なし	11.3	5.0		426.00
15	B D V-13	Pit57	マ	12B -No.なし	11.2 10.6	4.0 3.8		325.00 292.00
16	C D VI-2	竪堀1	岩直上	12C -No.なし	5.9	1.9		54.19
17	D F IV-1	竪堀11	旧表土	12D -1	8.2	5.3		994.00
18	D E IV-5	竪堀11	III	12D -2	4.7	1.6		17.43
19	D E III-25	竪堀11	III	12D -3	6.4	2.8		106.29
20	D	堀切5	排土	12D -No.なし	3.8	1.9		19.59
21	D	竪堀11	マ	12D -No.なし	4.2	2.4		34.62
22	D E IV-3	竪堀11	排土	12D -No.なし	5.8	1.8		53.27
23	D F III-22?	竪堀11	マ	12D -No.なし	4.8	1.6		23.95
24	E E V-6	東斜面	I	12E -1	3.0	1.4		8.57
25	E E VI-1	東斜面	排土	12E -2	4.0	3.3		47.58
26	E E V-7	竪堀17	マ	12E -3	4.6	2.9		26.43
27	E E V-22	東斜面	V	12E -4	4.8	1.8		(21.03)
28	E E VI-1	東斜面	V	12E -5	11.2	2.7		194.00
29	E D VI-10	竪堀12	II-2	12E -6	4.7	2.8		36.54
30	E E IV-14	東斜面	II	12E -7	5.0	2.5		58.34
31	E E V-22	東斜面	IV	12E -8	2.8	1.6		9.46
32	E E III-23	竪堀11	マ	12E -9	3.9	2.0		19.43
33	E E IV-23	竪堀19	II	12E -10	3.1	1.7		18.26
34	E F IV-8	東斜面	マ	12E -11	3.3	1.8		20.86
35	E E V-2	竪堀18	マ	12E -No.なし	3.0	1.6		21.16
36	F C V-3	西斜面	I	12F -1	4.4	2.6		40.90
37	F C V-3	竪堀9	III	12F -2	3.0	1.7		17.94
38	F C IV-23	竪堀10	I	12F -3	2.6	1.4		6.92
39	F C IV-23	竪堀10	IIマ	12F -4	5.2	2.3		34.89
40	F C V-3	竪堀9	III	12F -5	3.9	2.1		22.02
41	F B V-5	西斜面	II	12F -6	4.5	1.9		39.33
42	F E III-24	竪堀11	マ	12F -No.なし	2.5	2.1		11.73
43	F B V-5	西斜面	II	12F -No.なし	3.2 3.0 1.6 1.7	1.8 1.6 1.2 0.8	19.21 4.60	9.81 1.53

表21 西山城跡出土鉄滓

付けることができた。主郭を中心に比高差 10.00m 前後の斜面部に築き並べる特徴がみられ、先述した三つの城跡にも同じような配置がみられる。姫野々城跡は発掘調査が実施されており、15 世紀後半から 16 世紀中葉頃を中心とする遺物が出土しており、竪堀群は天文年間以降に構築された可能性が考えられている<sup>8)</sup>。姫野々城跡は津野氏の居城であり、天文年間(1532 ~ 1555 年)一条氏に攻められ、その後、長宗我部氏の三男親忠を養子として迎え入れるまで機能していたものと考えられている。天文年間の高岡郡内的一条氏と津野氏の攻防、城郭プランを知る上でも重要な成果があった。しかしながら、竪堀については地山を掘り込むタイプのもの、地形の起伏を利用し盛土で構築するタイプのものがあり、これらの構築方法の違いが領主によるものなか、地域的な差なのかは今後の検討課題である。高岡郡内をはじめ県内の城郭の縄張りにみられる竪堀の構造について類型化することが必要であると考えられる。

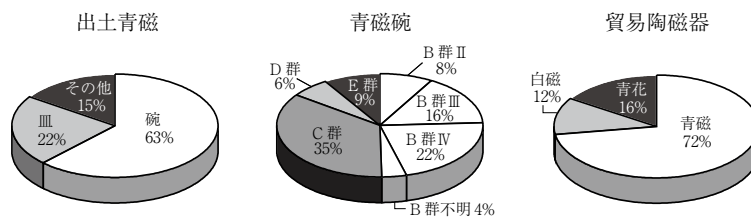
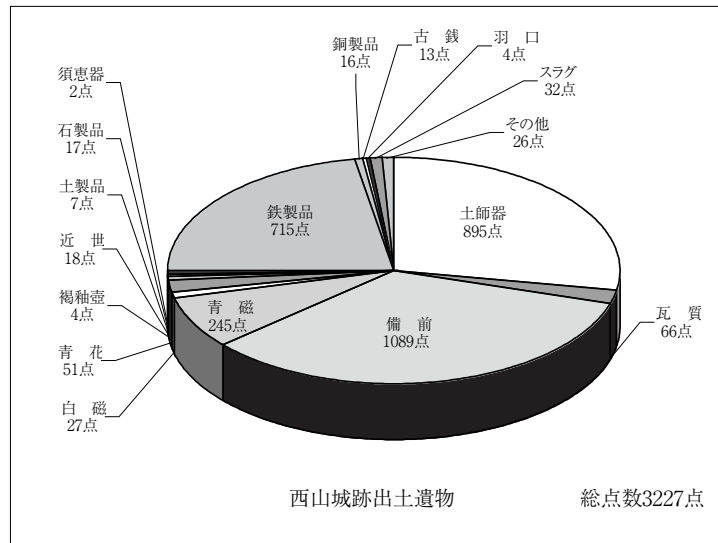


Fig.93 西山城跡遺物出土組成グラフ

### 西山城跡と岡の谷城跡

西山城跡の南麓を流れる久礼川を挟み南側の丘陵に岡の谷城跡が位置する。西山城跡からの距離は直線距離で700m離れており、標高112mの山上に立地する。曲輪と小規模な堀切だけで構成される山城である。曲輪は長軸32m、短軸12m前後を測り、縁辺には高さ0.5～0.7mの土塁が巡る<sup>9)</sup>。西山城跡の主郭からは久礼湾内までの眺望は開けるが、外港は見えない。岡の谷城跡からは、久礼湾の外港までの眺望が開けており、見張り台的な支城としての役割を果たしていた可能性も考えられる。青木城跡<sup>10)</sup>も同じような形態をしているが中心となる久礼城跡とのセット関係も考えられ、久礼坂の街道筋をおさえる役割を果たしていたものと考えられる。城郭とそれに付属する小規模な城郭の性格についても今後の検討課題である。

### 第4節 まとめ～西山城跡から久礼城跡へ～

今回の西山城跡の調査成果は、久礼城跡と佐竹氏の関わり、更に周辺地域における山城の構成を知る上でも有機的な成果を得ることができた。西山城跡の城主については不明な点が多く、地元伝承では西山城跡を含めた久礼川北部一帯の北村には北村氏という在地領主の名が伝わるが、南北朝期以降の佐竹氏(佐竹繁義～義之にかけて)が関与していた可能性も考えられている。今回の調査で出土遺物の帰属時期をみれば14世紀代の遺物も僅少ながみられることから、南北朝期には城として機能していたことが明らかとなった。また、西山城跡の東麓にある坪ノ内遺跡との関係も重要な

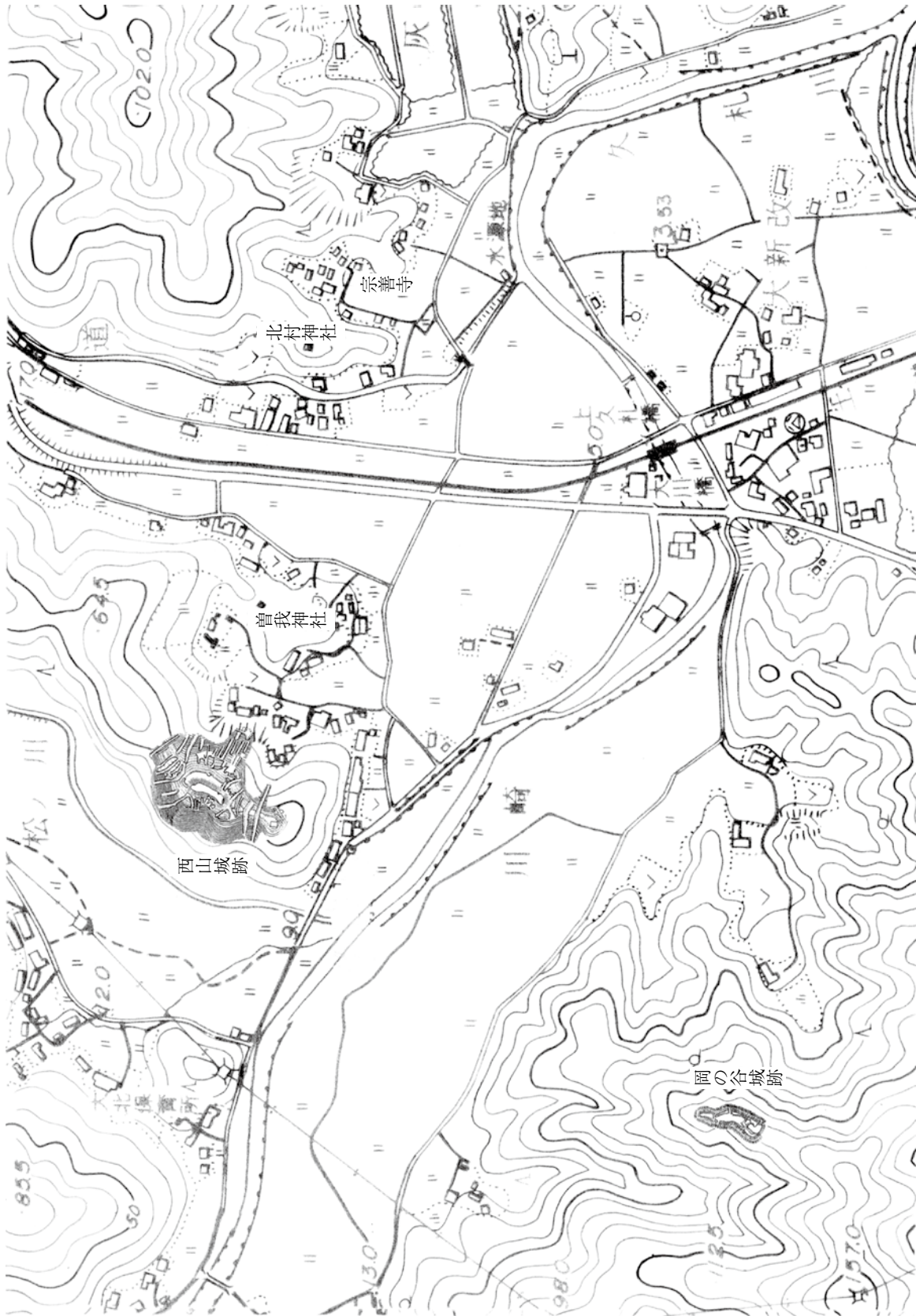


Fig.94 西山城跡と岡の谷城跡縄張図

位置を占める。坪ノ内遺跡では鎌倉時代から南北朝期にかけての倉庫的性格の掘立柱建物跡が検出されており、遺物も貿易陶磁器など当時の流通の活発さを裏付ける資料が数多く出土しており、中でも遺物からみた中心時期は14世紀代である<sup>11)</sup>。坪ノ内遺跡を含めた西山城跡の立地を概観すれば、久礼川と道の川の合流地点に位置し、久礼湾自体が遺跡周辺部まで入江状を呈しており、港湾的機能を持った遺跡として位置付けることが可能である。

永正14年(1517)津野氏の戸波城(土佐市)攻めの時には恵良沼で津野氏との攻防があり、天文年間(1543～1545年)には一条氏と津野氏との攻防など、高岡郡内における戦の時に西山城跡も布陣に取り込まれていった可能性が考えられる。

中土佐町にはもう一つ久礼城跡があるが規模は西山城跡よりも大きく、県内では拠点的城市として位置付けられている。久礼城跡については昭和59年に詰の一部が発掘調査されており、礎石建物跡や16世紀後半代の遺物も見つかっている<sup>12) 13)</sup>。今までの県内の事例で礎石建物が山城に出現するのは16世紀後半以降と考えられており、この頃から拠点的城市では山上に居館的建物が建てられるようになる。久礼城全域の調査が行われていないので断定は出来ないが、久礼城跡の主郭部分については16世紀後半以降に改修が行われ久礼城跡が中心的な城としての機能を果たしていたものと思われ、遺構から見た西山城跡から久礼城跡への変遷が追える。高知県内にはこうした中世の山城が約600城跡以上(平成11年度分布調査報告書による)の存在が知られており、西山城跡の発掘調査は今後の高知県の城郭史にとって大きな成果となった。

#### 補注・参考文献

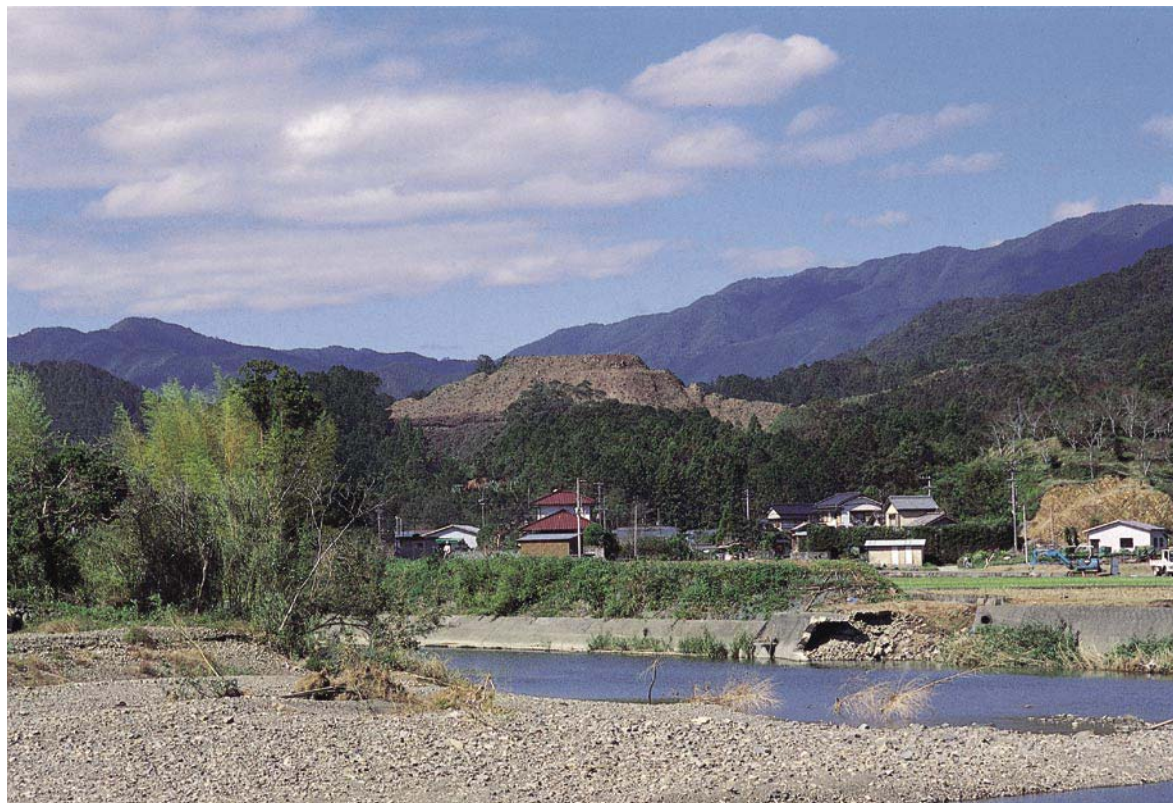
- 1) 芳原城跡(旧春野町)、姫野々城跡(津野町)、西本城跡(黒潮町)、小浜城跡(旧鏡村)など。比高差とともに、詰の裾部に溝もしくはピット列、集石などが沿う。
- 2) 千田嘉博氏のご教示による。
- 3) 『姫野々城跡Ⅰ』『姫野々城跡Ⅱ』葉山村教育委員会 1995・1996年
- 4) 今回の青磁の分類は上田分類を使用し、他の白磁、青花との組成をみるために小野正敏氏が相対編年で使用されている群で分類した。上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年
- 5) 備前焼播鉢については重根弘和氏の分類を基準とした。「中世の備前焼」『備前歴史フォーラム資料集備前焼研究最前線Ⅲ』備前市歴史民族資料館・備前市教育委員会 2005年
- 6) 菅原正明「畿内における土釜の制作と流通」『文化財論叢』独立行政法人奈良文化財研究所 1983年  
「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民族博物館研究報告第19集』1989年
- 7) 森島康雄「中世畿内の煮炊具」『中世の土製・陶器製鍋釜と鑄鉄鑄物鍋釜の関係を探る』文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 新領域創生研究部門平成17年度合同研究会報告記録 2006年
- 8) 3)と同じ
- 9) 縄張り図は宮地啓介氏作図による。
- 10) 青木城跡は池田氏の城と伝えられている。久礼の南部、四万十町窪川に続く久礼坂の登り口に立地する。小規模な平場と土塁、堀切で構成される城郭である。
- 11) 『坪ノ内遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006年 また、平成17年度に「坪ノ内遺跡Ⅰ」の南部も発掘調査が行われ、鎌倉から南北朝期にかけての遺構と遺物が検出されている。
- 12) 『久礼城跡』高知県高岡郡中土佐町教育委員会編 1984年
- 13) 前田和男『久礼城跡-私家版-』1997年 前田和男氏に久礼城跡について数多くのご教示を頂いた。

#### 参考文献(第Ⅱ章歴史的環境他)

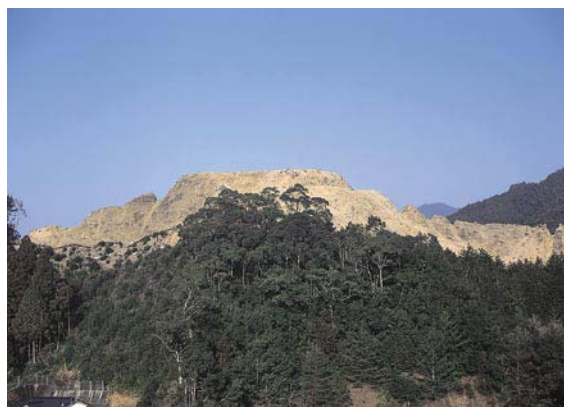
- 中土佐町史編さん委員会編『中土佐町史』中土佐町刊 1986年  
林 勇作『中土佐町の文化財』中土佐町教育委員会 1996年、『中土佐町金石史料』中土佐町教育委員会 1989年  
林 勇作氏には中土佐町内の文化財、特に五輪塔について数多くのご教示を頂いた。

# 写真図版





西山城跡遠景（東より、久礼川から望む）



西山城跡近景（東より、曾我神社から望む）



西山城跡近景（西より、松の川から望む）



西山城跡近景（北より）



C区堀切6より久礼を望む



写真2



A区（曲輪1）から久礼城跡を望む



A区（曲輪1）調査前全景（北より）



A区（曲輪1）調査前全景（南より）



A区（曲輪1）発掘調査風景（南より）



A区（曲輪1）西斜面発掘調査風景（北より）



A区（曲輪1）西斜面、盛土及び集石検出状況（北より）



写真4



A区（曲輪1）検出状況（南より）



A区（曲輪1）北端部遺物出土状況（備前焼甕片集中）



A区（曲輪1）南部遺物出土状況（銅製品と土師質土器皿）





A区（曲輪1）遺物出土状況（白磁皿）



A区（曲輪1）遺物出土状況（銅製品）



A区（曲輪1）遺物出土状況（瓦質土器火鉢）



写真6



A区(曲輪1)南東斜面部検出作業風景(通路状遺構)(北東より)



A区(曲輪1)通路状遺構及びB区(曲輪2)土塁2検出作業風景(北東より)



A区(曲輪1)通路状遺構検出状態(東より)





A区（曲輪1）通路状遺構とB区（曲輪2）土塁2検出状況（北西上より）



A区（曲輪1）完掘状態（北より）



A区（曲輪1）南端部SB1完掘状態



写真8



B区（曲輪2）調査前全景（南より）



B区（曲輪2）北端部検出作業風景（東より）



B区（曲輪2）北端部集石検出状況（東より）



B区（曲輪2）SB1・SB3掘立柱復元状況（南東より）



B区（曲輪2）堆積状況（A区東西バンク南壁セクション）



B区（曲輪2）SB1掘立柱復元状況（A区曲輪1より）



写真10



B区（曲輪2）SB1完掘状況（A区曲輪1より）



B区（曲輪2）土塁1・SB1完掘状況（東より）



B区（曲輪2）SB6完掘状況（A区曲輪1より）





B区（曲輪2）SK2上部集石・半截状況（東より）



B区（曲輪2）SK2半截状況（東より）



B区（曲輪2）SK2完掘状況（東より）



写真12



B区（曲輪2）土塁2検出状況1（A区曲輪1より）



B区（曲輪2）土塁2検出状況2（北より）



B区（曲輪2）土塁2検出状況3（A区通路状遺構部分より）





B区（曲輪2）土塁2断割状況（北東より）



B区（曲輪2）土塁2内部集石検出状況（北東より）



B区（曲輪2）土塁2セクション（西壁）



写真14



B区（曲輪2）遺物出土状況（青磁碗）



B区（曲輪2）遺物出土状況（土師質土器）



B区（曲輪2）遺物出土状況（筭）





C区完掘状態遠景（東より）



C区掘切6バンクセクション（東より）



C区掘切6完掘状況（西より）



C区掘切7バンクセクション（東より）



C区掘切8完掘状況（東より）

写真16



C区調査前全景（南より）



C区堀切9（東より）



C区横堀1・集石検出状況





C区豎堀4・5完掘状態（A区曲輪1より）



C区堀切6完掘状態（東より）



C区完掘状態（A区曲輪1より）



写真18



D区調査風景（B区曲輪2より）



D区堀切5完掘状態（東より）



D区堀切4完掘状態（東より）





D区豎堀11バンクセクション (東より)



D区豎堀11バンクセクション(豎堀11・堀切6 接合部)



D区豎堀11バンクセクション(豎堀11・堀切6 接合部)



D区豎堀11作業風景



D区豎堀11完掘状態



写真20



D区堀切3・4・5完掘状態（南東より）



D区堀切1完掘状態（東より）



D区東斜面作業風景（南より）





E区作業風景（北より）



スカイキャリーによる土砂の運搬作業



E区発掘調査風景



写真22



E区 TR1~3設定状況 (南より)



E区 TR 調査風景 (北より)



豎堀12遺物出土状況 (備前焼甕)



豎堀12遺物出土状況 (上層)



豎堀12遺物出土状況 (備前焼他)



豎堀12遺物出土状況 (青花皿)



豎堀12遺物出土状況 (青花皿)



豎堀12遺物出土状況 (土師質土器羽釜)





豎堀13遺物出土状況（青磁皿）



豎堀13遺物出土状況（備前焼甕）（東より）



豎堀12セクション（西より）



写真24



F区西斜面検出作業風景（北より）



F区豎堀8～10完掘状況（北より）



F区豎堀6・7完掘状況





F区西斜面遺物出土状況（備前焼甕）



F区西斜面遺物出土状況（青磁碗）



F区西斜面遺物出土状況（瀬戸梅瓶）





F区西斜面遺物出土状況（青磁花瓶）



F区豎堀6・7遺物出土状況（青磁花瓶）



F区出土青磁花瓶





久礼子供会見学 2005. 5. 21



久礼子供会見学 2005. 5. 21



高岡地区文化財保護連絡協議会 2005. 10. 4



高岡地区文化財保護連絡協議会 2005. 10. 4



久礼小学校現場見学 (正昭会主催) 2005. 10. 12



久礼小学校現場見学 (正昭会主催) 2005. 10. 12



西山城跡シンポジウム 現場見学会 2005. 10. 23



西山城跡シンポジウム (中土佐町主催) 2005. 10. 23





西山城跡シンポジウム 2005. 10. 23



久礼中学校見学 2005. 11. 17



笹場小学校現場体験学習 2005. 11. 28



平成17年度記者発表 2006. 1. 20



北垣聡一朗氏、萩原三雄氏 視察



ラジコンヘリによる航空写真測量 2005. 3. 8



ヘリコプターによる航空写真測量 2006. 1. 27



雪の西山城跡 2005. 2. 1



写真30







写真32





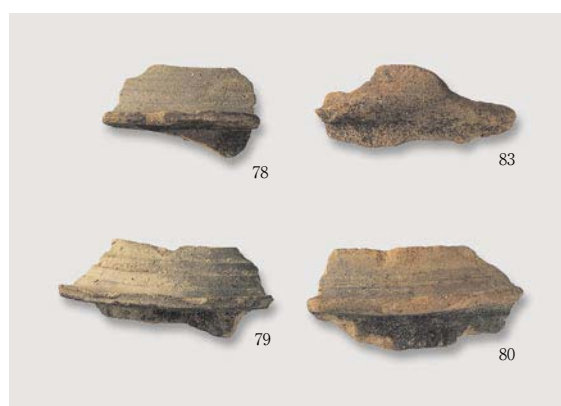
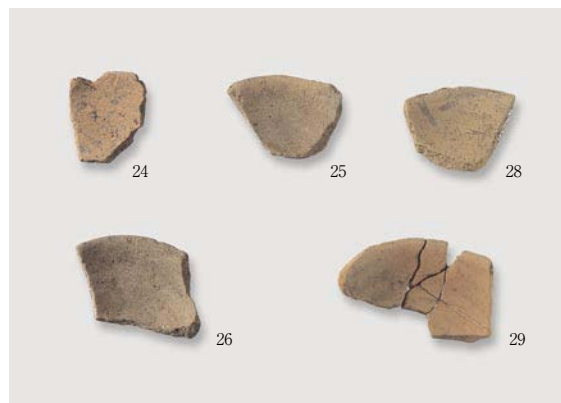
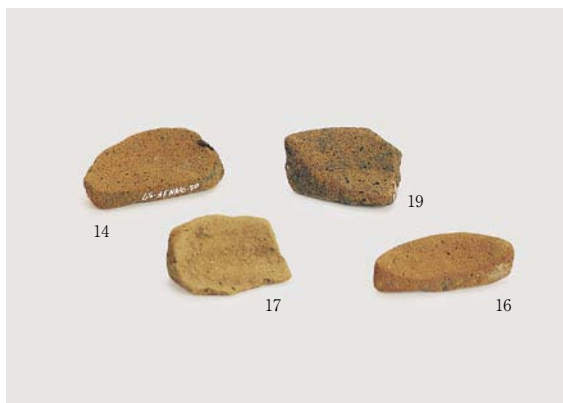
写真34







写真36

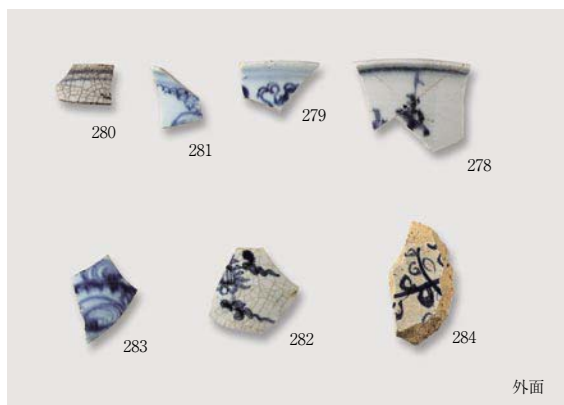




外面



内面



外面



内面

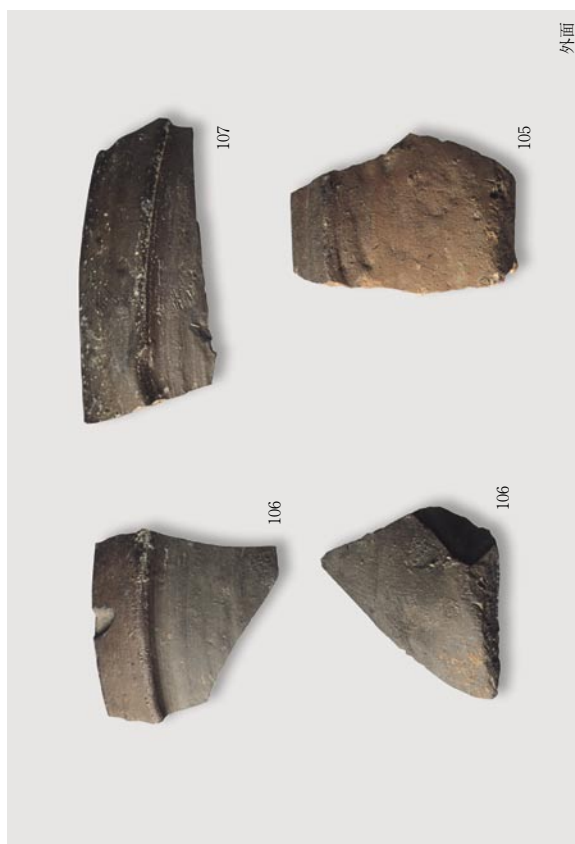
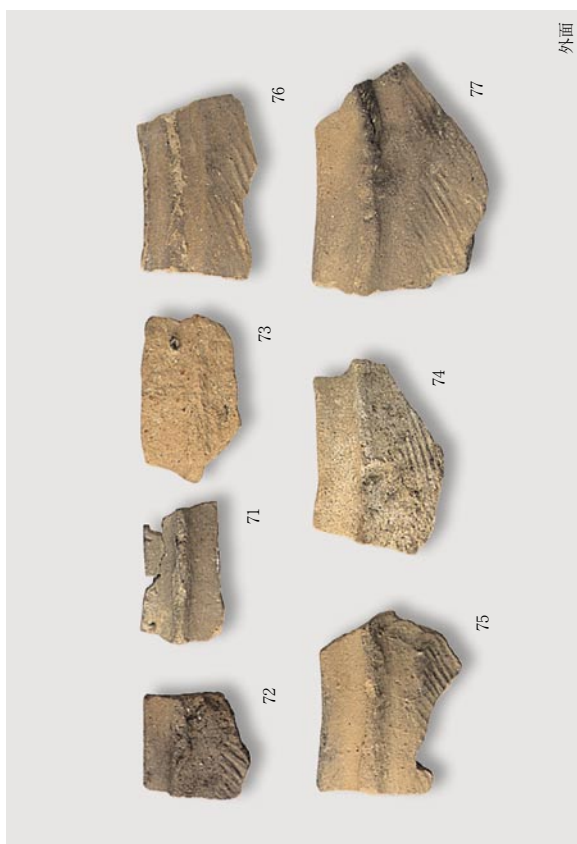
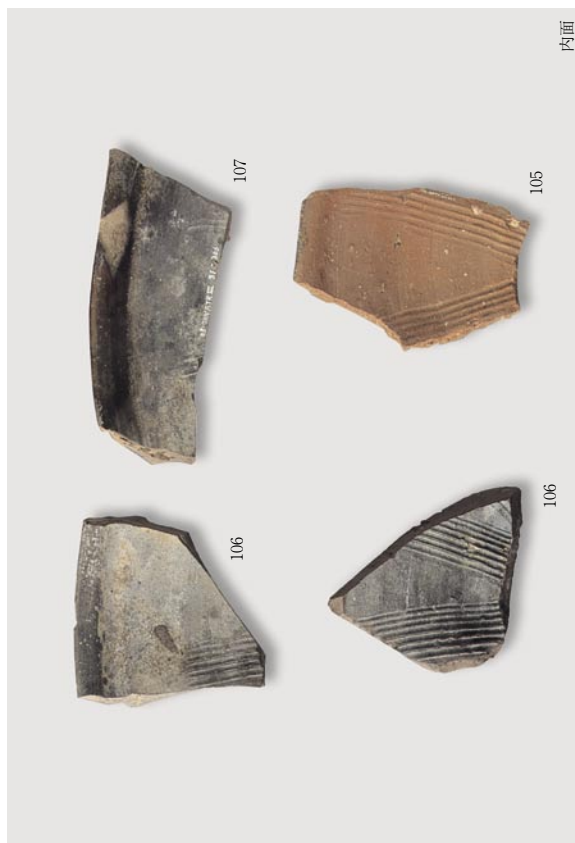
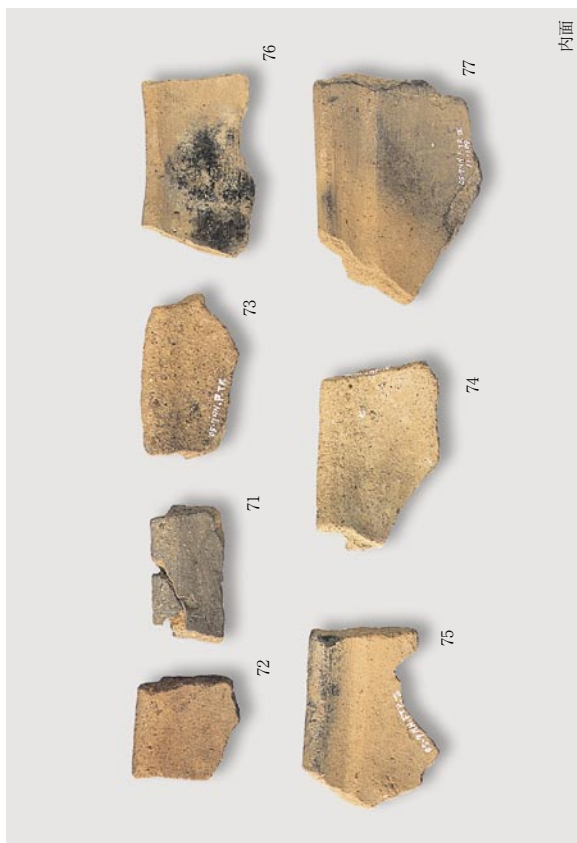


外面



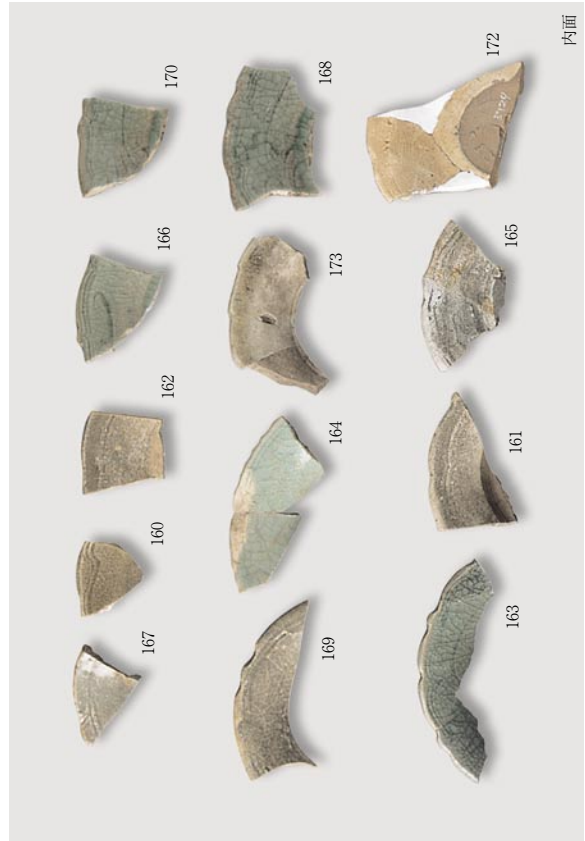
内面











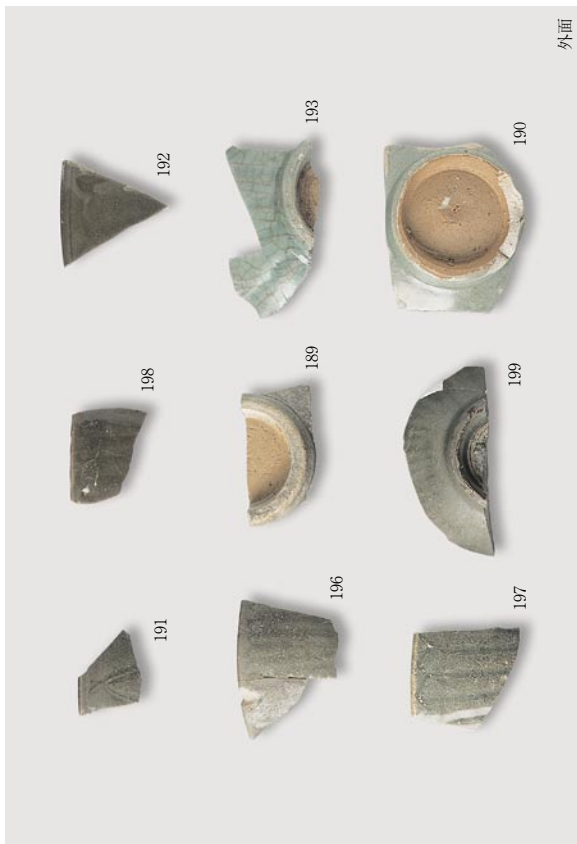
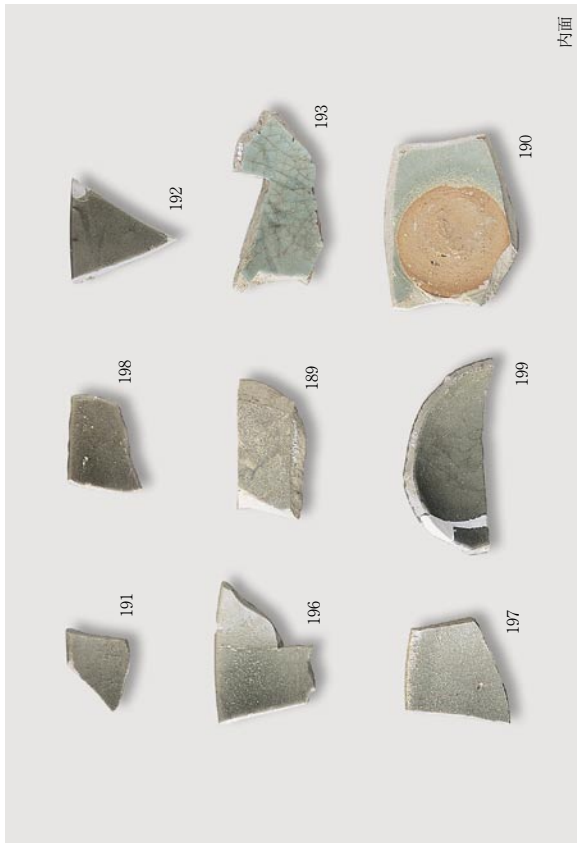










写真44



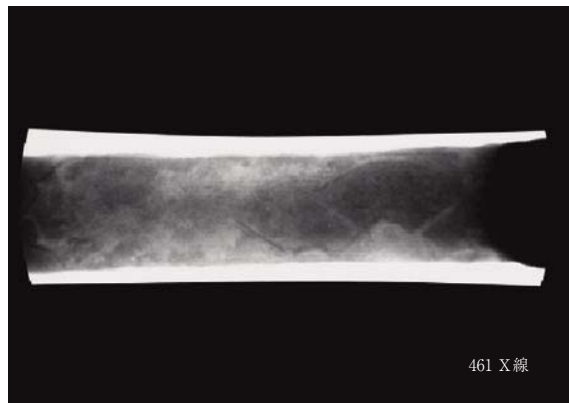
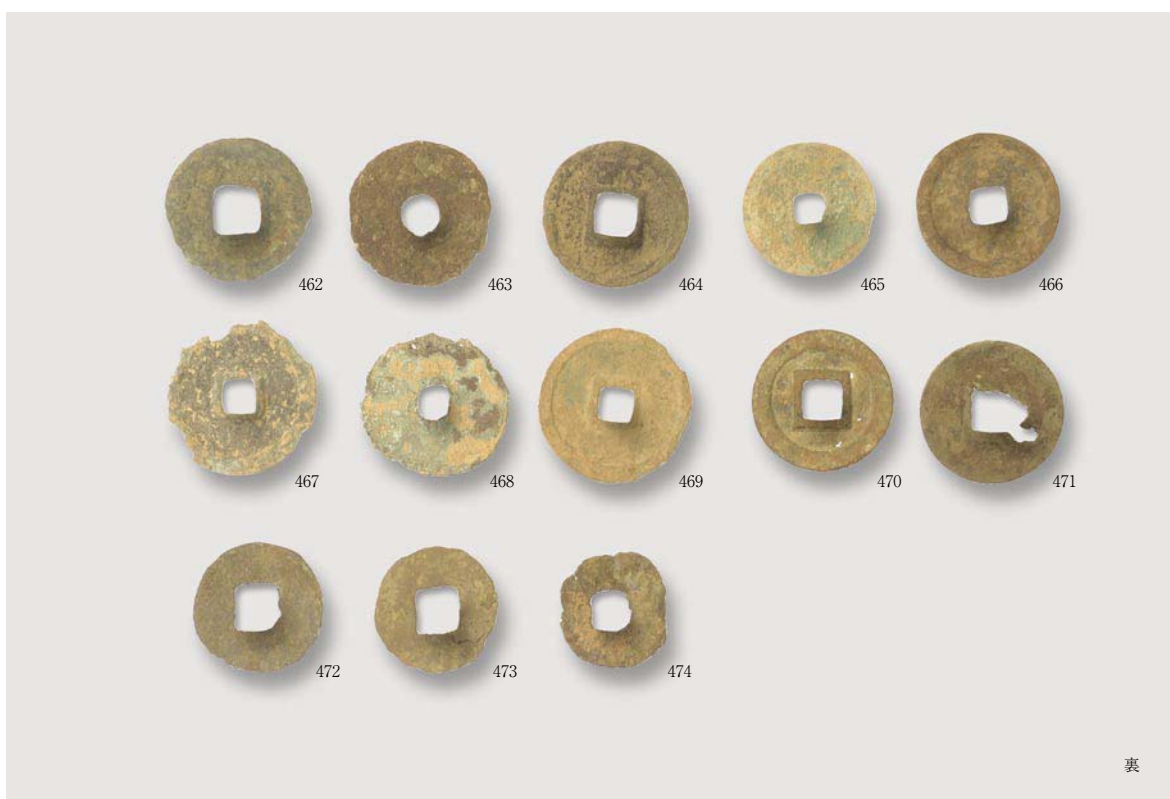


写真46





# 報告書抄録

ふりがな		にしやまじょうせき						
書名		西山城跡						
副書名		四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第106集						
編著者名		吉成承三						
編集機関		(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター						
所在地		高知県南国市篠原1437-1						
発行年月日		2008年3月26日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしやまじょうせき 西山城跡	こうちけん 高知県 たかおかぐん 高岡郡 なかとさちょう 中土佐町 くれ 久礼 あざしろやま しもこえ 字城山・下越	39205	050081	33° 28' 30"	133° 26' 40"	発掘調査 2004年8月2日～ 2006年3月31日 整理作業 2006年4月1日～ 2008年3月31日	12,854 m <sup>2</sup>	高速道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西山城跡	城郭	中世 南北朝期 ～ 室町時代	曲輪 堀切 竪堀 掘立柱建物跡 土坑	土師質土器 貿易陶磁器 備前焼 瓦質土器 石製品 鉄製品 銅製品		県内初、青磁の奢侈品である花瓶が出土		
要約	標高 70.32m の丘陵上に構築された山城である。堀切や竪堀を多用した防御的性格のつよい山城であり、遺構も良好に残っている。貿易陶磁器類もまとめて出土しており、中でも県内初の青磁の奢侈品である花瓶の出土は注目される。							

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第106集

## 西 山 城 跡

- 四国横断自動車道(須崎市～四万十市間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

2008年 3 月26日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

南国市篠原南泉1437-1

電話 088-864-0671

印刷 西村 謄写堂